

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書15

— 長野市内その3 —

石川糸里遺跡

第1分冊

1997

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
助長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書15

— 長野市内その3 —

石川条里遺跡

第1分冊

1997

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
働長野県埋蔵文化財センター



⑨ S D 3004 全景 弥生・古墳水田



⑨ S A 4002 全景



牛の足跡

平安砂層埋込水田（埋込区）

AEON

序

勸長野県埋蔵文化財センターによる善光寺平の調査は昭和62年度にはじまり、本遺跡を含む長野自動車道関連の調査を皮切りに、上信越自動車道、北陸新幹線関連を加え平成8年度までの10年間にわたって実施されました。善光寺平を東西、南北に通過した自動車道、新幹線の路線内はすべて遺跡であり、かつてなかった大規模な発掘調査となりました。これら千曲川によって形成された沖積地内の遺跡は、地下4～7mに及ぶ深さと、縄文時代から近世に至る幾層もの文化層が連続するもので、規模、密集度、どれをとっても大和盆地や大阪平野の遺跡とひけを取ることがない内容でありました。今回報告いたします石川条里遺跡の調査は、この善光寺平における一連の遺跡調査の発端となった遺跡であります。

石川条里遺跡は、善光寺平南部の筑摩山地と千曲川の形成した自然堤防の間の低地に位置します。長野自動車道のルートと重ね合わせますと、筑北盆地から山麓部を抜け下った最後のトンネル・長谷トンネルから千曲川の橋に至る間に遺跡はあります。周囲の丘陵部には、複数の銅鏡を出土した前方後円墳として有名な川柳將軍塚古墳や、中郷古墳があり、自然堤防上には弥生中期から古代の集落遺跡である塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群が展開しており、一帯が古代において信濃の政治的拠点として重要な位置を占めていたことがわかります。

調査成果につきましては、すでに県埋文センター発行の「ニュース」・「年報」や、現地説明会、遺跡速報展等で、その一端を紹介してまいりましたが、整理作業を進めていく中で新たな知見を得て、本書に収録することができました。遺跡の名称となっている平安時代の条里遺構をはじめ、中世の土地利用、下層に重層する弥生・古墳時代の水田跡とそれに伴う農具・祭祀具等の木製品など、弥生時代中期から中世に至る土地区画の変遷と農業技術の変化が明らかとなりました。また全国的にも類例を見ない古墳時代前期の大規模な祭祀跡に関しては、「殯」等の解釈が提示されておりますが、今後様々な論議がなされることと思われま

す。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同長野工事事務所、長野県高速道局、同長野高速道事務所、長野市、長野市教育委員会、篠ノ井農業協同組合、地区用地被買収組合等関係機関および地元協力者の方々、発掘・整理作業に従事協力された多くの方々、発掘から整理作業まで適切な御指導・御助言をいただいた長野県教育委員会文化財保護課と、本書を刊行するまでに努力された当センター職員の皆様に対し心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成9年3月31日

財団法人 長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正明

例 言

- 1 本書は長野県長野市篠ノ井塩崎ほかに所在する石川条里遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、中央自動車道長野線（長野自動車道）建設工事に伴う事前の記録保存のための調査として、長野県教育委員会の委託を受け、県教育委員会の指導のもとに、財団法人長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 発掘調査は昭和63年度から平成3年度の4年次にわたり、整理作業は平成3年度から平成8年度の6年次にわたって実施した。
- 4 本遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』5・6・7・8、『長野県埋蔵文化財ニュース』No27・28等で報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告書をもって最終報告とする。
- 5 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（1:1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1:25,000）、長野市発行の長野市都市計画図（1:2,500）を使用した。
- 6 巻首図版および写真図版掲載の航空写真は㈱新日本航空業写真測図研究所に撮影を委託したものである。
- 7 本報告書には次の方々より玉稿を賜わり、付章等に掲載した。記して謝意を表する。（順不同）

第1・2分冊	人骨・動物骨鑑定	京都大学霊長類研究所教授	茂原信生
第1分冊	プラント・オパール分析	㈱古環境研究所	
第1分冊	花粉分析、種子鑑定	㈱パレオ・ラボ	
第1分冊	黒曜石の原産地推定	㈱バリノ・サーヴェイ	
第2分冊	種子鑑定	㈱バリノ・サーヴェイ	
第2分冊	土器胎土分析	㈱第四紀地質研究所	
第2分冊	赤色顔料・鉄鏽分析	㈱川崎製鉄テクノリサーチ	
第3分冊	樹種同定	東北大学・理学研究科	鈴木三男
		農水省森林総合研究所	能城修一
- 8 本書は調査第1課長百瀬長秀の指導と助言のもとに、調査研究員市川隆之、白居直之が編集・校正を行なった。付章は原則として原稿のままとしたが、プラント・オパール分析は、調査区土層相互の照合に合わせて、一部配列を変更した。各文章の執筆分担は下記の通りである。

第1分冊—第1・3章第1節・第4章第2～5節	第2分冊—第2章第2節・第3章第2節	第3分冊…白居直之
第1分冊—第4章第1・5～7節	第2分冊…市川隆之	
第1分冊—第2章第1節	第3章第2節…市川桂子	
第1分冊—第4章第1節	土器…賛田 明	石器…町田勝則
第3分冊—第3章第2節	…白沢勝彦	
- 9 調査は7万㎡に及ぶ対象面積を4年度にわたる分割調査となり、各調査区の担当者ととの検討が不十分で、記述の方針・方法に一貫しない部分が生じた。また内容についても異なる解釈がなされた部分がある。今後の反省としたい。
- 10 本報告書で報告した遺跡の記録及び出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。

本文目次

巻首図版

序

例言

目次

第1章	序 説	1
第1節	調査の概要	1
1	発掘調査委託契約	1
2	調査の体制と経過	1
	(1) 昭和63年度 (2) 平成元年度 (3) 平成2年度 (4) 平成3年度 (5) 平成4年度 (6) 平成5年度 (7) 平成6年度 (8) 平成7年度 (9) 平成8年度	
3	整理作業の分担	7
4	指導者・協力者	8
第2節	調査の方法	9
1	遺跡の名称と記号	9
2	調査区設定と略称	9
	(1) 調査区設定の原則 (2) 工程上の調査範囲と調査区 (3) 遺構記号	
3	遺跡調査の手順	11
	(1) 水田遺跡、遺構の調査	
	ア 遺構面の確認調査	
	A プラント・オーバー分析	
	B トレンチの掘削と断面観察	
	C 水田遺構の検出 D 記録	
	E 木製品の記録、取り上げ	
	イ 安全対策と止水対策の方法	
	A 発掘調査面の掘削 B 止水、 排水の方法	
第2章	位置と環境	15
第1節	地形・地理的環境	15
1	位置と地形	15
	(1) 長野盆地の地形 (2) 遺跡周辺の地形	
2	気候と農事暦	17
第2節	歴史的環境と周辺の遺跡	19
1	旧石器時代・縄文時代	19
2	弥生時代	20
3	古墳時代	21
4	古代	23
5	中世	24

第3章	基本層序と微地形	37
第1節	基本層序とプラントオーバー分析の対比	37
1	基本層序	37
(1)	西側低地 (2) 東側低地 (3) 中央微高地 (4) 南西微高地	
2	プラント・オーバー分析について	42
(1)	試料 (2) 分析法 (3) 分析結果 ア水田跡探査 イ古環境の推定	
3	プラント・オーバー分析と分析地点の土層の対比	46
(1)	西側低地 (2) 東側低地 (3) 中央微高地 (4) 南西微高地	
第2節	微地形の変遷	58
1	各調査地の概要	58
(1)	西側低地 (2) 中央微高地 (3) 南西微高地 (4) 東側低地	
2	微地形形成の変遷	59
第4章	各時代の遺構と遺物	62
第1節	縄文時代	62
1	縄文時代の概要	62
(1)	調査経過 (2) 土層と地形	
2	遺構	65
(1)	竪穴住居跡 SB2001 SB2002 SB2003	
(2)	土坑 SK2514 SK2515 SK2516 SK2527 SK2534	
(3)	ピット群 SK2517~SK2526 SK2531~SK2533 SK2535 SK2536	
(4)	焼土址 SF2005 SF2006	
(5)	包含層と遺物集中 SQ2018 SQ2019	
(6)	その他 SX2003 SK2530	
3	遺物	73
(1)	出土状況 ア土器 イ石器	
(2)	縄文土器	
(3)	石器 ア概論 イ原石 ウ石核 エ剥片・碎片 オ石鏃 カ打製石斧 キ磨石・凹石・敲石 ク台石・石皿 ケ刃器・石匙 コ磨製石斧 サ石錐 シ砥石 ス加工痕跡を留める 石屑 セ玉類	
4	小結	92
(1)	遺構各説 ア竪穴住居 イ土坑 ウピット群	
(2)	石器群の概要(まとめ) ア製作技術 イ器種の形態と時期 ウ石器の組成	
(3)	集落の変遷と構造 ア集落の変遷 イ集落の構造 ウ集落の位置付け	
第2節	微高地の弥生時代・古墳時代前期(古墳祭祀域を除く)の遺構・遺物	116
1	調査の概要	116
(1)	南西微高地の遺構 ア弥生時代後期の遺構 SB01 SK1124 SK1125 SK1127 SK1117 SK1116 SK1118 SK1121 SK1126 SK1120 SK1128 SK1129 SK1130	

イ古墳時代前期の遺構 SK1123

(2) 中央微高地の遺構	SQ1001	
2 小結	123
(1) 弥生時代後期の遺構群の性格について	ア土坑の配列と被葬者	
(2) 弥生時代後期以前の微高地の様相について		
第3節 弥生時代・古墳時代の低地の遺構・遺物	146
1 概要	146
2 西側低地の遺構	146
(1) 調査の概要	ア弥生時代の遺構 SD1020・1021 イ古墳前期の遺構 SA1001 SA1002 SA1003 SA1004	
3 東側低地の遺構	151
(1) 調査の概要		
(2) 弥生時代中期の遺構	ア弥生時代中期の土層と遺構検出の概要 イ弥生中期の遺構 SA3530II SA3532 SD4004 SX4100 ウ弥生中期から後期に継続する遺構 ㊸区 エ弥生中期以前の杭列	
(3) 弥生時代後期の遺構	ア弥生時代後期の土層と遺構検出の概要 イ㊸-1区 ウ㊸-2・3区 SA3530 I SA3532上層 エ㊸・㊹区 SA3102・3104 SA3105 SC3521 SC3522 SC3523 SC3524 SC3525 SC3526 オ㊸-1・2区 SA3004 SD3016・3017 カ㊸区 SA4003 SA4004 SA4005 SA4008 キ㊸区 SC4015 SC4014 SA4011・A SA4011・B SA4012 SD4006 クSD3004 I (SD3004)	
(4) 古墳時代前期の遺構	ア古墳時代前期から中期の土層と遺構検出の概要 イ㊸区 SA2102・ 2103 ウ㊸-1区 SA2101 エ㊸-2・3区 SA3514 SC3515 SD3013 オ㊸・㊹区 SD3012 SA3101 SC3504 SC3501 SC3506SC3505 カ㊸-1・2区SA3005 SA3007 SA3010 SA3002 SD3003 SA3011キ㊸区 SA4001 SA4002SA4006 SH4001 ク㊸区 SD4005 SX4001 ケSD3004 II (SD3004)	
4 遺物	276
(1) 石器	ア石庖丁 イ刃器 ウ石斧 エ石鏃 オ砥石 カ磨り石、敲き石、凹み石 キ編み石 クその他	
5 小結	279
(1) 弥生・古墳水田の変遷		
(2) 弥生・古墳水田の埋没要因について		
第4節 微高地の古代遺構	283
1 古代の概略	283

(1) 調査の概要	
(2) 基本土層と地形	
(3) 微高地古代の遺構・遺物の概略	
2 微高地の遺構	285
(1) 土坑	SK1048 SK2050 SK2064 SK2071 SK2072 SK1081 SK2070 SK2215 SK2281 SK2383 SK2496
(2) 溝跡	SD1033 SD1034 SD1036 SD1037 SD1038 SD1039 SD1045・1046・1047 SD1051 SD1057 SD2005 SD2006 SD2008・2009・2010 SD2011 SD2019 SD2043 SD2045
(3) 柱穴群	
3 微高地出土古代の焼き物	296
(1) 出土焼物の概要	ア焼物種 A土師器 B黒色土器 C須恵器 D軟質須恵器E灰釉陶器 F緑釉陶器
(2) 器種	ア食膳具 A杯A B杯B C蓋 D皿 E柄 F鉢 G高坏(盤) H盤 イ貯蔵具 A壺 B甕 ウ煮沸具 A甕 B小型甕 C羽釜
(3) 微高地域の出土遺物	ア南西微高地 イ中央微高地 A古代遺構出土焼物 B他時代の遺構混入古代焼物
(4) 微高地域出土の古代焼物の小結	ア組成の特長 イ時期的変化
第5節 古墳時代後期～奈良・平安時代の水田	307
1 調査の概要	307
(1) 古墳時代後期～奈良時代の水田	
(2) 平安時代の水田	
2 遺構	309
(1) 古墳時代後期～奈良時代の遺構	SD3002 SC3005B・3006
(2) 平安時代の遺構	ア各調査区の状況 イ大畦畔・溝 SC1011 SC3005A SC3002 SC3001 SD2043 SD3009 SD3010A・B SD4001 SD3001 ウ土坑 SK001～004
3 小結	337
(1) 条里型地割の復元	
(2) 水田の水回し	
(3) 条里型地割の施行時期	
(4) 表層条里と平安埋没水田の整合	
(5) 平安砂層	
4 低地域の遺物	345
(1) 遺物の概要と整理方法	
(2) 水田域出土遺物	ア洪水砂層中・砂層～水田面出土土器 イ水田面出土の焼物 ウ耕作土・畦内出土の焼物 エ古代の溝跡出土土器 オその他遺物
(3) 水田域出土古代焼物の小結	ア組成 イ出土状況 ウ時期的な変化 エ各土層の年代 オ墨書土器
5 水田域出土古代焼物の成果と課題	355

(1) 水田域で使用された焼物	ア完形土器の出土	イ墨書土器	ウ水田域で使用された器		
第6節 中世の遺構・遺物				364	
1 調査の概要				364	
(1) 調査の経過					
(2) 基本土層と地形					
(3) 周辺の歴史的環境					
(4) 遺構の概略					
2 低地域の遺構				373	
(1) 微高地西側低地の遺構	ア基本土層と水田関連遺構—疑似畦畔	Ａ下面土層が盛り上がる畦状の疑似畦畔	Ｂ並列する浅い溝の疑似畦畔	Ｃ浅い帯状の砂層—溝跡とされた疑似畦畔	Ｄそのほか
	イ中世Ⅰ面水田	ウ中世Ⅱ面水田	Ａ①-1・②-1区	SD0002	
	SD0004	SD0006	SC0018	Ｂ①-2・②-2区	SC0017
	SD0022	SD0023	SD0025		
	Ｃ③・④区	SD0021	Ｄ小結		
	エ中世Ⅱ面以上水田とその他の遺構	Ａ溝跡	SD0003	SD0007	Ｂ
	土坑跡	SK0001	SK0002	SK0003	SK0004
	SK0005	SK0006	SK0007	SK0008	SK0009
	SK0010	SK0011	SK0012	SK0013	SK0014
	SK0015	SK0017	SK0018	SK0019	SK0020
	SK0021	SK0022	SK0023	SK0024	SK0025
	SK0027	SK0028	SK0029	SK0030	SK0031
	SK0032	SK0033	SK0034	SK0035	SK1132
	SK1133	SK1134	SK1135	SK1136	SK1137
	SK1138	SK1140	SK1141	SK1142	SK1143
	SK1180	SK1181	SK0037		
(2) 微高地東側低地の遺構	ア微高地東側低地中世Ⅰ面				
	イ微高地東側低地中世Ⅱ面	SD3006	SD3007	SD3010	SD3015
	ウ平安砂層上面検出遺構	SK2896	SK2897	SK2898	SK2899
		SK3001	SK3002	SK3003	SK3004
		SK3005			
(3) 現用水下の調査	ア現用水のありかた	Ａ聖川取水の用水	Ｂ沢水の用水		
	イ現用水下の調査	Ａ微高地西側低地の用水	用水1～5		
		Ｂ微高地上の用水	用水6・7	Ｃ微高地東側低地の用水	用水8～18
(4) 中世水田の小結	ア検出された遺構と地形環境	Ａ地形・地質環境	Ｂ土坑		
		Ｃ中世の水田域の区画	Ｄ溝跡		
	イ水田域の時期的変遷	Ａ古代水田の様相	Ｂ中世水田域の変遷		
	ウ中世水田の特長				
3 微高地の遺構				415	
(1) SK	ア井戸跡	SK1001	SK1002	SK1003	SK1004
		SK1005	SK1006	SK1007	SK1008
		SK1009	SK1010	SK1011	SK1012
		SK1014	SK1015	SK1016	SK1017
		SK1020	SK1024	SK1026	SK1029
		SK1030			

SK1038 SK1039 SK1040 SK1044 SK1045 SK1047 SK1049
 SK1065 SK1066 SK1082 SK1083 SK1084 SK1085 SK1087
 SK1088 SK1144 SK1145 SK1146 SK1147 SK2001 SK2002
 SK2007 SK2008 SK2009 SK2011 SK2012 SK2021 SK2041
 SK2055 SK2062 SK2065 SK2069 SK2073 SK2100 SK2145
 SK2180 SK2181 SK2193 SK2200 SK2227 SK2249 SK2252
 SK2418 SK2427 SK2431 SK2433 SK2434 SK2438 SK2443
 SK2450 SK2476 SK2479 SK2489 SK2621 SK2624 SK2626
 SK2627 SK2628 SK2629 SK2630 SK2631 SK2632 SK2635
 SK2636 SK2639 SK2640 SK2641 SK2642 SK2644 SK2645
 SK2646 SK2649 SK2650 SK2741 SK2864 SK2754 SK2829
 SK2861 SK2862 SK2866 SK2867 SK2872 SK2873 SK2875
 SK2876 SK2877 SK2880 SK2881

イそのほかの土坑 SK1013 SK1018 SK1086 SK2015 SK2155 SK2423 SK
 2616 SK2634 SK2883

- (2) 柱穴跡 アSD2001区画内(A) ST2001 ST2002 ST2003 ST2004 SA2002 SA2003
 イSD2001西辺～SD1008西辺中間域(B1) ST2005 ST2006 ST2007 ST2008
 SA1006

ウSD2001東辺～SD2007域(B2) SA2004

エSD2007～SD1008東辺域(B3)

オSD1008区画外西部(C) ST1001

- (3) 溝跡 SD1009 SD1010・1011・1012 SD1008(2029) SD2001 SD2007 SD1052

- (4) 遺構小結 ア井戸跡 A形態 B分布 C埋土・内部施設・廃絶の様相 D出土遺物 E年代
 F遺跡内での位置

イ建物跡・掘列跡・柱穴跡 A柱穴跡の分布 B建物跡の種類

C館内の建物配置

ウ溝跡 A溝跡の変遷 B館の堀

エ微高地中世遺構の変遷 A館出現以前 B館時代 C館廃絶以後

4 中世の遺物480

- (1) 焼物 ア焼物の概要 A在地産土器 B瓦質火鉢 C山茶碗 D常滑一壺・甕 E選美一壺
 F珠洲 G古瀬戸 H大窯製品 I輸入陶磁器

イ水田域の焼物 A微高地西側低地出土焼物 B微高地東側低地出土焼物

ウ微高地出土の中世焼物 A中世土坑出土 B中世溝跡出土焼物

C他時代遺構混入焼物 D検出面・出土地点不明焼物

- (2) 石製品 ア石臼 イ搗臼 ウ石鉢類 エ凹石 オ灯明具 カ五輪塔 キ硯 ク砥石 ケその他

- (3) 製鉄関連遺物 ア羽口 イ鉄滓 ウ鉄塊系遺物 エ微細遺物・鍛造刺片・粒状滓・砂鉄
 オ未製品・その他

- (4) 土製品 ア土鍾 イ土製円盤

5 成果と課題514

- (1) 館跡について ア石川条里遺跡の館跡様相 A館の存続時期 B館の立地 C館の範囲と計画

性と条里の関係 E館内部の構造 F館の基本構造 G本遺跡の特長

イ周辺の館跡との比較 A周辺域の館形態と規模 B周辺の館発掘例との比較
C各分類の消長関係とその比較

ウまとめと残された課題 A石川条里遺跡内の館出現の歴史的背景

B館形態からみた本館の位置

C本館の廃絶

(2) 中世在地産焼物の変遷 ア在地土器の出土傾向

イ在地産土器の組み合わせの種類と変遷 A在地土器の組み合わせの種類

B在地土器の組み合わせの変化

ウ在地土器の分類と変化 Aカワラケの分類 B内耳鍋の分類

Cすり鉢の分類

エ各在地産土器の組み合わせ内の各分類のあり方

オ周辺遺跡との比較 A「組み合わせA」の遺跡

B「組み合わせD」の遺跡

C「組み合わせG」の遺跡

D組み合わせF」の遺跡

カ在地産土器の変遷と年代 Aカワラケ B内耳鍋

C在地産すり鉢

キ在地産土器を中心とした焼物組成の諸段階の様相 A第I段階

B第II段階

C第III段階

D第IV段階

第7節 近世の遺構・遺物549

1 調査の概要549

(1) 調査の経過

(2) 基本土層と地形

(3) 周辺の歴史的環境

(4) 遺構の概略

2 近世の遺構554

(1) 微高地西側低地の遺構 ア①-2・②-2区近世面

イ溝跡SD0001 SD0012 SD0013 SD0017 SD0020 SD1061

SD1063

(2) 微高地東側低地の遺構 ア近世水田 イ枕列 SA3001

(3) 微高地の遺構 ア土坑 SK1027 SK1028 SK1089 SK1090 SK1131 SK2332 SK2864

イ溝跡 SD1001 SD1002 SD1003 SD1005 SD1006 SD1013 SD1014

SD1015 SD1018 SD1019 SD1022

SD1023・1024 SD1025 SD1026 SD1027 SD1028 SD1029 SD

1030 SD1031 SD1032 SD1043
 SD1044 SD1048 SD1049 SD1050 SD1054 SD1056 SD1062
 SD1064~1071 SD1072SD2013
 SD2018 SD2026 SD2029 SD2030 SD2031 SD2032 SD2033
 SD2034 SD2035 SD2036 SD2037
 SD2038 SD2039 SD2040 SD2041 SD2042 SD2048

ウその他の遺構 SA2005 SA2006 SG1001 SX2001

(4) 近世以後の水田の小結 ア近世遺構全体の概況

イ微高地域の水田化 A微高地縁辺の水田化

B用水による微高地上の水田化

ウ用水の発展

3	近世の焼物	577
(1)	近世焼物の種類 ア瀬戸美濃産磁器 イ瀬戸美濃産陶器 ウ肥前産磁器 エ肥前産陶器 オ在地産陶器 カ在地産土器	
(2)	水田域出土の焼物 ア微高地西側低地出土焼物 イ微高地東側低地出土焼物 ウその他出土焼物	
(3)	微高地出土の焼物 ア近世遺構出土焼物 イ他時代遺構混入焼物 ウ検出面・出土地点不明焼物	
(4)	近世焼物小結 ア周辺遺跡の様相 イ本遺跡の組成の特長	

付 章	自然科学分析	633
第1節	石川条里遺跡から産出した花粉分析	633
1	はじめに	633
2	試料	633
3	分析方法	633
4	花粉化石群集の記載	636
5	遺跡周辺の植生変遷	651
6	おわりに	652
第2節	石川条里遺跡から出土した大型植物化石	672
1	はじめに	672
2	出土した大型植物化石	672
3	考察	672
4	大型植物化石の記載	673
第3節	石川条里遺跡水田域(弥生時代後期~近世)出土の人骨と獣骨	676
1	はじめに	676
2	出土人骨の特徴	676
3	出土した獣骨	677
4	出土動物遺存体の特徴	677
5	まとめ	677
第4節	黒曜石の原産地推定	683
1	はじめに	683
2	分析試料	683

3	エネルギー分散型蛍光X線分析	683
	(1) 方法	
	(2) 結果および考察	
4	機器中性子放射化分析	684
	(1) 方法	
	(2) 結果および考察	

挿 図 目 次

- 第1図 調査区年度別調査範囲
- 第2図 大々地区割付図
- 第3図 大地区割付図
- 第4図 中・小地区割付図
- 第5図 鋼矢板設置標準図及び発掘面
- 第6図 遺跡周辺の地形
- 第7図 長野盆地の地形
- 第8図 菅光寺平南域の主要遺跡分布
- 第9図 周辺遺跡分布概念図(1)
- 第10図 周辺遺跡分布概念図(2)
- 第11図 周辺遺跡分布概念図(3)
- 第12図 各調査区の基本土層(1)
- 第13図 各調査区の基本土層(2)
- 第14図 調査地点別土層柱状図・プラントオーバー
ル採取地点及び採出状況(1)
- 第15図 調査地点別土層柱状図・プラントオーバー
ル採取地点及び採出状況(2)
- 第16図 調査地点別土層柱状図・プラントオーバー
ル採取地点及び採出状況(3)
- 第17図 調査地点別土層柱状図・プラントオーバー
ル採取地点及び採出状況(4)
- 第18図 主な植物の推定生産量と変遷(1)
- 第19図 主な植物の推定生産量と変遷(2)
- 第20図 主な植物の推定生産量と変遷(3)
- 第21図 調査地点と土層模式図
- 第22図 縄文遺構調査範囲
- 第23図 遺構全体図
- 第24図 縄文時代の土層と地形
- 第25図 S B 2001
- 第26図 S B 2002実測図
- 第27図 S B 2002遺物出土状況
- 第28図 S B 2003
- 第29図 S B 2003遺物出土状況図
- 第30図 縄文時代土坑
- 第31図 ビット群
- 第32図 包含層別出土土器重量分布・接合関係
- 第33図 グリッド別出土土器重量グラフ
- 第34図 石器出土分布
- 第35図 原石・石核法量相関グラフ
- 第36図 石鏃観察模式図
- 第37図 石鏃法量相関グラフ
- 第38図 磨石・凹石法量相関グラフ
- 第39図 台石法量相関グラフ
- 第40図 刃器法量相関グラフ
- 第41図 磨製石斧法量相関グラフ
- 第42図 石錐法量相関グラフ
- 第43図 砥石法量相関グラフ
- 第44図 石器組成グラフ
- 第45図 縄文土器 1
- 第46図 縄文土器 2
- 第47図 縄文土器 3
- 第48図 縄文土器 4
- 第49図 縄文土器 5
- 第50図 縄文土器 6
- 第51図 縄文土器 7
- 第52図 縄文土器 8
- 第53図 縄文土器 9
- 第54図 遺構内出土石器 1
- 第55図 遺構内出土石器 2
- 第56図 遺構内出土石器 3
- 第57図 遺構外出石器 1
- 第58図 遺構外出石器 2
- 第59図 遺構外出石器 3
- 第60図 南西微高地弥生後期遺構全体・コンタ
断面
- 第61図 南西微高地竪穴状遺構・土坑平面・断面
- 第62図 微高地土坑・土器集中平面・断面
- 第63図 微高地周辺弥生土器出土分布
- 第64図 南西微高地土坑内出土壺の方向
- 第65図 東側低地出土縄文晩期、微高地出土弥生
土器 1
- 第66図 微高地出土弥生土器 2
- 第67図 微高地出土弥生土器 3
- 第68図 微高地出土弥生土器 4

- 第69図 微高地出土弥生土器5
- 第70図 微高地出土弥生土器6
- 第71図 微高地出土弥生土器7
- 第72図 微高地出土弥生土器8
- 第73図 微高地出土弥生土器9
- 第74図 微高地出土弥生土器10
- 第75図 微高地出土弥生・古墳土器11
- 第76図 微高地出土弥生・古墳土器12
- 第77図 微高地・平安水田層上層出土弥生・古墳土器13
- 第78図 西側低地土層柱状図及び層位出土遺物図
- 第79図 西側低地弥生～古墳前期平面図及び土層柱状図
- 第80図 S A 1001、S D 1020・1021平面・断面・立面
- 第81図 S A 1001 (④区) 杭木取り分類
- 第82図 S A 1002・1003・1004平面・断面・立面
- 第83図 S A 1002 (⑥区) 杭木取り分類
- 第84図 ⑫区弥生中期の遺構
- 第85図 S A 3530 II (⑫区) 杭木取り分類
- 第86図 S A 3532 (⑫区) 杭木取り分類
- 第87図 S A 3530 II 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第88図 S X 4100弥生中期土器出土集中分布図
- 第89図 ⑬区深堀り杭出土状況断面
- 第90図 ⑬区弥生後期遺構全体図
- 第91図 S A 3530 I・3532上層平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第92図 S A 3530 I (⑬区) 杭木取り分類
- 第93図 S A 3530 I (⑬区) 杭・横木木取り分類
- 第94図 ⑬区弥生後期遺構全体図
- 第95図 S A 3102・3104平面・立面・主要杭分布図
- 第96図 S A 3104 (⑬区) 杭木取り分類
- 第97図 S A 3102 (⑬区) 杭木取り分類
- 第98図 S A 3105平面・立面
- 第99図 S A 3105 (⑬区) 杭木取り分類
- 第100図 ⑬区弥生後期遺構全体図
- 第101図 S C 3521・3522平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第102図 S C 3523平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第103図 S C 3521 (⑬区) 杭木取り分類
- 第104図 S C 3522 (⑬区) 杭木取り分類
- 第105図 S C 3523 (⑬区) 杭木取り分類
- 第106図 S C 3524平面・立面・出土主要杭分布図
- 第107図 S C 3524 (⑬区) 杭木取り分類
- 第108図 S C 3526 (⑬区) 平面・断面
- 第109図 S C 3526杭木取り分類
- 第110図 ⑬区弥生後期遺構全体図
- 第111図 ⑬-1区弥生畦畔・水田面全体図
- 第112図 S D 3016・3017平面・断面
- 第113図 ⑬区弥生後期遺構全体図
- 第114図 S A 4003平面・断面
- 第115図 S A 4003 (⑬区) 杭木取り分類
- 第116図 S A 4003下部及びS D 4004平面・断面
- 第117図 S A 4004平面・出土主要遺物分布図
- 第118図 S A 4004 (⑬区) 杭木取り分類
- 第119図 S A 4005・4008平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第120図 S A 4005・4008杭木取り分類
- 第121図 ⑬区弥生後期遺構全体図
- 第122図 S C 4015・S A 4012平面・断面・立面・出土主要出土遺物分布図
- 第123図 S C 4015 (⑬区) 杭木取り分類
- 第124図 S C 4015 (⑬区) 杭と横木木取り分類
- 第125図 S A 4012 (⑬区) 杭木取り分類
- 第126図 S A 4012 (⑬区) 杭と横木材木取り分類
- 第127図 S A 4011平面・出土主要遺物分布図
- 第128図 S A 4011 (⑬区) 杭木取り分類
- 第129図 S A 4011 (⑬区) 杭と横木材木取り分類
- 第130図 S D 4006平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第131図 S D 3004 I (⑬区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第132図 S D 3004 I (⑬区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第133図 S D 3004 I (⑬区) 平面・断面・出土主要遺物分布図

- 第134図 S D3004 I (㉔区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第135図 S D3004 I (㉔区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第136図 S D3004 (㉔-2区) 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図
- 第137図 S A3012 (㉔-2区) 杭木取り分類
- 第138図 S D3004 (㉔-1区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第139図 S D3004 (㉔区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第140図 S D3004 (㉔区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第141図 ㉔・㉔区古墳時代遺構全体図、S A 2102・2101平面・断面
- 第142図 S A 2101 (㉔区) 杭木取り分類
- 第143図 S A 3514 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第144図 S A 3514 (㉔区) 杭木取り分類、横木分類
- 第145図 S D 3013、S C 3515 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第146図 ㉔区古墳時代前期遺構全体図
- 第147図 ㉔区古墳時代前期遺構全体図
- 第148図 S D 3012、S A 3101 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図
- 第149図 S D 3012 平面・断面・出土主要遺物分布図 1
- 第150図 S D 3012 平面・断面・出土主要遺物分布図 2
- 第151図 S A 3101 (㉔区) 杭木取り分類
- 第152図 S D 3004 II、S C 3504 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第153図 S D 3004 II (㉔区) 平面・出土主要遺物分布図
- 第154図 S D 3004 II、S C 3501 平面・出土主要遺物分布図
- 第155図 S C 3501・3506 (㉔区) 杭木取り分類
- 第156図 S D 3004 II、S C 3501・3506 平面
- 第157図 S D 3004 II、S C 3505 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第158図 ㉔区古墳時代前期遺構全体図
- 第159図 S A 3005 (㉔区) 杭、横木取り分類
- 第160図 S A 3007 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図
- 第161図 S A 3002 平面・立面
- 第162図 S A 3002 (㉔区) 杭、横木木取り分類
- 第163図 S D 3003 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図 1
- 第164図 S D 3003 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図 2
- 第165図 S D 3003 (㉔-1区) 杭木取り分類、横木分類
- 第166図 ㉔区古墳時代前期遺構全体図
- 第167図 S A 4001 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図
- 第168図 S A 4002 平面・断面・立面・主要遺物分布図
- 第169図 S A 4002 断面
- 第170図 S A 4002 (㉔区) 杭木取り分類
- 第171図 S A 4006 平面・出土主要遺物分布図・杭木取り分類
- 第172図 S A 4007、S H 4001 平面・断面・出土主要遺物分布図、S A 4007 杭木取り分類
- 第173図 ㉔区古墳時代前期遺構全体図
- 第174図 S D 4005 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第175図 S X 4001 平面・立面
- 第176図 S D 3004 (㉔-2区)・S A 3010 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図
- 第177図 S D 3004 (㉔-1区) 平面・断面・出土主要遺物分布図
- 第178図 S D 3004 (㉔-1区) 平面・断面・立面・主要遺物分布図
- 第179図 S D 3004 (㉔区) S A 4006 平面・断面・出土主要遺物分布図 1
- 第180図 S D 3004 (㉔区) 平面・断面・出土主要遺物分布図 2
- 第181図 ㉔区古墳前期後半から中期遺構全体図
- 第182図 S D 3004 (㉔-2区)、S A 3008・3011

- 平面・断面・立面・出土主要遺物分布図
- 第183図 S A 3008・3011 (①-2区) 杭木取り分類
- 第184図 S D 3004 (①-2区) 木製品出土垂直分布図
- 第185図 S D 3004 (①-1区) 木製品出土垂直分布図
- 第186図 S D 3004 (⑯区) 木製品出土垂直分布図
- 第187図 東側低地出土弥生土器 1
- 第188図 東側低地出土弥生土器 2
- 第189図 東側低地出土弥生土器 3
- 第190図 東側低地出土弥生土器 4
- 第191図 東側低地出土弥生土器 5
- 第192図 東側低地出土弥生土器 6
- 第193図 東側低地出土古墳時代の土器 1
- 第194図 東側低地出土古墳時代の土器 2
- 第195図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 1
- 第196図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 2
- 第197図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 3
- 第198図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 4
- 第199図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 5
- 第200図 東側低地出土弥生・古墳時代の土器 6
- 第201図 弥生時代の石器 1
- 第202図 弥生時代の石器 2
- 第203図 弥生時代の石器 3
- 第204図 弥生時代の石器 4
- 第205図 弥生時代の石器 5
- 第206図 弥生・古墳時代の石器
- 第207図 弥生・古墳時代の石器
- 第208図 低地域平安～中世水田出土土器
- 第209図 弥生～古墳水田、微高地出土勾玉、ガラス小玉、土製品
- 第210図 水田区画と農具の変遷
- 第211図 平安時代微高地周辺の地形
- 第212図 古代の土坑
- 第213図 微高地西側古代遺構
- 第214図 微高地東側古代遺構
- 第215図 微高地東端部柱穴群
- 第216図 微高地域古代土器出土土坑分布
- 第217図 畦畔検出模式図
- 第218図 古墳時代後期～奈良時代遺構全体図
- 第219図 S D 3002平面・断面
- 第220図 S C 3005-B・3006擬似畦畔平面・断面
- 第221図 平安砂層埋没水田跡平面(①-1・②-1区)
- 第222図 平安砂層埋没水田跡コンタ(①・②・③区)
- 第223図 平安砂層埋没水田跡平面(①-2・②-2・③区)
- 第224図 平安砂層埋没水田跡平面(④・⑥・⑦区)
- 第225図 平安砂層埋没水田跡コンタ(④・⑥・⑦区)
- 第226図 平安砂層埋没水田跡平面(⑤-3・⑩-2・⑯・⑱区)
- 第227図 平安砂層埋没水田跡コンタ(⑤-3・⑯・⑱-2・⑳区)
- 第228図 平安砂層埋没水田跡平面(⑲・㉑区)
- 第229図 平安砂層埋没水田跡コンタ(⑲・㉑区)
- 第230図 平安砂層埋没水田跡平面・コンタ(①-1・①-2区)
- 第231図 平安砂層埋没水田跡平面・コンタ(⑱・⑲区)
- 第232図 S C 3002平面・断面・立面
- 第233図 S C 3002杭木取り分類
- 第234図 S C 3001平面・断面・立面
- 第235図 S D 3010断面
- 第236図 S D 3001平面・断面
- 第237図 平安水田溝跡平面・断面
- 第238図 平安水田土坑平面・断面
- 第239図 畦畔の方位
- 第240図 周辺調査地点と条畝型地割の復元
- 第241図 表面条畝と検出畦畔の比較
- 第242図 水田域出土古代焼物組成グラフ
- 第243図 水田域内西部の調査地区別出土古代焼物組成グラフ
- 第244図 水田域東部の調査地区別出土古代焼物各種組成グラフ
- 第245図 微高地出土古代焼物各種組成グラフ

- 第246図 調査地区内中世の土層と地形
- 第247図 中世遺構全体図
- 第248図 微高地西側低地中世遺構 1
- 第249図 微高地西側低地中世遺構 2
- 第250図 微高地西側低地中世遺構 3
- 第251図 微高地西側低地中世遺構 4
- 第252図 S C 0018断面図
- 第253図 微高地西側低地中世Ⅱ面以上の土坑 1
- 第254図 微高地西側低地中世Ⅱ面以上の土坑 2
- 第255図 微高地西側低地中世Ⅱ面以上の土坑 3
- 第256図 微高地西側低地中世Ⅱ面以上の土坑 4
- 第257図 微高地東側低地②・③区溝跡
- 第258図 微高地東側低地の土坑
- 第259図 遺跡周囲の地表面地割
- 第260図 現用水断面・位置
- 第261図 現用水断面
- 第262図 地表面地割と調査で推定された古代条理
- 第263図 館島畷図
- 第264図 微高地域の古墳時代以降の遺構と中世の遺構全体図
- 第265図 中世井戸 1
- 第266図 中世井戸 2
- 第267図 中世井戸 3
- 第268図 中世井戸 4
- 第269図 中世井戸 5
- 第270図 中世井戸 6
- 第271図 中世井戸 7
- 第272図 中世の井戸以外の土坑
- 第273図 S D 2001区画範囲内柱穴分布
- 第274図 S T 2001
- 第275図 S T 2002・2003
- 第276図 S T 2004
- 第277図 S D 1008区画範囲内西・南部柱穴分布
- 第278図 S T 2005・2006
- 第279図 S T 2007・2008
- 第280図 S A 1006
- 第281図 S A 2001
- 第282図 S D 1008区画外柱穴分布
- 第283図 S T 1001
- 第284図 中世溝跡分布とセクション
- 第285図 中世溝跡セクション
- 第286図 中世井戸規模グラフ
- 第287図 検出面標高別井戸深度グラフ
- 第288図 井戸深度数グラフ
- 第289図 形態別井戸分布
- 第290図 底面標高別井戸分布グラフ
- 第291図 掘削深度別井戸分布グラフ
- 第292図 中世井戸分布と深度
- 第293図 礎を出土した井戸分布
- 第294図 微高地中世遺構の変遷
- 第295図 内耳竈法量分布グラフ
- 第296図 内耳竈・カワラケ口縁部遺存度比率グラフ
- 第297図 カワラケ煤付着比率グラフ
- 第298図 水田域出土中世焼物組成グラフ
- 第299図 微高地域出土中世焼物組成グラフ
- 第300図 中世砥石サイズと石質グラフ
- 第301図 鉄滓出土遺構分布
- 第302図 遺構別鉄滓出土重量グラフ
- 第303図 「耕下」地籍図
- 第304図 中世の石川条里遺跡周辺図
- 第305図 「耕下」範囲と館模式図
- 第306図 周辺の中世館中心屋敷規模グラフ
- 第306図 館規模グラフ
- 第307図 カワラケの法量グラフ
- 第308図 周辺遺跡出土の中世在地産土器
- 第309図 在地産焼物変遷
- 第310図 近世遺構全体図
- 第311図 微高地西側低地近世遺構(②-2・②-1近世面)
- 第312図 微高地西側低地近世遺構(⑥区 S D 1017・1061・1063)
- 第313図 微高地東側低地近世遺構
- 第314図 近世土坑実測図
- 第315図 微高地域西部近世溝跡分布とセクション
- 第316図 微高地域東部近世溝跡分布とセクション
- 第317図 石川条里遺跡内出土近世焼物組成グラ

- 第318図 水田城出土古代焼物 1
 第319図 水田城出土古代焼物 2
 第320図 水田城出土古代焼物 3
 第321図 微高地域出土古代焼物 1
 第322図 微高地域出土古代焼物 2
 第323図 微高地域出土古代焼物 3・中世水田城
 出土中世焼物 1
 第324図 水田城出土中世焼物 2・近世焼物
 第325図 微高地域出土中世焼物 1
 第326図 微高地域出土中世焼物 2
 第327図 微高地域出土中世焼物 3
 第328図 微高地域出土中世焼物 4
 第329図 微高地域出土中世焼物 5
 第330図 微高地域出土中世焼物 6
 第331図 微高地域出土中世焼物 7
 第332図 微高地域出土中世焼物 8
 第333図 微高地域出土中世焼物 9
 第334図 微高地域出土中世焼物 10
 第335図 微高地域出土中世焼物 11・近世焼物
 第336図 微高地域出土中世石製品 1
 第337図 微高地域出土中世石製品 2
 第338図 微高地域出土中世石製品 3
 第339図 微高地域出土中世石製品 4・土製品 1
 第340図 微高地域出土中世土製品 2・検出面出
 土砾石
 第341図 微高地域出土中世鍛冶関連遺物 1
 第342図 微高地域出土中世鍛冶関連遺物 2
 第343図 微高地域出土中世鍛冶関連遺物 3
 第344図 平安時代～近世金属製品 1 (鉄製品)
 第345図 平安時代～近世金属製品 2 (銭貨・青銅
 製品)
 第346図 微高地域の古代以降の遺構 1
 第347図 微高地域の古代以降の遺構 2
 第348図 微高地域の古代以降の遺構 3
 第349図 微高地域の古代以降の遺構 4
 第350図 微高地域の古代以降の遺構 5
 第351図 微高地域の古代以降の遺構 6
 第352図 微高地域の古代以降の遺構 7
 第353図 微高地域の古代以降の遺構 8
 第354図 微高地域の古代以降の遺構 9
 第355図 微高地域の古代以降の遺構 10
 第356図 微高地域の古代以降の遺構 11
 第357図 微高地域の古代以降の遺構 12
 第358図 微高地域の古代以降の遺構 13
 第359図 微高地域の古代以降の遺構 14
 第360図 花粉分析試料採取地点及び土層柱状図
 第361図 地点No1 (①-1区)の花粉化石分布図
 第362図 地点No2 (①-2区)の花粉化石分布図
 第363図 地点No3 (②-1区)の花粉化石分布図
 第364図 地点No4 (④区)の花粉化石分布図
 第365図 地点No5 (⑥区-A)の花粉化石分布図
 第366図 地点No6 (⑥区-B)の花粉化石分布図
 第367図 地点No8 (⑦区SK2746)の断面図
 第368図 地点No9 (⑧-2区)の花粉化石分布図
 第369図 地点No10 (⑩区縄文トレンチ)の土層断
 面図
 第370図 地点No10 (⑩区縄文トレンチ)の花粉化
 石分布図
 第371図 地点No11 (⑪区)の花粉化石分布図
 第372図 地点No12 (⑪区)の花粉化石分布図
 第373図 地点No13 (⑬区)の花粉化石分布図
 第374図 地点No14 (⑬区SD3006)の土層断面
 図
 第375図 地点No14 (⑬区SD3006)の花粉化石分
 布図
 第376図 地点No15 (⑬区)の花粉化石分布図
 第377図 地点No16 (⑭区深堀)の花粉化石分布
 図
 第378図 地点No17 (⑭区SD3004)の土層断面
 図
 第379図 地点No17 (⑭区SD3004)の花粉化石分
 布図
 第380図 地点No18 (16区)の花粉化石分布図
 第381図 地点No19 (16区)の花粉化石分布図
 第382図 地点No20 (16区)の花粉化石分布図

播 表 目 次

第1表 昭和63年度調査概要	化石
第2表 平成元年度調査概要	第34表 地点No.3 (㉒-1区) から産出した花粉化石
第3表 農事暦とまつり一覧	化石
第4表 月別最高最低平均気温	第35表 地点No.4 (㉒区) から産出した花粉化石
第5表 月別日照時間の月別平均値	第36表 地点No.5 (㉒区-A)・地点No.6 (㉒区-B)・地点No.7 (㉒区-C) から産出した花粉化石
第6表 普光寺平南域の遺跡地名表	第37表 地点No.8 (㉒区SK2746)・地点No.10 (㉒区縄文トレンチ) から産出した花粉化石
第7表 縄文時代石器の内訳	第38表 地点No.9 (㉒-2区) から産出した花粉化石
第8表 剥片・砕片種別出土数	第39表 地点No.11 (㉒区) から産出した花粉化石
第9表 剥片・砕片材質別出土数 (小型)	第40表 地点No.12 (㉒区) から産出した花粉化石
第10表 剥片・砕片材質別出土数 (大型)	第41表 地点No.13 (㉒区)・地点No.13 (㉒区SD3006) から産出した花粉化石
第11表 石鏃属性	第42表 地点No.15 (㉒区) から産出した花粉化石
第12表 磨石・凹石・敲石属性	第43表 地点No.16 (㉒区深堀)・地点No.17 (㉒区SD3004) から産出した花粉化石
第13表 刃器属性	第44表 地点No.18 (16区) から産出した花粉化石
第14表 磨製石斧属性	第45表 地点No.18 (16区) から産出した花粉化石
第15表 縄文前期石器組成変遷表	第46表 地点No.19 (16区)・地点No.20 (16区) から産出した花粉化石
第16表 遺構内出土石器	第47表 出土した大型植物化石一覧表
第17表 遺構外出土石器	第48表 歯計測値
第18表 土墳墓一覧	第49表 歯計測値
第19表 弥生・古墳時代石器観察表 I	第50表 歯計測値
第20表 東側低地出土弥生・古墳時代石器観察表 II	第51表 出土別の人骨と獣骨
第21表 弥生・古墳時代石器観察表	第52表 種別の人骨と獣骨
第22表 弥生・古墳時代玉類・土製品観察表	第53表 時代別の人骨と獣骨
第23表 微高地域出土古代焼物一覧	第54表 石川条里遺跡 (水田城) 出土の馬歯の計測値と比較資料
第24表 平安砂の成分	第55表 分析資料表
第25表 水田城出土古代土器一覧	第56表 蛍光X線分析結果
第26表 遺構別微細遺物サンプル内訳	第57表 原産地黒曜石の分析結果
第27表 各サンプルの鍛造剥片・粒状滓のサイズ別重量と推定個数	第58表 原産地推定結果
第28表 鍛造剥片の厚さ平均	第59表 中性子放射化分析結果
第29表 鍛造剥片・粒状滓の平均重量	
第30表 鉄塊系遺物一覧	
第31表 金属製品観察表	
第32表 地点No.1 (㉒-1区) から産出した花粉化石	
第33表 地点No.2 (㉒-2区) から産出した花粉化石	

写真図版目次

巻頭図版 ㊦区 SD3004全景、SA4002 (古墳前期杭列畦畔)

㊦区 平安砂層埋没水田・牛の足跡・人の足跡

- | | | |
|-------|---|--|
| PL 1 | 調査遺跡周辺全景 (1947年、1988年) | 3012) |
| PL 2 | 縄文遺構 1 (縄文面全景、㊦-2区南壁セクション、㊦-2区縄文面全景、SB2001ほか) | PL 20 |
| PL 3 | 縄文遺構 2 (SB2002・2003、SK2514・2515・2516・2527) | 弥生・古墳遺構 17(SD3003、㊦-1区SD3004) |
| PL 4 | 弥生・古墳遺構 1 (南西微高地、SB01、SK1116・1117・1118) | PL 21 |
| PL 5 | 弥生・古墳遺構 2 (SK1119・1120・1121・1122・1126・1127・1128) | 弥生・古墳遺構 18(SD3003、㊦-1区SD3004・4005) |
| PL 6 | 弥生・古墳遺構 3 (SK1129・1130、SQ1001、SD1020・1021、SA1001・1002、㊦区全景) | PL 22 |
| PL 7 | 弥生・古墳遺構 4 (㊦区弥生水田) | 弥生・古墳遺構 19(SA3101・3102・3514) |
| PL 8 | 弥生・古墳遺構 5 (SA3530II、㊦区弥生水田、㊦区弥生水田) | PL 23 |
| PL 9 | 弥生・古墳遺構 6 (SA3101、㊦区SD3004I、㊦区SD3004I) | 弥生・古墳遺構 20 (SC3505、SA3002・3005・4001・4002・4003) |
| PL 10 | 弥生・古墳遺構 7 (㊦区SD3004I) | PL 24 |
| PL 11 | 弥生・古墳遺構 8 (㊦-2区SD3004、㊦区SD3004・4004) | 弥生・古墳遺構 21(SA4001・4002、SC3501、㊦区SD3004II、㊦区SD3004ほか) |
| PL 12 | 弥生・古墳遺構 9 (SD4006、SA3104・3105・3530I) | PL 25 |
| PL 13 | 弥生・古墳遺構 10(SC3523・3524) | 弥生・古墳遺構 22 (㊦・㊦・㊦SD3004、SD4005・4006、㊦区弥生水田木製品出土状況) |
| PL 14 | 弥生・古墳遺構 11(SC3521・3522・3523・3524・3526、SA3105) | PL 26 |
| PL 15 | 弥生・古墳遺構 12(SA4003・4005・4006・4011・4012) | 弥生・古墳遺構 23 (㊦・㊦区古墳水田、SD3003、㊦-1区SD3004ほか木製品出土状況) |
| PL 16 | 弥生・古墳遺構 13 (SA4011、SD4006、SC4015・4014・4015) | PL 27 |
| PL 17 | 弥生・古墳遺構 14 (㊦-2区SD3004、㊦区古墳前期杭列) | 弥生・古墳遺構 24(SD3003、㊦区SD3004・4005・SA4011、SH4011遺物出土状況) |
| PL 18 | 弥生・古墳遺構 15(SC4011・4015、㊦区SD3004II・3012) | PL 28 |
| PL 19 | 弥生・古墳遺構 16(㊦区SD3004II・ | 弥生・古墳遺構 25(SD3003、㊦区SD3004II・土手、SD3004遺物出土状況ほか) |
| | | PL 29 |
| | | 弥生・古墳遺構 26 (SC3524、SD4006、㊦区SD3004、弥生・古墳水田面ほか) |
| | | PL 30 |
| | | 平安遺構 1 (SK2064・2072、SD2006・2008~2010・2019、八稜鏡出土状況) |
| | | PL 31 |
| | | 平安遺構 2 (中央微高地全景、SD1034~1039、SK1048・2071) |
| | | PL 32 |
| | | 平安遺構 3 (㊦-1・㊦-1区平安水田全景、㊦-1区畦畔水口) |
| | | PL 33 |
| | | 平安遺構 4 (㊦-2・㊦-1・㊦-2 |

- 区平安水田全景、㉒-1区畦畔・水口)
- P L 34 平安遺構 5 (㉓区平安水田全景・畦畔・水口)
- P L 35 平安遺構 6 (㉒-2・㉓区平安水田全景、㉒-2区水田面凹凸)
- P L 36 平安遺構 7 (㉔・㉕区平安水田全景・畦畔・スキ跡)
- P L 37 平安遺構 8 (㉖-3・㉗・㉘-2・㉙-1・3区平安水田全景)
- P L 38 平安遺構 9 (㉚-2平安水田全景、㉛-1水田面凹凸・スキ跡、㉜-2擬似畦畔、S K 4001ほか)
- P L 39 平安遺構 10 (㉝-1水田面・S C 3005遺物出土状況、㉞・㉟区平安水田全景、S D 3009・3010)
- P L 40 平安遺構 11 (㊱・㊲区平安水田全景、㊳区水田面凹凸と足跡、S D 3100、S C 3002)
- P L 41 平安遺構 12 (㊴区水田面、S D 3100、㊵区足跡・平安砂層)
- P L 42 平安遺構 13 (㊶・㊷-2区平安水田全景、㊸区水口・足跡、S D 3100)
- P L 43 平安遺構 14 (㊹-2区平安水田全景、S C 3002、S D 3001・3002)
- P L 44 平安遺構 15 (㊺-1区平安水田全景・畦畔、S C 3001芯材・遺物出土状況ほか)
- P L 45 平安遺構 16 (㊻・16区平安水田全景、S D 4001)
- P L 46 平安遺構 17 (16区平安水田全景・畦畔、S K 002~004)
- P L 47 中世遺構 1 (S D 2001・2007・1008土橋付近、㊼-1セクション)
- P L 48 中世遺構 2 (S K 1001・1004・1012・1017・1020・1039・1066)
- P L 49 中世遺構 3 (S K 1084・1085・1086・1088)
- P L 50 中世遺構 4 (S K 1144・1146・2001・2008・2022・2065)
- P L 51 中世遺構 5 (S K 2073・2131・2193・2202・2249・2254・2305・2316)
- P L 52 中世遺構 6 (S K 2015・2427・2616・2624・2635・2864・2867・2875)
- P L 53 中世遺構 7 (㊽-1第1検出水田面、S D 0003・0004、S K 0001、㊾-1・2中世II水田面ほか)
- P L 54 中世遺構 8 (㊿北中世II水田面、S D 0023・0025、S K 0002・0003・0005・0007・0008・0011)
- P L 55 中世遺構 9 (S D 3006、㊽区呪符木簡出土状況、㊾-1中世I水田全景、S D 0014・0015ほか)
- P L 56 近世遺構 1 (S D 1001・1002・1008・1022~1024・2018ほか、S A 2001、S K 1131、S X 2001)
- P L 57 近世遺構 2 (S D 0012・0013・0020、㊿-2・㊽区近世水田)
- P L 58 縄文土器 1 (S B 2002)
- P L 59 縄文土器 2 (S B 2001・2003、縄文包含層)
- P L 60 縄文土器 3 (S B 2002)
- P L 61 縄文土器 4 (S B 2002)
- P L 62 縄文土器 5 (S B 2003)
- P L 63 縄文土器 6 (S B 2003、S K 2514・2516・2517・2518・2519・2530・2534、縄文包含層)
- P L 64 縄文土器 7 (縄文包含層)
- P L 65 縄文石器 1 (S B 2001・2002・2003)
- P L 66 縄文石器 2 (S K 2514・2515・2516・2519・2522・2534、縄文包含層)
- P L 67 縄文石器 3 (S K 2181・2281、S D 1016、S X 2002、縄文包含層)
- P L 68 弥生土器 1 (S K 1118・1121・1126・1129、S D 3004)
- P L 69 弥生土器 2 (S K 1116・1122・1128、S Q 1001・1003、S D 3002)
- P L 70 弥生土器 3 (S B 01、S K 1121・1125・1127、S D 3004・4006、㊿-1・㊽区水田面)
- P L 71 弥生土器 4 (S B 01、S K 1119、S C

- 3523・4014、SD3003・3004・4004)
- PL 72 弥生土器 5 (SK1127・1128、SD3004、㊸・㊹区グリッド出土、遺構外)
- PL 73 弥生土器 6 (SB01、SK1128・1130、SD17・3003・3004)
- PL 74 弥生土器 7 (SK1122・1128、SQ1003、SD3004)
- PL 75 古墳時代の土器 1 (SK1120・1128、SA4011、SD3004・4006、㊺区微高地)
- PL 76 古墳時代の土器 2 (SK1122、SA4002、SD3003・3004・4005)
- PL 77 古墳時代の土器 3 (古墳水田、SD3004)
- PL 78 古墳時代の土器 4 (SK1123、SD3003・3004・4005・3502)
- PL 79 古墳時代の土器 5 (SK1116、SD3003・3004・3005・3512・3513、古墳水田ほか、玉類、土製品)
- PL 80 弥生石器 1 (磨製石庖丁、磨製土鏃)
- PL 81 弥生石器 2 (打製石斧、磨石・凹石・敲石)
- PL 82 弥生石器 3 (磨石、礪石)
- PL 83 平安水田面出土土器1 (須恵器、土師器)
- PL 84 平安水田面出土土器2 (須恵器、土師器、墨書土器、土鏃)
- PL 85 中世焼物 1 (カワラケ)
- PL 86 中世焼物 2 (陶磁器)
- PL 87 中世焼物 3 (陶磁器)
- PL 88 中世焼物 4 (陶磁器)
- PL 89 中世焼物 5 (珠洲、須恵質すり鉢)
- PL 90 中世焼物 6 (在地産すり鉢)
- PL 91 中世焼物 7 (瓦質火鉢、在地産土師質火鉢)
- PL 92 中世焼物 8 (内耳鍋)
- PL 93 中世焼物 9 (内耳鍋、土師質釜、土師質香炉、大甕製品)
- PL 94 中世土製品 1 (土製円盤、土鏃、羽口)
- PL 95 中世石器 1 (石臼)
- PL 96 中世石器 2 (中・近世砥石、硯)
- PL 97 中世石器 3 (石臼、石鉢類、搗臼、五輪塔火輪、灯明具、その他)
- PL 98 中世石器 4 (鉄滓系遺物、椀型滓)
- PL 99 金属製品 1 (鉄製品、青銅製品)
- PL100 金属製品 2 (犁先)
- PL101 金属製品 3 (銭貨、銅鏡)

第1章 序 説

第1節 調査の概要

1 発掘調査委託契約

財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という）は、その設立趣旨から国及び県の機関（文化財保護法施行令（昭和50年令第267号）第1条に定める法人を含む。）により実施される公共開発事業において、事業の実施に先駆け調査を済ませる義務を負う者（事業者）の委託を受けて、埋蔵文化財の調査を行うほか、埋蔵文化財の保護のための必要な事業及び研究を行う。県埋文センターが委託を受けて行う調査（受託調査）は、それに先立ち長野県教育委員会（以下「県教委」という）が、行政上の調整を済ませた上で県埋文センターにおいて受託して行うことが適当であると認めたものについて実施される。

中央自動車道長野線（以下「長野線」）は、昭和57年3月の起工式から岡谷市で本格的な工事が開始された。これに伴って県教委は、同年4月から県埋文センターを発足させた。高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に準じて実施され、日本道路公団は県教委に調査を委託し、県教委は県埋文センターに再委託する方式がとられた。

本道跡は、70,000㎡が調査対象面積となり、工事工程及び発掘調査技術その他の事情により4か年にわたる分割調査として年度毎の契約を行なった。発掘調査区の設定及び調査技術については次節で述べるが、年度別の調査地区、面積は以下の通りである。

(年 度)	(発掘調査区)	(調査契約面積)
昭和63年度	①・④・⑤・⑧・⑨・⑪・⑮・⑰・⑳	33,400㎡
平成元年度	②・③・⑤・⑥・⑦・⑫・⑬・⑭	35,000㎡
平成2年度	⑫	1,600㎡
平成3年度	⑬	170㎡

2 調査の体制と経過

発掘調査から整理作業及び報告書刊行にいたる全ての業務は、長野調査事務所が管轄した。以下に年度を追って調査体制と調査区別の調査期間、調査の概要を掲げる。

(1) 昭和63(1988)年度

○調査体制	理事長	村山正 <63,11.25辞任>
	理事長	樋口太郎 <63,11.26就任>
	副理事長	高橋弘典 <63,6.6辞任>
	副理事長	伊藤万寿雄 <63,6.7就任>

長野調査事務所長（兼常務理事） 塚原隆明
 同 総務部長（兼事務局長） 半田順計
 同 調査部長（兼事務局調査部長） 笹沢 浩
 同 調査研究員 青木一男 池田 哲 市川隆之 伊藤友久 白居直之 内山光彦
 太田典孝 春日文彦 久保直隆 黒岩 隆 越川長治 斉藤伸介
 竹内 稔 寺内隆夫 中平智昭 中村敏生 西山克己 平林 彰
 平林芳明 福島厚利 三上徹也 宮尾栄三 山崎光顕 山崎博也
 綿田弘実

第1表 昭和63年度調査概要

調査区	調査面積 (㎡)	調査面 内容	調査期間 (月)											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12			
①-1	1,800	水田跡[中世・平安]		5/21				8/31						
①-2	1,800	水田跡[中世・平安]		5/21					9/2					
④	2,200	水田跡[中世・平安・弥生]					8/8		9/27					
⑤-1	2,300	集落跡[中世・平安] 祭祀跡[古墳]		5/21									12/16	
⑤-2	2,000	集落跡[中世・平安] 祭祀跡[古墳]		5/21									12/16	
⑥-1	1,300	集落跡[中世・平安・縄文] 祭祀跡[古墳]						8/27					12/16	
⑥-2	1,300	集落跡[中世・平安・縄文] 祭祀跡[古墳]						8/27					12/26	
⑦	900	水田跡[平安・古墳]				7/21				10/19				
⑧-1	2,200	水田跡[平安・古墳・弥生]						9/2					12/17	
⑧-2	2,000	水田跡[平安・古墳・弥生]								11/4			12/17	
⑨	5,300	水田跡[平安・古墳・弥生]								10/21			12/26	
⑩-⑪-⑫	6,100	トレンチ調査												
⑬	4,200	水田跡[平安・古墳・弥生]						9/2					12/13	



安全祈願



止水用鋼矢板の敷設

本遺跡は、長野市教育委員会によるほ場整備事業に伴う調査によって、平安時代の糸里型地割、弥生時代から現代にわたる水田遺跡であることが明らかにされていたが、時期・遺構など具体的には明確に検出されていなかった。また低湿地に立地し文化層が幾層も重層する調査は、県内では経験のないものであり、調査初年度は、適格な調査法を模索する段階であった。千曲川によって形成された沖積地内の遺跡は極めて軟弱な地盤の低湿地性の遺跡であり、調査の進行とともに膨大な情報量を持つことが判明した。弥生時代から現代に重層する水田跡のほか、当初予想もしなかった古墳時代前期の祭祀跡が微高地に存在していることが確認された。また微高地下層からは従来低地には存在しないと思われていた縄文時代前期の集落が検出された。

初年度の調査は、水田営農地帯の調査ということを踏まえた周辺環境の保全、止水用の鋼矢板工事ははじめ、地表下4mに及ぶ調査区内の排水及び安全対策など多くの課題を背負っての調査であった（詳細は次節調査の方法に記述）。

調査対象とされた聖川、JR篠ノ井線の周辺（17～19調査区）においては、河川、鉄道路線の安全確保のため部分的なトレンチ調査に留めた。

(2) 平成元（1989）年度

○調査体制	理事長	樋口太郎	
	副理事長	伊藤万寿雄	
	長野調査事務所長（兼常務理事）		塚原隆明
	同 庶務部長（兼事務局長兼事務局総務部長）		半田順計
	同 庶務部長補佐		松本忠巳
	同 調査部長（兼事務局調査部長）		笹沢浩
	同 調査課長		白田武正
	同 塩崎地区総括		宮下健司

第2表 平成元年度調査概要

調査区	調査面積(m ²)	調査面	調査期間(月)											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12			
②-1	1,500	水田跡【中世・平安】		6/13							9/27			
②-2	1,500	水田跡【中世・平安】					8/31				10/10			
③	2,400	水田跡【中世・平安】			7/7					9/9				
⑥	5,500	水田跡【中世・平安・弥生】 集落跡【弥生】	4/24				7/21							
⑦-1	3,300	水田跡【中世・平安】 祭祀跡【古墳】	4/13							8/31				
⑦-2	2,000	水田跡【中世・平安】 祭祀跡【古墳】	4/13							8/31				
⑩-3	400	集落跡【中世・平安】 祭祀跡【古墳】	4/11	5/8										
⑬-1	1,700	集落跡【中世・平安】 祭祀跡【古墳】	4/12					7/31						
⑭-2	500	水田跡【平安】 祭祀跡【古墳】	4/11				6/30							
⑮-1	1,900	水田跡【平安・弥生】	4/17			6/15								
⑯	3,000	水田跡【中世・平安・古墳・弥生】		5/19							10/7			
⑰	6,500	水田跡【中世・平安・古墳・弥生】				7/18						12/23		
⑱	4,800	水田跡【中世・平安・古墳・弥生】						9/6				12/21		

同調査研究員 池田 哲 市川隆之 伊藤友久 臼居直之 内山光彦 大久保邦彦
 越川長治 斉藤伸介 関 全寿 武居公明 中平智昭 田中 正
 平林 彰 平林芳明 三上徹也 宮脇正実 山崎博也 渡辺敏泰

昭和63年度の継続として、隣接する調査区の発掘調査を行った。2年目であり、調査に際しては止水用の鋼矢板や排水施設等の準備、周辺環境の保全のための仮設水路の敷設を行って調査に臨んだ。前年度からの課題であった排土の処理に関しては各個別調査区における調査期間の調整というかたち排土場所の確保が行われた。

分割調査のため全体像がつかめなかった古墳前期の祭祀跡では、周囲を取り囲む溝が全周することが確認され多くの石製装身具が出土し、低地では平安時代の洪水砂で埋もれていた条里の坪境がほぼ110m間隔で存在することが明らかとなった。また新たな微高地がみつき弥生時代後期の墓域が検出された。本年度で本遺跡の大半の発掘調査を終了した。

(3) 平成2 (1990) 年度

○調査体制

理事長	樋口太郎
副理事長	伊藤万寿雄
事務局長 (兼専務理事)	塚原隆明
長野調査事務所長	峯村忠司
同 庶務部長 (兼事務局総務部長)	塚田次夫
同 庶務部長補佐	松本忠巳
同 調査部長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
同 調査課長	宮下健司
同 調査研究員	飯島明孝 下島章裕 綿田弘実

調査区⑫-2 調査面積1,600㎡ 調査期間9月14日～12月7日

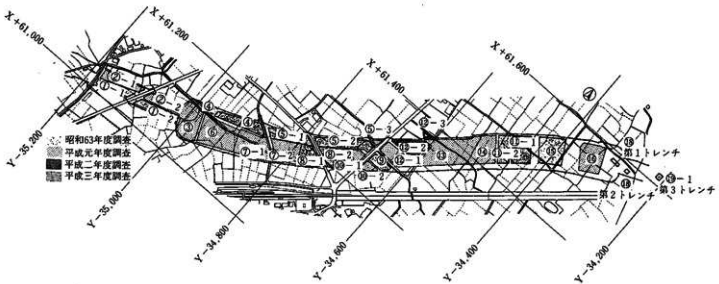
用地買収の未完了であった調査区で、地表面の耕作土が保全されていたため上層の攪乱がなく、本遺跡にあって唯一近世水田跡が全面調査された。近世水田の他に弥生中期から平安時代までの4面の水田跡が



平安水田の調査風景



排土処理



第1図 調査区年度別調査範囲

検出された。

(4) 平成3 (1991) 年度

○調査・	理事長	宮崎和順
整理体制	副理事長	伊藤万寿雄
	事務局長 (兼専務理事)	塚原隆明
	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 庶務部長 (兼事務局総務部長)	塚田次夫
	同 庶務部長補佐	山崎今朝寛
	同 調査部長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
	同 調査課長代理	原 明芳
	同 調査研究員	白居直之 白沢勝彦 三上徹也 綿田弘実

調査区②-3 調査面積170㎡調査期間4月8日～5月30日高速道路排水施設建設に伴い170㎡を調査した。小面積ではあったが過去3年間の状況を踏まえ弥生後期、古墳、平安、近世の水田遺構を検出した。6月からは整理作業に入り、主として土器・木器などの洗浄、遺物の台帳整理を行った。古墳祭祀域から出土した土器は、天箱1000箱に上ったが、脆弱であったため樹脂による固形化処理を年間を通して実施し、木器は出土8000点の中から製品の抽出を行った。

(5) 平成4 (1992) 年度

○整理体制	理事長	宮崎和順
	副理事長	伊藤万寿雄
	事務局長 (兼専務理事)	峯村忠司
	参 事	樋口昇一
	事務局総務部長	神林幹生

長野調査事務所長	岡田正彦
同 調査部長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
同 庶務課長	山崎今朝寛
同 整理課長	原 明芳
同 調査研究員	市川隆之 白居直之 白沢勝彦 徳永哲秀 西嶋 力

古墳祭祀域出土の土器の接合・復元、木器の実測、写真撮影を主として行った。木器は樹種同定作業を進め完了したものから昨年度導入したP・E・G処理槽での保存処理を実施した。樹種同定は東北大学・理学研究科鈴木三男氏と農林省森林総合研究所能城修一氏に依頼した。

(6) 平成5 (1993) 年度

○整理体制	理事長	宮崎和順 <5,10.15就任>
	理事長	佐藤善處 <5,10.16就任>
	副理事長	伊藤万寿雄
	事務局長	峯村忠司
	参 事	樋口昇一
	事務局総務部長	神林幹生
	長野調査事務所長	岡田正彦
	同 調査部長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
	同 庶務課長 (兼事務局総務部長補佐)	羽生田博行
	同 整理課長	原 明芳
	同 調査研究員	市川隆之 白居直之 白沢勝彦 徳永哲秀 西嶋 力

古墳祭祀域出土の土器の接合・復元を昨年度に引き続き行い、後半より実測を行った。木器は実測、写真撮影を継続して行い、大形木器は写真実測を採用した。またP・E・G処理槽で木器が400点が保存処理を完了した。

(7) 平成6 (1994) 年度

○整理体制	理事長	佐藤善處
	副理事長	田村治夫
	事務局長	峯村忠司
	参 事	樋口昇一
	事務局総務部長	神林幹生
	長野調査事務所長	岡田正彦
	同 調査部長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
	同 庶務課長 (兼事務局総務部長補佐)	羽生田博行
	同 整理課長	原 明芳
	同 調査研究員	市川隆之 出河裕典 白居直之 白沢勝彦 徳永哲秀 西嶋 力

土器の接合・復元を続行し、遺構の第2原因作成、土器・石器などの遺物の実測、木器のトレースを主として行った。木器に関しては奈良国立文化財研究所室長黒崎直氏の指導を受けた。

(8) 平成7 (1995) 年度

○整理体制	理事長	佐藤善處
	副理事長	田村治夫
	事務局長	峯村忠司
	参事	樋口昇一
	事務局総務部長	西尾紀男
	長野調査事務所長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
	同 庶務課長 (兼事務局総務部長補佐)	外谷功
	同 調査課長	百瀬長秀
	同 調査研究員	市川隆之 白居直之 徳永哲秀 西嶋 力 山本 浩



木器写真実測風景

遺構の第2原因作成、土器・石器・木器などの遺物の実測・トレースを主として行った。平行して遺物写真の撮影・焼き付け、遺構写真の焼き付けを行った。古墳祭祀域の遺物・遺構の検討を進め、大阪大学教授都出比呂志氏から指導を受けた。木器の保存処理は本センターの処理施設に加え、県立歴史館の処理施設でもP・E・G処理を行った。

(9) 平成8 (1996) 年度

○整理体制	理事長	戸田正明
	副理事長	佐久間鉄四郎
	事務局長	青木 久
	事務局総務部長	西尾紀男
	長野調査事務所長 (兼事務局調査部長)	小林秀夫
	同 庶務課長 (兼事務局総務部長補佐)	外谷 功
	同 調査課長	百瀬長秀
	同 調査研究員	市川隆之 白居直之 白田広之 西嶋 力

遺構・遺物のトレース・凶版作成、原稿執筆を主として、遺物の写真撮影・焼き付け・版組みなどを平行して行い、報告書が発行された。木器はP・E・G処理槽での保存処理を引き続き行い、本年度新たに杭類の常温含浸を実施した。

3 整理作業の分担

本遺跡の整理作業では各作業を以下の調査研究員が担当した。

遺物実測・トレース〔土器、金属器、木器関係〕…市川隆之 出河裕典 白居直之 三上徹也
〔石器関係〕…町田勝則

縄文時代の石器、大形木製品の实測は榊シン技術コンサルに委託して行った。

土器の復元…徳永哲秀 遺物写真撮影・焼き付け…西嶋 力

遺物保存処理・修復…白沢勝彦・山本浩・白田広之

4 指導者・協力者

発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご援助を頂いた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

青木 和明 赤羽 貞幸 荒井 格 飯島 哲也 石黒 立人 井原今朝男 上原 真人 牛川 佳幸
久々 忠義 工楽 善通 倉沢 正幸 黒崎 直 河野 道明 小林 正春 小山 丈夫 斎野 裕彦
坂口 一 笹本 正治 佐藤 信之 佐野五十三 茂原 信生 渋谷恵美子 島田 哲男 助川 朋広
鈴木 三男 関谷 慎二 田嶋 明人 谷口 肇 谷藤 保彦 千野 浩 都出比呂志 寺島 孝典
中山 誠二 西川 修一 能城 修一 服部 敬史 原田 和彦 樋上 昇 平川 南 福島 正樹
藤原 宏志 前島 卓 矢口 忠良 矢島 宏雄 山口 明 山口 謙治 山下 歳信 山田 昌久
長野市教育委員会



高速道路開通後の遺跡周辺 (篠ノ井西部地区は場整備施行組合提供)

第2節 調査の方法

本遺跡を含む長野市篠ノ井から更埴市稲荷山地域には条里型地割が認められる水田が広がっており、小字名にも地割に関係するものが多く残されている。これらの状況は、千曲川右岸の更埴条里遺跡とともに早くから注目されていた。長野市教育委員会は、昭和57年度から今日に至るまで広範囲に発掘調査を行ない、現水田の下に埋没した古代、中世の水田跡を検出している。一連の調査の中で、砂によって被覆された平安埋没水田跡の状況や条里型地割の広がりなどを解明するなど多くの成果を納めている。また同教育委員会が実施した本遺跡二ツ柳地跡のプラント・オパール分析によって平安水田よりも更に下層に弥生時代の水田跡が存在することが確認されていた。この情勢を踏まえ県埋文センターによる調査が昭和63年度に実施された。本項では実際の調査方法とその課題、調査報告書をまとめるにあたって当埋文センターで用いている基本的な調査の方針について概略を述べる。

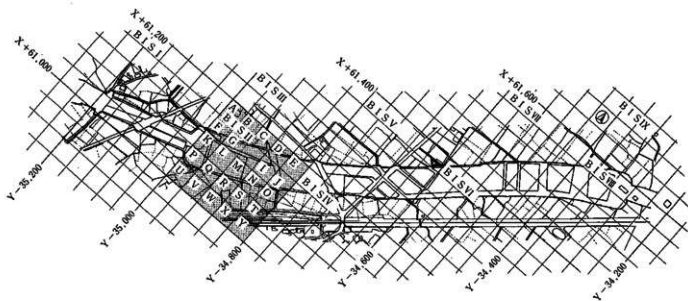
1 遺跡の名称と記号

遺跡名称は、長野県教委作成の遺跡台帳に記載されている「石川条里遺跡」とした。また記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を与えた。3文字の1番目は長野県内を9地区に分けた地区記号で長野市に該当する「B」と記し、次の2文字は遺跡をローマ字表記した「ISIKAWAJOURI」の「IS」を続けて「BIS」とした。この遺跡記号は将来において情報処理に対応するためのものであり、本遺跡に関係する遺物の注記、図面、写真など全ての資料について使用されている。

2 調査区設定と略称

(1) 調査区設定の原則

グリッドの設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点(長野県第八系、 $X=0.0000$ $Y=0.0000$)を基点に200倍の数値を選んで調査範囲内のX軸・



第2図 大々地区割付図

Y軸を測量基準線とした。これをもとにグリッドが設定され、大々地区(200×200m)・大地区(40×40m)・中地区(8×8m)・小地区(2×2m)の4段階に区分する。本遺跡は全長約1.2kmに及び調査範囲を対象とし北西から南東に向かってBISI区、II区、III区……の順に9の大々地区を設定した(図2)。この大々地区を25区画に分割し、大地区とし北西から南東へA、B、C……の大文字アルファベットを付した(図3)。更に大地区を25区画に分割し北西から南東へ1、2、3……のアラビア数字を付した(図4)。測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者に委託して設定した。

調査で検出された遺構の記録および遺物の取り上げには中地区の基準杭、グリッド名称を用いた。

(2) 工程上の調査範囲と調査区

本遺跡の調査範囲は、年次ごとの工事工程及び用地買収の関係から極めて変則的な分割範囲が設定された。また地表下約2～4mに及ぶ深さに遺構面があることから、排土処理の用地及び運搬道の確保、更に調査時の安全確保のために調査年次ごとに調査範囲が限定され設定地区名称も○区○として付加された。

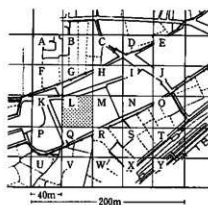
水田遺構の調査では堆積した土層の分層を手掛かりとして遺構検出を進め、分層された層位の連続性をもって水田面を確定する。各調査区で特定された水田層の堆積は薄く、分割された調査区相互で同一土層を照合することが極めて困難であった。このため当該文センターで通用している調査区名称を用いて各時代の遺構面の事実報告、所見を記載すると工程上の調査区が更に分割される

こととなり調査面での混乱と重複する記載が多くなる。そこで本書では昭和63年度から4カ年間の発掘調査段階で設定された工程に従った調査区の略称を用いた。記載の上で区別するため工程上の調査区の場合○内アラビア数字を用いている。挿图中においてはX軸・Y軸の座標値と○調査区、X軸・Y軸の座標値とグリッド、○調査区とグリッドの3種の記載がなされ、低地域の調査報告では主として前2者が用いられ、微高地域の調査報告においては後2者を用いている。文章記載及び表においては、この調査範囲を示すものとして○区を明記した。

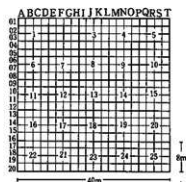
(3) 遺構記号

遺構名称は記録、遺物の注記等の便宜を図るため記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は基本的に検出時に、主として平面的形態や分布の特長を指標として決定するため必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。一旦記号・番号を付した遺構に関しては、原則として変更しない。このため番号には欠番があり、表記についても2桁数字から4桁数字など様々なものがある。最終的な遺構名称の決定は整理作業の段階で行われる。本書で用いた遺跡記号には、次の種類がある。

- ・SB：方形・円形・楕円形の掘り込み。竪穴住居址、竪穴状遺構。
- ・SK：SBより平面形が小さな掘り込み。土坑、土壇、貯蔵穴、井戸等。
- ・SA：列をなす高まりもしくは落ち込み。杭列、柵列。
- ・SC：耕地の遺構において連続する大小の高まり。水田面畦畔、道路状遺構。



第3図 大地区割付図



第4図 中・小地区割付図

- ・SL: 耕地の遺構においてSC、SA等によって区画された面。水田区画、畑。
- ・SD: 細長く連続する掘り込み。溝址。
- ・SH: 石が面的に集中するもの。集石、焼石炉等。
- ・SQ: 遺物が面的に集中するもの。祭祀址、ごみ捨て場等。
- ・SF: 火を焚いたあとが面的に広がるもの。火床、炉址等。
- ・SX: 不明遺構。

3 遺跡調査の手順

(1) 水田遺跡、遺構の調査

当埋文センターでは昭和60年度から62年度にかけて松本市島立地区等で水田跡の調査が行われているが、低湿地での本格的な水田跡の調査は善光寺平の本遺跡が初めてであった。低湿地での調査に対して未経験であったため、初年度の調査では調査技術、安全対策など調査方法全般にわたって試行錯誤が繰り返された。初年度の調査経験を踏まえその後調査法が確立され、2年次以降の本遺跡の調査、更には長野市川田条里遺跡、浅川扇状地遺跡群、更埴市更埴条里遺跡の水田調査においてその成果が上げられた。

A 遺構面の確認調査

水田跡の調査に先立ち検出面を確定するため、主に2つの方法が取られた。1つはプラント・オパール分析による水田層の確認、もう1つは長いトレンチによる地積層の確認である。この2者によって水田遺構の面的な広がり、発掘によって水田遺構が検出可能かどうかを決定した。またプラント・オパール分析資料採取のための試掘坑、トレンチから出土した遺物によって水田遺構の時期の目安とした。水田面の検出にあたっては水田層と確認されながらも、技術の未熟さゆえに結果として明瞭な水田区画が検出できなかった面がいくつかあった。

A プラント・オパール分析

本遺跡の場合プラント・オパール定量分析の目的とするところは、埋蔵水田跡の層位とその範囲を知ることにある。調査対象範囲が路線と同一の、幅60m、長さ約1.2kmに及んだため、ほぼ20m間隔で64地点の試掘坑を設定し、初年度サンプルの採取を行った。この分析と試掘坑から出土した土器によって弥生時代中期・後期、古墳時代前期の水田層の存在が明らかとなり、平安砂層によって被覆された水田層が全域にわたってほぼ同一の数値を示すことが確認された。この分析方法・内容の詳細については第3章第1節で述べる。この分析により水田跡検出の確証をえることができた反面問題点もいくつか残された。分析試料採取のための試掘坑設定が十分検討されていなかったため、調査範囲である路線幅中央部に試掘坑が並び重要遺構の検出時に妨げとなった。また土層の分層にあたり試料採取あつた担当者や調査区担当者の認識のずれがあり、プラント・オパールが多量に検出された土層が全域で確定できない調査区があった。このことは2m四方の試掘坑で調査区全域の状況をつかもうとした調査方針が無理があり、以後の調査では調査区の周囲法面もしくはトレンチの断面から試料採取をすることにした。

B トレンチの掘削と断面観察

本遺跡の調査区はその多くが路線に沿って東西に細長く設定されたため、各調査区の北側もしくは南側に排水溝をかねたトレンチ掘削を行い、壁面の土層断面観察を行った。連続する地積層の中から基本土層を把握し、壁面で観察される畦畔・溝等の水田遺構が帰属する検出面を確定した。この観察によって平安砂層が水田域で例外なく検出されること、東側の低地では弥生・古墳水田が泥炭層で被覆されていることが確認された。また分層された水田層の鋤込み、凹凸などの耕作状況から調査方法を決めた。土層断面図は縮尺1/20で図化し、必要に応じて写真撮影をした。なお土層観察の際、土色の記録は原則として『新

版標準土色帖]（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）によった。

遺跡全体に共通する堆積土層の把握につとめたが各時代の水田耕作による堆積層の違い、農業用水路、生活用道路によって分断され未調査地点を隔てた調査区間の微妙な土質の違い、各調査区担当者の認識の相違などによって細部で一致を見ることができなかった。

C 水田遺構の検出

調査面の決定後は、水田跡上層の堆積層を効率的に除去するため、大型重機(0.4~0.7m³)によって検出面直上までの掘削を行った。排土の搬出にも大型重機が用いられ、大型ダンプによって運搬した。重機の使用にあたっては、地盤が軟弱であったため大型鉄板を敷き込み、下層水田の保護に留意した。

中近世、平安水田跡の検出にあたっては、大半の水田面が砂層に覆われていたため人力で砂を除去し、水田面の凹凸の検出にはスプーン等を使用した。弥生・古墳の水田跡は、砂質泥炭層を重機(0.4m³)によって数センチづつ削り土質の微妙な違いから畦畔の検出を行った。検出後人力で周辺の堆積層を除去し遺構の精査をした。本遺跡では技術上の未熟さがあり杭列、大畦畔は検出されたものの小区画となる畦畔の検出にあたっては十分な成果が上げられなかった。

D 記録

水田跡全面の測量には④・⑤-3・⑫-3区の一部小調査区以外は、空中写真測量（以下空測という）を用いて行った。調査区や水田面の状況に応じてバルーン、ラジコン・ヘリコプター、クレーン車を用いてステレオ写真測量を業者に委託し実施した。平面図の作図にあたっては1/20縮尺図及び2~4cmのコンタ図を原則とした。検出された個別の特徴的な畦畔、杭列、土器集中区などは、空測と併用して簡易遺り方測量で記録した。水田跡の測量に関して空測を用いたことは作業を進めるのに効率的で、木製品が多量に出土した本遺跡の場合、脆弱遺物の保護にもなった。

水田跡全面の写真記録は、ある程度の高度が必



重機による法面の掘削



調査区法面の土層観察



水田遺構検出作業



バルーンによる空中写真測量



木製品検出作業

要なため空測時に空中写真撮影を実施した。6×6、もしくは6×7によるモノクロネガとカラーライドの撮影を原則として業者に委託した。個別の遺構に関しては調査研究員が35mm・6×7を用いてモノクロネガとカラーライドの撮影を行った。

E 木製品の記録、取り上げ

各水田層及び遺構から約9,000点に上る木製品が出土した。脆弱遺物である木製品の記録には空測による図化、35mmの写真撮影を多用して短期間で行った。また乾燥を防ぐため調査においては濡れ布、シートで被い、取り上げ後は防カビの処置をした水溶液に浸した。木製品の取扱に関する詳細は第3分冊を参照されたい。

イ 安全対策と止水対策の方法

A 発掘調査面の掘削 (第5図)

本遺跡の堆積土層は泥炭と砂を含む極めて軟弱な土質であり、水田面が地表面下1.5~4 mに及ぶ深さで確認されていた。このため周辺環境の保全、発掘調査時の土砂崩落防止の目的から調査面の掘削に際しては、調査対象となる道路用地杭から50~100cm幅の間において調査区周囲に安全勾配を付けた法面掘削が行われた。①の鋼矢板を敷設した場合は1割勾配を付け発掘面の深さと同じ幅で法面が設定され、②の鋼矢板の敷設なしで4 m以下の掘削をする場合は、6 m幅の法面が設定され、ほぼ中間となる深さに大走りを設けた。①の方法は面的調査をした①~③区の各調査区で実施され、②の方法は18・19区のトレンチ調査で実施された。更に面的調査で掘削面が4 m以下となった⑬・16区では①と②の方法を合わせて掘削を行った。また掘削した法面には土砂崩落防止と土層の保護のために常時ビニールシートで覆った。



第5図 鋼矢板設置標準図及び発掘面

B 止水、排水の方法

本遺跡は低湿地に立地するが、それに加え周辺が水田地帯で、調査が稲作りと重なる時期であることから出水、湧水が予想されていた。周辺からの止水対策としては、鋼矢板を各調査区周囲に敷設した。鋼矢板は、⑬区～16区の水田面が下層に及ぶ調査区は8 m、ほかの調査区は6 m前後の長さのものを用いた。また法面もしくは水田確認面の掘削の際に幅50～150cm程の排水溝を調査面周囲に巡らし、排水ポンプによって常時排水を行った。

本遺跡では水田跡調査の他に微高地から検出された居住・祭祀跡の調査を行った。安全対策と止水対策の方法は前項の水田遺構の調査と同様である。記録に関しては、各遺構から多数の遺物が出土したことから、写真測量と簡易遺り方測量を併用して縮尺1/10の詳細な図化を行った。なお古墳祭祀域に関する調査法の詳細は第2分冊を参照されたい。



平成元年度調査風景

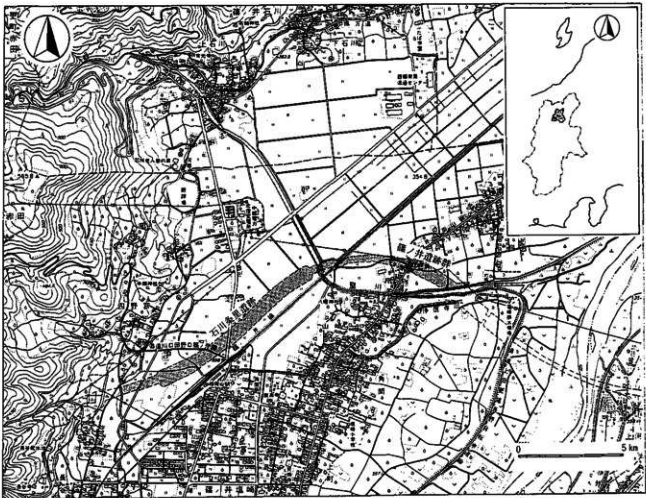
第2章 位置と環境

第1節 地形・地理的環境

1 位置と地形

石川糸里遺跡・篠ノ井遺跡群は長野盆地の南西部分の端に位置し、西側の西部山地、東側の千曲川に挟まれ、自然堤防・後背湿地の発達した千曲川氾濫原上にある。

石川糸里遺跡は長野市石川・二ツ柳・塩崎など複数の地籍にまたがり、千曲川によって形成された自然堤防の後背湿地に位置する。東側は自然堤防上に立地する篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群接し、北西側は西部山地の縁辺部に接する。南側は塩崎越地籍で更地市境となるが更地市八幡・桑原・稲荷山糸里の地割遺構へとつながる。広域に「石川糸里遺跡」とした範囲は、各時代の生産関連跡、主には水田遺構から構成さ



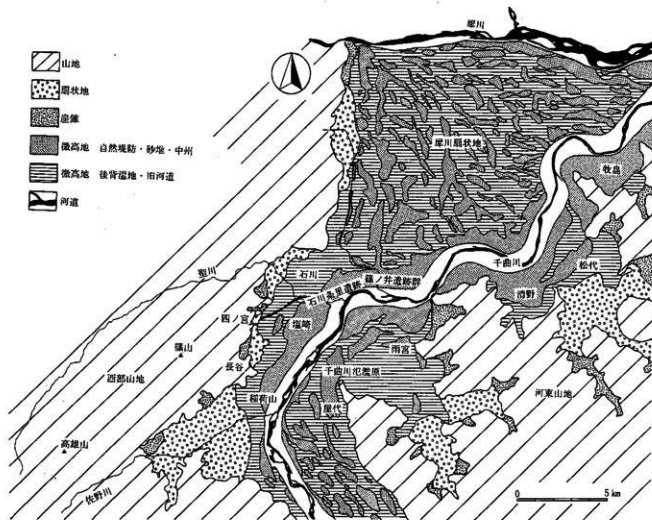
第6図 遺跡周辺の地形

れる性格が付された遺跡範囲を示すものである。しかしこの遺跡範囲内には地表面からは確認が困難な埋没微地形が存在し、各時代の埋没水田遺構とともに居住・祭祀・墓といった性格の異なる遺構が検出され、将来的にも確認される遺跡構成要素を含んでいる。

(1) 長野盆地の地形 (第7図)

長野盆地は南北長さ約40km、東西幅約8~10km、標高330~400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地地域に明瞭に区分される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められる。長野市街地の中心部は裾川扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央を南北に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響されて自由蛇行している。

犀川扇状地は長野市犀口を扇頂とし南北方向に緩やかに傾斜して広がる。勾配は4/1000mである。扇頂は千曲川と接し、南端は岡田川と接している。傾斜方向に比高差数m以内の微高地と微低地が放射状に配列している。微高地は犀川の網状流路に沿って形成された自然堤防や旧河道の砂堆・中洲などで、砂・礫などの粗粒堆積物から構成されている。微低地は後背湿地や旧河道の部分である。微高地は畑地、微低地は水田に利用されている。



第7図 長野盆地の地形

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中洲などの微高地と、旧河道、後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。上流から順を追って観察する。戸倉町から更埴市屋代にかけての氾濫原上には、自然堤防、後背湿地の列が並び千曲川が乱流していた様子がうかがえ、文献にも流路の変更が記されている。右岸側の山麓線は北北西-南南東方向で直線的であり、本流の側方侵食の急崖である。更埴市稲荷山、八幡付近で千曲川は河床勾配を1/1000と緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、また蛇行を始める。左岸では佐野川扇状地の東端に3mの崖があり、標高350mのラインをつくる。これも本流の側方侵食の崖である。稲荷山以北では左岸側に八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井（東篠ノ井、横田）、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達する。その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮、清野、松代、牧島の後背湿地となる湾入低地とその西側には自然堤防が形成されている。

(2) 遺跡周辺の地形

調査地点である塩崎から西方の篠山(907.7m)山塊は、その南西の高雄山(1166.4m)山塊とともに高雄山山地に属している。両山塊とも新鮮世の火山岩類からなる。

長谷寺南部、四野宮南部、河越溜池西側には完新世の崖錐性の堆積物が分布していて、中新世の樫花凝灰岩とともに山麓帯を形成している。石川・長谷では小規模な扇状地がみられる。

調査地域を流れる聖川は聖山に源を発し、まず高雄山をまいて北東方向に流れる。これは高雄山-篠山を結ぶ方向と同じであり、地質構造を反映している。信更町田野口では河床勾配は緩やかで谷底平野を形成しているが、山田～上石川で急となり上石川で南東方向に向きを変えてから再び塩崎北方で東に折れて流れ、千曲川に合流する。過去には石川から東に流れていたと考えられ、川原田堰が旧川筋に該当する。聖川が現在と同様の流れの方向をとるようになったのは天正年間以降とされ、角間、山崎両地区の境を流れるようになり、宝永6(1709)年に現在の川筋へ改修したとされている。聖川は後背湿地では天井川となり、微高地を形成しているところもある。本遺跡一帯の主な灌漑用水源は、文政9(1826)年に千曲川からの塩崎用水が竣工するまで、聖川や聖山後背の丘陵部からの小渓流、湧水であった。

自然堤防上の平地としては果道篠ノ井・稲荷山線沿いに塩崎上町・角間・山崎方面に伸びるものと、JR稲荷山駅の南部に至るものがあり、後背湿地はその北西側に広がる。自然堤防上には南北方向の凹凸が観察され、微高地と現在の河道までの間に何本かの旧河道を確認することができる。塩崎小学校の東側には2m程の崖があり、時期は不明であるが千曲川の旧河道とされ、角間を流れる浄信寺川沿いはやや低くなっている。後背湿地は山麓寄りでは標高358.56m、JR稲荷山駅付近では357.00m、篠ノ井遺跡群と石川条里遺跡の接する付近では355.60mと緩やかに傾斜しているが、地表面下からは現地地形から観察できない微地形が発掘調査によって発見されている。

2 気候と農事暦

善光寺平南部に位置する更埴市と本遺跡が所在する長野市篠ノ井は、全国的にも「田植え」の時期が遅い地域として有名である。松本盆地一帯の水田が苗によってが緑色に変わる5月中～下旬に遅れること約1か月、6月中旬～下旬に田植えの最盛期を迎え、一部は7月上旬に終了する。夏期の稲作の裏作としては麦、ねぎなどが作付けされ、田植え直前まで土地利用がなされている。以下に本地域の気候と稲作にかかわる農事暦に関して、ほぼ同緯度にあたる金沢市の様子と比較して概要を述べる。農事暦に関しては江戸時代中頃加賀の『耕稼春秋』と昭和10年頃の善光寺平南部の様子を抜粋してまとめた(表3)。

本州の内陸部に位置する長野盆地は、年間降水量が少なく、年・日の気温較差の大きい内陸性気候の特色をもつ。金沢市の気温と比較すると冬は寒さが厳しいが、夏の暑さはほぼ同じであることが分かる。ま

た春から夏にかけての気温が急に上がるのが特長であり、4月～6月にかけて5～8の上昇がみられる降水量では、年間を通じて987mmで日本の年平均降水量のほぼ1/2である。これは本地域が冬に積雪が少ないことが要因であり、1月の平均降水量は、篠ノ井40mm、更地41mm、中野74mm、飯山232mmで、北信濃とはいえ雪による影響はほとんどない地域である。因に日本海岸式気候に属する金沢市は冬の降水量が多く2645mmとなる。積雪が少ない反面日照時間が長く、どんよりと曇る日が続く金沢市に比較して冬の日照時間が2倍近くある。長野の年間日照時間は、全国的に最も日照時間が長い松本盆地と比較しても劣らない数値を示している。この冬の気候がこの地域での2毛作を可能としている。

初夏の気温の急上昇と冬に蓄えられた山麓からの水の供給によって稲作が支えられ、稲の生育期間を短縮させている。篠ノ井地域の稲刈りは10月上旬から中旬に最盛期を迎え、11月上旬に脱穀が行われる。また稲作終了と同時に麦蒔きが行われる。

加賀の農事暦をみると、4月下旬の田植えに入る前の3月に田の打ち起こし(荒起こし)が行われているが、善光寺平では5月初旬に苗代作り、6月中旬が田植えであるのでその10日程前からアラクレ、アセメリをする。本遺跡が所在する地区では、6月下旬に裏作である麦刈りが行われ、

第3表 農事暦とまつり一覽

項目 (月)	『農田神社』加賀一江戸時代中期	農事暦・年中行事 善光寺平南地区 一昭和10年ころ一	稲作にかかわる祭・まつり	
1月	田島貴殿 農具の準備 わら仕事	わら仕事	正月 ◆モノツクリ 米の粉で糰子、糰子 を作り餅の皮に刺す ◆鳥追い、もちら道 い、餅、餅の家の 周りを叩く	
2月	田の打ち起こし(荒起こし) 種肥を池に捨ける 露による古株切り、ごみ焼し 土入れ、草餅、餅の泥あげ			
3月	幹土 畦の下地作り 施肥 改田直し(草き直し) 畦盛り	種肥を水に浸す		
4月	改田草き(改田打ち) 代かき 施肥 田植え	雪解けを待つ苗代かき スジマキ【苗代に種肥をまく】 アラクレ【土をこすす】 藁タリ 稲草刈り 代かき【土を細かくこすす】 【馬・牛に馬糞をかける】	麦刈り	◆苗代祭り ヤキゴベ作り 種を枝を苗代に刺す 水口に供え物
5月	荒草取り 一番草(特打ち) 施肥			
6月	二番草 中干し 三番草	田植え【苗代で買った苗を本田に移し植える】 新麦作り 田の草(1番草) 田の草(2番草)	◆田植え祭 苗3把用紙に供える 甘露・舟船を神棚に 供える キナフムシを作る ご馳走を食べるetc	
7月	稲草取り 水戸払い(田の水落し)	善光寺平南地区は6月下旬から7月上旬に田植え 【開田・更地小島・花立・東横田・長谷・土口etc】 田の草(3番草)		
8月	草刈り 大畷稲刈り	新麦せ 大穀・粟の種まき	◆虫送り 大穀を焼らし、タイ マツをこもし虫を遣 い払う ◆カマエレ 稲穂を3～4本神棚 に供える 初穂を神に供える ◆カマツギ だんごを作る ボタモチを作る 餅つき神に供える	
9月	中穂刈り 晩穂刈り 種を乾燥	稲刈り ハゼカケ【稲束の乾燥】		
10月	稲蒔き(稲の蒔き) その他の蒔き 稲刈り 米俵積み	善光寺平南地区は10月上旬から中旬に稲刈り 大穀・粟の収穫 麦蒔き 脱穀 初穂り		
11月		善光寺平南地区は10月下旬から11月上旬に脱穀 脱穀、土寄せ 家内の前庭 (紙すき・炭焼き etc 種蒔り準備)	◆年取り 田の神に供え物	
12月	藁をなう、藁を織る			

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長野	最高 3.2	4.4	8.8	16.4	22.1	24.9	26.7	32.2	25.0	16.8	12.8	6.5
最低	-0.0	-1.4	-4.4	4.8	9.9	15.2	19.9	26.6	16.2	8.1	2.7	-1.9
金沢	最高 6.2	6.8	12.7	17.3	22.1	25.1	25.3	30.9	26.7	20.9	15.5	16.5
最低	2.2	3.1	7.2	12.1	16.9	21.5	22.4	28.4	18.4	12.4	7.1	16.3
松本	最高 4.4	3.1	9.7	17.2	22.4	25.0	25.1	30.7	25.2	16.6	12.2	7.5
最低	-1.4	-4.4	-2.6	3.2	8.6	14.1	18.6	24.4	15.1	7.5	1.0	-3.5

第4表 月別最高最低平均気温 (1951～1990年平均) [理科年表]

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
長野	131	142	182	197	215	260	177	206	146	151	145	132	1881
金沢	94	85	146	181	213	155	179	214	154	154	119	75	1701
松本	184	155	215	252	240	191	209	220	157	170	173	178	2373

第5表 月別日照時間の月別平均値 (1951～1980年平均) [理科年表]

その後田起こし、シロカキに入る。このため7月初めの半夏生に田植えをするのが一般的である。田植え後10～15日目あたりに田の草を取り、再び10～15日をおいて田の草を取り3度繰り返される。加賀では9月に稲刈りを迎え、本地域では10月に稲刈りが始まる。

稲作にかかわる年中行事としては、苗代作り、田植え、稲刈り、年取り・正月にみることができる。苗代の祭では、苗代に柳の棒を立てたり、ヤキゴメ・イリゴメなどを水口に供えたりしていた。田植え祭りでは、ボタモチ、餅をつくってお祝いし、苗やお酒を神棚に供え豊作を祈願した。稲刈り、脱穀でも、ボタモチ、餅をつくってお祝いし、餅やご馳走を神棚に供えて収穫を祝った。新米の食べ始めは11月下旬頃とされていた。本地域では小正月に「物作り」として米の粉で稲の花、俵などのダンゴを作り、柳の枝に指して神棚に祀る行事が現在にも引き継がれ、旧正月の松飾りを燃やす「どんどやき」の際に餅と共に焼いて食べ、「健康を願う」行事となっている。

害虫・害獣駆除に関する行事としては、正月の「鳥追い、もぐら追い」と夏の「虫送り」がある。前者は、糶・杵などで家の周りの庭・耕地などを叩いたり、拍子木・板などを叩いて歌を歌う、後者は御幣を立てたり、太鼓などを叩き鳴らし、火をともしムラザカイまで虫を追い払う行事である。このほかに稲作関連の祭りとして、「雨乞い」「風祭り（風よけ）」が現在でも地域の年中行事として引き継がれている地区がある。

参考文献

- 1 清水隆久、農山漁村文化協会 1983 『農業図鑑』日本農書全集26を中心に主な内容を列挙した。
- 2 長野県史刊行会編 1985 長野県史 民俗編第4巻(二)北信地方を参考に主な農事暦・年中行事を表にまとめたものである。畠光寺平なかの地域の限定は特にしていない。

第2節 歴史的環境と周辺の遺跡

1 旧石器時代・縄文時代

千曲川左岸地域では現在までのところ旧石器時代の遺跡は明瞭なかたちで確認されていない。聖山の裾部にあたる篠山の山麓（標高380m）に立地する長野市鶴前遺跡（5-1）から黒曜石製のナイフ形石器が1点発見されている。2 側辺に加工を施すいわゆる茂呂形ナイフ形石器で、旧石器時代後期（武蔵野台地第IV層～第III層文化期相当）に属する資料であるが、弥生時代後期の遺物包含層からの単独出土である。

旧石器時代の終末、御子柴文化に相当すると考えられる資料は、鶴前遺跡および鶴前遺跡から200mほど東の同じ篠山の山麓（標高471m）に位置する塩崎城見山砦遺跡（269）で確認されている。鶴前遺跡では弥生後期の遺物包含層中から頁岩製の柳葉形尖頭器（?）1点が出土した。塩崎城見山砦遺跡では安山岩製の木葉形尖頭器8点、打製石器8点、石鏃・搔削器12点の出土がある。同遺跡では尾根の鞍部に2カ所ほどの遺物集中区が想定されるが、中世城郭施設構築によって破壊されている。

縄文時代は、早期前半に帰属する良好な集落遺跡が確認されている。更埴市烏林遺跡（54）で、立野式押型文期の竅穴住居2軒、土坑6基が検出された。遺物は豊富で出土土器総点数1,077点、石器総点数6,106点であった。中葉期は烏林遺跡から貝殻沈線文土器（三戸式・田戸下層式）の破片が、後半期では烏林遺跡及び鶴前遺跡から条痕文土器及び絡条体圧痕文土器の破片が収集されている。縄文前期は鶴前遺跡で前葉～中葉期の竅穴住居1軒が検出されている。また更埴市小坂西遺跡（52）で同時期と推定される竅穴住居1軒が確認され、本遺跡でもほぼ同時期の竅穴住居3軒と土坑5基、柱穴17基が検出された。これらの遺

跡からは縄文尖底土器を含むいわゆる中道式以降の特異な土器が伴出している。該期に至ると自然堤防上の篠ノ井遺跡群(2-4)からも羽状縄文土器の破片が出土するようになり、千曲川右岸の長野市松原遺跡(74)で有尾式相当期の遺構が確認されている。縄文中期は、前半の勝坂式併行期に帰属するとみられる土坑が鶴前遺跡で検出されている以外、遺構の検出例はない。中期では初頭段階に鶴前遺跡で五領ケ台式併行期の土器が収集されている他は後半期から後期にかけて遺構の発見例がなく、鳥林遺跡と篠ノ井遺跡群(2)で加曾利E式併行期の土器、堀ノ内式併行期の土器が収集されているに過ぎない。一方右岸地域では松原遺跡に中期初頭段階の集落跡が確認されたほか、更埴市屋代遺跡群(92)でも五領ケ台式併行期及び中期後半加曾利E式併行期の集落跡が発見されている。縄文晩期は中葉まで遺構の発見がなく、初頭の陸帯文土器～佐野式併行期の土器が鳥林遺跡、小坂西遺跡で収集されている。

2 弥生時代

畿内I期後半段階の西日本、東海地域の弥生土器群は、在地の縄文晩期水式土器に共存する。晩期水式段階は、鶴前遺跡(5-1)の竪穴住居、篠ノ井遺跡群市営体育館地点(2-6)、同聖川堤防地点(2-2)の土坑のほかは遺構として未確認であるものの、土器は千曲川左岸・右岸の自然堤防上及び周辺山麓沿いの遺跡から広範囲に確認されている。土器の分布状況からは、この時期に活発な人の動きを見ることができ、また晩期の土器群が出土した遺跡は、以降弥生集落が営まれており土地利用もこの段階を引き継いでいる。

篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群が立地する千曲川左岸の自然堤防上は、善光寺平では稲作受容期から逸早く居住域として営まれ、弥生時代を通して継続的に集落が展開する。伊勢宮遺跡(3-5)、聖川堤防地点(2-2)、からは遠賀川系、条痕文系(埜王式、水神平式)の土器群が打製・磨製石庖丁などとともに出土している。条痕文系土器は左岸山麓沿いの池尻遺跡(48)、小坂西沖遺跡(53)、鶴前遺跡などにも見られ、左岸域に弥生文化の兆が顕著に現れる。

更に畿内Ⅱ～Ⅲ期の段階になると、塩崎遺跡群市道松節小田井神社地点〈松節遺跡〉(3-3)の群をなす30基の木棺墓群、聖川堤防地点の竪穴住居、土坑が検出され、自然堤防上に集落と墓域が存在したことが確認された。これらの遺跡から出土した畿内Ⅱ期に平行する伊勢宮式土器は、縄文・沈線文などが施文される土器群であるが、壺・甕などの器形は弥生中期を通じて本地域に踏襲されていくものである。この段階の土器群は、人面付土器を出土した荒井遺跡(92-6)、大宮遺跡(91-3)など右岸自然堤防上でも多数出土し、地域的な広がりが見られる。Ⅲ期の土器は、沈線文に加え櫛描文を多用するものが多くなり、Ⅲ期後半には栗林式土器として千曲川流域及び中部・関東地方まで広範囲で出土している。左岸・右岸の自然堤防上の聖川堤防地点、篠ノ井遺跡、荒井遺跡、松ヶ崎遺跡、生仁遺跡などで竪穴住居が検出され、松原遺跡(74)では後期まで継続する集落となる。ほぼ弥生中期前半(Ⅲ期)で右岸左岸の自然堤防上(篠ノ井遺跡)を集落、後背湿地(石川条里)を可耕地とする利用が始まったと見られる。

弥生中期(Ⅳ期)は遺跡数が増加しその状況から、自然堤防上の大規模拠点集落と、山麓沿いの中小規模周辺集落が形成されている。左岸では塩崎小学校地点(3-2)、聖川堤防地点、篠ノ井南253号線地点(3-4)などで竪穴住居30軒余りが検出され、右岸では松原遺跡からの三百数十軒の竪穴住居をはじめ鳥林遺跡(98-1)や生仁遺跡(91-2)から数軒の住居がある。また松原遺跡からはこの地域独自の礎床墓が複数見ついている。周辺山麓寄りでは、左岸の湯ノ入下遺跡(22)、右岸の大穴遺跡(99)、屋代清水遺跡(97)がありほぼこの時期に限定された集落である。松原遺跡は、防衛的な施設とされる周囲を濠で取り囲む環濠集落であった。この時期には磨製、打製の石鏃が急増し、可耕地の拡大をめぐる周辺地域との争いがあったことが想像される。

農耕に関係する遺物では、湯ノ入遺跡からのアズキの炭化種子、塩崎遺跡群一本木地籍からの炭化米、荒井遺跡からの炭化麦などいくつかの生産物が出土している。石川条里遺跡では水田遺構が検出され以後水田が継続している。時期は不確定であるが、松節遺跡からは銅鏃と石製模造鏃が発見され、祭祀にかかわる場が自然堤防上にあったことを窺わせる。また光林寺裏遺跡(10)からは鉄斧5点と勾玉が出土するなどこの地域で金属器が数多く使用されたと見ることができ、松原遺跡出土の赤漆塗りの壺、高杯の存在などと考え合わせると、階層差の現れを示唆するものである。

弥生後期(畿内V期)この地域は、更に集落規模が拡大する。前代の栗林式土器文化に引き続き地域独自の中部高地型櫛描文、赤色塗彩する箱清水式土器を生み出し善光寺平及び千曲川流域に文化圏を築く。この文化圏では箱清水式土器のほか、竪穴住居は隅丸の長方形で出入口部に小柱穴を並列する構造をもち、墓は主体部を円形の溝で囲んだ円形周溝墓を特長としている。左岸自然堤防上では塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群から竪穴住居が100軒以上検出され、篠ノ井遺跡群新幹線地点では円形周溝墓が複数群をなして検出されている。住居からは、鉄鏃、板状鉄刀鋸鋸先、鉈等の鉄製品が、墓の副葬品として、銅・鉄鋼、ガラス小玉が多数出土した。前代にもまして金属器が普及し、集落間もしくは集落内での階層差が見え始める。右岸では厩代遺跡群、生仁遺跡、四ツ屋遺跡(76)に拠点集落が営まれ、竪穴住居40軒余りが検出されている。これらの遺跡からは土占骨、刻骨など呪術関連の遺物が出土し、農耕祭祀が盛んであった様子を示している。

後期終末段階(VI期)では、他地域との交流が活発となる。篠ノ井遺跡では箱清水式土器とともに東海・北陸地域の特徴的な土器が混在し、鶴前遺跡、外西川原遺跡(66)の特定の住居からは北陸地域の土器が主体を占めている。竪穴住居の平面形は、隅丸長方形から方形に変化し、墓は共同墓地的な円形周溝墓から聖川堤防地点にみる大形の方形周溝墓が出現する。また北平1号墳(182)は集落と隔絶した山の尾根上に立地している。土器の動きからは、全国規模での地域的な統合があったことが指摘されている。

3 古墳時代

弥生時代後期終末ないしは古墳時代初頭には、長野市北東部の山上に位置する墳丘墓として北平1号墳がある。主軸長17mで2つの埋葬主体が確認され、主体部からは東海地域に本質をおく土器群のほかに勾玉、管玉、ガラス小玉が出土した。当該期で本遺跡周辺の善光寺平南部域では、今のところこの墳丘墓に匹敵する山頂の墓は確認されていないが、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点には弥生後期以来の周溝墓群の中に大形で特殊な形態の墳丘墓を見ることができる。同遺跡群では弥生後期後半に集落域と墓域が環濠等によって隔絶され古墳前期まで生活領域として継続しているが、周溝墓には全長20mで方形周溝墓の陸橋部を僅かに突出させた形態のもの(SDZ9)や全長25mで陸橋部を大きく突出させた前方後方形周溝墓(SDZ3)が検出されている。埋葬主体は削平され詳細は不明であるが、北平1号墳と類似する副葬品が想定される。この前方後方形周溝墓に後続する時期に千曲川左岸山頂には古墳が出現する。

4世紀代の古墳では姫塚古墳(121)と同一の尾根下に川柳將軍塚古墳(122)がある。いずれも未調査のため不明点が多いが、前者は全長32mの前方後方墳で、後者は全長93mの前方後円墳である。川柳將軍塚古墳では墳丘外から埴輪円筒棺の出土があり、また多くの小型鏡・各種玉類が出土品として伝世されている。更に5世紀の古墳として篠山の山麓裾部に全長53mの前方後円墳である中郷古墳(134)がある。

千曲川右岸では全長100mの前方後円墳である森將軍塚古墳(217)がある。森將軍塚古墳は盗掘をうけていたものの舶載の三角縁神獸鏡や各種玉類、土器、金属器等が主体部から出土している。右岸では更に前方後円墳が築造され、全長66.7mの土口將軍塚古墳(201)→全長73.0mの倉科將軍塚古墳(206)→全長32.0mの有明山將軍塚古墳(218)へと継続している。

このように善光寺平南部域の千曲川を挟んで点在する古墳に関しては、一連の首長系列ととらえる見方がされ、姫塚古墳→森將軍塚古墳→川柳將軍塚古墳→土口將軍塚古墳→中郷古墳・倉科將軍塚古墳→有明山將軍塚古墳といった一地域圏の流れが想定されている。

長野市北東部の千曲川右岸には、1つの尾根上に4基の前方後円墳が並ぶ和田東山古墳群(174)がある。築造時期は4世紀中頃から5世紀代にかけてのものと考えられ、当地域の首長系列を示すものと考えられる。西に隣接する尾根上には大星山古墳群(175)があり、4世紀後半から5世紀後半にかけての方墳と円墳が確認されている。更に西の尾根には前方後円墳として大室18号墳(176)があり5世紀代の築造と考えられている。

前方後円墳の密集地であった千曲川中流域では5世紀中頃～後半以降、前方後円墳が姿を消す状況となる。長野市北東部の千曲川右岸では5世紀中頃以降大室古墳群(177~181)の形成が始まり、合掌型石室という特異な形態をもつ小形積石塚古墳が出現する。以後横穴式石室をもつ盛土墳へと変化を見せながら7世紀までその築造が継続し、500基を超える規模に膨れ上がる。ここに見られる積石塚古墳は、大室周辺のほか右岸域に点在する。一方善光寺平南部の千曲川左岸には積石塚古墳や合掌型石室はまったく見られず、竪穴式石室をもつ直径33mの越將軍塚古墳(147)や直径32mの四之宮將軍塚古墳(132)など大形円墳が築造され、更に古墳後期には鶴萩古墳(139)や池ノ上古墳(130)のような横穴石室をもつ15m前後の中型円墳や10m前後の小形円墳が多く築造され群集墳を構成するに至る。千曲川と山を隔てた篠山山間地である信更地域では5世紀中頃以降と考えられる全長39mの前方後円墳の田野口大塚古墳(172)や直径32mの円墳赤田大塚1号墳(171)、直径30mの藤塚1号古墳・小山田藤塚古墳(169)などが築造されている。この信更地域では今のところ県内で最古の須恵器窯である松ノ山窯跡(234)が発見され、出土須恵器は陶邑古窯跡群で生産された須恵器と類似した特長をもつことが指摘されている。

古墳前期の集落遺跡は弥生後期に比べると遺跡数、検出遺構数において少ないが、千曲川左岸、右岸ともに自然堤防上に展開している。左岸では篠ノ井遺跡群高速道地点(2)・市営体育館地点(2-6)において竪穴住居や獨立柱建物跡が検出され、塩崎遺跡群市道松節小田井神社地点(3-3)等でも竪穴住居が確認されている。また本遺跡では耕下地点(1-1)を含め該期の大規模な祭祀跡が検出され、川柳將軍塚古墳や中郷古墳との関連が示唆される。更に本遺跡からは水田跡も確認され、集落一耕地一祭祀一墓といった一連の時代様相の解明が可能となっている。右岸では松原遺跡(74)、生仁遺跡(91-2)、灰塚遺跡(91-5)等に竪穴住居が確認されているが、城内遺跡(92-2)、大境遺跡(92-1)等がある屋代遺跡群(92)、五輪堂遺跡(93-2)がある粟佐遺跡群(93)が集落の主体となっている。右岸域でも左岸と同様に本遺跡と同じ石鋼を出土した生仁遺跡が祭祀場と考えられ、更地糸里遺跡(101)で水田跡が検出されている。

古墳中期・後期の集落は、左岸では前期集落と同様に自然堤防上の各遺跡に遺構が確認されている。現在までの遺構の検出状況では篠ノ井遺跡群より塩崎遺跡群に密集度がある。後期には自然堤防上の篠ノ井遺跡群(仮称新幹線地点)に加え、犀川扇状地の扇端部に位置する田中沖遺跡(14・15)にも集落が出現する。これら後期の集落は奈良・平安時代に継続している。これに対し右岸では中期集落遺跡として森將軍塚古墳下の山麓寄りに屋代清水遺跡(97)があり竪穴住居12軒、獨立柱建物13棟等が検出されるなど、自然堤防上以外でも中条遺跡(83)等広域に展開している。また自然堤防上の遺跡では五輪堂遺跡をはじめ、未報告ではあるが屋代遺跡群仮称高速道地点にみる大規模集落跡や各種玉類などの特殊遺物の出土が確認されている。後期の集落では、自然堤防上の各遺跡の他に屋代遺跡(81)などが加わり集落分布が更に拡大している状況が窺える。

4 古代

屋代遺跡群(92)を初めとして本遺跡周辺では大規模な発掘調査が相継ぎ、新たな所見が加えられつつある。しかし、多くの遺跡は整理途中でもあり、周辺遺跡の概況についても今後大幅な書き換えが必要になると思われるが、ここでは現時点で知られる様相についてまとめておくことにしたい。当地域は古代においては更科郡の小谷郷に所属したとみられており、文献記録からはこの周辺にいたとされる個人名と式内社がいくつか知られる程度である。これに対して考古学的な資料は度重なる発掘調査によってかなり蓄積されてきているが、この地区全体の構造や変遷については十分な検討がなされているとは言いがたいところもある。

本遺跡の立地する塩崎地区の地形は巨視的にみれば自然堤防、後背低地、山手の緩斜面地帯、山地に区分される。後背低地では石川条里遺跡(1)の水田遺跡、自然堤防上は南から塩崎遺跡群(3)・篠ノ井遺跡群(2)の集落遺跡が並列し、山手の緩斜面地帯では鶴前遺跡(5-1)を初めとする小規模な遺跡が点在する。また、山地内の小規模な平坦地では猪平遺跡(46)などの小集落遺跡も検出されている。ただし、微視的にみると時期ごとに集落遺跡の立地場所や構造、地形変化に伴って水田域と居住域が変化している傾向も窺える。集落遺跡の立地変化をみみると奈良時代の集落は自然堤防の塩崎遺跡群をはじめとして鶴前遺跡などの山手の緩斜面地帯にも散在的に検出されているが、8世紀後半ころから9世紀にかけてはほぼ自然堤防上に集中する傾向が知られる。ところが、9世紀後半頃から再び鶴前遺跡などの山手の緩斜面地帯にも集落が出現すると共に、猪平遺跡などのように山中の小規模な平坦地でも小規模な集落遺跡が出現する様相がみられる。平安時代後半の遺跡については自然堤防上では集落が不明瞭となり、山手の緩斜面地帯を中心に小規模な集落遺跡が見付かっているに過ぎない。自然堤防上の遺跡が不明瞭な理由は遺跡立地の変化、あるいは遺構の遺存状況によるものかは判然としませんが、平安時代の洪水砂層以上の遺構については中世も含めて井戸などの深い遺構しか検出されていない状況と関連すると思われる。こうした集落立地変化に関しては概略の変化も窺えるが、構造的な変化については詳細は明らかになっていない。そのなかで、塩崎遺跡群では「専司」とへら描きされた須恵器の出土、篠ノ井遺跡群高速道路地点や聖川沿いの長野市教育委員会調査地点(2-2)での9世紀代の大量の墨書土器出土、篠ノ井遺跡群新幹線地点の磚仏や瓦塔出土は注目される。また、本遺跡北方の石川地区山手には古瓦出土が知られる上石川鹿寺(24-1)、西側の山地の裏手には須恵器の窯がいくつかある。水田遺構は石川条里遺跡から篠ノ井遺跡群の一部など後背低地を中心として広範囲に洪水砂層で埋没した水田遺構が検出されている。この水田は近世を除く全時代を通したなかでもっとも広域に水田遺構が確認でき、しかも条里型地割によるものである。さらに地表面の条里型地割とはズレが認められる点も指摘されている。この水田の年代は後述する洪水年代に関連して9世紀後半と考えられている。なお、この水田遺跡は長野市教育委員会によって数地点が調査されており、そのなかで大畦脇では篠ノ井遺跡群と同文字種の則天文字の墨書土器が検出されている。

上記のような遺跡変化の変化に加えて、いくつか地形の変化や堆積環境に関する所見も得られている。一つには篠ノ井遺跡群(4)地点(2-2)の自然堤防背面にあたる場所では古墳時代前期には居住遺構、平安時代には水田遺構、平安時代の前期末の洪水以後には再び居住遺構が検出される変遷が明らかにされた。この変化では少なくとも平安時代前半には水田域がかなり広範囲に広がる事が知られると共に、土層との関連で古墳時代よりも低地の埋没が進展していく様相がみられる。なお、平安時代にもっとも水田域が拡大する背景には自然堤防上の長大な溝構築と関連する可能性が想定される。すなわち、溝は平安時代前期末の洪水と共に廃絶されるが、その年代は自然堤防背面の水田域上で居住遺構が構築される時期と

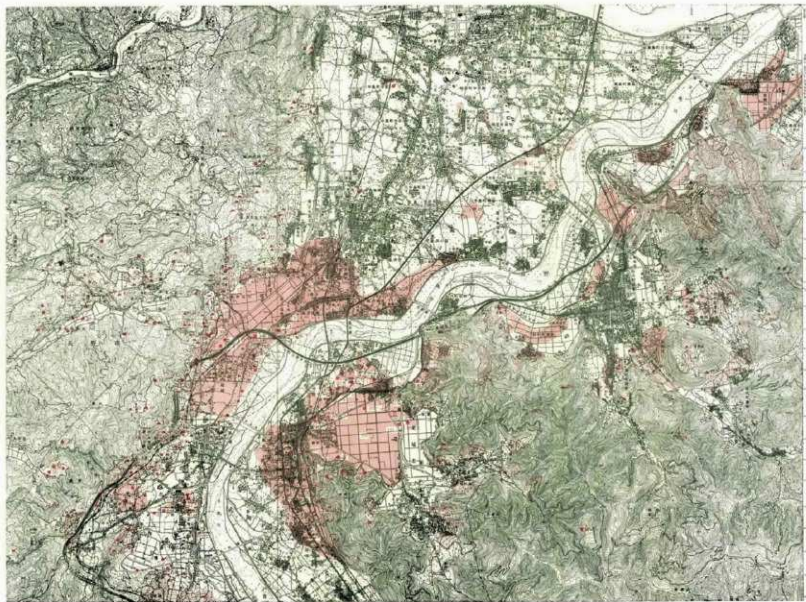
あまり時間差が見られないので、この水田の放棄もほぼ洪水時期とみられる。二つ目には平安時代前期末にはこの地域を広範囲に覆う洪水がみられ、この洪水でかなり地形が変化した様相も知られているのである。この洪水は善光寺平南部から千曲川沿いの遺跡で広域に確認されているもので、各遺跡ともほぼ同時期と捉えられる。この洪水は本遺跡でも弥生時代以後では比較できる洪水が見られないほどの大規模なものであり、その年代は文献記録の仁和四(888)年の洪水記録に対比する説がある。考古学的には灰釉陶器年代を基準として検討が加えられていたため、従来では洪水年代と文献の年代のズレが指摘されていたが、近年では灰釉陶器年代の変更ともなっており、ほぼ近似した年代であるとする見解が有力になりつつある。この洪水砂層の成因については千曲川上流域で火山の水蒸気爆発に伴う泥流により千曲川が堰き止められ、それが氾濫したことにより起こったとする説が示されているが、疑問視する意見もあって見解の一致はみえていない。これらの問題は千曲川沿いの低地の遺跡調査のなかで地震との関連や洪水のあり方の検討によって今後より明らかにされてくるものと期待される。この洪水の与えた影響については子細に明らかになっていないが、自然堤防上の長大な溝および、自然堤防背面の水田も放棄され、低地域の埋没を一気に押し進めて平坦化を進めたとも思われる。自然堤防上の溝が放棄される理由については千曲川の流路の変更による取水が難しくなったことや、微地形の変化を伴ったものと推測され、旧来の配水システムに多大な影響を与えたものとも思われる。

なお、塩崎地区の近隣地域でいくつか注目されている遺跡があるので簡単に触れておく。まず、千曲川対岸の屋代遺跡群では近年、高速道路工事に伴う発掘調査が実施され、多数の木簡が検出された。その内容は従来の知見を大幅に書き換えるものであり、地科郡衙との関連も注目されている。また、この屋代遺跡群に近接して更地条里遺跡、雨の宮院寺がある。塩崎地区の南方の更地市八幡地区の社宮司遺跡(63)では三彩が出土し、調査面積が小さいながらも掘立柱建物跡のみで竪穴住居跡が見られない遺跡として注目されている。官衙関連遺跡とも考えられているが、詳細は明らかになっていない。

5 中世

中世では本遺跡周辺は四ノ宮荘となる。文献記録によって様々なことが知られる一方で、中世遺跡調査例は断片的で当地域の様相もよくわかっていない。文献記録からみた概要は後述することにして、ここでは考古学的な状況を中心に触れておく。

自然堤防上では井戸跡や溝跡が若干知られているのみで建物跡などの検出された例はない。これは平安時代後半以後の遺跡が非常に分かりずらくなっている点と関連し、中世では少なくとも居住はあったと見られる。低地域でも中世水田遺構の残存状態が悪いため、調査は聖川沿いの一部のみが知られているのみであり、全体像についてはあまり検討できていない。山手の緩斜面地帯では鶴前遺跡で僅かながら掘立柱建物跡が検出され、西側山地では山城である塩崎城見山砦遺跡や赤沢城の一部が調査されている。なお、この周辺の山城としては上記以外に塩崎城、所在地不明ながら塩崎村史に記載される大平砦(変薬城?)・薬師山砦、北に隣接した石川地区では石川城(262)、湯の入城(258)、二つ柳城(259)などが知られる。館については詳細は明らかになっておらず、本遺跡内の館も従来全く知られていなかったものである。この周辺で確定されている館は少ないが、推定されている場所は四ノ宮地籍の四宮氏館、赤沢城下の赤沢氏館、自然堤防上の殿屋敷地点周辺や堀ノ内地籍、下くね地籍などがある。しかし、ほとんどが字名を中心として推測されているもので、根拠が弱い推定地も含まれる。隣接した石川地区では聖川上流の堀ノ内、堀内地籍、大当地籍、塚田地籍で館が推定されている。城以外では長谷寺背後の山から過去に経簡が出土していることが知られる。



第6表 善光寺平南域の遺跡地名表
(千曲川左岸遺跡)

○遺物出土 ◎遺構検出

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳			奈良		平安		中近世	文献
			草・早	前・中	後・晩	不明	中期	後期	不明	前期	中期	後期	不明	奈良	前半	中		
1	石川条里遺跡		◎			◎	◎		◎	◎			◎	◎			◎	53, 54, 55, 88 ~ 91, 97, 103, 106, 110
1-1	耕下地点								◎	◎			◎	◎			○	89
1-2	消防塩崎分署						◎		◎				◎					86
2	篠ノ井遺跡群		○			◎	◎		◎	◎		◎	◎	◎			◎	54, 55, 58
2-3	聖徳橋地点				○			○				○	○				○	
2-1	大規模自転車道						◎		◎	◎		◎	◎	◎			◎	84
2-2	聖川堤防		○			◎	◎		◎	◎		◎	◎	◎			◎	107
2-4	市道山崎斎橋線					○	◎		◎	◎		◎	◎	◎				98
2-5	中部電力鉄塔						◎		◎									101
2-6	市営体育館			◎		◎	◎		◎	◎		○	○					"
3	塩崎遺跡群			○		◎	◎		◎	◎		◎	◎	◎		◎	○	
3-1	市道角間線地点			○			◎					◎	◎				◎	93
3-2	塩崎小学校地点					◎	◎		◎	◎		◎	◎				○	73, 79, 82, 83, 108
3-3	市道松節小田井神社地点					◎	◎		◎	◎		◎	◎				○	92, 129
3-4	市道篠ノ井南253号線地点					◎	◎		◎	◎			◎	◎			○	103
3-5	伊勢宮遺跡					◎	◎											1, 73
3-6	中条遺跡						○					○	○				○	100
4	横田遺跡群					○	○		○	◎		○	○	◎				
4-1	富士宮遺跡									◎								94
5-1	鶴前遺跡			◎		◎	◎		◎	◎		◎	◎	◎			◎	60
5-2	中電鉄塔地点												◎					96
6	鶴坂七尋石森遺跡					◎			◎	◎								59
7	長峰遺跡																○	
8	於下遺跡																◎	
9	湯沢尻遺跡			○				○										
10	光林寺裏山遺跡					○												127
11	上九反遺跡											○	○					
12	田牧居幡遺跡												◎	◎			◎	114
13	花立遺跡							○								○		
14	田中沖I遺跡								◎	◎		◎	◎	◎			○	80
15	田中沖II遺跡					○			◎	◎		◎	◎	◎			○	104
16	八幡原遺跡													○				
17	菰川原遺跡												○			○		
18	南宮遺跡													◎				109
19	築地遺跡													◎	◎		◎	58
20	新田遺跡				○												○	
21	寺内遺跡				○			○				○						
22	湯の入上遺跡					◎	○	○										
23	石川方田遺跡群							○					○					
24	上石川遺跡群							○					○					
24-1	上石川麗寺跡													◎				
25	上見林遺跡				○										◎			
26	小山田池遺跡					○												113
27	寺屋敷遺跡						○											
28	卒塔原遺跡				○													
29	鹿の入遺跡				○													

第2章 位置と環境

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳			奈良		平安			中近世	文献
			草・早	前・中	後・晩	不明	中期	後期	不明	前期	中期	後期	不明	奈良	前半	中	後半		
30	大崎遺跡																	○	
31	天神山遺跡					○													
32	かじか沢遺跡					○		○				○	○					○	
33	瀬原遺跡	○																	
34	天池遺跡																	○	
35	寺平遺跡					○												○	
36	家の入遺跡																	○	
37	釜上遺跡					○												○	
38	大清水遺跡					○												○	85
39	大崎遺跡					○		○				○	○					○	#
40	平林遺跡																	○	
41	宮下遺跡			○	○					◎				◎	◎				116
42	栗山遺跡																	○	
43	戸口遺跡																	○	
44	下辺遺跡							○											
45	長谷遺跡							○				○	○					○	
46	掃平遺跡		○	◎											◎	◎		◎	116
47	福山遺跡		○	○															
48	池尻遺跡		○	○	◎														68, 128
49	佐野山遺跡	○																	
50	佐野山遺跡			○															44
51	峠遺跡		○																#
52	小坂西遺跡		○	◎	○			◎										◎	59
53	小坂西沖遺跡				○														44
54	鳥林遺跡		◎					○							◎				59
55	雁塚遺跡																		44
56	桑原遺跡群																		
56-1	返町遺跡							○				○							44, 52
57	大牧遺跡																		44
58	元町遺跡											○							#
59	治田池下遺跡		○	○															#
60	治田池呼遺跡							○											44, 52
61	八幡遺跡群																		
61-1	志川遺跡											○							44
61-2	六反田遺跡											○							#
61-3	よこまくり遺跡											○							#
61-4	れんてば遺跡											○							#
61-5	よこみぞ遺跡											○							#
61-6	青木遺跡																○		9, 20
61-7	北畑付遺跡															◎			26
62	真光寺遺跡			○															44
63	社宮司遺跡														◎				30
64	白石遺跡																	◎	40
65	宮川遺跡									◎									44
66	外西川原遺跡							◎		◎		◎						◎	40

〈千曲川右岸更埴市域〉

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳			奈良	平安			中近世	文献	
			草・早	前・中	後・晩	不明	中期	後期	不明	前期	中期	後期		不明	前半	中			後半
67	町川田遺跡							○										95	
68	川田糸里遺跡			○		○	○		○	○	○		○				○	54, 55, 88	
69	大室遺跡							○				○							
70	村東山手遺跡		○	○													○	54, 55	
71	小滝遺跡																○	54, 57	
72	一等牧遺跡							○				○					○		
73	牧島遺跡																○		
74	松原遺跡					○	○				○		○	○			○	54, 55, 56, 105, 111, 112	
75	松代城北遺跡																○		
76	四ツ屋遺跡						○		○	○				○				47, 49, 51, 69, 73, 83	
77	宮村遺跡																○		
78	大村遺跡							○									○		
79	林正寺遺跡																○		
80	般若寺遺跡				○			○				○	○				○		
81	屋地遺跡					○	○				○	○	○	○				73, 102, 118	
82	皆神山遺跡				○														
83	中衆遺跡						○		○	○	○			○					
84	市場遺跡							○				○	○				○		
85	中村遺跡							○				○	○				○	81	
86	鹿島遺跡				○														
87	百瀬遺跡	○	○																
88	県山辺跡	○																	
89	中ノ宮遺跡						○											44, 52	
90	土口遺跡群																		
90-1	土口遺跡																	○	
90-2	日ノ尾遺跡				○		○												
91	雨宮遺跡群																		
91-1	唐崎遺跡						○											44, 52	
91-2	生仁遺跡			○		○	○		○	○	○		○	○	○		○	17, 38, 73	
91-3	大宮遺跡			○							○								
91-4	雨宮院寺跡																	73	
91-5	灰塚遺跡								○	○								18	
91-6	大日堂遺跡																	73	
92	屋代遺跡群		○	○		○	○		○	○	○		○	○			○	56, 57, 58, 64	
92-1	大塊遺跡		○				○		○	○			○	○			○	43, 58	
92-2	城ノ内遺跡			○		○	○		○	○	○		○	○			○	11, 16, 40, 50, 73	
92-3	松ヶ崎遺跡																	○	40
92-4	町浦遺跡													○				#	
92-5	北中原遺跡			○					○	○				○				#	
92-6	荒井遺跡					○												○	6
92-7	大塚遺跡										○					○		7	
92-8	馬口遺跡												○	○	○			8, 10, 21, 31, 33, 35, 36, 40, 73	
92-9	郷津遺跡						○	○										40	
92-10	古道遺跡							○										#	
92-11	地之目遺跡 一丁田遺跡										○							○	59

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳			奈良	平安			中近世	文献
			草・早	前・中	後・晩	不明	中期	後期	不明	前期	中期	後期		不明	前半	中		
93	栗佐遺跡群																	
93-1	北村遺跡								◎									40
93-2	五輪堂遺跡					○	◎		◎	◎	◎		◎	◎				22, 23, 32, 39, 73, 133
94	小島遺跡群										○							37
95	打沢遺跡群										○							
95-1	大以遺跡							○										
96	寂母遺跡群		○	○		○	○											
96-1	西王子遺跡										○							
97	屋代清水遺跡			○		◎	◎		◎	◎			◎				◎	41
98	生賀遺跡群																	
98-1	高遺跡					◎	◎						◎					40, 120, 122
99	大穴遺跡	○	○	○		◎	◎						◎					57, 58
100	岡地清水遺跡									◎				◎				57
101	更埴条里遺跡			◎		○	◎						◎				◎	34, 56, 57, 58, 70, 73
101-1	町田遺跡														◎			
101-2	本誓寺遺跡												○					29
102	北山遺跡																	
103	矢ノ口遺跡																	

〈千曲川流域古墳〉

番号	遺跡名	古墳			文献
		前期	中期	不明	
104	腰村古墳			◎	72, 73
105	境内古墳群		◎	◎	72
106	岡田裏古墳		◎	◎	#
107	寺内古墳			◎	#
108	上大久保古墳			◎	#
109	北石津古墳		△		#
110	鶴石古墳		◎		#
111	六部塚古墳		○		#
112	将軍塚古墳		◎		#
113	南石津古墳		◎		#
114	海道北山古墳		◎		#
115	大平1号古墳		△		#
116	布陸塚古墳		△		72, 73
117	柳沢1号古墳		△		72
118	山畑新田古墳		△		#
119	藤塚古墳		△		#
120	湯ノ入古墳群		△		#
121	総塚古墳	◎			72, 73
122	川藤将軍塚古墳	◎			11, 67, 73, 123, 131
123	宮下1号古墳		△		72
124	飯綱社古墳		◎		15, 72
125	大和田1号古墳		△		72

番号	遺跡名	古墳			文献
		前期	中期	不明	
126	城古墳			◎	72
127	廻坂古墳群			◎	#
128	虚空藏平1号			△	#
129	丸山・園内古墳			◎	48
130	池ノ上古墳			◎	72
131	寒師山古墳群			△	#
132	四之宮将軍山古墳		△		#
133	八ツ塚1号古墳			◎	#
134	中郷古墳		△		136
135	中郷古墳陸塚		△		72
136	大柏母古墳			◎	#
137	小日向古墳			◎	#
138	秋葉山古墳			◎	#
139	鶴塚古墳			◎	#
140	平古墳			◎	#
141	八幡宮古墳	◎			#
142	城山古墳			◎	#
143	東谷古墳			◎	#
144	東谷古墳群		△		#
145	湯ノ崎1号墳			◎	13

△は墳形などにより時期を推測

番号	遺跡名	古墳			文献
		前期	中期	不明	
146	塚穴古墳群			◎	
147	越将軍塚古墳		◎		44, 73
148	嶺山古墳		◎		44, 72
149	湯ノ崎古墳群			△	#
150	一本松古墳			◎	#
151	小坂古墳群			△	#
152	横見塚古墳			△	#
153	遠見塚古墳			△	#
154	宝蔵1号古墳			△	#
155	小坂塚古墳			△	#
156	塚ノ口1号古墳			△	#
157	吹上塚古墳群		△	△	#
158	吹上塚西古墳		◎		#
159	吹上塚東古墳		△		#
160	中塚古墳			△	#
161	八幡古墳群		◎	◎	#
162	矢先山1号古墳			◎	#
163	矢先山下古墳				△
164	山ノ神古墳				△
165	鎌塚古墳			◎	#

番号	遺跡名	古墳			文献
		前期	中期	後期 不明	
166	このの塚1号		△		44, 72
167	磯崎山古墳群		△		#
168	丸山古墳		△		#
169	小山田藤家古墳		△		#
170	白山家古墳		○		
171	赤田大塚古墳		○		
172	田野口大塚古墳		○		134
173	桜田家古墳		○		
174	和田東山古墳群	○			
175	大星山古墳群	○	○		63
176	大室18号墳	△			
177	大室北山支群		○		2~5, 72, 73, 87
178	大室大室谷支群	○	○		#
179	大室塚支群	○	○		#
180	大室北谷支群		○		#
181	大室金井山支群		○		#
182	北平1号墳	○			63
183	松原1号墳		○		54
184	長礼山1・2号墳		○		72, 73, 78, 86, 140
185	天王山古墳		○		72
186	東条古墳群		○		
187	竹原登塚古墳		○		73, 137
188	菅間王塚古墳		○		73, 138
189	熊の沢古墳		○		72
190	牧内古墳群		○		#
191	熊塚古墳群		○		#

番号	遺跡名	古墳			文献
		前期	中期	後期 不明	
192	桑根井登塚古墳			○	72, 139
193	村北古墳群			○	72
194	小丸山古墳			○	
195	藩神山西・北 廣古墳群				72
196	南大平古墳			○	
197	虫歌・宮崎古 墳群			○	72
198	舞鶴山1・2 号墳		○	○	72, 73
199	清野古墳群			○	72
200	母塚山古墳			○	#
201	土口将軍塚古墳			○	73, 117
202	土口北山古墳群			○	
203	室平古墳群			○	
204	土口古墳群			○	44, 72
205	生堂北山古墳群				#
206	倉科将軍塚古墳			○	44, 73
207	倉科北山古墳群			△	44, 72
208	大峽古墳群			○	#
209	竹尾古墳群			△	#
210	矢ノ口古墳群			△	#
211	杉山古墳群			△	#
212	田端古墳群			△	#
213	森古墳群			○	#
214	岡地古墳群			○	#
215	大穴古墳群			○	44, 58, 72
216	将軍塚古墳群			○	19, 42

番号	遺跡名	古墳			文献
		前期	中期	後期 不明	
217	森将軍塚古墳	○			19, 42
218	有明山将軍塚古墳			△	44, 73
219	小島古墳群			△	44, 72
220	一重御座神社古墳			○	#
221	東山神社古墳			○	#
222	お坊塚古墳			△	#
223	打沢古墳群			△	#
224	打沢古墳			△	#
225	姫塚古墳			○	#
226	虚空蔵古墳群			△	#
227	夜両古墳群			△	#

<竊跡>

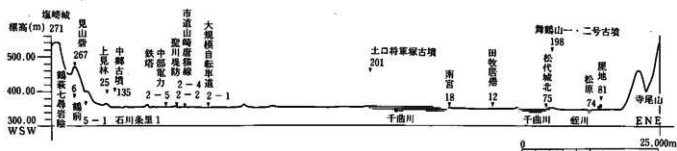
番号	遺跡名	古墳 後期	奈良	平安 前期	文献
229	前田痕跡			○	#
230	原市場痕跡			○	#
231	鍋無痕跡			○	#
232	いもじゃくば 窟跡			○	#
233	城の環壕跡			○	#
234	松ノ山窟跡	○			72・73
235	天王山窟跡			○	72
236	牧内窟跡			○	#
237	滝本窟跡			○	#
238	池ノ平窟跡			○	#

<山城1>

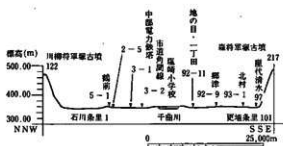
番号	遺跡名	文献
239	笹平城	71
240	須立城	#
241	新山城	77
242	有旅城	71
243	籬の城	#
244	内後館	71・135
245	於下館	61・71
246	名称なし	135
247	大塚館	71・135
248	東島寺館	—
249	広田城	71
250	富部館	—
251	布施城	71
252	横田城	71・135
253	小森館	71
254	杵瀬館	71・135
255	和田城	71・77・135
256	西の城	71・135
257	草の城	#
258	湯の入城	—
259	二つ柳城	—

番号	遺跡名	文献
260	塚田	—
261	大塔城	71・135
262	石川城	—
263	堀の内	—
264	園内	—
265	薬山砦	65
266	四宮館	#
267	見山砦	59
268	善右エ門屋敷	65
269	下耕	—
270	殿屋敷	—
271	塩崎城	71・135
272	赤沢城	71
273	小坂城	#
274	稲荷山城	71・135
275	龍王城	71
276	佐野城	71・135
277	八幡松田館	71
278	川田氏館	#
279	古山城	#

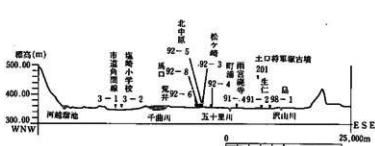
番号	遺跡名	文献
280	霞城	71・135
281	金井山城	#
282	寺尾城	#
283	尾飾城	#
284	松代城	71
285	奇妙山砦	#
286	妻女山城	—
287	竹山城	71
288	屋代古城	—
289	唐崎山城	71・135
290	天城城	71
291	平林館	#
292	生仁館	38・71・135
293	鞍骨城	71・135
294	ノロシ山城	71
295	鷺尾城	71・135
296	屋代城	45・71・135
297	長谷 経塚	52・119・130
298	矢崎山 経塚	#
299	大峰 経塚	125・130



第9図 周辺遺跡分布概念図①



第10図 周辺遺跡分布概念図②



第11図 周辺遺跡分布概念図③

第2章第1節・第3章第2節引用・参考文献

- | | | |
|----------------------|------|---------------------------------------|
| 1 春日 学 | 1985 | 『長野市石川・二ツ柳条里遺構地域の地名』「信濃」III-37 |
| 2 小出 章 | 1985 | 『長野市石川・二ツ柳地域の水利の現状』「信濃」III-37 |
| 3 更級・埴科地方誌刊行会 | 1980 | 『更級・埴科地方誌 近世編上』 |
| 4 更級・埴科地方誌刊行会 | 1986 | 『更級・埴科地方誌 自然編』 |
| 5 塩崎村史刊行会 | 1971 | 『塩崎村史』 |
| 6 建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所 | 1993 | 『信濃の巨流 千曲川』 |
| 7 丸山敏一郎 | 1974 | 『善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について』「信濃」III-26-5 |
| 8 宮下健司 | 1985 | 『長野市石川条里周辺における原始・古代の空間構造』「信濃」III-37-9 |
| 9 米山一政 | 1985 | 『長野市石川条里遺構をめぐる歴史環境』「信濃」III-37 |

第2章第2節遺跡分布 引用・参考文献(五十音順)

- 1 磯崎正彦 1959 『長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古式弥生土器』『信濃』III-11-6
- 2 大塚初重 1962 『信濃大室古墳群』『古代学研究』30
- 3 大塚初重 1969 『信濃大室古墳群』『考古学集刊』4-3
- 4 大塚初重・小林三郎・石川日出志 1993 『信濃大室 横石塚古墳の研究 1』
- 5 大室古墳群調査会 1970 『信濃大室古墳群北支群緊急発掘調査報告書』
- 6 岡田正彦 1969 『長野県更埴市荒井遺跡採集の一括資料』『信濃』III-21-11
- 7 岡田正彦 1970 『長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告』『信濃』III-22-4
- 8 岡田正彦 1971 『長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告』『信濃』III-23-5
- 9 岡田正彦・竹内三千夫 1972 『更埴市大字八幡青木遺跡緊急発掘調査報告書』『長野県考古学会誌』14
- 10 岡田正彦 1973 『長野県更埴市馬口遺跡出土の緑釉手付木版』『長野県考古学会誌』5
- 11 岡田正彦 1977 『城之内遺跡』『日本考古学年報24』
- 12 蒲原圭行・高嶋光司ほか 1979 『善光寺平南平部における古墳の実測調査』『信濃』III-31-12
- 13 棚原 健 1966 『長野県更埴市稲荷山湯の崎一本松古墳発掘』『信濃』III-18-9
- 14 棚原健 1979 『川柳村草塚古墳の再認識』『千曲』23
- 15 棚原健・松尾昌彦 1984 『長野県飯綱社古墳の出土遺物』『信濃』III-36-4
- 16 更埴市教育委員会 1961 『城ノ内-信州千曲河岸の土師式集落の研究』
- 17 更埴市教育委員会 1969 『生仁』
- 18 更埴市教育委員会 1970 『下条・灰塚遺跡-長野県更埴市の古代集落遺跡緊急発掘調査報告書』
- 19 更埴市教育委員会 1973 『長野県森特軍塚古墳』
- 20 更埴市教育委員会 1977 『長野県更埴市大字八幡青木遺跡緊急発掘調査報告書』
- 21 更埴市教育委員会 1978 『屋代馬口K-長野県更埴市屋代遺跡群馬口K遺跡緊急発掘調査報告書-1』
- 22 更埴市教育委員会 1981 『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡-長野県屋代南高等学校校地点試掘確認調査報告書-1』
- 23 更埴市教育委員会 1982 『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡II-長野県屋代南高等学校校地点発掘調査報告書-1』
- 24 更埴市教育委員会 1983 『長野県更埴市横沢遺跡群I-横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書-1』
- 25 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市横沢遺跡群II-横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書-1』
- 26 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市八幡遺跡群北稲付遺跡-西部沖は場整備に伴う発掘調査報告書-1』
- 27 更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市南沖遺跡II-長野県信用金庫屋代支店建設に伴う発掘調査報告書-1』
- 28 更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市横沢遺跡群III-横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書-1』
- 29 更埴市教育委員会 1985 『本誓寺遺跡調査の概要』
- 30 更埴市教育委員会 1986 『長野県更埴市杜宮司遺跡-西部沖泉宮は場整備に伴う発掘調査報告書-1』
- 31 更埴市教育委員会 1986 『屋代遺跡群馬口遺跡-長野県屋代南高等学校改築に伴う発掘調査報告書-1』
- 32 更埴市教育委員会 1987 『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡IV-長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書-1』
- 33 更埴市教育委員会 1987 『屋代遺跡群馬口遺跡II-長野県屋代南高等学校体育館建設に伴う発掘調査-1』
- 34 更埴市教育委員会 1988 『長野県更埴市屋代遺跡群・更埴条至水田址詳細分布調査報告書-1』
- 35 更埴市教育委員会 1988 『屋代遺跡群馬口遺跡III-長野県屋代南高等学校プール等建設に伴う発掘調査報告書-1』
- 36 更埴市教育委員会 1989 『長野県更埴市屋代遺跡群馬口遺跡IV-長野県屋代南高等学校校舎宿舎建設に伴う発掘調査報告書-1』

- 37 更埴市教育委員会 1989 「長野県更埴市小島遺跡—都市計画道路駅前線工事に伴う発掘調査報告書—」
- 38 更埴市教育委員会 1989 「長野県更埴市 生仁遺跡III—県営雨宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書」
- 39 更埴市教育委員会 1990 「更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡III—屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書—」
- 40 更埴市教育委員会 1990 「平成元年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書」
- 41 更埴市教育委員会 1992 「屋代清水遺跡—県立歴史館建設に伴う発掘調査報告書」
- 42 更埴市教育委員会 1992 「史跡 森将軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—」
- 43 更埴市教育委員会 1994 「長野県更埴市屋代遺跡群 大境遺跡IV・V 中部電力雨宮変電所・鉄塔建設に伴う発掘調査報告書」
- 44 更埴市史編纂委員会 1994 「更埴市史 第1巻 古代・中世編」
- 45 更埴市教育委員会 1995 「長野県更埴市 屋代城跡範圍確認調査報告書」
- 46 小林秀夫 1975 「善光寺平における積石塚古墳の諸問題」 『長野県考古誌』21
- 47 小林秀夫 1976 「長野市四ツ谷特殊遺構の遺物」 『信濃考古』36
- 48 笹沢浩 1971 「長野市篠ノ井西内古墳出土の壺蓋」 『長野』38
- 49 笹沢弘 1975 「長野市四ツ谷遺跡出土の後期弥生式土器」 『信濃考古』39
- 50 笹沢弘・岡田正彦 1978 「更埴市城之内遺跡」 『信濃考古』27
- 51 佐藤慶二 1977 「長野市四ツ谷遺跡出土の須恵器」 『長野県考古学会誌』29
- 52 更埴埴科地方誌刊行会 1978 「更埴埴科地方誌 第2巻 原始古代中世編」
- 53 財)長野県埋蔵文化財センター 1989 「長野県埋蔵文化財センター 年報 5」
- 54 財)長野県埋蔵文化財センター 1990 「長野県埋蔵文化財センター 年報 6」
- 55 財)長野県埋蔵文化財センター 1991 「長野県埋蔵文化財センター 年報 7」
- 56 財)長野県埋蔵文化財センター 1992 「長野県埋蔵文化財センター 年報 8」
- 57 財)長野県埋蔵文化財センター 1993 「長野県埋蔵文化財センター 年報 9」
- 58 財)長野県埋蔵文化財センター 1994 「長野県埋蔵文化財センター 年報10」
- 59 財)長野県埋蔵文化財センター 1994 「中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 更埴市内・長野市内その1 鳥林遺跡 小坂西遺跡 鶴萩七尋岩陰遺跡 赤沢城跡 塩崎城見山器遺跡 地之目遺跡 一丁田遺跡」
- 60 財)長野県埋蔵文化財センター 1994 「中央自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書14 長野市内その2 鶴前遺跡」
- 61 財)長野県埋蔵文化財センター 1995 「長野県埋蔵文化財センター 年報11」
- 62 財)長野県埋蔵文化財センター 1996 「長野県埋蔵文化財センター 年報12」
- 63 財)長野県埋蔵文化財センター 1996 「上信越自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書 7 長野市内 その5 大屋山古墳群 北平1号墳」
- 64 財)長野県埋蔵文化財センター 1996 「上信越自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書 23 更埴市内 その二 長野県屋代遺跡群出土木簡」
- 65 塩崎村史刊行会 1971 「塩崎村史」
- 66 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料 第1巻(上・下)」
- 67 下平秀夫 1968 「川柳将軍塚古墳発見の埴輪円筒棺をめぐって」 『信濃』III-20-4
- 68 下平秀夫 1970 「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査概報(2)」 『信濃』III-22-4
- 69 竹九三千夫 1974 「長野市松代町清野四ツ谷遺跡の古式土師」 『信濃』III-26-2
- 70 長野県教育委員会 1968 「地下に発見された更埴条里遺構の研究」
- 71 長野県教育委員会 1983 「長野県の中世城郭跡 分布調査報告書」

- 72 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表』
- 73 長野県史刊行会 1982 『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信編)』
- 74 長野県史刊行会 1986 『長野県史 遺史編 第2巻 中世』
- 75 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』
- 76 長野県史刊行会 1989 『長野県史 遺史編 第1巻 原始・古代』
- 77 長野県町村誌刊行会 1985 『長野県町村誌』
- 78 長野市教育委員会 1974 『長礼山2号墳発掘調査略報』
- 79 長野市教育委員会 1978 『塩崎遺跡群—塩崎小学校校地点遺跡 第1次調査報告—』
- 80 長野市教育委員会 1978 『田中沖遺跡 第1次発掘調査概報』
- 81 長野市教育委員会 1978 『中村遺跡—松代西条小学校校地点遺跡の調査報告』
- 82 長野市教育委員会 1979 『塩崎遺跡群—塩崎小学校校地点遺跡 第2次調査報告—』
- 83 長野市教育委員会 1980 『四ツ屋遺跡(1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(第3次)』
- 84 長野市教育委員会 1980 『篠ノ井遺跡群—大規模自転車道校地点遺跡の調査報告』
- 85 長野市教育委員会 1981 『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』
- 86 長野市教育委員会 1981 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
- 87 長野市教育委員会 1981 『長野・大室古墳群—分布調査報告書—』
- 88 長野市教育委員会 1983 『浅川扇状地遺跡群向迎田遺跡・川田条里の遺構・石川条里の遺構』
- 89 長野市教育委員会 1984 『石川条里の遺構・上駒沢遺跡』
- 90 長野市教育委員会 1985 『石川条里の遺構(3) (付・上駒沢遺跡)』
- 91 長野市教育委員会 1985 『長野市二ツ柳埋没水田址の調査』(『信濃』Ⅲ-37-9)
- 92 長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡 IV—市道松部—小田井神社校地点遺跡—』
- 93 長野市教育委員会 1987 『塩崎遺跡 V 殿屋敷遺跡—角間地区市道改良事業地点』
- 94 長野市教育委員会 1987 『横田遺跡群 富士宮遺跡 鉄塔建設に伴う緊急発掘報告』
- 95 長野市教育委員会 1988 『町川田遺跡』
- 96 長野市教育委員会 1989 『長野市塩崎鶴前遺跡・塩崎城跡—中部電力(株)送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書—』
- 97 長野市教育委員会 1989 『石川条里遺跡(4)』
- 98 長野市教育委員会 1989 『篠ノ井遺跡群II—市道山崎唐橋線地点—』
- 99 長野市教育委員会 1989 『松代城跡 —平成元年度発掘調査概報—』
- 100 長野市教育委員会 1989 『中条遺跡—長野県松代高等学校体育館建設事業地点—』
- 101 長野市教育委員会 1990 『篠ノ井遺跡群III—中部電力北信坂城線鉄塔地点・長野市宮塩崎体育館地点—』
- 102 長野市教育委員会 1990 『墨地遺跡II—国補中小河川砥川改修事業地点』
- 103 長野市教育委員会 1991 『塩崎遺跡群(6)・塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点・石川条里遺跡(5)—石川条里遺跡消防塩崎分署地点—』
- 104 長野市教育委員会 1991 『田中沖遺跡II 長野市神明広田区画整備事業地点』
- 105 長野市教育委員会 1991 『松原遺跡 長野南農業協同組合集荷場施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 106 長野市教育委員会 1991 『石川条里遺跡(6) —篠ノ井西部地区県営園地整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 107 長野市教育委員会 1992 『篠ノ井遺跡群(4)—聖川堤防地点—』

第2章 位置と環境

- 108 長野市教育委員会 1992 『塩崎遺跡群(7) 塩崎小学校・水泳プール改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 109 長野市教育委員会 1992 『南宮遺跡』
- 110 長野市教育委員会 1993 『石川糸里遺跡(7) 長野市北野土地区画整備事業 県営住宅みこと川団地施設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 111 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡II-市道松代家111号線地点』
- 112 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡III 主要地方道中野更埴線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 113 長野市教育委員会 1993 『上見林遺跡 主要地方道長野信州新線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 114 長野市教育委員会 1993 『田牧居母遺跡-長野県住宅供給公社沼里住宅団地造成地点-』
- 115 長野市教育委員会 1993 『史跡 松代藩主真田家墓所-宗教法長長国寺庫裏建設に係る現状変更に伴う発掘調査報告書-』
- 116 長野市教育委員会 1994 『橋平遺跡・宮ノ下遺跡-史料コンクリークラブ造成事業に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 117 長野市・更埴市教育委員会 1987 『土口將軍塚古墳-重要遺跡確認緊急調査-』
- 118 日本竊盗史研究所 1977 『長野市松代 屋地遺跡』
- 119 林 和男 1985 『矢作山経塚出土の経筒』 『長野』123
- 120 丸山敏一郎 1974 『善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について』 『信濃』III-26- 5
- 121 丸山敏一郎 1976 『善光寺平南縁の古墳立地について』 『信濃』III-28- 4
- 122 丸山敏一郎 1976 『更埴市島・道前土墳墓』 『長野県考古学会誌』26
- 123 宮下健司 1979 『長野県川柳將軍塚古墳をめぐる古文書』 『信濃』III-31- 9
- 124 宮下健司 1985 『長野県石川糸里周辺における原始・古代の空間構造』 『信濃』III-37- 9
- 125 宮本邦基 1934 『長谷寺発掘金堂の経塚に就て』 『信濃』I- 3- 6
- 126 宮本邦基 1939 『信濃国篠ノ井町発見の子持ち勾玉』 『中部考古学会報』4-1
- 127 本村家章 1972 『長野市篠ノ井光林寺裏出土遺物の研究』 『MUSEUM』254
- 128 森島隆・米山一政 1968 『長野県更埴市桑原地尻遺跡調査報告(1)』 『上代文化』34
- 129 森嶋隆 1976 『銅鐸及び石製模造鈿』 『篠ノ井指定文化財調査報告書』
- 130 森嶋隆 1981 『信濃経塚資料にみる二・三の課題』 『信濃』III-33-12
- 131 森本六爾 1929 『川柳將軍塚の研究』
- 132 矢口忠良 1968 『長野県更埴市桑原地区太田原向山古墳址出土須恵器について』 『信濃』III-20- 7
- 133 矢島宏雄 1978 『馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡』 『長野県考古学会誌』31
- 134 矢中隆・山田昌久 1987 『長野市田野口大塚古墳の測量調査』 『信濃』III-39-4
- 135 湯本軍一責任編集 1980 『日本城郭体系 第8巻 長野・山梨』 新人物往來社
- 136 米山一政 1966 『中郷神社前方後円墳』 『篠ノ井指定文化財調査報告書』
- 137 米山一政 1971 『竹原笹塚古墳』 『長野市の文化財』
- 138 米山一政 1973 『菅間大塚古墳』 『長野県指定文化財調査報告』 4
- 139 米山一政 1973 『桑根井空塚』 『長野県指定文化財調査報告』 4
- 140 米山一政 1976 『長礼山1号古墳』 『日本考古学年報』27
- 141 長野遺跡分布図

第3章 基本層序と微地形

第1節 基本層序とプラント・オパール分析の対比

1 基本層序 (第12・13図)

本調査域は、西側の篠山丘陵部と東側の千曲川自然堤防と中間に位置し、後背低地を東西に横断する長い範囲である。発掘調査によってこの調査範囲には広域な低地と2箇所の微高地が埋没地形としてあることが確認された。微高地は調査範囲の中央部(⑤・⑦・⑧・⑩区)(以下「中央微高地」という)と、中央微高地から約40m南西に低地を隔てて⑥区に検出された(以下「南西微高地」という)。前者の微高地からは縄文時代前期の集落跡や古墳時代前期の祭祀跡、古代から中世の居住跡が検出され、後者の微高地からは弥生時代後期の墓域とされる土坑群が検出されている。低地は中央微高地を境に西側丘陵寄りの調査域(①・②・③・④・⑥区)(以下「西側低地」という)と東側聖川寄りの調査域(⑨・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・16区)(以下「東側低地」という)で広く確認された。後者の東側低地からは弥生時代中期から古墳時代中期までの水田跡が広く検出され、両者の低地から平安時代の埋没水田跡が確認された。本調査域の地形および堆積土層は、2箇所の微高地と2箇所の低地に区分される。

ここでは上記4区分の調査域、各調査区の基本層序について概要を述べる。本来ならば遺跡(調査域)を通視する基本層序によって全体の土層堆積状況や検出遺構の相関関係を提示すべき所であるが、本調査域の場合、用水路・生活用道路等によって隔てられた調査区設定によって調査区相互の土層に違いがあったこと、同一調査区内であっても微妙な堆積層の違いから検出遺構が同一面であるという確証が得られなかったこと、また各調査区担当者の土層分層観念の違いがあったことなどから、土層細部の統一ができなかった。土層照合のため各調査区から採取した土壌サンプルの比較を試みたが、同一土層としたものに疑問が残る結果となった。各調査区の細部土層区分の違いは、本遺跡の立地が低地であり各時代・時期の土地条件によって山麓や河川の土砂供給を常に受けていたことや、土地利用が異なったことに由来するものと考えられる。そこで各地点相互の土層照合を無理にせず、各調査区の基本層序を発掘調査段階のまま個々に提示した。

本調査域で共通して検出された土層は平安砂層と砂層に被われた平安耕作土層であるが、この土層も地点によって土色、内容物が微妙な違いがあり、本遺跡で共通認識できる目安として堆積層の違いを時代で区分した。なお各調査区で付したアラビア数字の層名は層相の変化ごとに付した番号であり調査区間の対応を示すものではない。区分は以下の通りである。

I層…近世、II層…中世、III層…平安洪水砂層、IV層…平安耕作土層、V層…古墳時代(地点により一部弥生時代を含む)VI層…弥生時代中期・後期、VII層…縄文時代

I層とII層の区分ができなかった調査区は区分を明記していない。IV層とした区分には奈良時代の耕作土が含まれる可能性がある。V層としたものは同一土層内から古墳中期までの土器しか得られていないので古墳後期は含まれない、またVIIは縄文前期に限定される。

(1) 西側低地 (①, ②, ③, ④・⑥の低地部) の基本土層

表土…耕作土、灰色から褐色の砂質シルト層。下層もしくは下部に鉄、マンガンの集積層がある。

I層…黄褐色から褐灰色のシルト層。砂質となる層があり、凝灰岩の風化礫が多量に含まれる。鉄、マンガンの集積層が顕著に見られる。

II層…黄褐色から褐灰色ないしは黒褐色粘土層。凝灰岩の風化礫が多量に含まれ、鉄、マンガンの集積層が顕著に見られる。下部は①・④・⑥区では褐灰色シルト層、②・③区では黒褐色粘土層となる。

III層…明褐色から灰色砂層。粒形の均一平安洪水砂。一部に鉄、マンガンの集積が見られる。

IV層…上部は褐灰色粘土層。②・④区の下層は黒褐色粘土層である。また②-2・④区では耕作土層中に凝灰岩の風化礫が含まれ、①・②-1区では炭化種子が多量に混入していた。

IV～V層…灰色ないし白色粘土層。帯状の堆積層として各調査区に共通する。

V層…緑灰色から黒褐色粘土層。

V下層…灰色ないし白色粘土層。帯状の堆積層として共通する。

I層は砂質であり表土との間層に洪水性の砂が堆積した地点が見うけられるなど、山麓からの小河川もしくは千曲川の土砂堆積の影響を多分に受けている。II層は凝灰岩礫を含む粘性の強い粘土層であり、地点によって洪水性の砂層が見受けられるが安定している。III層の平安洪水砂は本調査域西端にあたる①-1と②-1区西寄り調査域最大の50cmの厚みがありほぼ30cm前後の堆積が見られた。同調査区では東方向に厚みが減じられ東端ではIV層上に砂層がなくなる。道路を隔てた東側調査区の①-1・②-2区で再び15～20cm前後の厚みをもって堆積し更に東側の③・④区に連続している。④・⑥区の微高地寄りの砂層は、上層の褐色粘土に攪拌されてなくなる。IV層平安耕作土上面は西から東へ緩やかに傾斜し中央微高地縁辺で上昇し堆積厚も減じている。IV層下部にあたる①-1の12層と②-1の9層は炭化種子を多量に含んだ黒褐色粘土で泥炭質であることから平安時代以前の水田層の可能性がある。V層は20cm前後の厚みがあり、地点によっては泥炭質となる所もあるが、水田耕作土に特徴的に見られる下部堆積層の乱れが観察されなかった。遺構の検出はされていないがV層内から古墳時代前期の土器が出土している。V層より下は灰色から褐灰色粘土とシルトの互相となり安定している。

(2) 東側低地 (⑤-⑧, ⑩, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑮, ⑯)

表土……耕作土、灰色から褐色の砂質シルト層。下層もしくは下部に鉄、マンガンの集積層がある。

I層……褐灰色のシルト層。褐灰色のシルト質粘土層。⑫-2・3区は上層に黄褐色砂層が堆積している。層内には普遍的に凝灰岩の風化礫が多量に含まれる。

II層……黄褐色から褐灰色シルト層。暗灰色粘土層。凝灰岩の風化礫が散在し、一部に砂層堆積がある。鉄、マンガンの集積が顕著に看られる。

III層……黄褐色から褐灰色、赤褐色砂層。⑩・⑫区では粗砂、⑬・⑭区では細砂。⑫・⑬・⑮・16は灰色粘土ブロックが散在している。また一部に鉄、マンガンの集積が見られる。

IV層……暗灰色から黒褐色粘土層。炭化物粒子多量混入。⑪区では上部に炭酸鉄塊がある。⑩・⑮区では凝灰岩の風化礫が混入する。IV層下部は泥炭質となる。

IV～V層…灰色ないし白色粘土層。帯状の堆積層として共通する。⑨区12・13層、⑫-1区7-1層、⑫-2・3区9層、⑬・⑭区8'層、⑮区11層、⑯区12層が対応する。

V層上……微高地縁辺の⑨・⑫・⑬は灰黄色から褐色粘土に泥炭質の炭化物粒子が多量に混入する。低地中央の⑭・⑮・⑯区は黒色泥炭、灰色シルト、褐灰色砂質泥炭の互層となる。

V層……灰色粘土層。帯状の堆積層として共通する。炭化物粒子を多量に混入する。⑩・⑮区では凝灰岩の風化礫が混入し、一部炭酸鉄が散在する。

V～VI層…灰色ないし白色粘土層。⑫-1区9層、⑫-2・3区11層、⑬・⑭区9層、⑮区15層、⑯区22層、⑰区9c層が対応する。低地中央部の⑮・⑯区は黒色泥炭、灰色シルト、褐灰色砂質泥炭の互層となる。

VI層……暗灰色から灰褐色粘土層。泥炭質の炭化物粒子が多量に混入する。灰色粘土と泥の互層となる地点もある。

VI層下……泥炭質の黒褐色シルト、灰色粘土、泥炭層の互層となる。

I層とII層の土質の違いが不明瞭であり、両層とも砂質のシルトである。⑫-2区ではI層が洪水砂層に覆われ、近世水田が検出された。近世洪水砂層は調査面が保持された地点には普遍的に観察される。II層はシルト質となる地点と粘土質になる地点とがあり中世水田層として統一的に捉えられないが、低地中央部は砂のブロックを含んだシルト層が漸移することから、洪水性の堆積層があったもの判断される。III層の平安洪水砂はほぼ全域で確認されたが、堆積の厚み、内容物、粒形において地点により状況の違いが見られた。上層粘土と攪拌され明確に検出されなかった地点は、本調査域で最も低地部となる11・15区北側で、砂が凹凸のみに検出された地点は⑫区東側、⑬区北側であった。後世の耕作による影響と考えられるが、低地最深域で砂堆積が希薄な要因は判然としない。⑬-1、⑬・⑭区ではIV層下部に黒色の有機物が多量に混入した層があり、平安水田以前の水田層の可能性がある。⑮、⑯、16区の低地中央のIV～V層は50cm程の厚い泥炭質の粘土、シルトであり西側の微高地にむかって厚みを減じている。V層は20～50cmの堆積層として安定的に見られる。V層上面、V層内からは古墳時代前期の水田遺構が検出されている。V～VI層は地点によって堆積厚に違いがあるが、低地から微高地方向に厚さを減じ微高地周囲では白色の粘土層に対応している。⑮、⑯区ではVI層上面に洪水性の砂の堆積が認められVI層上面からは弥生後期の水田遺構が検出されている。VI層は上部が粘土となり下部がシルト質粘土に分層される地点があり前者は弥生後期、後者は弥生中期の水田層とされる。

(3) 中央微高地 (⑤-1.⑤-2.⑦.⑧.⑩)

表土……暗褐色から暗褐色シルト層。砂質であり、下部に鉄、マンガンの集積層がある。

II～IV層…暗灰色シルト層。下部に鉄、マンガンの集積層がある。

V層……褐色から灰褐色シルト層

V～VII層…灰色から褐色シルト層と灰褐色から黒褐色粘土の互層となる。

VII層……褐灰色シルト層

II～IV層とした⑤区2層、⑧区1層下部が中世、古代遺構の検出面であり、V層とした⑤区3・4層、⑧区2-1.2層が古墳前期遺構の検出面である。これらの土層は各時代の居住・祭祀利用によって攪拌され、近世以降の耕作の影響を受けている地点もある。III層は基本層序にはないが、古墳時代前期の溝や平安時代の溝などから検出された。V～VII層は最大で1.8mの堆積厚があり、10cm前後の厚みをもって帯状に堆積した白色ないしは灰色粘土が黒色粘土と互層をなして堆積している。土層の乱れはほとんど観察されず、遺物の出土もない。VII層は縄文前期包含層であり⑧区では13層下部から土器片が出土している。

(4) 南西微高地 (⑥)

表土……褐灰色シルト質粘土層。砂質。

V層……褐灰色粘土層。砂質。

V下層…褐色から灰色シルト層と黒褐色粘土の互層となる。

調査区南西側に岬状に検出された微高地であり。環境保全と調査の安全面から下層深くまで掘削ができずVII層の状況は不明である。表土層下のV層とした⑥区8層が弥生時代後期の遺構が検出面である。隣接する⑥区低地からはIII層、IV層が検出され、弥生・古墳水田耕作土となるV層は粘性の強い褐灰色から

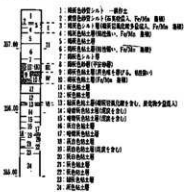
①-1区



②-1



①-2区



③区



④区



⑤-1-2区 (微高地)



①-2-3



①-④区



⑤区



第12図 各調査区の基本土層(1)

黒褐色粘土層となる(⑥区10・11層)。微高地8層は隣接する低地にはない土層であり以下12層灰色シルト層まで低地の土層と微妙な違いが認められる。

2 プラント・オパール分析について

プラント・オパール分析は、調査初年度である昭和63年度に駒古環境研究所に委託し実施した。以下の報告内容は同研究所の第1次1988年10月と第2次1989年3月の分析報告書にもとずいたものである。ただし第1次と第2次の報告をまとめた関係で試料採取地点数や試料数は集計した。また発掘調査過程で調査区の層序の見直しをしたため採取地点の層序とのくい違いが見られた地点があり、この調査地点では、採取地点の層序を各調査区の基本土層に照合しなおして掲載した。1～3(1)は報告書のまま、3(2)は一部加筆した。

(1) 試料

昭和63(1988)年7月4日～7月7日に第1次現地調査、同年7月16日～7月17日に第2次現地調査を行った。調査対象区は長野自動車道路線内の西山山麓から聖川周辺域の東西約1200mの範囲で、ここに64箇所の試掘坑が設定された。この64箇所の内、遺構が検出されたり壁面崩落の危険が生じた地点は、調査対象から除外された。

試料は、各試掘坑内の土層壁面において、容量50ccの採土管およびポリ袋等を用いて、各層ごとに5～10cm間隔で採取した。なおNa9地点(19区)については、試掘坑の掘削が困難であったため、長さ1.5mのボーリング棒を用いて試料採取した。試料採取地点は37箇所、試料数は436点であり、これらすべてについて分析を行った。

(2) 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法」をもとに、次の手順で行なった。

- ①試料土の絶乾(105℃・24時間)および仮比重測定
- ②試料土約1gを秤量しガラスビーズを添加(直径約40 μ m, 約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量。
- ③電気炉灰化法による脱有機物処理
- ④超音波による分散(150W・26kHz・15分間)
- ⑤沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去、乾燥
- ⑥封入剤(オイキッド)中に分散、プレパラート作成
- ⑦検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下プラント・オパールと略す)を主な対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。計数はガラスビーズ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート一枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と各種物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層圧の1cmあたりの植物体生産量を産出した。

換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である。

(3) 分析結果

ア 水田跡の探査

水田跡(稲作跡)の確認や探査を行なう場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000

個以上と比較的多量に検出された場合に、そこで稲作が行なわれていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、後代のものが上層から混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行なわれていた可能性はより確実なものとなる。

稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量はイネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやイチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。各採取地点のプラント・オパールの検出個数は第13図に示したとおりであり、第14図は主な分類群についての植物生産量とその変遷を示した。

イ 古環境の推定

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壤条件のところまに生育し、ヨシは比較的湿った土壤条件のところまに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。No.17からNo.37地点の東側低地の弥生時代の層序ではタケ亜科はほとんど認められず、ヨシ属の著しい卓越が認められた。このことから当時この調査区一帯がヨシ属の繁茂する湿地帯であったものと推定される。イネの出現に伴ってヨシ属の著しい減少が認められ、東側低地での弥生時代の初期水田はヨシ原を開墾して造成されたものと推定される。一方西側低地から西山の山麓部に位置するNo.58からNo.64地点の弥生時代の土層下の層序からはタケ亜科（主にクマザサ属）が比較的多く見られ、当時この付近にクマザサ属などタケ亜科植物の群落があったものと推定される。この調査区ではイネの出現とともにヨシ属の繁茂が認められタケ亜科は減少している。

参考文献

- 藤原宏志 1976:『プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の硫酸体標本と定量分析法-』『考古学と自然科学』9
- 藤原宏志 1979:『プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) -福岡板付遺跡(夜白式)水田および群馬日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定-』『考古学と自然科学』12
- 藤原宏志・杉山慎二 1984:『プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田跡の探査-』『考古学と自然科学』17
- 藤原宏志 1985:『長野市二ツ柳遺跡におけるプラント・オパール分析』『信濃』第37巻 9号
- 杉山慎二・藤原宏志 1987:『川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析 赤山 -古環境編-』川口市遺跡調査会報告第10集

3 プラント・オパール分析と分析地点の土層の対比

プラント・オパール分析の試料は主として平安水田耕作土より下層の水田層検出を目的としてサンプリングされたため上層水田の試料を部分的に欠いているが、本章第2節の分析結果から水田層の時期と、前後する土層を含めた古環境について述べる。

(1) 西側低地

No.48~No.54、No.58~No.68の18地点の分析が該当し、No.62~No.64地点は①-1区、No.58~No.60地点は①-2区、No.48~No.54地点は④区にそれぞれ対応する。①-1区で最下層水田となる土層は、17層上部から16層で多量のプラント・オパールが検出され、14層を挟み11層まで多量の検出を見た。同区13層からは古墳前期初頭の土器片が得られているので、15~17層は弥生時代の可能性がある。No.62~No.64地点の17層以下からはタケ亜属が多く、水田層に変化すると同時にヨシ属が圧倒している。この地区では乾地に水田が営まれ、水田化とともに湿地に変化した環境を示している。①-2区で最下層水田となる土層は14層である。No.58地点16層から多量のプラント・オパールが検出されているが、14層の泥炭質との互層となる地点である。同

地区では12層下部から古墳時代前期の土器片が出土していることから13・14層は弥生時代の可能性が高い。No58・No59地点において19層以下からタケ亜属が多く検出され、ヨシ属が増えてからプラント・オパールが多量に検出されている。この地点では湿地化した後に水田が営まれたと見られる。④区で最下層水田となる土層は11層ないしは10層であるが、中央微高地に近づくにつれプラント・オパールの検出量が減少し、No49地点で未検出となる。隣接する⑥区の同一土層内からは古墳前期の杭列が検出されていることから、11層弥生後期、10層古墳前期となる。④区は微高地縁部であるが全ての層でヨシ属が圧倒し湿地化していた環境にある。10層以降の水田層の出現とともにヨシ属が減少している。また微高地⑤区にかかるNo48地点の平安砂層が残る地点には耕作土層中にプラント・オパールが検出されている。

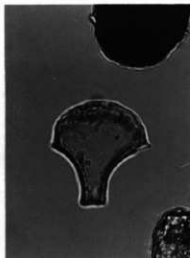
(2) 東側低地

No9、No13～No30、No37-1、No37-2、No38、No40の23地点の分析が該当する。No38、No40地点が⑤-3区、No37-1、No37-2地点が⑨区であり微高地縁部に位置する。No40地点では平安砂層が検出され、水田層も確認されたがプラント・オパールは未検出となり、隣接するNo38地点からは下層からも多量に検出された。平安時代の前後する時期の土地利用の変換地点が⑤-3区辺りになることが、分析結果からも確認された。No37-1、No37-2地点では⑨区14・15層からプラント・オパールが多量に検出され最下層水田とされる。同層からは杭列が検出され、古墳時代前期の時期が該当し、16層が弥生時代となる可能性がある。No25～No30地点は低地部にかかる⑬・⑭区に該当する。この地点では平安水田層(7層)から弥生中期水田層(11層)まで多量のプラント・オパールが検出された。⑬・⑭区では弥生・古墳水田遺構が数多く検出されている。No21～No23地点は⑮区、No18～No20地点は⑯区、No14～No17地点は16区が対応し、本調査域で最も低地となる調査区であり、弥生後期から古墳前期の水田遺構が多数検出されている。平安水田層から弥生中期水田層までプラント・オパールが検出されているが、⑮区(No21～No23地点)9～13層、⑯区(No18～No20地点)21～25層が未検出であり、地点によっては⑮区15層、⑯区12・13、14層、16区8層下部が未検出となっている。プラント・オパールが検出されなかった層及び地点は、黒色の泥炭層と泥炭質のシルト層が厚く堆積した場所で、弥生後期水田層、古墳水田層の上層に位置している。

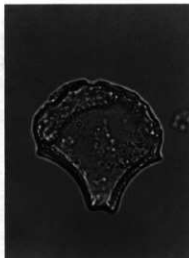
古環境復元では、最下層水田層に相当する土層より下(⑮区20層、⑬・⑭区13層以下、⑯区18層以下)では全体的にヨシ属の著しい卓越が認められ、水田の出現に伴ってヨシ属の著しい減少が認められた。このことから初期水田は湿地帯を開墾して利用されたものと推定される。またプラント・オパールが検出されなかった各土層ではヨシ属が卓越していることから、水田が放棄された後に再び湿地帯に戻ったものと推測される。

(3) 中央微高地

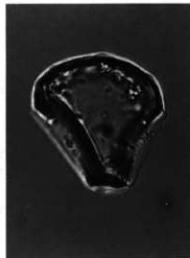
No41-2、No42、No44、No46の4地点の分析が該当する。微高地東縁部にあたるNo41-2地点では4層までプラント・オパールが検出されているが、6層以下には検出されていない。4層は平安時代以降の水田の可能性が高い。古環境復元では13層以下にタケ亜科が見られ、縄文前期包含層直上層では多量に検出されている。6層までの土層からはヨシ属とタケ亜科両者が見られ、ヨシ属の比率が多い。このことからVII層までは乾地でありV層までの安定堆積を示す土層は乾地と湿地が繰り返されていたものと推測される。なお西南微高地においてプラント・オパール分析は実施していない。



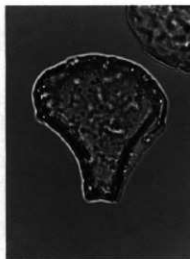
1. イネ No.37地点(9区)
4層サンプル(中近世)×400



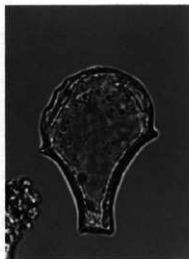
2. イネ No.37地点(9区)
12層サンプル(奈良平安)×400



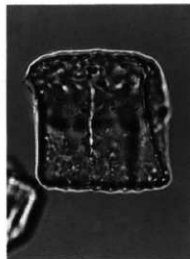
3. イネ No.37地点(9区)
12層サンプル(奈良平安)×400



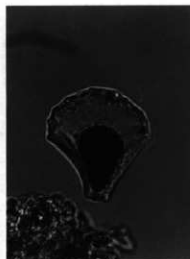
4. イネ No.37地点(9区)
14層サンプル(古墳)×400



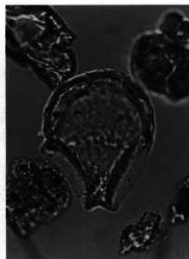
5. イネ No.37地点(9区)
14層サンプル(古墳)×400



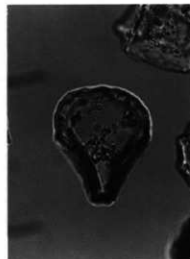
6. イネ No.37地点(9区)
14層サンプル(古墳)×400



7. イネ No.25地点(14区)
9層サンプル(弥生)×400

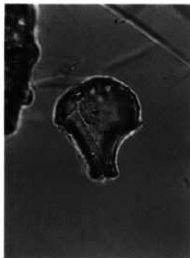


8. イネ No.25地点(14区)
5層サンプル(中世)×400

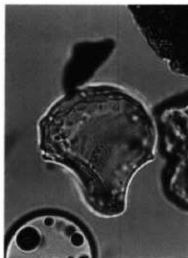


9. イネ No.20地点(15区)
1層サンプル×400

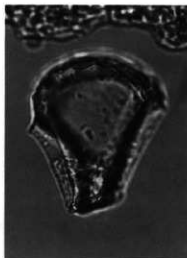
プラント・オパールの顕微鏡写真



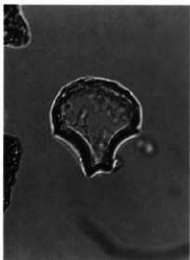
10. イネ No20地点(15区)
1層サンプル×400



11. イネ No20地点(15区)
1層サンプル×400



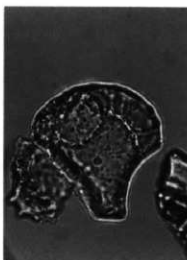
12. イネ No19地点(15区)
26-1層サンプル(弥生後期)×400



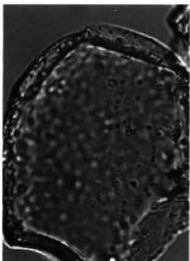
13. イネ No19地点(15区)
26-1層サンプル(弥生後期)×400



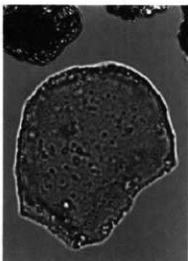
14. イネ No19地点(15区)
26-1層サンプル(弥生後期)×400



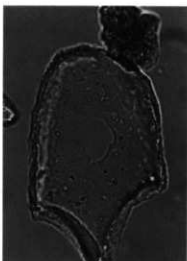
15. イネ No18地点(15区)
26-1層サンプル(弥生後期)×400



16. ヨシ属 No48地点(4区)
8上層サンプル(平安)×400

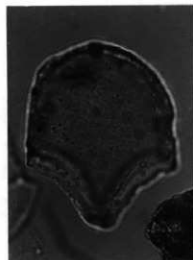


17. ヨシ属 No37地点(9区)
16上層サンプル×400



18. ヨシ属 No25地点(14区)
4層サンプル(弥生中期)×400

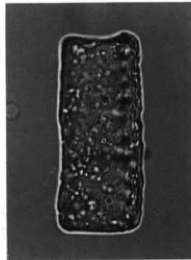
プラント・オパール顕微鏡写真



19. ヨシ属 No198地点(15区)
26-1層サンプル(弥生後期)×400



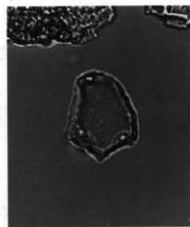
20. キビ族 No37地点(9区)
31. キビ族 No37地点(9区)



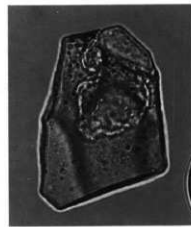
21. キビ族 No37地点(9区)
16上層サンプル×400



22. シノバ族 No37地点(9区)
4層サンプル(中近世)×400



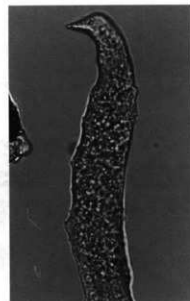
23. タケ茎科(クマザサ属) No37地点(9区)
14上層サンプル(古墳)×400



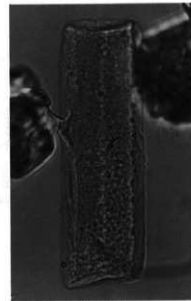
24. 不明 No37地点(9区)
16上層サンプル×400



25. 不明 No48(4区)
8上層サンプル(平安)×400



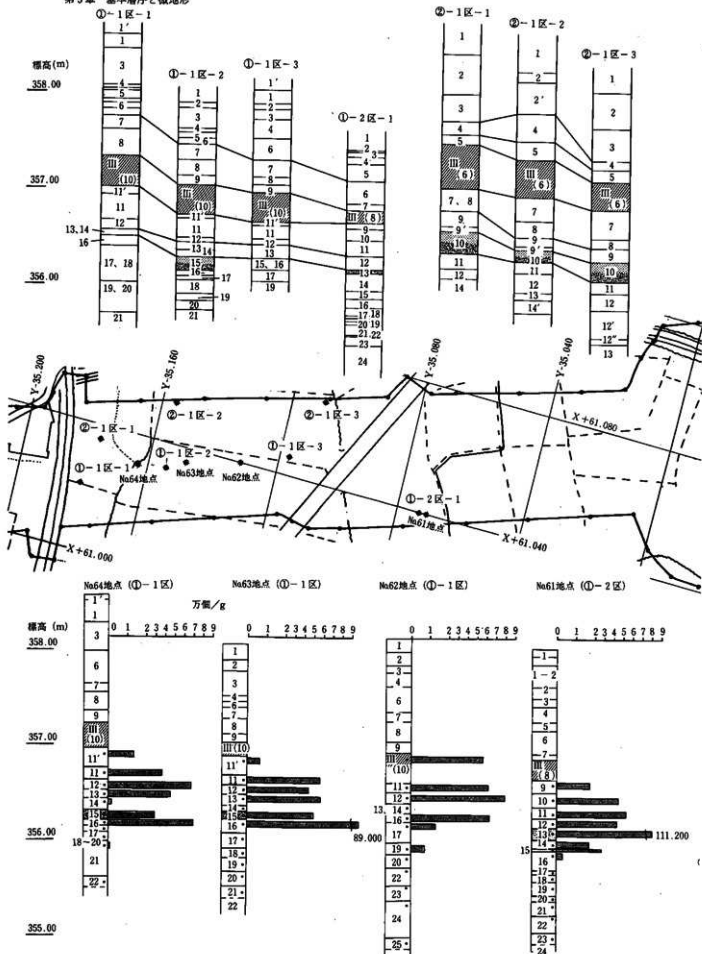
26. 不明 No48(4区)
8上層サンプル(平安)×400



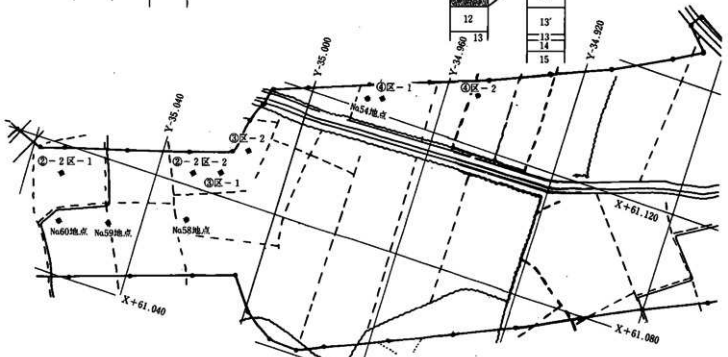
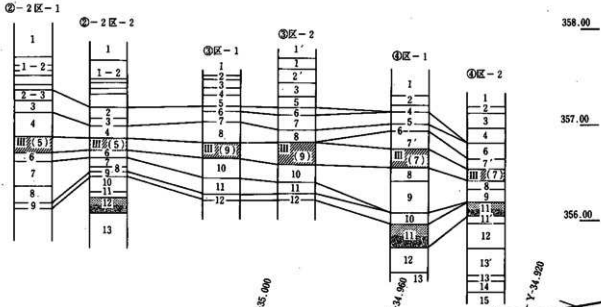
27. 不明 No18(15区)
26-1層サンプル(弥生後期)×400

プラント・オパール顕微鏡写真

第3章 基本層序と微地形



第14図 調査地点別柱状図



No.60地点 (①-2区)

No.59地点 (①-2区)

No.58地点 (①-2区)

No.54地点 (④区)

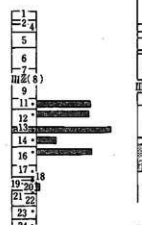
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9



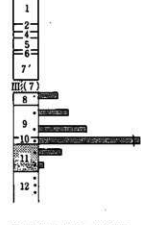
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9



0 1 2 3 4 5 6 7 8



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9



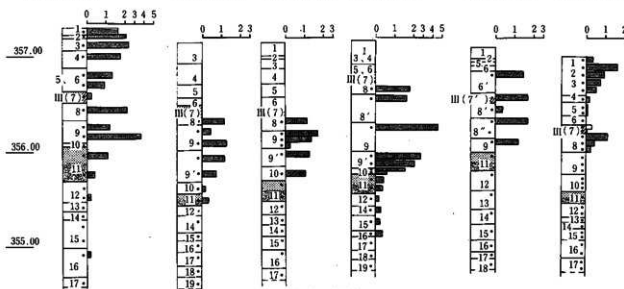
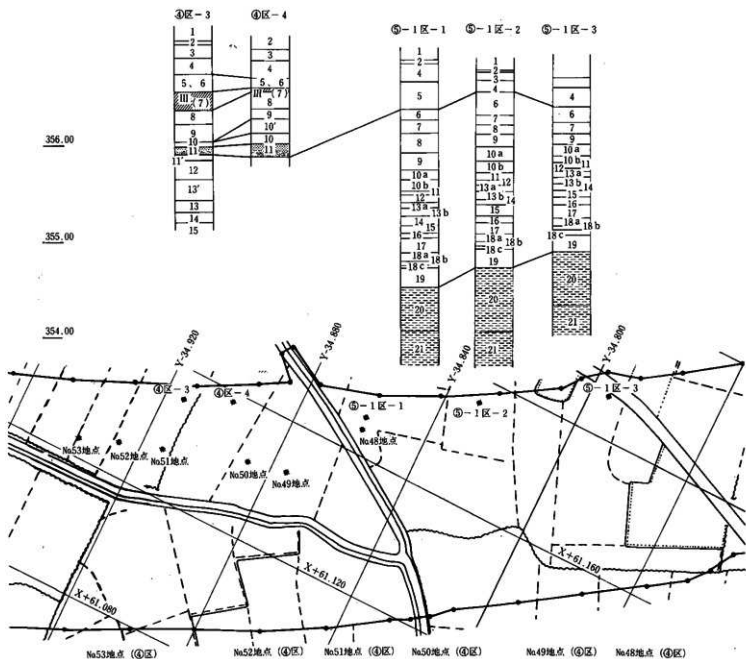
・印は分析試料の採取箇所

田平安砂層 古墳 弥生後期 355.00

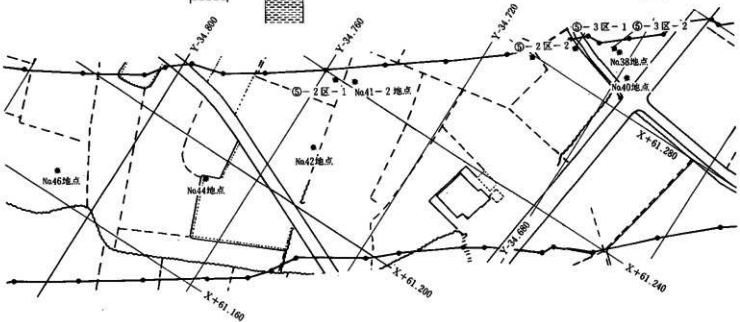
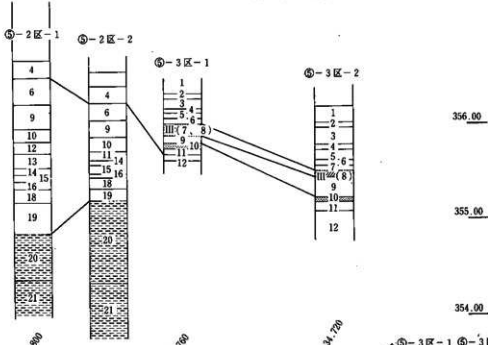


プラント・オバール サンプル採取地点及び採出状況 1

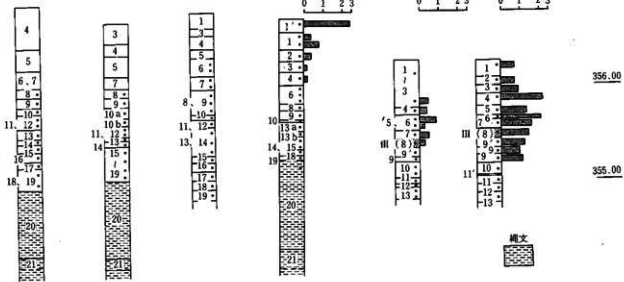
第3章 基本層序と微地形



第15図 調査地点別柱状図

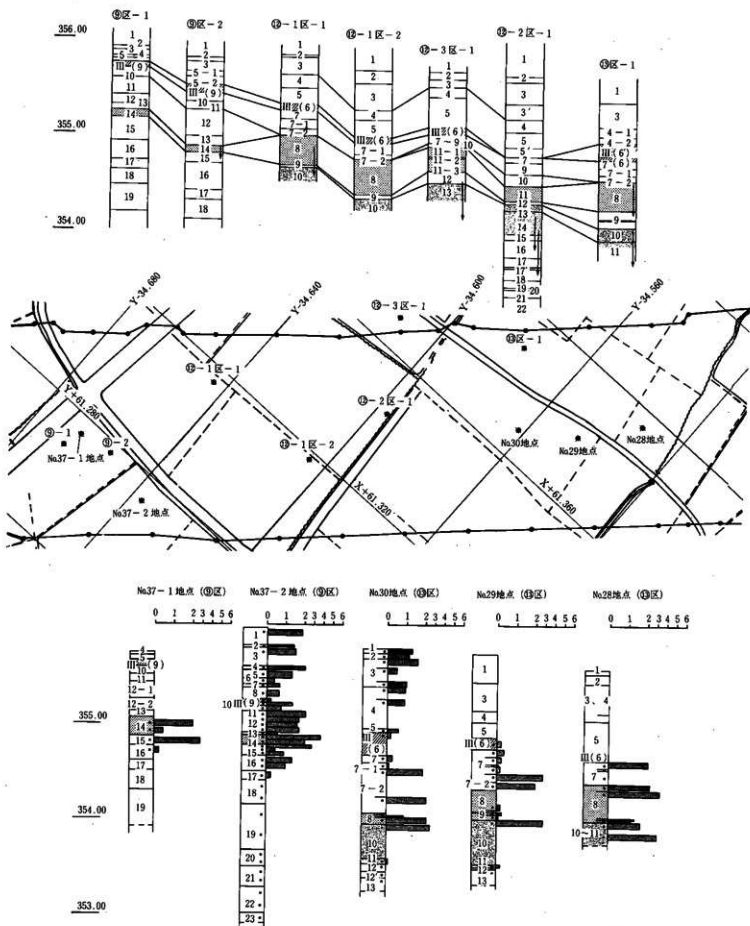


No.46地点 (⑤-1区) No.44地点 (⑤-1区) No.42地点 (⑤-2区) No.41-2地点 (⑤-2区) No.40地点 (⑤-3区) No.38地点 (⑤-3区)



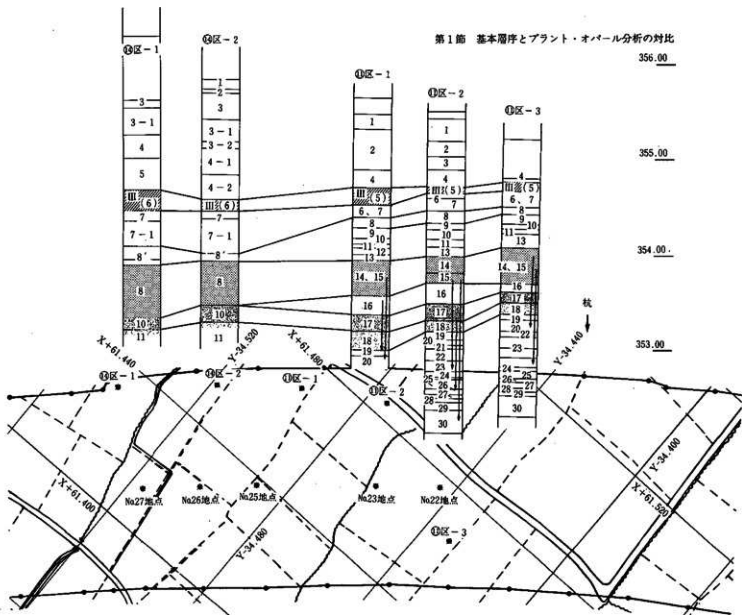
プラント・オパール サンプル採取地点及び採出状況 2

第3章 基本層序と微地形



第16図 調査地点別柱状図

356.00

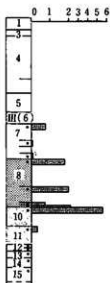


355.00

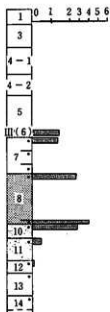
354.00

353.00

No.27地点 (③区)



No.26地点 (③区)



No.25地点 (③区)



No.23地点 (③区)



No.22地点 (③区)



355.00

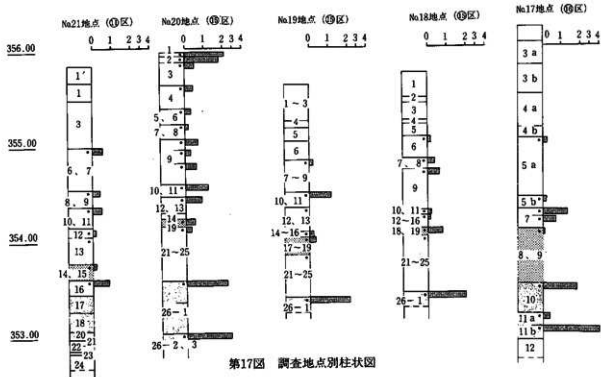
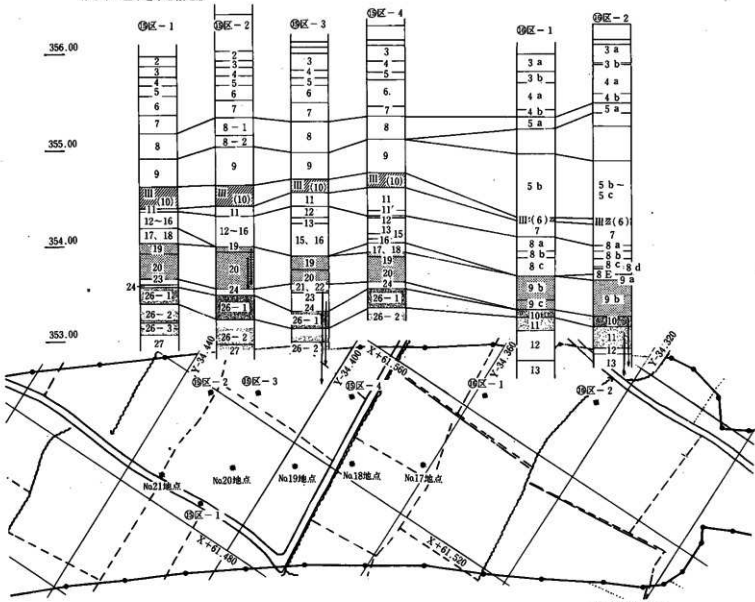
354.00

353.00

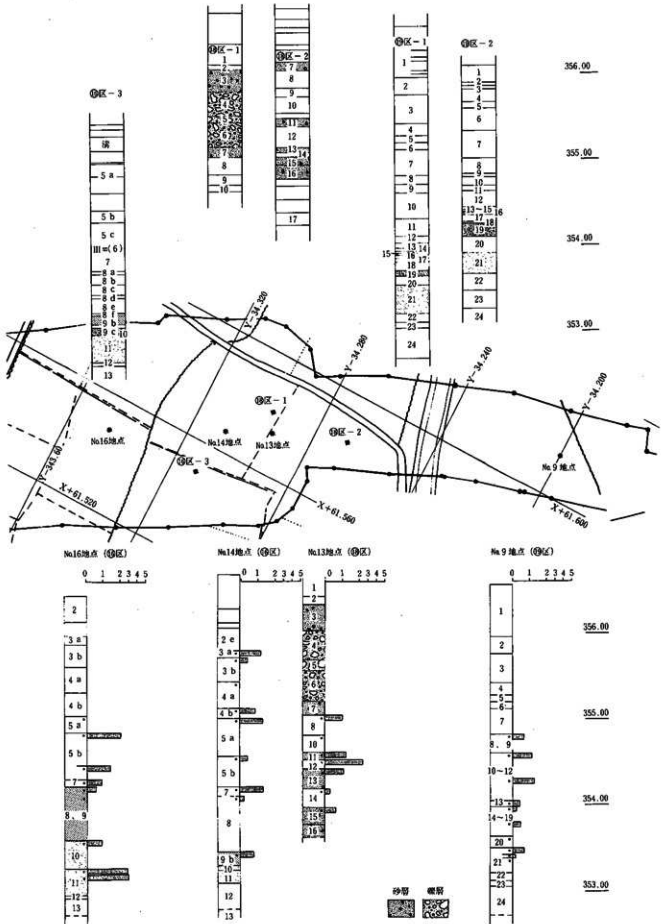
致生中期

プラント・オパール サンプル採取地点及び採出状況 3

第3章 基本層序と微地形

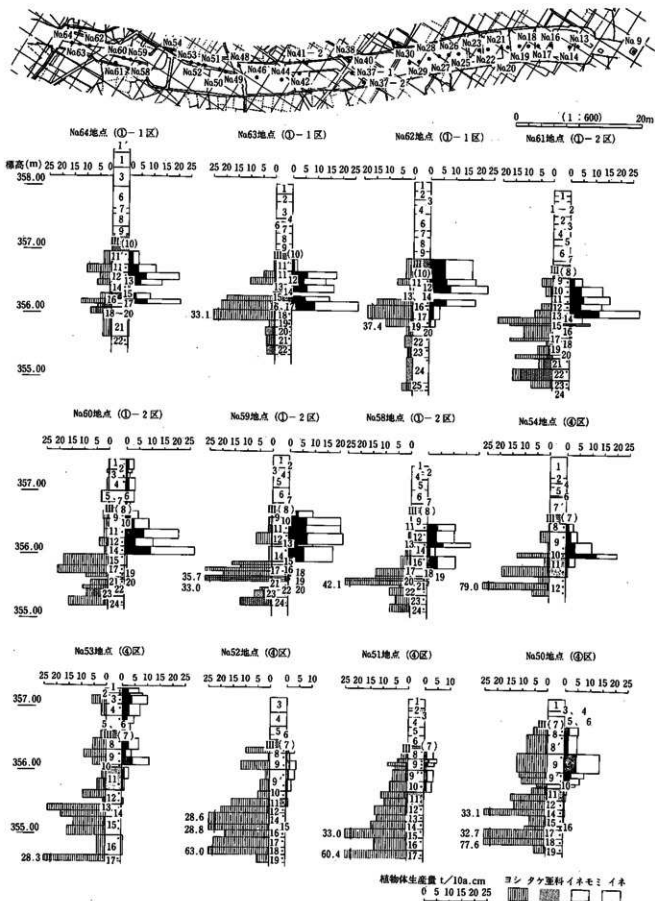


第17図 調査地点別柱状図

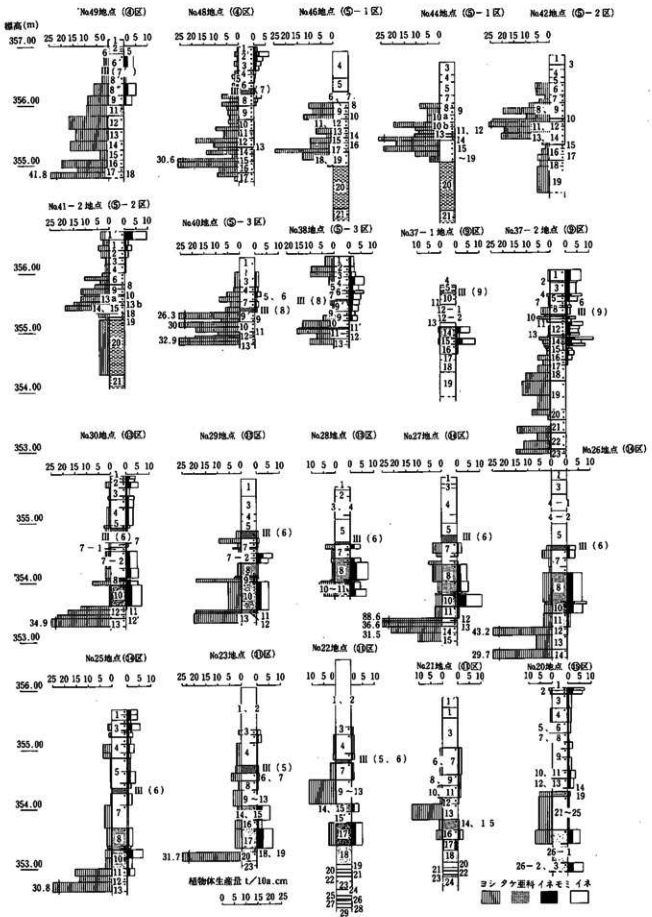


プラント・オバール サンプル採取地点及び採出状況 4

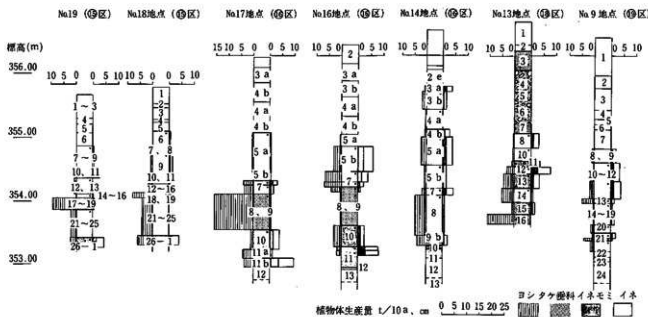
④



第18図 主な植物の推定生産量と変遷1



第19図 主な植物の推定生産量と変遷 2



第20図 主な植物の推定生産量と変遷 3

第2節 微地形の変遷

本調査域の地表面は西側山麓から東の低地方向へ緩やかに傾斜し、自然堤防との中間を走行する聖川周辺に天井川を形成した高まりがある。先に述べたが、発掘調査によって本調査域からは2箇所の微高地が検出され、本調査域を含めた遺跡全体に埋没した微地形があることが明らかとなった。以下に本調査域の微地形変遷の概略を述べることにするが、本調査域で共通する土層は平安洪水砂層及び平安耕作土層が唯一であり、時代ごとの微地形変遷の手掛かりは各調査区で検出した遺構、出土遺物である。初めに各調査域の土層の時代・時期についてその根拠をまとめる。

1 各調査域の概要

(1) 西側低地

遺構として検出できた土層は平安水田が最下層面であるが、西端調査区の標高356.2m前後の土層(V層①-1区15層)からは古墳時代前期初頭ないしは弥生時代後期の土器片が収集されており、プラント・オパール分析結果からは水田層の可能性が高いとされる。この土層は微高地付近の標高355.5m前後の⑥区10、11層に相当し、同調査区では古墳前期の杭列が検出されている。土層の堆積厚は20cm前後である。V層以下で遺物の出土が確認された土層は西端調査区寄りの①-2区23層(標高355.4m)縄文時代の所産と考えられる横刃型石器が出土しているが、詳細な時期は不明である。調査区全域で水田遺構として検出された平安水田層(IV層)上面と水田面を覆っていた平安砂層上面の標高は、西端調査区(①-1・②-1区)で357m-357.5mとなり、山麓と微高地の中間調査区(②-2・①-2区)で356.6m-356.9m、南西微高地寄りの低地調査区(⑥区)で356.3m-356.4m、中央微高地寄りの低地調査区(④区)で356.4m-356.5mである。水田層内及び砂層内からは平安時代前期の土師器、須恵器が収集されている。平安砂層直上の

粘土層からは中世前半の陶磁器が多数含まれていた。

(2) 中央微高地

標高354～355mで縄文前期の遺構・遺物が確認されている。本調査域で時代が確認された最も古い土層である。同一土層の堆積厚は約1.5～2mであるが、すべての調査区で最下面まで掘り抜いていないため不明な部分がある。縄文前期以後の時代が確認できる資料は、古墳時代前期の遺構検出時に縄文晩期、弥生中期・後期の土器片が古墳時代の遺構内から出土している。この土層は標高は356.4m前後となり、隣接する西側低地④区の微高地よりの標高356.5mの地点で弥生後期の土器棺が、標高356.2mで弥生中期前半の土器が出土している。縄文前期包含層から縄文晩期出土面までは最大で1.8mの厚さをもつ。古墳前期遺構検出面から古代・中世の検出面まで地点によっては40cm前後であるが、同一面となる所もある。平安時代洪水砂層は該期の溝、古墳時代前期の落ち込みを検出されている。砂層は古墳前期の溝内から標高356.2m前後で検出され、微高地東側の平安時代の溝跡からもほぼ同一標高で検出されている。

(3) 南西微高地

標高357m前後で弥生後期の遺構・遺物が確認され、隣接する同時期の低地面は355m前後で比高差は2mとなる。弥生後期の遺構内からは弥生時代中期前半の土器片が出土している。また同一検出面の窪みには平安砂層の堆積が看られる地点もあった。微高地下層の土層からは時代を特定できる遺物の出土はない。

(4) 東側低地

微高地周辺部から東へ緩やかに傾斜し、長野市都市計画図（平成元年測量）では微高地と低地最深部の比高差は1～1.2mで、原地形からも低地であることが確認される。本調査域からは下層水田として弥生中期後半の水田遺構、弥生後期の水田面、古墳前期の水田面が検出された。弥生中期の遺構が確認された調査区は微高地寄りでは⑨-2区で標高354.2～4m、低地部⑬区で353.3m、最深部⑭区で351.1であり、16区では遺構は未検出であったが、352.8mで土器片の散布域が検出された。遺構に伴う土器は全て弥生中期後半に帰属する栗林式土器であったが、16区からは中期前半の糸痕文土器が、⑬区からは縄文晩期の鉢が同一面もしくは下部から出土している。弥生中期を遡る遺構面は検出されなかったが、16区のトレンチ調査では標高350.9mの土層内から杭が検出されC14年代測定では縄文時代後期というデータが得られている。弥生後期水田面は微高地寄り（⑨・⑫-1区）で354.9m、低地部東端（⑬・16区）で353.3mである。弥生中期から後期の層厚は、間層を挟む地点もあるが20～50cmで比較的均一な堆積層である。古墳水田面は微高地寄り（⑨・⑫-1区）で355.3m、低地部東端（16区）で353.7mである。⑩・⑬区では弥生後期面と古墳水田層の間層に泥炭質の土層があり最大で35cmの厚みがある。古墳水田層内からの出土土器は、古墳前期のものが圧倒的に多く、中期に帰属するものが数点見られ、層厚は30～40cmで均一の堆積層である。平安水田層（IV層）上面と水田面を覆っていた平安砂層上面の標高は、微高地寄りの西端部（⑤-3区）で355.9m～356mとなり、低地部（⑬区）で354.4m～354.6m、低地東端最深部（16区）で354m～354.1mである。古墳水田面と平安水田層の間層として泥炭質の堆積層があり、微高地縁辺部では数センチの厚みであるが⑩・⑬・16区では40cm程になる。平安水田層の堆積厚は20cm前後と比較的均一である。平安砂層直上の水田層は、微高地周囲では10cm前後であるが⑬・16区では40～60cmの厚さがあり、以後急激な堆積が認められる。

2 微地形形成の変遷

前項の発掘調査所見から本調査域の微地形形成は、時代の確認できる範囲で4段階の過程が想定される。この段階設定は、出土遺物・検出遺構など人的要因の痕跡に基づいた時間軸であり、実際の微地形形成とは多少のずれを含んでいる。

本調査域では縄文時代前期を下る資料が得られていないので縄文前期を下限としⅠ段階とする。この段階の中央微高地は沖積低地の中にあつて高乾な環境を保持できる場所として、該期の集落が営まれた。東側低地は、河道であつたかあるいは氾濫源として河川堆積物の供給を常にうけていた。西南微高地に関する資料がなく、また中央微高地が位置の上からは縄文晩期以後の微高地と一致しているものの微高地形成の起源とするには資料が乏しい。

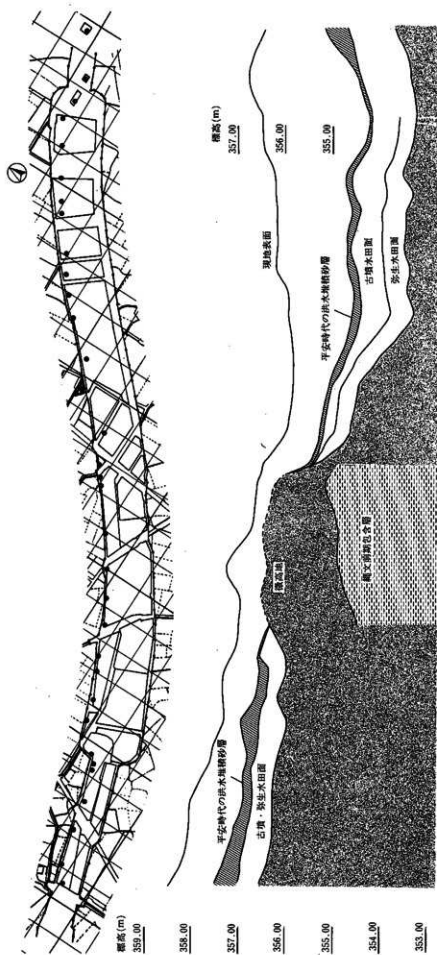
Ⅰ段階以降（縄文前期集落廃絶）本調査域からの確実な出土遺物は縄文晩期もしくは弥生中期前半であり、この段階をⅡ-Ⅰ段階とする。Ⅱ-Ⅰ段階の遺物出土地点は南西微高地と中央微高地、両微高地周辺の西側低地と東側低地最深域である。本調査域および沖積地の地形はほぼこの段階に形成され以後この段階の微地形上を踏襲して堆積していく。Ⅰ段階からⅡ段階までの微高地における堆積厚は最大で2mなのに対し東側低地では少なくとも4m以上に達する。微高地の堆積層は粘土とシルト質粘土が明暗のある縞模様を作っており、静かな堆積が繰り返された状況であるが、この堆積の最上面となる遺構検出面直下層（漸移層）では砂層の堆積が認められている。東側低地の堆積層も明暗のある縞模様を作った粘土とシルト質粘土の互層となるが最下面杭の検出付近からシルトと泥炭が堆積層に加わる。このことから縄文晩期直前に沖積低地の微地形を形成する大小河川の侵食、堆積作用があつたことが考えられる。南西微高地の上層も中央微高地と同様の堆積を示している。この段階から東側低地は複数の河川からの岩屑の供給域となり、千曲川沿いには自然堤防が形成される。また西側低地は弥生後期まで粘土層の堆積しかないことからこの地点は、やや遅れて弥生時代の後半に形成されたとみることが出来る。低地では弥生中期後半に相当する土層が水田として利用され、水田域を拡大しながら弥生後期（古墳時代前期初頭）まで継続し、微高地は居住域、墓域となっている。

東側低地では古墳前期前半に泥炭質の堆積層があり、古墳前期後半ないしは中期に再び粘土質の水田層がある。古墳前期・中期の水田層は再度泥炭質シルト層に覆われ、平安水田直前水田（奈良水田か？）まで水田耕作が断絶する。この段階をⅡ-2段階とする。泥炭質土壌は西側低地にも薄い堆積が認められ、東側低地の中でも低い地点では泥炭・シルト層内に砂層の堆積が確認される。この段階は東側の低地部を中心に堆積が繰り返り行われている。低地の堆積が安定し古墳後期～奈良時代の水田が展開する。

低地部が糸車型地割によって区画された後、千曲川を主体とする洪水砂層で低地全域が埋没する。この平安時代前期（仁和4年か）の洪水による堆積段階をⅢ段階とする。平安砂層は微高地上の遺構内にも含まれ、Ⅱ段階の地形をトレースした堆積を示す。

平安洪水砂層堆積以後は低地を埋める形で堆積が繰り返されている。この段階をⅣ段階とする。西側低地は水田層内に西側山麓の堆積物が多く含まれ、東側低地の聖川周辺は中世以降急激な堆積が見られ、用水からの堆積物が微地形形成の1要因となっている。また西側低地の近世水田層、東側低地の中・近世水田層は砂質となり平安時代から近世まで洪水堆積が頻繁であつたことを物語っている。

以上4段階にわたる微地形形成過程を概観した。本調査域の微地形は、縄文時代前期Ⅰ段階の状況が不明となるものの、縄文時代晩期ないしは弥生中期初頭に形成（Ⅱ段階）され、平安前期以降（Ⅳ段階）徐々に現地表面の地形となっている。本遺跡を含めた沖積地の微地形は、縄文時代晩期に形成された可能性が強く、千曲川自然堤防上に立地する塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群の発掘成果からも裏づけられる。また平安時代前半期を境とする河川の活発な堆積作用は千曲川流域のみならず、全国的にも指摘されている。



第21図 調査地点と土層様式図

第4章 各時代の遺構と遺物

第1節 縄文時代

1 縄文時代の概要

(1) 調査経過

昭和62年、長野県教育委員会文化課（現文化財保護課）では石川条里遺跡の試掘調査を実施し、微高地内の現地表面から約2.5mのところ縄文時代遺構の存在を確認した。しかし、この時点では遺跡の範囲や構造の把握までには至らなかった。なお、この時確認された遺構は後にSB2003であることが判明した。

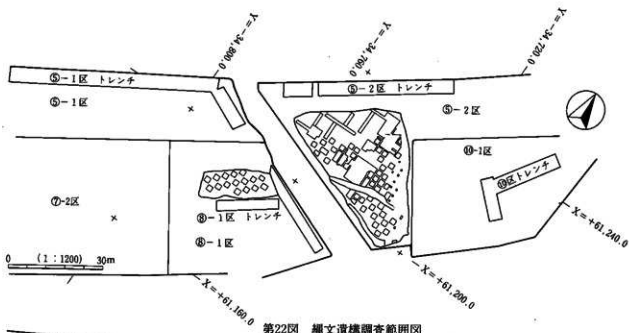
昭和63年から本格的に石川条里遺跡の調査が開始されたが、微高地上では当初予想されていなかった中世の館や古墳時代の遺構が検出されるにおよび、大幅に調査計画の見直しが必要となった。こうしたなかで遺跡の存在は確認されていながらも子細な様相が把握できていない縄文時代の遺構は大きな不安材料となる。そこで、早期に縄文時代遺跡の範囲や様相を把握する努力が計られることになり、晩秋ごろに上面の調査が一段落した⑤-1区から順次縄文時代遺構の様相を把握するトレンチを掘削し、合わせて深さが縄文時代包含層に達する中世堀跡の調査が優先的に進められた。そして以下のことが判明した。

- ・縄文時代の遺物は14層に包含され、その分布密度は⑧区付近がもっとも高い。そして、⑧区から西・東方向へ離れるにしたがって分布が疎くなる傾向がある。

- ・遺構は⑤-1区東端と⑤-2区西部から⑧-2区に分布し、遺構の立ち上がりは⑧-2区を基準とする15層から14層中まで認められるが、14層上面では不明瞭である。

上記の試掘調査結果と工事工程との調整により、遺構分布の密な⑧-2区を中心に⑧-1区と⑤-2区西側に絞って面的調査を実施することにした。まず、上記の範囲を13層の下面まで重機で掘削し、あとは2m四方のグリッドに従って土層観察用の畦を残しながら包含層を手掘りで掘削して遺構を検出していった。なお、この包含層調査で遺構が把握できた場合はそれぞれ遺構に帰属させたが、遺構が把握されない場合はすべて包含層遺物として扱っている。また、遺跡地形に関する測量はグリッド隅で計測した標高から後に復元することにした。上記の作業に従って遺構を順次検出していったが、当初の子想どおりに⑧-2区から⑤-2区では遺構が検出され、隣接した⑧-1区では遺構は検出されなかった。そして、14層中で検出される遺構と13層下部・13層が埋土中に入り込む遺構の存在が新たに判明した。こうして昭和63年度は当初計画の大幅な見直しもあったものの、12月には縄文時代の遺構中心部の調査を終了した。

平成元年度は、前年度の縄文時代の遺構が検出された⑧-2区に隣接した⑩-1区と、遺構・遺物の分布中心から外れた⑦-2区が調査された。この内、⑩-1区は縄文時代遺構が連続している可能性が予想されていたが、試掘溝の結果では遺構が検出されず、遺跡範囲はほぼ前年度の範囲で納まると判断された。⑦-2区では縄文面の遺構はないと予想されていたものの、確認のためにトレンチを入れた。しかし、縄文の土層が非常に深く、これらの土層に達しなかった。



第22図 縄文遺構調査範囲図



第23図 遺構全体図

(2) 土層と地形

縄文時代の遺構・遺物に関わる土層は⑧-2区13~15層である。これらの土層はシルトを基本とし、12層以上から薄い黒・灰・白色の粘土の互層となって大きく土層が変化していることが知られる。なお、この13~15層の土層の様相は以下のとおりである。

13層 灰褐色 (Hue7.5YR 4/2) シルト

14層 褐灰色 (Hue7.5YR 4/1) シルト

15層 褐灰色 (Hue10YR 4/1) シルト

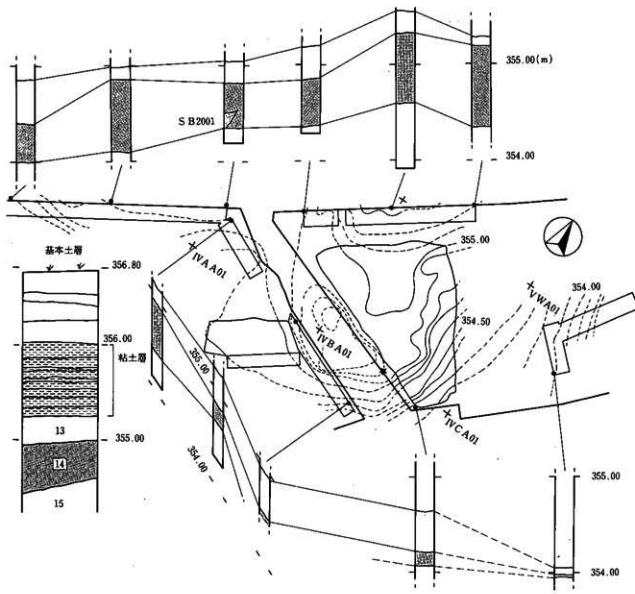
13~14層の層厚は試掘溝西端の⑤-1区では30~60cm前後、中央南よりの⑤-1~⑧-1区東壁はそれぞれ30cm前後、南端の⑧-2区南部では40~10cm前後、東端の⑤-2区では10~80cmとなっており、13層は南・西部が厚く、逆に14層は北・東が厚くなる傾向がある。ただし、東に位置する⑧-1区は何れも薄くなって

いる。この13～15層を構成する土は石川条里遺跡全体のなかでは比較的粒度が粗い部類に属する。

基本土層と遺構遺物の関係では、13・14層上部が遺物包含層にあたり、14層中から遺構の立ち上がりが見られる。また、遺構埋土のほとんどが14層を基本とする。ただし、S Q2019は13層下面で検出され、S K2514・2527は13層起源の土層が埋土に入る。このことから縄文時代の生活面は14層中～13層下面であると推定される。

この縄文面の地形を14層上面の標高から復元してみると(第24図)、⑤-2区中央北側をピークとする小規模な凹凸をもつ微高地に縄文遺構が分布すると認められる。そのなかでも微高地の中央部の平坦地よりも縁辺にあたる傾斜の緩やかな南面(⑤-1区北東部周辺)と西面の地点で遺構が分布している。なお、第④図は作図にあたり、調査時の測量ミスと思われる箇所も整理で修正・推測している。

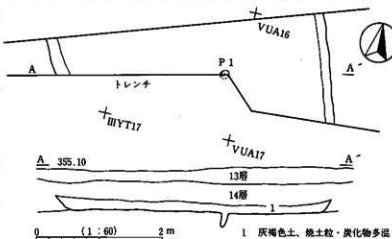
この縄文時代の微高地の形成過程は明らかでないが、粒度の粗い堆積土を基本としていることから、かなり流速のある流水が付近に流れ込んで微高地が形成されたと推定される。また、この縄文時代微高地は上層の弥生時代以後の微高地と重複するが、その中間には厚い粘土層がある。従って、縄文時代前期初頭までに微高地が形成された後は比較的安定した時期であったが、縄文時代前期初頭～弥生時代中期にいたる間に別の契機によって弥生時代以後の微高地がほぼ重複した位置に形成されたと思われる。



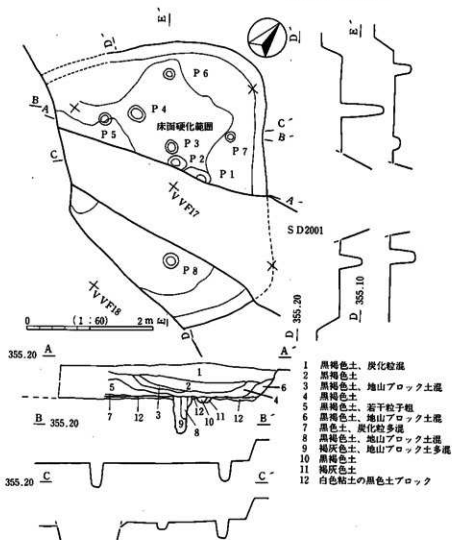
第24図 縄文時代の土層と地形

2 遺構

縄文遺構調査面は弥生時代以後の遺構調査面とは厚い地積層によって隔絶されている。そのため、縄文時代の遺構調査面を縄文面と呼称した。この縄文面から出土した土器はほぼ縄文時代前期初頭の所産であり、比較的限定された時期の遺跡と捉えられる。検出された遺構は竪穴住居3軒と土坑5基、柱穴状の穴跡が17基、遺物集中2基、焼土跡2基がある。遺構の分布は竪穴住居跡S B 2001がやや離れているが、ほとんどは⑧-2区を中心とした小微高地の縁辺にそって、南西部に2軒の住居跡、その北側から東にかけて数基の土坑、さらに北東部にピット群が並列する。以下に竪穴住居と土坑、柱穴状の穴跡、焼土跡、包含層と遺物集中、その他の遺構の順で述べる。



第25図 S B 2001



第26図 S B 2002 実測図

(1) 竪穴住居跡

SB2001 ⑤-1区 IIIYS16, UA16 (第25図, PL2)

⑤-1区の北側調査区壁際のトレンチにかけて検出した。住居の半分は調査区外へのび、片側はトレンチで破壊して極わずかな部分のみを調査した。住居の壁は14層中まで立ち上がりが確認され、埋土は14層を基本とする。検出された範囲が狭く、西・東北辺の一部のみを確認したに過ぎないので住居跡の全容は不明であるが、西・東辺はほぼ平行して直線的に走るので平面形はほぼ方形か、長方形を呈すると推定される。規模は東西方向で約4.4mを測る。床面はほぼ水平であるが、貼り床等は確認されずや軟弱である。床面の施設は柱穴が1基検出されたのみである。埋土は焼土・炭を多く含む粘質の14層起源の灰褐色土層で、遺物は散在的に少量出土した。

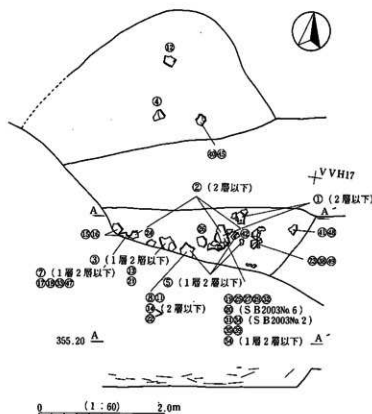
SB2002 ⑧-2区 VVE16・17, VF16・17 (第26・27図, PL3)

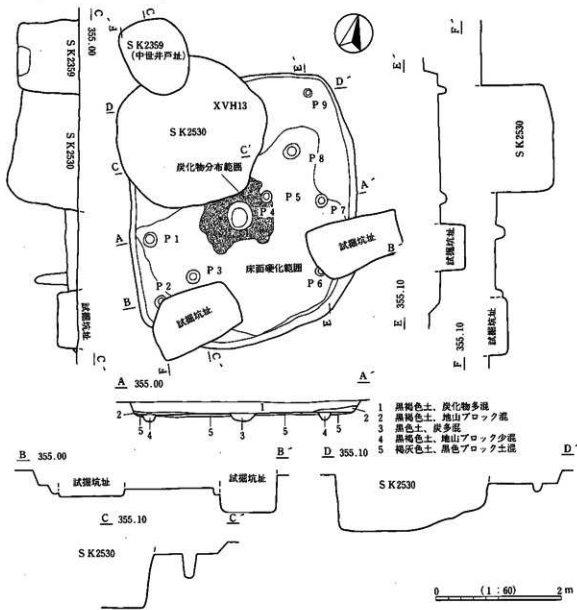
中世跡跡SD2001の壁を精査中に15層を掘り込む遺構として本址が発見された。平面形は14層上面は見えにくく、15層を掘り込む床面から壁を立ち上げた。そのため壁の高さ等は子細不明である。また、住居の西壁については調査区周囲に設定した排水用の溝で破壊されて不明である。切りあいは中世のSD2001に切られる以外、縄文時代遺構同士の切りあいはない。平面形は残存部から隅丸方形もしくは長方形を呈すると思われ、規模は南北方向で約4.5mを測る。床面は15層まで掘り込んだ後に黒色土や粘性のある灰褐色土で薄く貼り床されたもので、貼床部分がやや締まっている。この床面で検出された施設には柱穴状の落ち込みが8基あり、P1・2・4が比較的深く形状から主柱穴と推定される。なお、P2では柱痕が検出されている。炉は検出されていないが、中央部から南西側に向かって炭化物の広がり方が確認された。埋土は7層に分層され、7層は床面上の炭化物層で、6層が廃絶直後に壁際に入った埋土と推測された。5

層では遺物がほとんど検出されず、2～4層で遺物が比較的多く検出されている。この内3層は地山のブロック土を大量に含む。遺物はSB2003に次ぐ出土量があり、平面分布では比較的南側壁際での出土が多い。特筆すべき遺物として挾状耳飾りが1点出土している。

SB2003 ⑧-2区 VVG13・14, VI13・14 (第28・29図, PL3)

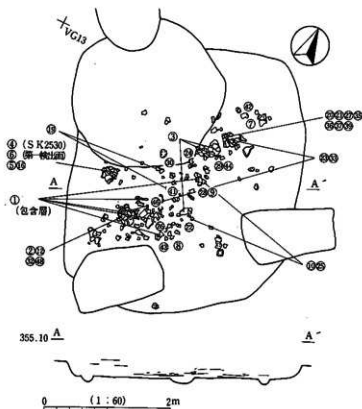
本遺構は長野県教育委員会文化課による試掘坑で確認されていたが、本調査ではこの試掘坑跡を精査するなかで貼り床と思われる土層や土器・炭を含む黒褐色土が確認されて住居跡であることが判明した。平面形は14層上面では検出できず、14層からやや掘り下げたところで確定した。遺構の切りあいは本址北西部が風倒木痕とも思われる穴跡に切られ、本住居の南西部と南東辺は試掘坑で破壊されている。平面形はやや不整の長方形を呈し、規模は長軸で約4.2m、短軸で約3.7mを





第28図 S B2003

測る。床面は15層まで荒掘りした後、粘性のある灰褐色土などを貼ったもので住居中央部から南にかけて比較的堅い。床面上の施設として中央部でP4の浅い穴、北東・南西部にP3、P8の主柱穴と思われる深い柱穴、長軸方向の壁際に浅い穴が数基検出されている。このうち、P4は周囲に炭化物が広がることから炉の可能性が捉えられたが、内部には焼土が確認されていないため断定できなかった。主柱穴はP3・P8しか検出されていないが、この2基の位置関係から風倒木痕と思われる穴跡と文化課の試掘坑部分にも想定され、本来は主柱穴は4本であったと推定される。また、壁際の浅い柱穴状の落ち込みは東辺で3本認められ、西辺に残存部からはほぼ対応する位置にあると推定される。ただし、東辺の北端P9と中央P7の間はやや間隔が広く、間にもう一本入っていた可能性もある。埋土は壁際床面上に地山の砂質土を含み遺物を余り含まない黒褐色土が認められ、その上部には黒褐色土が一様に覆う。遺物はこの黒褐色土の埋土中央部で大量に出土しており、個別遺構としては他遺構を圧倒する量である。



第29図 SB2003 遺物出土状況図

かった。しかし、後に本址にかかる土層観察用の壁を再検討したところ14層を基調としながらも白色粒子を含む埋土の土坑であることが判明した。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、東西98cm、南北68cmを測る。断面形は西側が急で一部オーバーハングするものの、東側が緩やかなU字状を呈する。検出面からの深さ26cmを測る。埋土は白色粒子が点在する黒褐色土の単層で、遺物は埋土上面に平坦面を上にした平石が1点検出されたのみである。

SK2516 ⑧-2区 VVG09、VH09 (第30図、PL3)

14層中で炭化物の散布が認められたが、14層中では明確に平面形が捉えられず、15層上面まで掘り下げて土坑と認定した。平面形はやや方形に近い不整形を呈し、東西172cm、南北172cmを測る。壁の立ち上がりはやや急で、底面は凹凸が著しい逆台形の断面形になっている。埋土は4層に分層され、全体に黒色を基調とする。上から2層目に15層起源と思われる灰褐色粘質土が認められ、最下部に炭を多く含む土層が認められた。性格は不明であるが、最終的に埋め戻されている可能性が考えられた。

SK2527 ⑧-2区 VVI12、VJ12 (第30図、PL3)

14層上面で13層起源の灰黄褐色土が落ち込む土坑と認定した。平面形は北西-南東方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸方向で106cm、短軸方向で78cmを測る。断面形は壁がやや急で底面が平坦となっており、深さは検出面から約20cmを測る。性格は不明であるが、SK2514と同様に13層起源と思われる埋土が認められることから、14層起源埋土の遺構よりも後出すると考えられる。

SK2534 ⑤-2区 VUS12・13 (第30図)

微高地の北西部に位置する。平面形は北東-南西方向に長軸をとる楕円形を呈し、長軸で118cm、短軸で

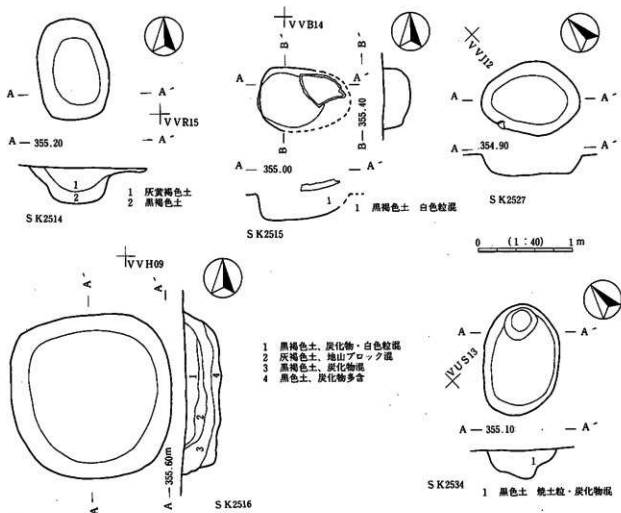
(2) 土坑

SK2514 ⑧-2区 VVJ14 (第30図、PL3)

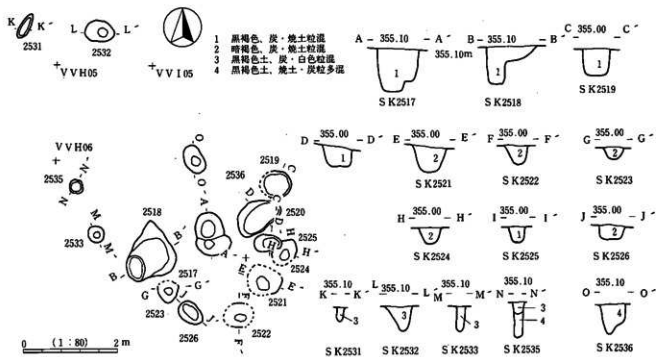
14層上面で13層起源の非常に粘りのある灰褐色土を確認し、試験溝を入れたところの灰褐色土がほぼ垂直に落ち込むことから土坑と認定した。平面形は106cm、短軸76cmの楕円形を呈し、断面形は上部10cmほどが東方向に緩やかに立ち上がるU字状となり、深さは38cmを測る。埋土は下部の黒色土が主体になる層と上部の灰黄褐色土層に分層された。遺物は少量の土器片があるが、流れ込みの可能性が高い。性格は不明であるが、埋土に13層が落ち込むことから他の14層起源の埋土をもつ遺構よりも新しいと思われる。

SK2515 ⑧-2区 VVA14、VB14 (第30図、PL3)

14層中で埋土上部の平石を一旦は検出したが、土坑の存在は分からな



第30図 縄文時代土坑



第31図 ビット群

82cmを測る。断面形はU字状を呈し、北東壁際に浅い円形の落ち込みが認められた。埋土は焼土・炭化物を大量に含む黒色土の単層で、特に焼土が上部で検出されている。なお、周囲で土器片が数点検出されている。本土坑は形態・規模はSK2527に類似するが、埋土が異なる。

(3) ビット群

SK2517~2526・2531~2533・2535・2536・⑤-2・⑧-2区 VVG~VK・04~07 (第31図)

微高地北東部の縁辺近くで楕円・円形の平面形で深さ約20~90cm前後の柱穴状の土坑が17基集中して検出された。これらの土坑は形状が柱穴状であることや、遺跡全体のなかでこの部分のみ集中して認められることから孤立柱建物などの構築物を構成すると思われる。しかし、配列の規則性が読み取れず、構築物の形状は明らかにできなかった。切りあいはSK2525と2524が重複し、SK2517が2基の土坑の重複の可能性があるが、前後関係は明確にできなかった。埋土はSK2523・2526・2522・2521・2524が暗褐色の粘性の弱い土、それ以外の土坑が黒褐色粘質土である。また、後者の埋土をもつSK2535と2536で焼土・炭化物が多量に検出されている。以上のように土坑の重複が見られ、しかも2種の埋土があることから検出された土坑すべてが1つの構築物を構成するのではなく、類似構築物が最低2時期に重複して構築された可能性がある。遺物は若干の土器・石器があり、この周辺の包含層遺物でも比較的土器や石器がまぎって採取されている。なお、近接したSK2516も埋土に焼土や炭化物を含む点で類似し、相互に関連するとも思われる。

(4) 焼土址

SF2005 ⑧-2区 VVH08・09

SK2516北側で検出された小規模な焼土址である。平面形は東西約30cm、南北約20cmの楕円形である。掘り込みはなく、焼土層の厚さは11cm前後である。なお、本址に近接したSK2516やビット群の一部では埋土に炭化物・焼土粒が含まれており、関連も考えられる。

SF2006 ⑧-2区 VVI13・VJ13

SB2003東側で検出された焼土址である。14層上面で検出され、平面形は北西~南東方向に長い不整形で規模は長軸で約60cm、短軸で約40cmを測る。焼土は直接焼けており、焼土層の厚さは7cm前後である。

(5) 包含層と遺物集中 (第32~34図)

包含層調査時に土器集中と認定した遺構があるが、その範囲は明確でなく調査時も包含層グリッド遺物として取り上げているので包含層と遺物集中を合わせて扱うことにした。

包含層遺物は13層下面から14層中で帰属する遺構が把握されなかった遺物であり、調査時に遺物集中として認められても基本的にはすべて2m区画のグリッドで取り上げている。この包含層遺物は全般的に少量の遺物が遺構分布域を中心に散在しているが、なかには突出した量の遺物を出土するグリッドがある。これらは一部は調査時に遺物集中(SQ)と認定したものもあるが、そのあり方は土器・石器ともに多い場合もあれば、石器の集中、あるいは土器の集中と認められる場合もある。先に述べたように遺構構築面が14層中とすると、このような出土状況を示す場合においては何らかの屋外での活動の跡と認定される可能性がある。以下に土器と石器の出土傾向について述べる。

包含層出土土器をグリッド数/重量でグラフにすると100g以下のグリッドがもっとも多く、200gまでは全体にグリッド数を減少させながら連続し、200g~300gで散在的に分布する。それから空白において600g以上と突出するグリッドがわずかにある。このグリッド別出土重量分布を平面でみると遺物量突出する

遺物のなかで特定場所に集中する場合には何らかの活動の痕跡、あるいは特殊な事情が考えられると思われる。

次に石器であるが、石器も土器と類似した出土傾向を示す。すなわち、全体的に遺構分布範囲を中心に散在的に見られるが、いくつか集中的に出土する地点がある。そのなかで土器とほぼ類似した集中地点となるのがS Q2018とピット群周辺である。ただし、土器がまとまって出土したS Q2019周辺では、石器の出土が認められず、一方で㊸-1区AL07・AK08グリッド周辺、S K2534周辺では石器を中心とするまとまりが認められる。なお、器種別にみると植物加工に関わる台石・すり石・凹石についてはS Q2018周辺にまとまりがあり、それ以外では台石がS X2003周辺で1点、すり石は散在的出土である。刃器や石匙といった刃部を有する石器は各石器の集中地点でも共通して認められる。なお、狩猟具である石鏃は出土量自体少ないがS Q2018周辺と住居で出土し、未製品はS K2516と㊸-1区AL07・AK08グリッドで出土している。石器製作にかかわる石核・剥片類では石核は各石器集中地点にみられるが、剥片は石核出土と一致する例ではS Q2018周辺とピット群周辺があるがそれ以外は全体に散在するものが多いように思われる。特にS B2003南側やS Q2018西側では剥片が散在的に出土している。

S Q2018 ㊸-2区 VVD13・VE13

VD13とVE13グリッド境の14層中で焼土・炭粒と共に土器片が多く認められ、下面にトレンチ試掘溝を入れたが若干の窪地と認められるものの、明確な掘り込みは認められなかったことから遺物集中とした。遺物はグリッド遺物として取り上げているが、他グリッド出土土器量と比べても突出する。

S Q2019 ㊸-2区 VVL13・VK13・VL12

VL13を中心にVK13、VL12グリッドでは13層下面で比較的まとまって大型土器片が認められた。土器は13層下面でやや出土が目立ったが、14層では逆に遺物の出土が減少する傾向があり、下面では掘りこみ等は確認されていないので遺物集中として扱った。なお、範囲が明確でないので遺物は包含層グリッド遺物として取り上げられている。なお、本遺構は13層下面で検出されているので14層起源の埋土遺構よりも後出する可能性がある。

(6) その他

S X2003 ㊸-2区 VV17・VJ17

V17・VJ17グリッド境に位置し、長軸約1.1m、短軸約0.6mの楕円形の範囲に焼土粒が散在するものである。出土遺物はないが隣接した地点で台石が出土している。やや浅い落ち込みになる可能性が認められたが、明瞭な掘りこみは確認されていない。なお、焼土粒が散在する点や平石が隣接して出土する点はS Q2018と類似する。

S K2530 ㊸-2区 VVG12・13、VH12・13

S B2003北西部を切って位置し、中世の井戸に切られる。平面形は直径約2.4m前後の不整形を呈し、深さは検出面から約1.1mを測る。底面は非常に凹凸が目立つことから風倒木痕の類であろうと推定された。遺物はS B2003を切るために、混入したと思われる土器片や石器がある。

3 遺物

(1) 出土状況

縄文時代の遺物は包含層と遺構から出土しており、それぞれに出土量や遺存度、分布や接合の仕方は多様である。このような多様な出土状態は遺跡内で行なわれたさまざまな行為や自然的な営力によっていると想像できるが、これを一つ一つ紐解いていくことはとてもできなかつた。そのなかで断片的ながら、いくつつか特徴的な出土状態が知られたのでここに述べておく。なお、ここでは材質別に土器と石器に分けてみることにしたい。

ア 土器

土器は他器物に転用する場合もあるが、基本的に破損した時点で2次の転用をしない限り、本来の使命は終ると考えられる。従って、その遺存度によってはそれが廃棄の所産か、設置・埋納されたものかの判断がしやすいと思われる。このように考えた場合、今回の調査で得られた土器は大型破片はあっても完形となる土器はないので、基本的に破損して廃棄されたものと考えられる。しかも、遺跡内では土器が特定場所にまとまって出土する傾向が窺えている。

土器の出土分布を重量からみると、もっとも出土量が多いのはS B 2002・2003とした竪穴住居埋土中のもので、次には包含層出土土器のなかでまとまった土器が出土した地点がある。この2つの場所以外は包含層や個別土坑にしろ散在的にしか土器が採取されていない。次に接合関係をみた場合、S B 2002・2003出土と包含層出土土器の接合はほとんど見られないので、S B 2002・2003出土土器は限定的な廃棄行為の所産であることが考えられる。なお、このS B 2002・2003の出土土器がこの場所に廃棄された傍証として大型破片の出土ながら完形品はないこと、さらに出土した土器が繊維土器ながら赤変しているものが多い点がある。このような特定場所での廃棄が知られることから、さらに2つのことが類推される。一つには基本的に土器は破損すれば片付けられるもので、無作為に放置されることがないことである。この点からは本遺跡が粉れもなく短期のキャンプのような場所ではなく、やはり一定の空間構成を備えた一定期間の居住地であることによるものと思われる。

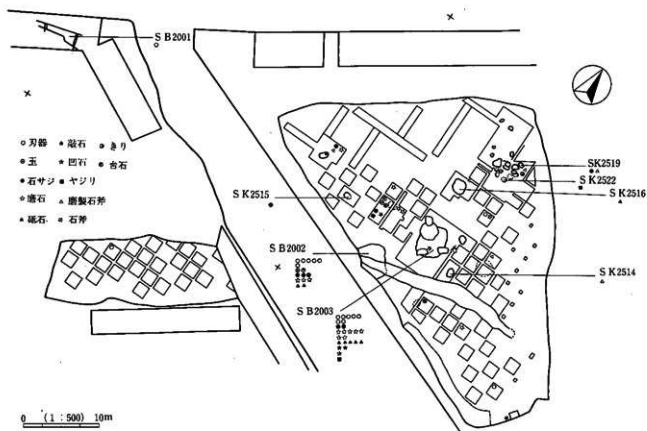
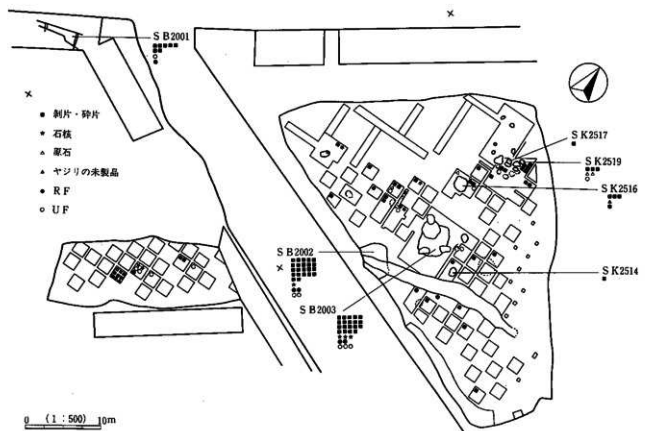
もう一点は竪穴住居跡への廃棄とは異なる包含層中の土器集中は別の意味があると考えられる。ただし、この点に関しては完形出土ではないので廃棄の所産の可能性もあるが、石器との伴出、あるいは遺構と近接した場所などの条件をもつものも多い。従って、このような包含層中で集中的に遺物が出土した場合には何らかの活動が行なわれて、最終的に居住地から離れる段階でそのまま放置されたのではないかと推測される。

なお、包含層中の土器集中地点での行為は煮炊きと土器管理、あるいは植物加工に伴うことなどが想定される。このなかでS Q 2018では植物加工用の石器も出土しており、植物加工に関連して土器が使用された場所である可能性がある。それ以外の土器集中では石器の出土分布と比較した場合、土器の出土と必ずしも一致しないものが多く、具体的に性格を明らかにできなかった。

イ 石器

本遺跡で知られた石器の出土状況では複数石器がまとまって出土した例と散在的・単独で出土する2者がある。さらに、前者の例ではS B 2002・2003のように遺構内で出土したものと包含層中で比較的集中する2者がある。

このなかで比較的集中して出土する例のあり方は土器出土状況と類似している。従って、まとまって廃棄されたものと、何らかの活動に伴って排出された遺物が放置された2者があつたと想定される。しかし、石器は小型で土器より割れにくく、しかも破損しても2次利用が可能な側面をもつので、土器の遺存状況



第34図 石器出土分布

から判断されるような出土の意味は読み取りにくい。そのため竪穴住居跡SB2002・2003出土の場合では土器と同様に破損品などの廃棄の所産か、放置の所産かは断定できなかった。その一方で包含層中でまとまって出土した例では類似した機能の石器の組み合わせが複数地点で共通して見られるものがあり、やはり土器同様に何らかの行為によって排出された遺物が放置された可能性がある。この包含層中の石器集中出土地点の石器種類の内容は以下のとおりである。

- ・AK08-AL07付近 剥片・石核・碎片と刃器・使用痕のある剥片・加工痕のある剥片。
- ・SQ2018付近 剥片・石核・碎片・原石はSQ2018北・東側に多く、西・南で刃器・石さじといった加工具と玉、凹石・台石・すり石の植物加工に関わる石器、1点ながら石鏃の狩猟具がある。
- ・SK2534付近 剥片・石核とすり石・石さじ・磨製石斧があるが何れも少量である。
- ・ビット群 ビット群南側で剥片・石核・碎片・原石、錐・石さじなどがある。

上記のなかで剥片・石核・碎片はほぼ共通して認められ、包含層中の石器集中地点では石器製作が組み込まれていることが推測できる。ただし、それ以外の石器の組み合わせは異なっている。AK08-AL07グリッド付近では刃器・使用痕のある剥片・加工痕のある剥片があり、SQ2018周辺の北・東部もこれに類似する。それ以外ではSQ2018周辺南・西で植物加工具、ビット群周辺では加工具、SK2534周辺は少量多種の石器を加えている。この様子から生活のあらゆる場面で石器が製作・補修されることが推測される。詳細にみるとAK08-AL07グリッド付近では使用痕を有する剥片・石鏃未製品が出土し、しかも黒曜石を中心とするが、竪穴住居やSQ2018周辺では石鏃未製品も含むものの頁岩、黒曜石、珪質岩など多様な石材が認められている。石器の石質選択のあり方からすると後者では、刃器・石匙も含まれる可能性がある。したがって、遺跡内では多様な石材と比較的単純な種類の石材で石器製作・補修が行なわれる場合があると推測される。このことは製作石器の種類が異なることとはもちろん、製作・補修される場面が継続的な場合、臨時・特定の契機での集中製作の違い、または片付けを伴うものと放置されるものの違いでもある可能性がある。これらの点については剥片の量や種類、接合関係によって検討できるとも思われるが、今回の整理のなかでは十分な検討ができなかった。

上記以外で散在的に出土した石器には磨製石斧・すり石・刃器などがある。この内、磨製石斧はSB2003東側で2点出土しているが、いずれも破損している。また、すり石も台石とセットにならない場合もあるので、これらは廃棄として捉えられたほうが妥当であろうか。

(2) 縄文土器

SB2001出土土器 (第45図1-13)

縄文(1-11)及び無文(12-13)土器が出土している。1は口唇部に突起が貼付される土器で、口縁部に横方向の条線が5条観察される。器面の状態が悪く、施文原体は不明だが、条線間に細かい擦痕が確認され、原体の先端がささくれた状態であった事が窺える。胴部は縄文LRが施文されているものと思われる。2は肥厚口縁を呈する土器で、一部肥厚部にかかって縄文RLが施される。3-5は平縁の土器で、縄文LR及びRLが施文される。3は同一施文帯の中で原体を変え、4・5は施文帯の上下で原体を変えてそれぞれ羽状を構成する。6-11は胴部で6-8・10は縄文RLが、9は縄文RL及びLRが施文され羽状構成となる。11は異節縄文の可能性が有る。12は緩やかな波状口縁の土器で、波頂部が三角形を呈する。無文土器と思われるが器面状態が悪く、調整等の観察はできない。13は胴部で、内面に横方向の擦痕状調整が確認される。

1-13はいずれも胎土に繊維を含んでおり、また長石・ガラス質鉱物の含有が目立っている。本址出土土器は、前期前葉に位置付けられよう。

S B2002出土土器（第45図1～4、第46図5～14、第47図15～26、第48図27～55）

縄文（1～42）・刺突文（43～50）及び無文（51～55）土器が出土している。

1～8は器形の復元が可能な土器である。1は胴部上半の器形が残る土器で、4単位の波状口縁を呈する。波頂部が外側に大きく膨らみながら口唇部で内湾し、波頂部間の中央に三角形の突起が作り出される。器面全面に縄文RLが施されており、全体で斜状を構成する。施文方向は横位施文であるが、波頂部の斜位施文となり器面を埋めている。2は器形全体の推定が可能な平縁の土器で、胴中央部に膨らみを持ち、頸部で括れてから口縁部が短く外反する。底部は残存しないものの、器形の状況から尖底を呈すると思われる。縄文RL及びLRが施文され羽状を構成するが、胴部付近の施文が斜めになり若干乱れている。3・5～7は胴部～口縁部または胴部が残存する土器で、口縁部に向かって直線～やや斜めに開きながら立ち上がる器形を呈する。6は胴下部の器形が内側に湾曲する事から、底部が尖底の可能性もある。縄文は3・5がRLを、6はLを全面に施文し斜状構成となり、3には結節が確認される。7は結束の縄文LR及びRLで羽状を構成するが、変形構成になる部分が看取できる。また胴下部には爪形状の刺突がなされている。4は緩やかな波状口縁の土器で、波頂部に短い垂下隆帯が貼付される。胴部から口縁部に向かってかなり外反する器形を呈し、底部は器形の状況から尖底になるものと思われる。8は胴部が外反しながら立ち上がり、口縁部に幅狭の面を作出する。両者とも、多段ループ文が全面に施文される。

9～11は捺糸文を施文する。9・10は同一の個体で、捺糸文Lが横位施文される。11は器面の状態が悪く、原体の確認ができない。12は口唇部に円形刺突がなされる平縁の土器で、多段ループ文が施文される。13は口縁部に1条の水平隆帯が貼付される土器で、口唇部には半裁竹管状工具による刺突が観察される。縄文は隆帯の上下にRLが施文され、隆帯上には円形刺突が行なわれる。

14～29・31～41は単節縄文が全面に施文される土器である。14～19は平縁を、20は波状口縁を呈する。14～16・19・20は口唇部に刻みをもつが、この中に縄文原体によるものが含まれている可能性もある。39～41は底部で、39のように丸みを帯びるものと、40・41のように先端が若干突出するものが存在する。縄文は14・19・20・22・23・31～34がLR及びRLで羽状を構成し、15～18・21・24～29・36・37・40・41はRLを、35・39はLRを施文している。羽状構成の土器は全体で変形を構成するものが目につき、14・20・23には結束が確認される。また、23のように上下の施文帯で縄文を重ねて施文するものも存在するが、ほとんどは横方向の施文帯をしっかりと構成している。18・37には結節が確認できる。30は縄文Lを施文する土器で、1点のみ出土した。42は器面状態が悪く不鮮明であるが、反燃りの縄文を施文している可能性がある。

以上の土器の内面調整は、状態が悪く不明な土器が多いが、ナデ調整によるものと横及び縦方向の擦痕状調整を行なうものが存在する。

43・44は角状工具で押引文を数段施文する土器で、43は波状口縁を呈し、口唇部にも押引文が見られる。内面はナデ調整が行なわれ、指頭圧痕が観察される。45～47は爪形文を施文する土器で、45・46のように3段にわたるものと47のように1段のものが存在する。48は器面状態が悪く詳細は不明だが、へら状工具で縦方向の刺突を密に行なっていると思われる。49・50は頸部付近の破片で、内外面にナデ調整が施され、括れ上部に円形刺突が行なわれる。

51～55は器面がナデ調整される無文土器で、51・53の内面に横又は縦方向の擦痕状調整が観察される。54・55の底部は器面状態が悪く、縄文が施文されている可能性もある。

以上の資料はいずれも胎土に繊維を含んでおり、また縄文施文土器には長石・ガラス質鉱物の含有が目立っている。本址出土土器は前期前葉に位置付けられよう。

S B2003出土土器（第49図1～19、第50図20～49）

縄文(1~3、7~42・47・49)、撚糸文(46)、無文(4~6、44・45・48)、刺突文(43)が出土している。

1・2・4・5は胴部~口縁部の器形復元が可能な土器である。1・2は口縁部が直立~やや外反気味に立ち上がる器形を呈する土器で、1は縄文LRLを、2は縄文RLを施文する。全体で斜状構成となり、1には結節が観察される。4・5は胴部に若干の膨らみをもち、頸部で括れながら口縁部が強く外反する器形を呈する。いずれも無文で、ナデにより器面が調整される。

7~15・17・20は口縁部で7~12は波状口縁を、13~15・17・20は平縁を呈する。波状口縁の土器はいずれも波頂部より短い垂下隆帯を貼付するが、7のように波頂部が外側に押し出されるもの、9のように口縁部が強く外反するものが含まれる。縄文は7・10・11がRL、8がLR、9がLRL、12がLR及びRLで、垂下隆帯上を除いて器面全面に施文される。13は口縁部が三角形を呈し、屈曲部に斜め方向の刻みか施される。縄文は13・15がLRを、14はループ文を、17・20はLR及びRLを施文する。

16・18・19・21~42は胴部である。16・18・19は縄文L及びRを施文し、19は全体で変形の羽状を構成する。21~27・29~31・33~42は単節縄文の土器で、22・25・29・31・38・40・42はRLを、41はLRを施文する。この内、32・41には結節が観察される。23・24・26・27・30・33~37・39はLR及びRLを施文する羽状構成の土器で、全体で変形を構成する土器も存在する。21・27・34・35・39は結束の原体が使用される。28・32は複節縄文?で、LRLが施文される。47・49は底部で、尖底及び平底の両者が存在する。器面状態が悪く原体は観察できないが、49の底面には縄?の圧痕が認められる。46は撚糸文を施文する土器で、1点のみ出土した。原体はRと思われるが、器面状態が悪く断定できない。

43は半裁竹管状工具による爪形文の刺突がみられ、逆T字状の文様を構成する。

6・44・45・48は無文土器である。ナデにより器面調整が行なわれるが、45の表面には太い擦痕状の調整が、44の内面には横及び縦方向の擦痕状調整が観察される。

以上の資料は全て胎土に繊維を含み、また、縄文施文土器には長石・ガラス質鉱物の含有が目立つ。本址出土土器は前期前業に位置付けられよう。

SK出土土器(第51図1~40)

SK2514・2516~2519・2530・2534の7基のSKから遺物が出土している。

1・4は縄文RLを施文する土器で、1の内面には横方向の擦痕状調整が認められる。それぞれSK2514、2519より出土した。2は縄文L及びRで変形の羽状を構成する。SK2517の出土である。3は波状口縁で、波頂部より短い垂下隆帯が貼付される。隆帯上を除いて縄文RLを施文し、口唇部に刻みをもつが、縄文原体によって刻まれた可能性もある。SK2518より出土した。

5~21はSK2516より出土した土器で、縄文及び刺突文が存在する。5~9は平縁で、5・6・9は口唇部に刻みを施す。5・6・8・9・11~13・16~18は縄文RLを施文しており、6は結節が確認される。

7・10・15は縄文LR及びRLで羽状を構成する土器で、10は結束の原体を使用する。14は小破片のため不鮮明であるが、角状工具による刺突がみられる。20は口縁下部に強い屈曲をもち、口縁部には2条の爪形文を、胴部には結束?の縄文が施される。19・21は無文土器で、19は内外面が横及び斜め方向の擦痕で、21はナデにより器面が調整される。

22~37はSK2530出土土器で、縄文及び刺突文が施される。22~25は口縁部で、22・23は波状口縁、24・25は平縁口縁を呈する。22は波頂部より短い垂下隆帯が貼付される。24には1条の水平隆帯がみられ、口唇部に円形刺突が施される。縄文は22~24・27・30~32がRL、25・26・28がLR及びRL、29が東、33がL及びRを施文し、25・28には結束の原体が使用される。34・36は同一個体で、異節縄文を施している可能性がある。35は附加条の縄文と思われる。37は底部で平底を呈し、半裁竹管状工具により2条の刺突

が施される。38～40はSK2534出土土器である。38は口縁部が肥厚し、円形の刺突が施される。39・40は器面状態が不鮮明だが、39はRLを、40は捺糸文を施文していると思われる。

SK出土の土器はいずれも前期前半に位置付けられよう。

遺構外出土土器（第52図1～31、第53図32～46）

46のみは調査第1面の古墳時代の土坑から出土したもので中期初頭の土器である。それ以外は縄文面とした調査面の包含層から出土した前期前葉の土器である。

1は波状口縁で波頂部より垂下隆帯が貼付され、隆帯上を除いて縄文RLが施される。2～9、11～13、20は平縁を呈する土器で、2・4・5は刻みが、11は円形刺突が口唇部に施される。5は口縁部が屈曲し、屈曲部分に刻みをもつ。縄文は2・4・6・9・11・20がRLを、5・7・8・13がLR及びRLを施文し、8・12には結節が確認される。3はRLとLを結束した原体で施文していると思われる、段違いの結束による原体が確認できたのは本例のみである。10・14～19・21～25・27～33は胴部で、10・16は縄文Lを、14・15・17～19・21～25・27・28は縄文RLを、29は多段ループ文を施文している。26は、尖底で、RLを施文する。

30～33は状態が悪く不鮮明だが、31～33は附加条の縄文を施文している可能性がある。34は縄文RLを施文後、斜格子状の沈線が描かれる。内面はナデにより調整されるが、横または擦痕状調整を行なうものがある。

35～44は無文土器で、内外面にナデ又は擦痕状調整が施される。45は底部で平底を呈し、半截竹管状工具による爪形文で2列の刺突を行なう。底面は明瞭でないが、縄文原体の圧痕をもつようである。

46は中期初頭の土器で、半截竹管による平行沈線で模様を描かれる。本遺跡では1点のみの出土で、古墳時代の遺構から出土している。

(3) 石器

ア 概論

調査により収集された資料は合計262点である。この内道具として認定できる資料は98(116=以下使用層を含めた数)点、これ以外は石器製作途中に石屑として弾き出された資料である。内訳は第7表に示す。

第7表 縄文時代石器の内訳

	総数	母岩	石 屑		狩猟具	採集具
名称		原石	石核	剥片ほか両極	鉄鏃	打製石斧
数量	262	6	12	114・1	11	4

調理・加工具				加工具				他	玉類
磨石類	台石類	石 匙	刃 器	使用層	磨製石斧	石 鏃	砥 石	加有層	名称
25	3	12	20	18	6	3	10	13	数量
									1・3

時的には、出土遺物を包含する土層（縄文包含層）が前期前葉単純層であることから、ほぼ該期に相当する資料と考えられる。道具の種類では、調理・加工用の磨石・台石類が全体の29(24)%あり、狩猟を司る道具では石鏃が11(9)%、刃器類が33(28)%と合わせて44(37)%を占める。石器群の内容から設定できる文化的な位置付けは、狩猟・採集の段階にあり、狩猟用具の凌駕が早期的な、あるいは前期初頭の一様相を示すものと考えられる。

以下出土資料につき報告するが、記述は以下の5つの項目について実施した。すなわち、

<1>材質、<2>製作法、<3>分類（形態的類別・機能的類別）、<4>法量（大きさ）、<5>遺存状態である。

なお、出土状況・分布については遺構各説にて扱う。

分類方法

- 記述1. 原材から製作用素材の獲得まで、技術的方法を簡単に記述する。
2. 素材獲得時の諸属性について観察、表として掲載する。礫と剥片、剥片はさらに縦長と横長に区分し、自然面の有無について記載する。
 3. 形態的特徴により区分。分類は全体形を基本とし、形の構成要素に準じて細別する。
例) 石錐・全体形、頭部形、刃部形etc.
 4. 機能的特徴を機器観察に基づき計測、表に掲載、記述する。
例) 石錐・機能部値(長さ・幅etc)、使用痕跡(長さ・幅・使用痕の型)
 5. 欠損状態について観察・表に掲載する。欠損部位は黒塗りを残存部とし、器種ごとにアルファベットで記載する。状況(欠損断面)はカタカナ表記で、石錐凡例に基づく。

観察方法

- 機器1. ルーベ(Vixen×3.5、コクヨメタルホルダー×20)・・・全資料
2. 金属顕微鏡(OLIMPUS BX60M×50・×100)・・・石錐・石錐・石匙・刃器

イ 原石(第57図No1・2、PL66)

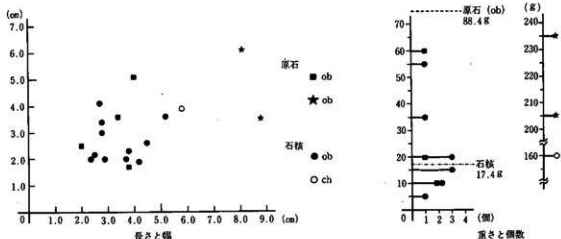
剥片剥離に供される原材で、一度も剥離作業の実施されなかった資料。自然面(剥離面及び節理面の風化面)に覆われた転石で、総数6点を収集(第57図No1・2)。全て黒曜石材で法量は平均値 $3.8 \times 5.0 \times 3.0$ cm, 88.4gを計測する。ただし200gを超える例2点が含まれる。

ウ 石核(第54図No3・4, 第55図No1, 第56図No5, 第57図No3~5、PL65・66)

剥片の剥離生産を主目的とした個体群で、一回以上剥離作業が実施された資料。総数12点。黒曜石11点・チャート1点で、法量は平均値で黒曜石 $2.6 \times 3.4 \times 1.7$ cm, 17.4gを計測する。剥片剥離は剥離面打面を主とし、以下2種の方法に基づく。

第1種—原石または分割された石核から直接剥片剥離を行う例3点(第54図No3, 第55図No1, 第57図No3・4)。

第2種—原石あるいは石核から剥片を剥離し、これを石核として剥片剥離を行う例9点(第54図No4, 第56図No5, 第57図No5)。打面の転移率は50%、打面の再生はなく、転移に伴う作業面の移動は同一面あるいは2面である。



第35図 原石・石核法量相関グラフ

エ 剥片・碎片 (第54図Na 5、PL65)

剥片剥離作業において加工の施される属性を担った対象を剥片とし、これが剥離される過程に於いて産出された製作に不適な資料を碎片とする。具体的には石鏃を第一義的な製作物とする目的的な素材剥片から、刃器として石鏃にいたる道具類の生産に要する剥片までを包括し、製作途上での出現段階と素材部位を考慮し、2種2類に区別する。すなわち原石の表皮が片面 $\frac{1}{2}$ 以上認められる剥片を1種・表皮が $\frac{1}{2}$ 以下の剥片を2種とし、各々で両極剥離痕を有する剥片をA類、石鏃製作などに関与する素材用剥片をB類として抽出する。各類の出土地区及び石材別内訳を第8～10表に示す。

A類は1点のみ収集。材質は硬質頁岩で3.7×1.7×1.1cm, 4.4g。打撃に基づき形状変異は上下両端部形が面状と点状の組み合わせである。

B類総数は22点 (第54図Na 5, 96.1g)、剥片1種12点 (51.9g)、2種14点 (156.8g)、碎片36点 (40.6g)である。打製石斧など、大形の剥片石器製作に関わる石層にも同様な類別を与える。頁岩 (粘板岩)の石材が主体であり、剥片26点 (375.3g)・碎片5点 (5.0g)がある。

(個体数)

器種名	原石	石 屑						大形剥片	
		石 核	剥片 A	剥片 B	剥片(1)	剥片(2)	碎 片	剥 片	碎 片
S B	—	4	—	9	3	4	18	12	3
S K	2	1	—	2	3	2	2	4	—
遺構外	4	7	1	11	6	8	15	10	2
合 計	6	12	1	22	12	14	35	26	5

(重さ) 単位: g

器種名	原石	石 屑						大形剥片	
		石 核	剥片 A	剥片 B	剥片(1)	剥片(2)	碎 片	剥 片	碎 片
S B	—	37.8	—	52.6	10.8	59.8	16.6	201.2	2.5
S K	16.5	16.9	—	11.3	16.7	13.0	4.9	65.8	—
遺構外	513.7	296.2	4.4	32.2	24.4	84.0	17.6	108.3	2.5
合 計	530.2	350.9	4.4	96.1	51.9	156.8	39.1	375.3	5.0

第8表 剥片・碎片種別出土数

分類 出土地	剥片B類						剥片1種		剥片2種		碎片		
	石材	黒曜石	チャート	頁岩	頁岩茶	緑硬頁岩	瑪 瑙	黒曜石	チャート	黒曜石	チャート	頁岩	黒曜石
S B	1(0.7)	4(20.4)	1(14.5)	3(17.0)	—	—	3(10.8)	—	2(16.5)	1(3.4)	1(39.9)	17(15.7)	1(0.9)
S K	—	—	—	—	1(9.2)	1(2.1)	3(16.7)	—	2(13.0)	—	—	3(6.4)	—
遺構外	6(17.3)	1(1.4)	4(13.5)	—	—	—	5(19.8)	1(4.6)	6(28.7)	—	2(55.3)	14(16.6)	1(1.0)

第9表 剥片・碎片材質別出土数 (小型)

分類 出土地	剥片				碎片	
	安山岩	粘板岩	凝灰岩	頁岩	安山岩	粘板岩
S B	3(8.0)	4(72.8)	3(22.4)	2(98.0)	1(0.8)	2(1.7)
S K	2(25.4)	1(25.2)	—	1(15.2)	—	—
遺構外	4(57.2)	3(15.1)	—	3(36.0)	—	2(2.5)

第10表 剥片・碎片材質別出土数 (大型)

オ 石鏃 (第55図Na 2～4, 第56図Na10・12, 第57図Na7～11, 第11表, PL65～67)

刺突・殺傷が想定できる資料。製品8点・失敗品3点、計11点を収集する。火成岩を主体とし黒曜石9点・チャート1点・安山岩1点である。

形態的視点から基部が無茎なI類5点と有茎なII類2点を大別し、細別は基部形状に基づき実施する。

I A類一基部が内湾する例。抉りが浅く全長の1/6以下で、脚部の開き角が120度以上をA1類4点(第55図No.2, 第57図No.8~10)、抉りが深く開き角120度以下をA2類1点(第56図No.10)とする。

II A類一平らで直線的な基部を呈する例1点(第56図No.12)。

B類一基部が内湾する例1点(第57図No.11)。

以上のほか、形状不明1点(第55図No.3)、技術的に製作途中の失敗品(未製品)と考えられる例3点(第55図No.4, 第57図No.7)がある。

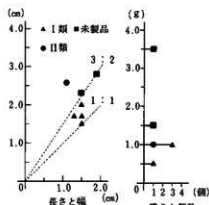
側辺部の形状は、外湾(2点)あるいは直線的(6点)であり、一部鋸歯状を呈する例2点(第56図No.12・第57図No.11)がある。

機能的側面は使用による先端部の損傷・装着痕跡・付着物について観察した。機器は金属顕微鏡(×100)を使用し、全資料につき実施した。結果、先端部の損傷と考えられる剝離痕跡が1点に認められ、3点(27%)に装着を考えさせる痕跡が確認できた。

法量については類型別に第11表に平均値を示す。



第36図 石鏃観察模式図



第37図 石鏃法量相関グラフ

第11表 石鏃属性

平均値	法量(最大値)				計	機能部			側辺形		欠損						自然	素材	総										
	長さ	幅	厚さ	重さ		先端角	使用痕	装着痕	再	直	外	部位								面	横	縦							
												有	無	有	無	生							湾	A	B	C	D	E	F
I	1.7	1.5	0.4	0.6	4	42	-	5	1	4	-	4	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	5
II	2.6	1.1	0.5	1.0	1	34	1	1	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2
未製品	2.6	1.7	0.8	2.5	2	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	2	3	
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	

カ 打製石斧(第54図No.13, 第58図No.15, 第59図No.39, PL65~67)

大形の打製石器で、草本類の伐採あるいは掘削等の作業が予想できる資料。安山岩3点・頁岩(粘板岩)1点を収集。完形資料は1点のみであり、形態的類別は特に実施しない。第54図No.13は、平面形態が台形状を呈し、ひとつの刃部と2側辺に腹面側からのみ加工を施した例である。刃部は緩斜度の平坦剝離、2側辺は急斜度の剝離加工である。第58図No.15は、刃部を欠損した例で背腹両面より、平坦な緩斜度の剝離を施した例である。第59図No.39は、基部を欠損した例で表採品である。

機能的にはNo.15の基部に装着痕跡と考えられる摩耗痕を確認した。No.13では明瞭な使用痕跡は確認できなかった。観察は金属顕微鏡(×100)を使用し全資料に対して実施した。

キ 磨石・凹石・敲石(第54図No.14・15, 第55図No.14~19, 第59図No.31~33, PL65~67)

する・たたく等の作業を想定できる資料。特徴的で最も頻繁な用法に基づき磨石・凹石・敲石を類別する。総数25点を収集。火成岩を主体とし、安山岩14点・砂岩7点・花崗岩2点・凝灰岩1点・頁岩(粘板岩)1点である。明らかな製作痕跡を確認できる資料はなく、河原石を直接使用する例に限られる。形状と大きさから類別を行い、2類12細分する。

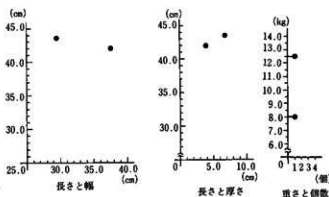
ある。

法量は各類別ごとに、平均値を第12表に示す。

欠損状況では完形資料が多く、磨石で67%、凹石で85%、敲石では50%が完形である。

ク 台石・石皿(第56図No4, 第59図No37, PL66-67)

する・たたく(つぶす)等の作業が想定でき、置かれて使用された資料。火成岩である安山岩3点を収集する。全体の整形及び機能部の作出(皿部の形成・目たて)はない。板状の素材をそのまま、あるいは適当な大きさに分割した後に使用している(第56図No4, 第59図No37)。使用は表裏両面を少なからず使用するものが主体で、肉眼観察でも十分な摩擦面が認められた。



第39図 台石法量相関グラフ

ケ 刃器・石匙(第54図No2・6・9・10・11・12,

第55図No5・6・12・13, 第56図No1・2・9・14, 第58図No16~25, PL65~67)

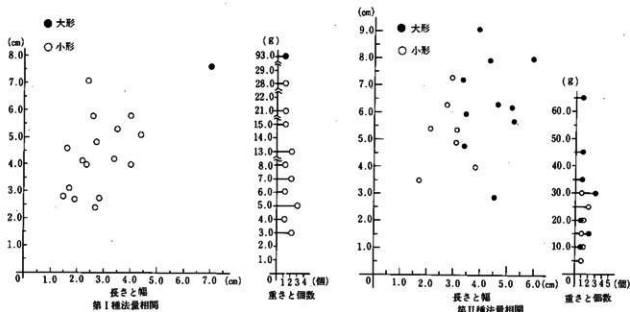
項目中提示した器種以外で、刃部を有し、切る・掻く等の作業が想定できる資料。石匙・削器・搔器等加工の施される資料と使用痕跡を有する資料を合わせ刃器として類別する。製作技術的な視点から、剥離獲得した素材をそのまま使用する第I種と素材の一部に加工を施す第II種を区別する。第I種に所謂「使用痕跡を有する石屑」(第54図No12, 第55図No12・13, 第56図No1, 第58図No23~25)が、第II種に「スクレイパー」(第54図No2・6~9, 第55図No7~11, 第58図No19~22)・「石匙」(第54図No10・11, 第55図No6, 第56図No2・9・11・14, 第58図No16~18)が該当する。さらに素材の差異から、大形薄片素材と小形薄片素材に大別する。第I種では大形1点(ホルンフェルス)・小形17点(硬質頁岩9点・チャート1点・黒曜石7点)、第II種「スクレイパー」は大形11点(安山岩7点・頁岩4点)・小形9点(硬質頁岩6点・チャート1点・黒曜石2点)、「石匙」では大形1点(安山岩1点)・小形11点(硬質頁岩5点・チャート5点・黒曜石1点)である。

形態的視点からの類別は実施していないが、「石匙」に関して、基部(つまみ部)の刃部に対する位置から縦形(第54図No10, 第56図No9)・横形(第55図No6, 第56図No11・14, 第58図No16)・斜形(第54図No11, 第55図No5, 第56図No2, 第58図No17・18)の類別を行い、第13表にまとめた。

機能的視点では、金属顕微鏡(×200)を使用し、主に刃縁のみに限り観察した。結果、第I種で67%、「スクレイパー」で80%、「石匙」で67%の資料に使用痕跡と考えられる摩擦・微細剥離痕などが確認できた。

第13表 刃器属性

属性分類	法量(最大値)				計 上 数	刃部						使用痕跡			素材片			総 数						
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		計 数	刃 長 (cm)	刃 幅 (cm)	計 数	刃 角 (度)	平面形			種類			自然		横	縦				
											内	直	外	面	面	数					摩	線	光	MF
II種	小形	5.2	2.9	1.2	18.3	6	2.9	0.4	11	50	2	5	6	11	2	13	2	2	6	1	5	5	4	9
	大形	6.4	4.4	1.1	27.7	10	4.8	0.4	11	48	3	7	2	11	1	12	-	-	7	-	6	9	1	11
石匙	縦型	4.5	1.9	0.8	6.3	2	3.4	0.6	2	51	-	-	2	2	-	2	-	-	1	-	1	1	1	2
	横型	4.6	3.9	0.8	14.4	4	3.3	0.4	10	50	1	3	1	3	1	4	-	-	3	-	2	1	2	4
	斜型	5.7	3.7	0.7	13.0	2	4.0	0.3	6	43	-	2	3	4	1	5	1	-	3	1	3	3	1	5
	不明	-	-	-	-	-	-	0.4	1	64	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1



コ 磨製石斧 (第56図No.3・13, 第58図No.27・28, PL66・67)

伐採・切断・加工の作業を想定できる資料。蛇紋岩4点・翡翠1点・安山岩1点、計6点を収集する。製作は剥片剥離→剥離整形→研磨の工程をとり、全て両刃石斧である。大きさから2類に区別する。

《大きさ》

中形—長さ8.0cm以上12.0cm未満の例1点 (第57図No.27)

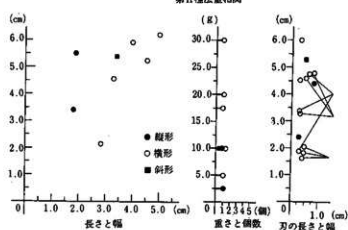
小形—長さ5.0cm以上8.0cm未満の例4点 (第55図No.3・13, 第57図No.28)

ほか、欠損により形態不明の例1点がある。

《形式》

いずれの資料も長さ10.0cm、厚さ3.0cm、重量300g以下であり、長幅比で1:1~2:1ないしは5:2までに相当する扁平の加工斧と考えられる。頭部の形態は直頭状1点(第56図No.13)、尖頭状1点(第56図No.3)、円頭状2点(第58図No.28)、刃部の形態では直刃2点(第56図No.3・13)、斜刃2点(第58図No.27・28)である。

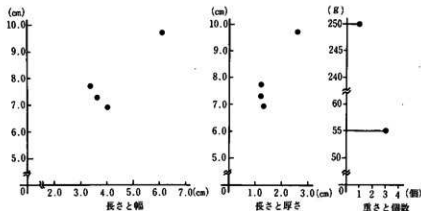
機能的視点からは、金属顕微鏡(×50)を用い刃部に摩耗・線状痕を、基部に装着痕を観察した。結果全ての資料に使用痕跡が確認できた。装着痕は光沢の確認であり、研磨痕である可能性を含んでいる。



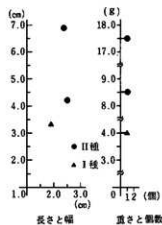
第40図 刃器法量相関グラフ

第14表 磨製石斧属性

平均値 属性 分類	法量(全体値)				計 上 数	(機能部値)			使用痕跡				刃部平面形			頭部形			欠損状況			総 数			
	長さ <cm>	幅 <cm>	厚さ <cm>	重さ <g>		刃幅 <cm>	刃角 <度>	長さ <cm>	幅 <cm>	形 摩 線 光	装 着	直	斜	不 明	直	尖	円	不 明	刃 部	表 皮	完 形				
小形	7.3	3.7	1.2	54.0	3	3.5	56	0.3	2.0	1	1	2	4	2	1	1	1	1	2	-	1	-	3	4	
中形	9.7	6.1	2.6	245.0	1	(3.3)	61	0.7	(3.1)	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	



第41図 磨製石斧法量相関グラフ



第42図 石錐法量相関グラフ

サ 石錐 (第57図No.13・14、PL.66)

穿孔作業を想定できる資料で3点収集。堆積岩を主体とし、チャート2点・硬質頁岩1点である。製作技術上、加工を行わない第I種と剝離加工を施す第II種に区別できる。

I種—素材の端部をそのまま使用する例1点。

II種—素材の側面に押圧剝離を施す例2点(第57図No.13・14)。素材の特徴を壊すことなく加工し、先端機能部と基部の区別が不明瞭なB1点(No.13)と明瞭なA1点(No.14)に区別できる。刃部の作出法は、片面側からの例1点(No.13)と両面からの例1点(No.14)があり、機能部断面形は菱形状2点(No.14)・三角形状1点(No.13)である。

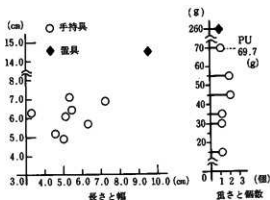
機能的視点では、金属顕微鏡(×200)を用いて使用痕観察を実施した。結果、I種で光沢痕跡を、II種では摩耗・光沢痕跡を確認したが、線状の痕跡を認めることはできなかった。

欠損例はなく、全て完成品である。

法量は各類各1点であり、観察表に譲る。

シ 砥石 (第54図No.16・17, 第55図No.20・21, 第56図No.8、PL.65～67)

研磨作業が想定できる資料。軽石8点・花崗岩1点・安山岩1点、計10点を収集する。法量から手持具8点(第54図No.16, 第55図No.20・21, 第56図No.8, 第59図No.34～36)と置き具2点(第54図No.17, 第59図No.38)に区別でき、使用面が溝状の例3点(第54図No.16, 第56図No.8, 第59図No.38)とケズリ・面状の例7点(第54図No.17, 第55図No.20・21, 第59図No.34～36)がある。



第43図 砥石法量相関グラフ

ス 加工痕跡を留める石屑 (第54図No.1, 第56図No.6・7, 第57図No.6・12, 第58図No.26、PL.66)

剝片剝離を伴う道具製作に関し、遺跡内に行われたであろう加工行為の結果を表現し得る資料を一括する。石鏃などの小形品を製作する際に出現した加工痕跡を留める石屑が13点(第54図No.1, 第56図No.6・7, 第57図No.6・12, 第58図No.26)ある。黒曜石4点・チャート7点・硬質頁岩2点である。

セ 玉類 (第54図No.18・19, 第58図No.29・30、PL.65・66)

装飾など二次的な生産用具に相当する資料では、管玉3点(第54図No.18, 第58図No.30)・珠状耳飾1点(第54図No.19)・玉未製品1点(第58図No.29)がある。全て滑石製である。欠損例はなく、全て完成品である。法量属性は観察表に示す。

第4章 各時代の遺構と遺物

第18号 遺構内出土石器

5日2001

加工面を有する石斧

図番	断面(最大値)				刃部		打	石	分	出土地区		備考
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)				番号	遺構名	
54-1	2.8	1.6	0.6	1.1	先	鈍	先	—	RF	①-1	SB2001	斧

石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-2	8.2	12.0	1.8	19.0	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	①-1	SB2001	斧

5日2002

原石・石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-3	2.3	3.8	2.2	15.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	①-2	SB2002	原石?
54-4	2.0	3.7	1.5	9.3	1	鈍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧

石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-5	2.0	2.0	0.2	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	

使用痕を有する石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-12	7.1	2.4	0.5	8.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧

石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-6	5.4	3.1	1.0	17.0	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧
54-7	4.9	3.1	0.9	11.0	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧
54-8	9.1	3.9	0.9	30.0	1	鈍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧
54-9	7.9	4.3	1.3	42.0	1	鈍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧

石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-10	5.5	1.9	1.0	10.0	1	鈍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧
54-11	5.4	3.4	0.5	10.0	1	鈍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	斧

打製石斧

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-13	6.2	3.4	1.1	22.0	1	鈍	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	石斧?

打製石斧(磨石・磨石)

図番	断面(最大値)				刃部		使用痕		加工痕		欠	目	石	分	出土地区		備考		
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)					番号	遺構名			
54-14	11.1	8.5	3.3	325.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	
54-15	13.6	4.5	3.7	338.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	②-2	SB2002	

礫石

図 番 号	断面(最大値)				造 形								欠 損 部 位	採 集 の 場 所	採 集 の 方 法 (数)	備 考	出土地区					
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 さ (g)	(四)		(圓)				縦 長 (cm)	幅 (cm)					厚 (cm)	重 さ (g)	番 号	遺 跡 名	備考	
					縦 長	幅	縦 長	幅	縦 長	幅												縦 長
59-34	7.1	5.3	3.7	56.8	3	圓	6.0	4.9	圓	4.9	4.1	圓	5.6	1.9	完	-	棒打	-	手押	-	縄文古墳1	
59-25	6.1	5.1	4.1	27.4	1	-	-	-	圓	5.6	4.4	-	-	-	完	-	棒打	-	手押	-	縄文古墳1	
59-36	6.4	5.4	4.5	53.7	2	圓	5.1	3.4	-	-	-	圓	4.2	3.2	完	-	棒打	-	手押	-	縄文古墳1 V2-19	
59-38	(11.3)	(11.8)	5.9	(60.0)	2	圓	(9.0)	(2.5)	圓	(10.2)	(10.0)	-	-	-	欠	-	安山岩	-	貫通	-	遺跡	

加工成を認めざる石

図 番 号	断面(最大値)				欠 損 部 位	石 質	分 類	出土地区			備 考	
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 さ (g)				番 号	遺 跡 名	備考		
57-6	3.1	2.9	0.7	3.5	-	-	頁岩	-	RF	②-2	縄文古墳 V1-16	石鼓溝遺
57-12	2.9	1.2	0.3	1.3	-	-	チャート	-	RF	②-2	縄文古墳 V1-16	石鼓溝遺
57-26	3.1	2.3	0.6	4.4	-	-	チャート	-	RF	②-2	縄文古墳 V1-17	万葉川遺

玉環

図 番 号	断面(最大値)				光 部				欠 損 部 位	分 類	石 質	出土地区		備 考	
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 さ (g)	上部		下部					研 磨 面	番 号		遺 跡 名
					外 径 (cm)	内 径 (cm)	外 径 (cm)	内 径 (cm)							
58-29	2.21	1.10	0.85	5.39	-	-	-	-	完	赤銅石	輝石	②-2	縄文古墳 V1-16		
58-30	1.20	1.34	1.30	1.97	0.93	0.84	0.77	0.64	-	完	碧玉	輝石	②-2	縄文古墳 V1-17	

4 小結

石川糸里遺跡の縄文時代遺構は上層遺構から厚い堆積土によって隔絶され、しかも出土土器は前期初頭に限定される点から当該期の集落様相が比較的単純な形でみれる。そこで最後に本遺跡の様相について簡単にまとめておく。

(1) 遺構各説

ア 竪穴住居

A 平面形・規模 本遺跡では3軒の住居が検出された。全体形が判明したのはS B 2003のみであるが、他の2軒も残存部から類推するといずれも隅丸長方形を呈すると思われる。規模はS B 2003で約4.2×3.7m、S B 2001が東西約4.4m、S B 2002で南北約4.5mであり、検出された竪穴住居址は平面形と規模が類似している。ちなみにS B 2003の床面積は約15㎡であり、当該期の県内の住居床面積を集成した堤隆氏のデータ⁽⁴⁾と比較すると本遺跡の住居はやや大き目だが、ほぼ類似した範囲に納まることがわかる。また、平面形では長野県の当該期では隅丸方形・長方形と円形が混在する様相も知られるが、本遺跡では円形は認められなかった。本遺跡はやや後出する様相と捉えられるか。

B 住居の構造 住居の床は概略の形を掘った後に薄く貼床されたものだが、全体的にかなり堅緻とはいえない。柱は床面から60cm前後の深さの主柱穴と深さ10cm前後の柱穴で構成される。S B 2003では主柱穴が住居中央部に4本方形に配置され、浅い柱は長軸方向の壁際やその近くに3(4?)本並列する規則的な配置を示す。S B 2002は全体像を明らかにできなかったが、主柱穴は東辺に平行して2本、その中間に1本の計3本が認められ、4ないし5(6)本と思われる。他に浅い柱穴が検出されているが主柱穴に近接したり、壁際にあったりしてS B 2003ほど規則的でない。S B 2001は不明である。以上のように限られた資料であるが、基本的には柱は平面形同様に住居中央に方形に主柱穴が配列され、壁際や内部にいくつか浅い柱穴・あるいは補助の柱が配置される構造と見られる。ただし、規則的に柱穴が認められるS B 2003では主柱穴が方形ながら、住居の平面形や壁際の柱配置は長方形となっており、上屋構造はどのようになるのか不明である。また、S B 2002と2003では子細にみると柱の配置が異なるが、この配置の違いの理由も明らかでない。なお、入り口は確定できたものはないが、S B 2003の圓い床面の範囲が南側を中心とする点からは短辺側、つまり低地側へ向かって開口していた可能性がある。

C 内部施設 内部施設としてはS B 2003中央部で周囲に炭化物が散在する小規模な穴が検出されている。調査では焼土が検出されていないので炉と断定できなかったが、強い可能性があるとするればこれが該当しよう。S B 2001・2002は住居址全体が調査されていないので炉の存否は不明である。県内の資料をみる限り、当該期の住居における炉の存在は必ずしも普遍的ではなく、検出される場合では多くが地床炉、ごくわずかに石囲や石を付設するものがあるようである。こうした状況からみると炉が無くてもおかしくはないが、S B 2003の場合では炭化物の散在から火を扱った可能性は残されており、焼土を残さない焚所の可能性一例えば灰敷、小規模な炉、あるいは使用期間が短い、廃絶に際して焼土を除去するなど考えられる。いずれにしろ、後代のように炉が明瞭でない点は、台石が個別住居内で検出されていないことと関連して植物加工のあり方の違いとして見れる可能性がある。なお、煮炊きは屋外で行われた可能性もあるが、調査範囲内では比定できそうな焼土址は不明である。

D 住居の廃絶 住居の廃絶の様相については不明な点が多い。そうしたなかでいくつか興味深い所見が得られた。一つはS B 2002では柱穴内に柱痕が認められたことである。これにより住居の廃絶に際しては柱材を抜く作業はなかったと推定される。二つ目には住居の土器の出土のしかたにはS B 2001のように破

片が少量出土する例と、S B 2001・2003のように埋土中層以上で多量の土器が出土する2者が認められたが、いずれも床面上での土器出土はない。このことからS B 2001～2003ともに住居使用時の土器がそのまま残されたものでなく、住居廃絶時には土器を持ち出していることがわかる。なお、県内の前期初頭の住居跡調査例をみる限り、S B 2001のように破片が少量出土する例のほうが一般的のように思われ、S B 2002・2003のように埋土中の大量出土例は少ない。本遺跡のS B 2002・2003の場合ではゴミ捨て場として利用されたと推測されるが、これは居住地のスペースデザインのなかでの選択であると共に、廃棄の単位が小さいことも示している。さらに、少なくとも土器廃棄の行なわれた段階と住居が存在した2時期が想定できる。

E 住居機能 調査のなかで気付いた竪穴住居の機能に関する問題をまとめてみる。まず、一つ目の問題は炉が不明瞭な点である。近年、縄文時代の土器と炉の関連についての考察がいくつかあり、住居内の炉が植物加工に関連した施設と捉える説が提示されている¹⁰⁰。これに関して、本遺跡では植物加工に関わる台石が個別住居内で認められない点も考え合わせると、個別住居内で植物加工が行なわれなかったために炉が顕著でなかったとも考えられる。また、一方で本遺跡出土土器のほとんどが尖底である点を含めて、どこで煮沸行為が行なわれていたのかは問題が残された。焼土跡は2か所検出されているが、あまり目立つ存在ではなく、長期にわたる煮沸の所産とは思われないものである。

二つ目には台石といった加工具が住居内で認められなかった点がある。本遺跡では台石が3点出土しているが、いずれも住居跡の屋外で出土している。廃棄された可能性もあるが、S Q 2018から考えれば、各住居内では植物加工が行なわれず、むしろ屋外での共同作業に近いのではないかと推測される。

以上の調査所見から本遺跡はほぼ類似した規模な竪穴住居数軒で1つの集団を構成し、植物加工を共同作業とする協業集団であったと推測される。しかも、植物加工・煮沸は屋外で行なっている可能性が窺え、個別住居址は生産・消費の独自性があまり強くないように思われる。そうした場合、竪穴住居は緩やかに独自性を保ちながらも、現在みる「部屋」に近い存在のようにも思われる。

イ 土坑

本遺跡では柱穴以外の土坑と捉えた遺構が5基あるが、いずれもその性格は不明である。これらの土坑の形状は円形で比較的大型のS K 2516がやや異質な存在で、他は規模も形状もほぼ類似した楕円形の土坑である。ただし、楕円形土坑でもS K 2534は埋土中に焼土・炭化物を含み、S K 2515は埋土に白色粒子を含んで台石も出土している違いもみられる。これらの土坑は出土遺物が少ないことから竪穴住居址との関連は不明なものが多いが、基本土層との関係からS K 2514と2527が竪穴住居址より後出すると認められた。従って、住居址と離れて土坑だけが構築される場所もあったようである。

次に土坑分布をみるとS K 2514と2527以外はS B 2002・2003以北の微高地上に分布し、なかでもS K 2516はビット群に近接して位置して埋土に焼土粒や炭化物をもつ共通点もある。また、竪穴住居址に後出すると思われたS K 2514と2527は竪穴住居の外側低地よりに位置すると共に13層下部検出のS Q 2019と近接しているので一連の遺構群としてみられる。この分布のなかでは後出するS K 2514と2527を除くと竪穴住居址・ビット群をつなぐライン内側の微高地上に土坑が散在するようにみえる。なお、S K 2616が竪穴住居址やビット群と何らかの関連が見られるが、それ以外の土坑は関係が判然としない。

上記の土坑のあり方を当該期の御代田町の下弥堂¹⁰¹、塚田遺跡¹⁰²と比べてみる。この2遺跡では略完形の土器を出土する土坑、人為的な埋土の認められる楕円形土坑などが確認されている。本遺跡でも共通するとみられるのは楕円形土坑であるが、完形土器を入れる土坑は本遺跡では検出されず、一方で本遺跡で検出されたS K 2516のような焼土粒や炭化物が含まれる土坑は上記2遺跡には認められない。また、分布では先述の2遺跡でも個別住居と関連して土坑が構築されている様相は見られず、緩やかに住居がとりま

く内側に土坑が分布する状況が指摘されている。本遺跡でも微高地上に土坑が分布し、その縁辺に竪穴住居址やピット群がとりまいていても見られるが、先に述べたように住居と同時存在の可能性が高いのはSK2616のみで、楕円形土坑は直接竪穴住居との関連は不明、もしくは後出すると見られる。従って、本遺跡の場合には土坑のみで構成される空間、段階があったと推定される。

ウ ピット群

今回の調査では住居址からやや離れた北東地点でピット群が検出された。柱配置の規則性や構造は明らかにできなかったが、類似遺構は当該期では知られておらず、きわめて注目される遺構と思われる。県内の類似遺構として前期前葉の阿久遺跡を代表とする方形配列土坑と呼称される遺構(掘立柱建物?)、報告書で時期不明とされているが、御代田町下弥堂遺跡で3基からなるピットがある。本遺跡は阿久遺跡のような規則的な配置はよみとりにくく、住居群と並列してやや離れた場所にあることなどから類似した性格の遺構とはみられないと思われる。性格は不明であるが、このピット群周辺では土器出土量がやや多く、石器は錐などの加工具も採取されている。これらの遺物から何らかの加工がこの周辺で行われたことが想定される。なお、ピット埋土には焼土・炭化物粒が含まれており、付近に存在するSK2516埋土との関係も想定される。

註

- 1 現隆1994「縄文時代前期初頭の基落」『下弥堂』御代田町教育委員会
- 2 川崎保1995「縄文土器の機能・用途と口縁部文様帯の装飾・形質」『信濃』47-9
- 3 御代田町教育委員会1994「下弥堂」
- 4 御代田町教育委員会1994『粟田遺跡』

(2) 石器群の概要(まとめ)

ア 製作技術

小形の剥片石器 [石鏃、石錐、刃器] ・ ・ 火成岩(黒曜石)・堆積岩(頁岩・チャート)を使用。

原石・石核は、その94%が黒曜石である。産地分析の結果¹⁰⁾、星ガ塔及び男女倉産を同定することができたが、遺跡からは直線距離にして45kmある。剥片剥離作業に伴う石屑(剥片・碎片)では、自然面や節理面などの表皮を含む1種が、全体の15%程度と少なく、剥離面に覆われた核状の原材を想定できる。なお200gを越えるような塊状の原材2点が収集されており、大形原材の獲得・貯蓄が予想される。石匙・小形刃器に用いられた硬質の頁岩は新潟などの県外材¹⁰⁾が予想されるが、石核や石屑の出土が殆どない点から推察すれば、剥片あるいは完成品の状態で持ち込まれた可能性が高い。

大形の剥片石器 [打斧、刃器、磨斧、玉] ・ ・ 堆積岩(粘板岩≠頁岩)・火成岩(安山岩・蛇紋岩)・滑石を使用。

大形刃器に用いられた黒色緻密安山岩は、千曲川流域での獲得が可能で、遺跡の近くでは佐久あるいは飯山市周辺が該当する。直線距離にしておよそ80kmあり、石核や石屑の出土がないことから、剥片あるいは完成品の状態で持ち込まれた可能性が高い。磨製石斧と玉類は蛇紋岩や滑石を使用し、県内では1)千曲川最上流域・2)茅野～高遠の天竜川流域・3)姫川流域の3ヶ所、いずれかの可能性が考えられる¹⁰⁾。

礫核石器 [磨石類、台石] ・ ・ 火成岩(安山岩・花崗岩)・堆積岩(砂岩)を使用。

遺跡に近い千曲川流域にて採集可能である。磨石類は無加工であるが、台石は板状を呈しており、露頭での採集・粗削加工を考慮する必要がある。露頭は遺跡対岸(千曲川右岸)にあり直線距離で7kmである。

イ 器種の形態と時期(第15表)

A 狩猟・漁撈具

狩猟に関わると思われる道具には石鏃があり、石器全体^(a)の11(9.8)%を占める。遺跡内での石器残存数量比中に占める石鏃量は、前段階の早期末葉^(a)に比べ著しく低下している。ただし個別器種としては、黒曜石材が8割と高率であること、凹基無茎式で抉りの浅いA1類が4割近く存在する点など、前段階とほぼ同様な特質を示す。法量でも長さで1.7cm、重さで0.6gと、小形鏃に近い値を示す。また有茎式が2点収集されているが、形式的には後出形態であり、遺構外出土の資料という点も加味すれば、縄文時代晚期以降に属す可能性が高い。

B 採集具

採集に関わると思われる道具には、打製石斧・磨石類・台石がある。この内打製石斧については、形式的・数量的に、その存在が不明瞭で早期末葉段階と同様な状況にある。特に本遺跡にて収集された資料は、2点が欠損例で器種認定に多少の無理がある。完形の1点は形式的には打製石斧ではなくて、むしろ筧状石器に属す資料であるが、使用痕跡は確認できなかったため機能・用途は不明である。また明瞭に判断できる打製石斧の刃部破片1点があるが、出土地区不明の表探資料で該期に所属する可能性は低い。

磨石類・台石は、採集部門では主に堅果類の粉碎作業を想定することが可能な器種である。石器全体では29(24)%を占め、遺跡内での石器残存数量比中、第2位である。機能的に「する・たく」などの作業が考えられるが、磨面のみ有する資料が80%と、多くを「する」機能によっていたことが解る。「する・たく」機能の複合例は12%に過ぎず、大半の例が単独機能である。これらのことから、個別器種的には早期末葉段階とほぼ同様な状況にあることが理解されるが、残存数量比中に占める割合では増加傾向にある。

C 加工・調理具

狩猟(漁撈)・採集の活動から、木材・骨角製品の加工まで、様々な加工(調理加工含む)に関わる道具には石匙・刃器・磨製石斧・石鏃・砥石がある。石匙と刃器は石器全体の33(28)%あり、石器残存数量比中第1位を示す。石匙では頁岩・チャートが8割を占め、形態的に斜形ないしは横形が7割程ある。これらの事実を早期末葉段階と比べると、残存数量比(組成率)が高率化していること・黒曜石以外を多用する点・縦形の割合が低いことなどの差異を指摘することができる。さらに刃器には7.0cmを越える中形例^(a)が僅かながらも増加している点の特筆され、前期前葉への移行を読み取ることが可能である。

磨製石斧が石器全体に占める割合は僅かに6(5.2)%である。形態的には頭部が尖頭あるいは円頭状で、刃部が凸形を呈する例が主体である。側面の作出は余り良好ではないが、早期段階の「半定角式」とも呼ぶべき形態に近い。材質も同様に白色化(風化?)した蛇紋岩である。法量では8.0cmを越える中形斧が1点、残りはそれ以下の小形斧で、いずれも両刃の加工斧である。

石鏃は石器全体の3(2.6)%程度である。材質はチャートが主体で、形態的には鏃部を作出したII種が7割あり、早期末葉段階に認められた棒状形はない。使用痕跡は明瞭ではなく、回転線状痕は確認できなかった。

第15表 縄文前期石器組成変遷表

区分	石器 遺跡 様相	狩猟 漁撈 採集					調理加工					加工			生 業 段 階
		石 鏃	石 鏃	打 斧	磨 石	特 磨 石	台 石	石 削 匙	擣 器	剥 石 A	磨 石	砥 石	磨 石		
早期 後半	向六工 2)	○	?	?					○				○	?	2
前期 初頭	石川 1)		?												

石川遺跡に認められる要素 (2)新しい要素○、古い要素○

組成率

砥石は浮岩(軽石)製が主体で、材質的には砂岩製の砥石などと同類に扱うことはできない。しかしながら表面には研磨面や溝部など、砥石と同様な使用痕跡が確認できるので器種認定を行った。石器残存数量の

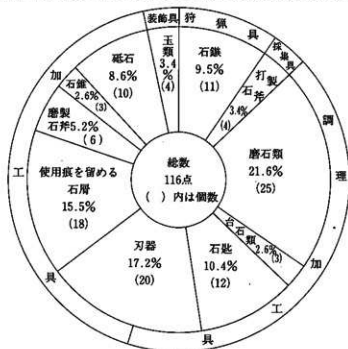
10(8.6)%近くを占める。

D 装身具

直接生産に関わる道具以外には、装身具と考えられる玉類がある。この中には管玉2点と塊状玉飾1点があり、いずれも滑石製である。これら飾り玉と垂飾品のセットは早期木業に箕輪町カゴ田遺跡にて確認されているが、北信地域では最も古い段階のセット例と言える⁽¹⁷⁾。

ウ 石器の組成 (第44図)

最後に、石器の遺跡内残存数比 (第7表) から生業活動を推定してみる。組成率では調理・加工具に分類した石匙・刃器が最も高率で、磨石類がこれに次ぐ。前者を狩猟具に含めるか、あるいは採集具に含めて考えるかにより解釈の仕方は異なるが、狩猟具が7割近くを占めた早期木業段階 (坂北村向六工遺跡例) とは、明らかな違いが認められる。ただし前述したように、石器群全体の様相は前段階と然程の差異が認められないので、石鏃の減少と石匙・刃器類の増加を数量上の変化として留意し、狩猟以外に漁撈の存在を考慮することも一考である。石鏃の減少は、数値上、採集具の増大化を招いたが、中形刃器の登場を、この現象にからめて解釈していくのであれば、採集形態の変化を想定してみるのも、また一考である。石製土堀具の不在を「半栽培」の未確立と評価するのであれば、狩猟・採集形態の質的な転換を考えていく必要もある。いずれにせよ、本遺跡資料から想定できる生業は、前時期同様に狩猟採集の段階にあり、向六工遺跡での成果「2期、石鏃・石匙を用いた動物質食料の獲得が形成され、磨製石斧・石鏃などの工作具が発達していく段階」(P168)のほぼ延長上にあると言える。狩猟具の激減と採集・調理具の増加を、前期社会への胎動期と捉えておきたい。



第44図 石器組成グラフ

註

- 黒曜石の原産地推定は〈エネルギー分散型X線分析〉及び〈機器中性子放射化分析〉を註3にて委託実施した。朝・パリノ・サーヴェイ分析報告は別に付章4節に掲載している。
- 中村由克1986『野尻湖・信濃川流域の旧石器時代遺跡群と石器石材』『信濃』第38巻第4号による。
- 朝長野県埋蔵文化財センター 1997『第4章第7節1(3)石材分析』朝・パリノ・サーヴェイ分析報告『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16-長野市内その4-篠ノ井遺跡群』掲載。
- 石器の残存数比に対する全体とは、各種種に「使用痕を留める石層」を加算し、道具として成り立っていないと考えられる「加工痕を留める石層」を除去した数値で表示している。文中()内が全体の割合に相当する。
- 朝長野県埋蔵文化財センター1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12-東筑摩郡坂北村・麻績村内-』。本項で扱う早期木業の資料とは坂北村向六工遺跡を対象としている。
- 町田勝則1996『先史学における石器研究の役割(2)』第30回日本民族学会発表要旨。縄文時代に属する刃器(大型)は、大きさから大形・中形・小形に区別でき、7.0(8.0)cm以上11.0cm未満の例を「中形」とする。
- 川崎保の告示による。川崎保1996『「の」の字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて』『長野県の考古学 朝長野県埋蔵文化財センター研究論集1』。

(3) 集落の変遷と構造

ア 集落の変遷

本報告では出土土器から個別遺構の時期区分は詳細に検討できなかった。しかし、遺構からみると時期差をもつ可能性が捉えられるものがある。そこで、これらを手掛かりにして少し遺跡の変遷を整理してみることにした。

今回の調査のなかで時期差をもつと捉えられたのは以下の3点である。一つはS B2002・2003は14層を埋土とする埋土中で多量の土器が出土したが、これらの土器の接合関係や遺存状態からゴミ廃棄の所産と推測した。このことから、少なくとも竪穴住居が構築された段階と土器が廃棄された2時期が存在するとみられる。2点目は基本土層との関係においては13層が入り込むS K2514・2527、さらに13層下面で検出されたS Q2019は14層を基調埋土とする遺構よりも後出するとみられる。3点目はピット群内で切り合いになると見られる土坑が存在し、柱抜き取り痕の可能性や構築順序によって疑似的に切り合いに見えるものかもしれないが、ピット群は複数時期にわたる構築の可能性もある。

上記の断片的な様相から基本土層を基準として、14層を基調埋土にもつ遺構には最低2時期、さらに13層が入り込む遺構の少なくとも1時期の最低3段階の変遷があるという見通しが得られる。このなかで、13層に関わる遺構のみは竪穴住居を伴わず、土坑と土器集中のみで構成される。したがって、竪穴住居址を中心とする遺構群と、やや離れて土坑で構成される場所やゴミ廃棄場所があったとも考えられる。また、土器が破損しやすいのは煮沸時と考えると、完形ならず、包含層土器とほとんど接合しないS B2002・2003出土土器が煮沸された場所は調査域の外にあると想像される。

以上の様相から次のようなことが推測される。まず、集落構造に関しては調査域内でゴミ捨て場、土坑で構成される遺構が竪穴住居址と同時に存在しない可能性から、竪穴住居址から離れた場所にゴミ廃棄場所、楕円形土坑とわずかな土器集中で構成される遺構群が離れて存在すると推定される。また、煮沸の場所は竪穴住居外の可能性が高く、それは廃棄場所とも離れていた可能性がある。

次に遺構変遷に関しては14層起源の埋土遺構が古く、13層起源の土層が入る埋土の遺構は後出すると考えられる。そして、14層起源の埋土をもつ遺構のなかでもS B2002・2003出土土器が包含層とあまり接合しないことはゴミ廃棄された段階が後出し、住居址を中心とする遺構群が先行すると思われる。もちろん、この場合では包含層の遺物集中などの遺構の爆発が判然とせず、しかも各段階の時間幅が不明となる問題が残されるが、ここでは概略で竪穴住居址・ピット群・遺物集中→S B2002・2003へのゴミ廃棄→S K2514・2527、S Q2019の変遷を推測しておく。この推測を前提とするとピット群以外は各段階で大きく集落景観が変化していると思われる。つまり、緩やかながらも一定の空間構成が各時期を通して保持されるのではなく、スペースデザインがその都度変化している様相と見られる。

イ 集落の構造

本遺跡は遺跡規模は小さいが、特定場所へ土器が廃棄されていることは片付けを伴う一定の居住デザインがあったことを推測させる。このデザインがどのような観点で設定されているかはわからないが、少なくとも包含層遺物集中で見られた加工活動の場も含まれて構成されていたことが予想される。そこで、さまざまな加工活動と遺構の関連から集落の空間構成の様相を探ってみることにしたい。なお、ここでは上記で推測された遺構変遷のなかでもっとも古いと思われた竪穴住居址群を中心とする遺構群に、他の段階と思われたが故に、住居とは離れて存在した可能性がある遺構群を加えてみる。なお、ここでは㊦-2区で検出された遺構を中心に扱い、やや離れた別の高まりにあるとも見られるS B2001は位置的にも離れ、13層起源の埋土が入らないものその時期が不明瞭なので除外する。

㊦-2区で検出された遺構は小微高地の縁辺南側に添ってピット群・S B2002・2003が弧状に並列して

いる。そして、微高地側に土坑がいくつか散在している。このなかでSK2516のみは同時存在した可能性があるが、他の楕円形土坑は13層関連遺構のなかでも見られ、それと同形態の土坑は同時存在なのかは不明である。

次に包含層遺物の分布から何らかの加工作業が行なわれたと思われる地点を上記の遺構分布と合わせてみる。まず、竪穴住居と近接した微高地側のSQ2018周辺で植物加工や石器製作、ピット群周辺で錐や石匙を使用した加工・石器製作が見られる。そして低地側のAK08・AL07グリッド周辺で簡単な刃器などを使用した加工が行なわれたとも推測される。なお、本遺跡内でもっとも多出した刃器類はSB2002・2003出土がもっとも多いが、廃棄か放置か判然とせず、加工場所は特定できていない。しかし、少なくとも植物加工を行なったSQ2018周辺では刃器はあまり出土しておらず、別の場で使用されたと考えられよう。この様相をみると植物加工を代表として屋外にもさまざまな加工場所が設定されており、しかも遺跡内の決められた場所で特定の加工作業が行なわれていると見られる。特に竪穴住居やピット群が並列するラインの微高地上側周辺で多く認められ、低地側ではあまり顕著でないようである。そして、このラインから外側の低地側でも加工作業がおこなわれているが、微高地内側と外側でやや加工作業の質が異なるようにも思われた。すなわち、先に石器の出土分布で述べたように微高地上では片付けを伴う連続作業としての石器製作、低地側のAK08・AL07では住居から離れた場所で臨時（集中）的に行なう場ではないかと考えた。この推測からすると、やはり微高地上のほうが加工作業場所が比較的固定化された様相と見られる。

以上から、本遺跡の縄文時代集落の構造は小微高地縁辺に竪穴住居・ピット群が弧状に並列し、その内側の遺構に近接した微高地上の空間で加工作業が特定場所で行なわれたとみられる。ただし、上記の様相は微高地上が同心円状に作業空間—居住空間—（空き地・廃棄空間）という構成をとるのではなく、あくまでも居住関連遺構が微高地の地形に添って弧状に並列するところを中心として、その内側が作業空間として利用されているものである。そして、こうした空間からやや離れた土器の廃棄場所、あるいは煮沸の場、楕円形土坑が構築される場所があったと思われる。

最後にこの空間構成について残された問題がいくつかあるので触れておきたい。一つは竪穴住居の入り口は低地側に開口していたと推測したが、上記の集落構造のなかでみると加工活動の場となる微高地上に開口しないことはやや奇異に思われるものの、その理由は不明である。もう一点は煮沸の場を特定できなかったことがある。ここでは竪穴住居から離れた場所での煮沸行為が行なわれたのではないかと推測したが、詳細は不明である。

ウ 集落の位置付け

以上の推測から、本遺跡はどのような遺跡であると捉えられるであろうか。まず、基本となりそうな特徴を再確認しておく。

- A 集落は2軒前後の竪穴住居からなる。そして、この少数の住居は植物加工などの加工作業を屋外で協業している可能性もあり、個別住居の独立性が弱いように思われる。
- B 集落は全体としてみれば長期の継続的居住がなく、1時期のきわめて短期に営まれた遺跡とみられる。しかし、少なくともその間に3時期の変遷が推測される。この変遷のなかで作業空間・居住空間を移動させて居住のスペースデザインを変えている。
- C 石器の種類を比率でみると植物加工工具、石匙・刃器類に代表される加工工具が高く、その一方で狩猟具は低率である。
- D 遺跡の立地は従来あまり知られていなかった低地内の微高地に立地する。

以上の特徴のなかでBの短期に営まれて継続性がない点、Aの集団としては小規模である点は県内で知られていた当該期の集落様相と同じである。従って、従来指摘されるように本遺跡も移動を繰り返すなか

で営まれた遺跡の一つであると考えられる。しかし、Dに挙げた低地内微高地に立地する点は従来あまり知られていなかった知見となるだけに、改めて検討しておく必要がある。特に、移動を繰り返すことは狩猟・採取活動のなかで食料資源の枯渇を防止し、有効に食料資源を利用するシステムとされることから、DはCの特徴にも関連しているとみられる。つまり、本遺跡の立地選択に当たっては生業のあり方に規定される側面があるとも思われる。このことは周囲の立地環境の異なる同時期の遺跡における、生業を表現する石器組成を比較することで明らかにされうと思われるが、今回は十分な比較ができなかったので調査結果を中心に憶測ながら1つの解釈を述べることにしたい。

本遺跡の石器群組成は石匙・刃器類、植物加工具を中心とし、狩猟具は低調となっている特徴が明らかにされた。詳細はすでに述べられているので省略するが、ここでは上記の特徴的な3種の石器について若干補足しておく。

まず、比率の高い植物加工と刃器・石匙類からみよう。植物加工具とみられる台石は遺跡内で3個採取された。すべて同一時期に存在した確証はないが、住居数を大きく上回る数値ではない。従って、集団規模が小さいことに起因するかもしれないが、協業にしても大規模な集中的植物加工とはいえないと思われる。このように住居址屋外で台石が検出された県内の例では下弥堂⁽¹¹⁾・塚田遺跡⁽¹²⁾・高風呂遺跡⁽¹³⁾などがある。しかし、高風呂遺跡では個別住居内での台石と屋外の特設場所で集中して台石が検出された2者が併存する様相も知られる。いづれにしろ、堅穴住居内と屋外で植物加工が行なわれる形態があるものの、屋外での植物加工は認められるようである。そして、台石数を本遺跡と比較すると本遺跡が他遺跡を圧倒する量とはみられない。したがって、本遺跡が他遺跡よりもかなり植物加工に比重を置くものとは言えず、当該期通有に見られる比重の置かれ方であるともできよう。このことは縄文時早期よりも相対的に植物加工具の率が高くなっているとはいえ、大きな集落構造の変化にまで至らないと思われる。

次に刃器類である。本遺跡での刃器類のあり方は遺構外では特定場所に集中する傾向はあまりなく、S B 2002・2003で多く出土している。このS B 2002・2003出土例では土器のように使用不能になる条件が認定しにくいことや、出土状況の記録をとっていないため、廃棄なのか放置なのか判断できていない。したがって、植物加工のように加工場所や労働のあり方についてはほとんど不明である。しかも、刃器や石匙類については多目的の利器⁽¹⁴⁾として捉えられることから、特定生業へ限定して捉えることは難しい。ここでは石器組成の時代的な特性をもちつつも、若干他遺跡よりも刃器類の数は高いことを確認しておく。

次に量的に少ない狩猟具についてみる。本遺跡で出土した狩猟具は非常に少ない。しかし、石鏃の少なさの捉え方に問題も残される。本遺跡の石器組成比率としてみれば石鏃が極端に少ないことは明らかであるが、先にみたように植物加工具・刃器の実数では必ずしも他遺跡をはるかに凌駕する量とはなっていないとみられる。つまり、植物加工は一般的、刃器類は若干多めだが極端な傾向としては見られず、むしろ狩猟具が少ないことのほうが本遺跡の特徴と見られる。しかし、これも石鏃未製品が出土していることや、製品は少ないながらも石鏃に多用される黒曜石の原石が多く得られていることを考えれば、実態として石鏃使用が少ないと言いつても言い切れない面もある。つまり、使用に供されたか、持ち去られたものが多いために遺跡に残された石鏃が少ない可能性もある。しかし、やはり未製品の実数が少ないことは間違いなく、しかも黒曜石原石が多いとはいえ、確実に石鏃製作に供された確証もないため、ここでは石鏃使用の場面が少なかったと考えておいたほうが妥当と考える。なお、蛇足であるが、刃器類・石匙と石鏃の製品残存数は、各種石器に使用されている同質の原石・剥片の数の傾向とは一致していない。この理由は判然としませんが、移動を繰り返すなかで、移動前に次の居住地での活動に備えて道具を製作し搬出するパターンがあって、次の移動先であまり必要としない石器は選択的に廃棄されてしまうのだろうか。そうすると刃器類の多さはそれなりに遺跡での生業を反映していると思われるかもしれない。これは、あくまでも憶測に過ぎず、

確証はなにもない。

こうしてみると、本遺跡の石器組成からみた生業のあり方は総体的には刃器・石匙類、植物加工具が増加する時代性をもちつつも、石鏃の極端な少なさと刃器・石匙が若干多い傾向がみられると思われる。しかし、その特徴が時代性のなかで捉えられるか、本遺跡固有の特徴と断定できるか今一つ明確にしえなかった。このどちらとみるかによって遺跡立地の評価は大きく異なることが予想される。すなわち、時代性としてみれば立地に直結した固有の生業が行なわれていたとはみられないし、後者であれば本遺跡立地に則した特徴的な生業が行なわれていたと見られる。ここではどちらが妥当かは断定しきれないが、やはり石鏃の少なさは狩猟の力点を置かれ方が低かった可能性は高い。そうした場合に別の生業として中型刃器にみる植物採取と石鏃に力点を置かない狩猟、あるいは漁業が想定される可能性もでてこよう。さらに、漁業とすると網錘が出土していないので網を使用しないで骨角器を使用した漁業とみられる。そういった点では砥石の存在は気になる点である。このように考えると本遺跡は漁業に力点が置かれる生業であったと推測することも、全く空想ではないとも思われる。なお、漁業・植物採取に依拠した生業としても、それが長期にわたって継続しない理由は季節性、13層の形成に関連しての地形変化、あるいは時と場合により別の生業に比重が置かれる生活へ時と場合によって選択されたとも想定できる。

以上より、本遺跡の立地選択の理由は明らかにできなかったが、漁業や植物採取などの特定生業によって選択された可能性が若干高いあり方ではなかったかと思われる。ただし、この場合でも立地場所によって專業的・集中的におこなわれたのではなく、比重の置かれ方の違いとして見れる。さらに遺跡の継続性が長くないことから、漁業・植物採取を主体的におこなう生業のあり方が当地域全体に共通するというよりも、いくつかある選択枝の一つであった可能性がある。あまり歯切れのよいまとめ方ではないが、上記の推測は周辺遺跡との比較のなかで、改めて検討される必要があることは申し述べておく。

なお、上記から導き出されたイメージは小集団が立地環境に則して居住地を移動させる様相と思われたが、一見すると究めて閉ざされた世界のようにもみえる。しかし、多様な石材の搬入や土器の形からも情報や物が交流していることが知られており、この居住の仕方と外域との交流のあり方が問題となる。これについては今回、どのような交換、あるいは流通システムがあったのかは明らかにしえなかった。河川に面して立地することは生業だけではなく、このような交流のあり方にも関連していたのだろうか。

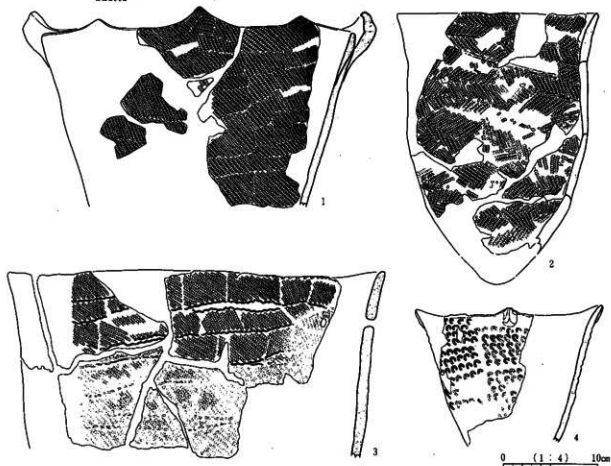
註

- 1 御代田町教育委員会1994「下弥堂」
- 2 御代田町教育委員会1994「塚田遺跡」
- 3 茅野市教育委員会1986「高風呂遺跡」
- 4 境隆1994「石匙の使用痕観察」『下弥堂』御代田町教育委員会

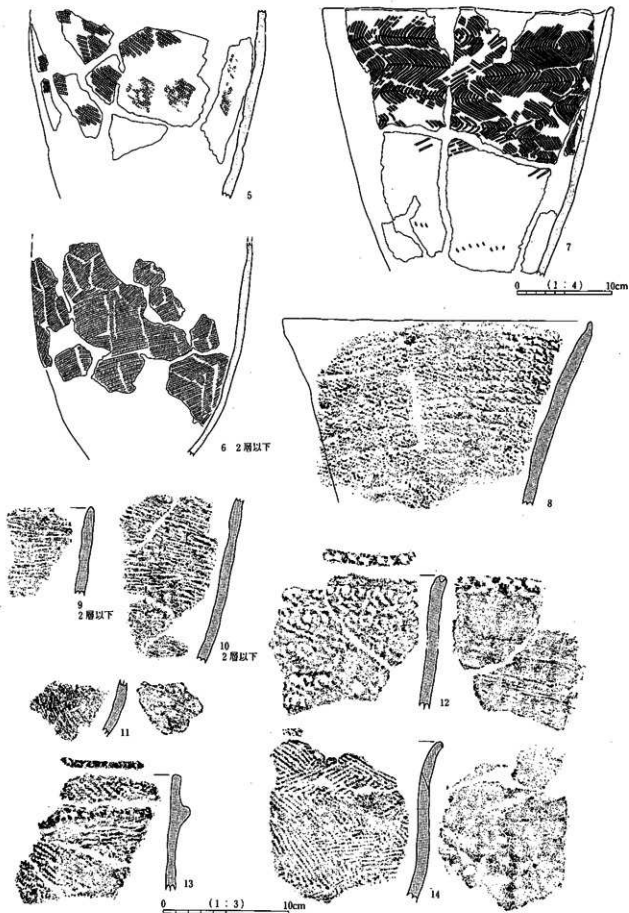
S B2001



SB2002



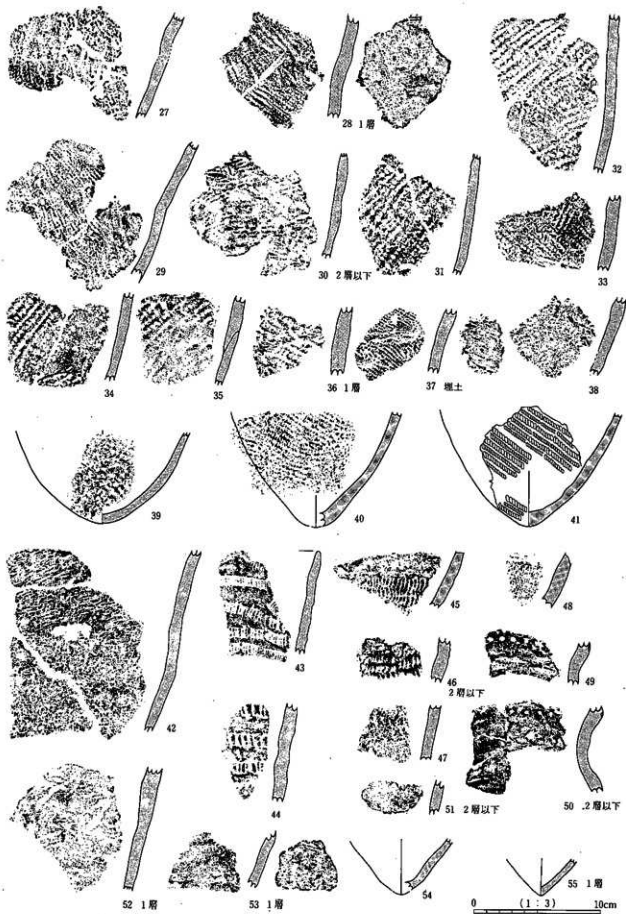
第45図 縄文土器1 (S B2001・2002-1)



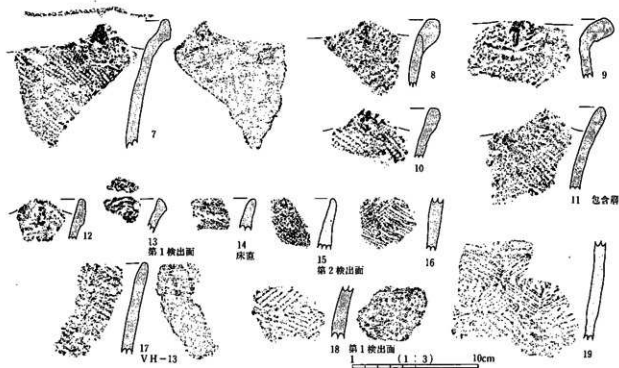
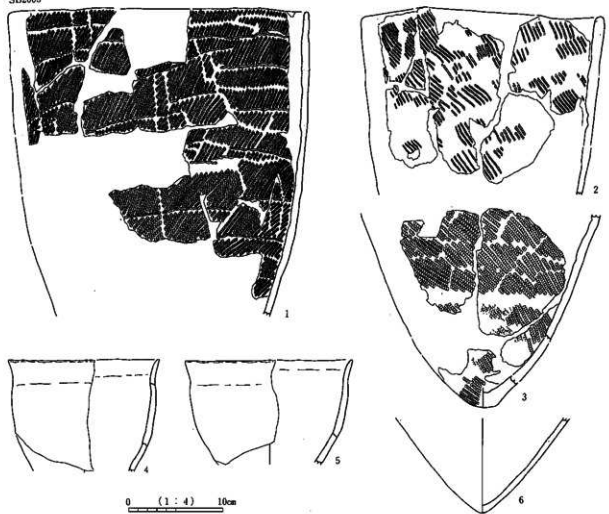
第46図 縄文土器 2 (SB2002-2)



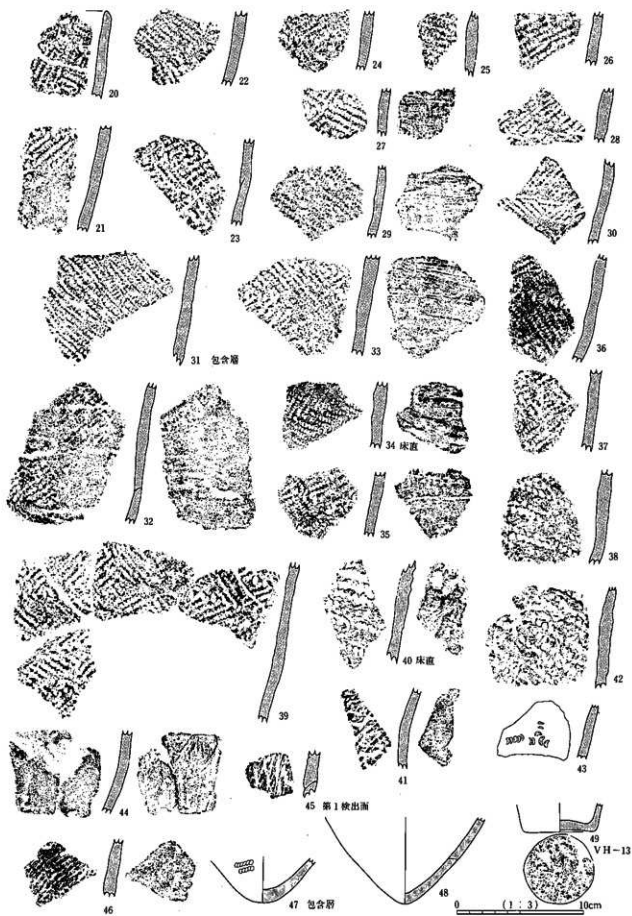
第47圖 縄文土器 3 (SB2002-3)



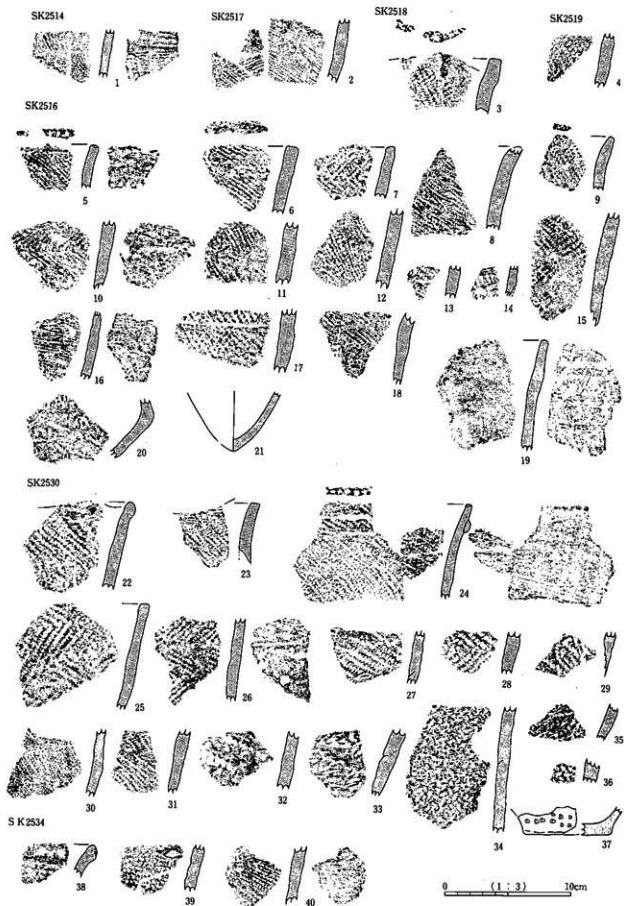
第48圖 縄文土器4 (SB2002-4)



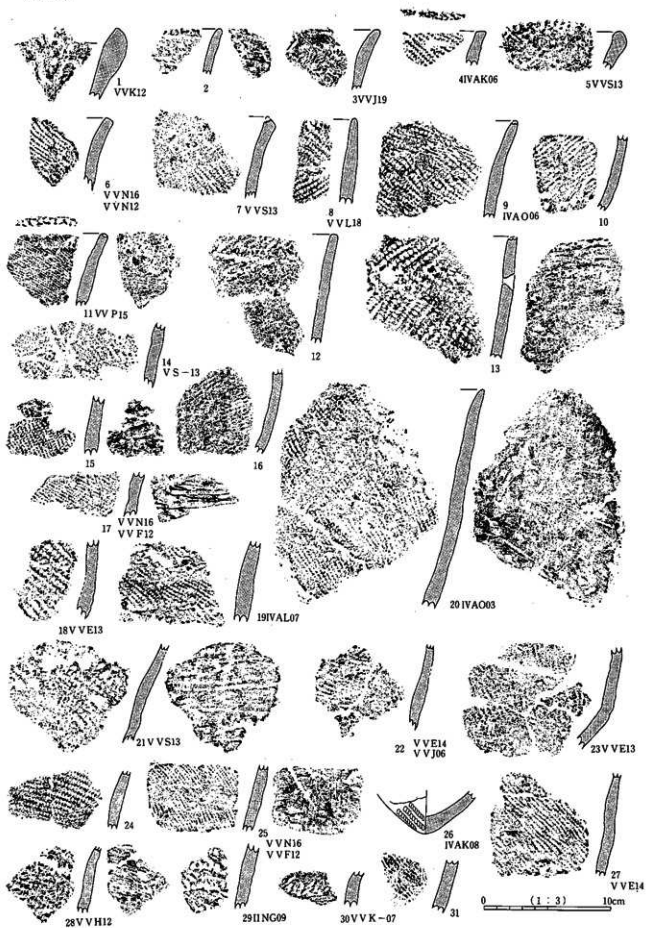
第49図 縄文土器5 (SB2003-1)



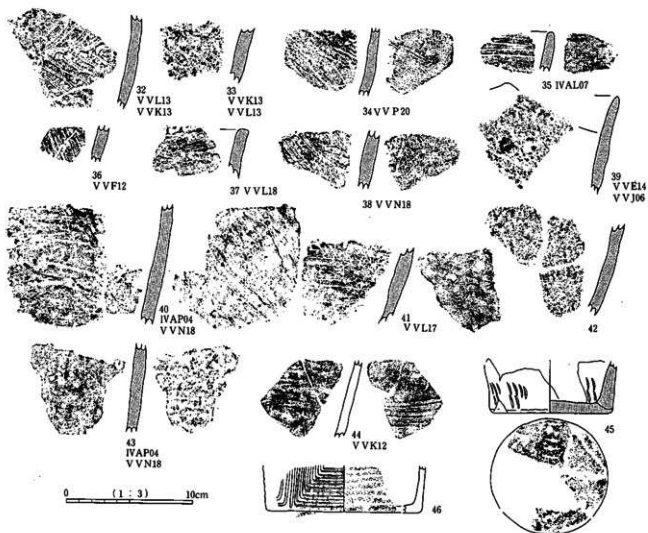
第50圖 繩文土器6 (SB2003-2)



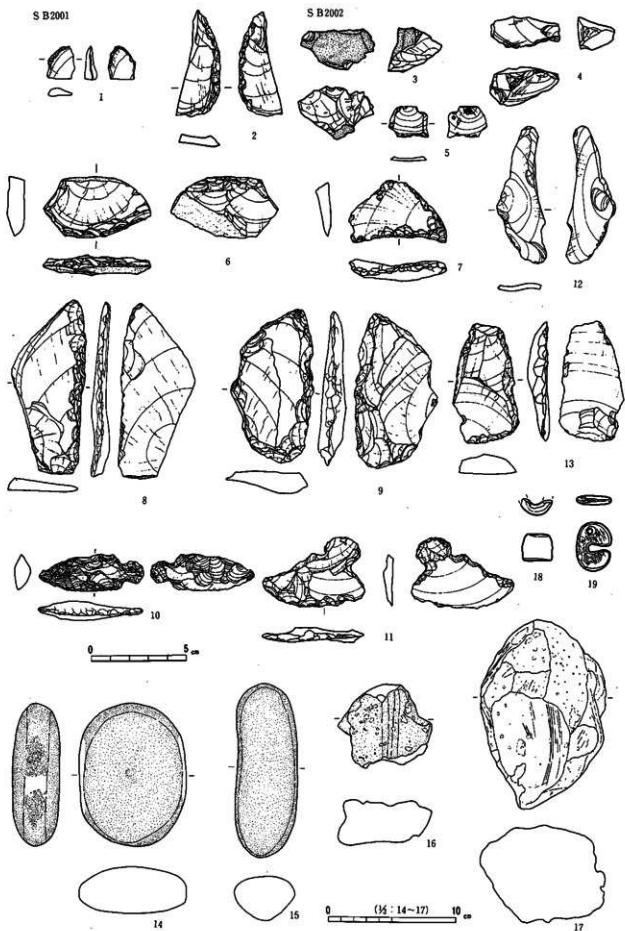
第51図 縄文土器 7 (SK)



第52圖 繩文土器 8 (繩文包含層-1)

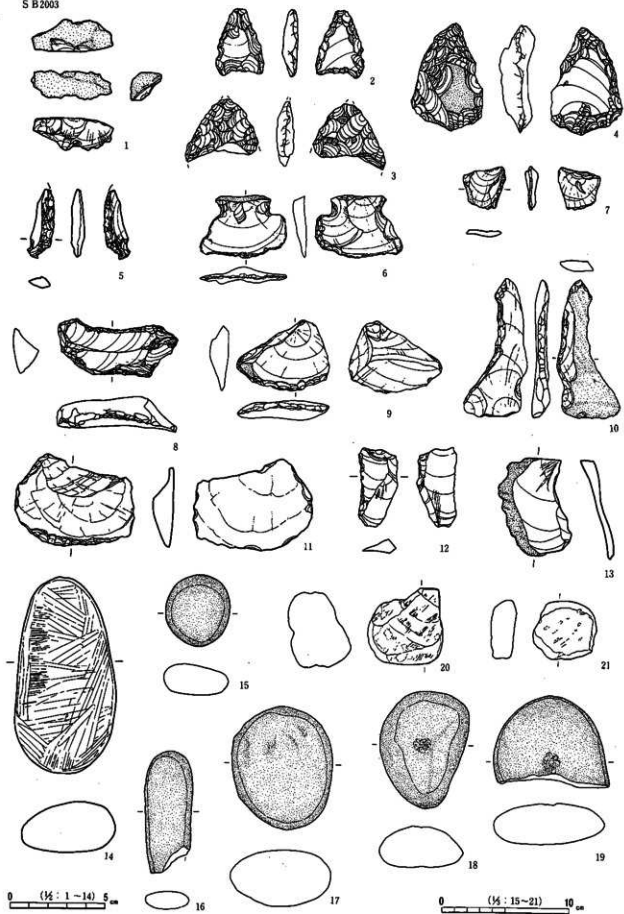


第53圖 繩文土器 9 (繩文包含層-2、古墳時代SK混入)

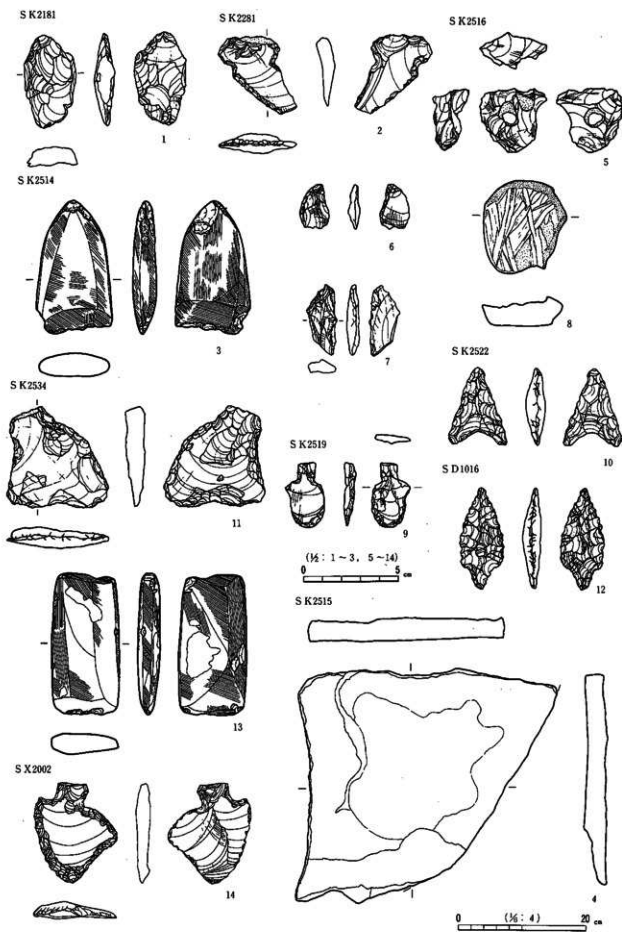


第54圖 遺構内出土石器 1

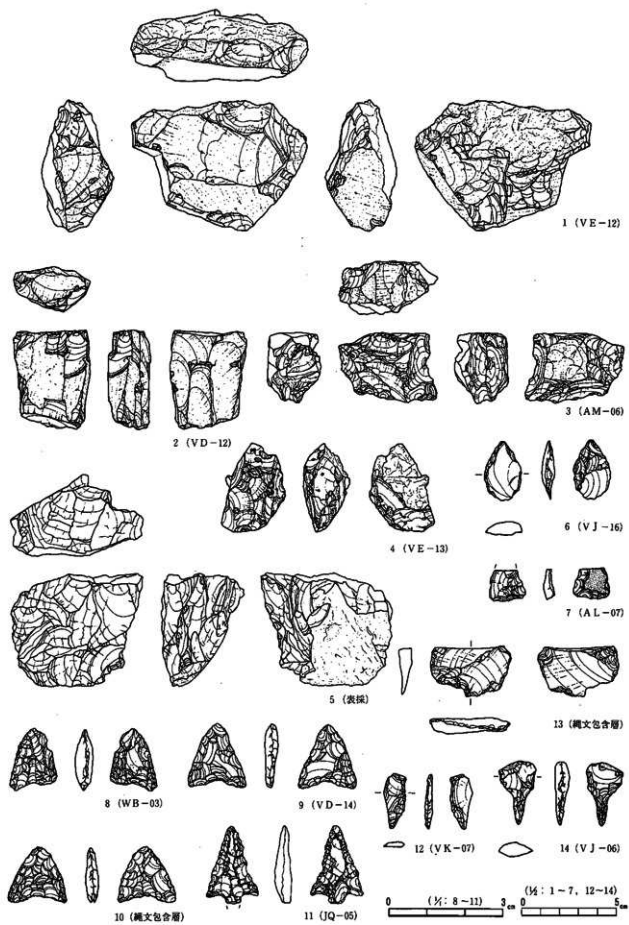
S B 2003



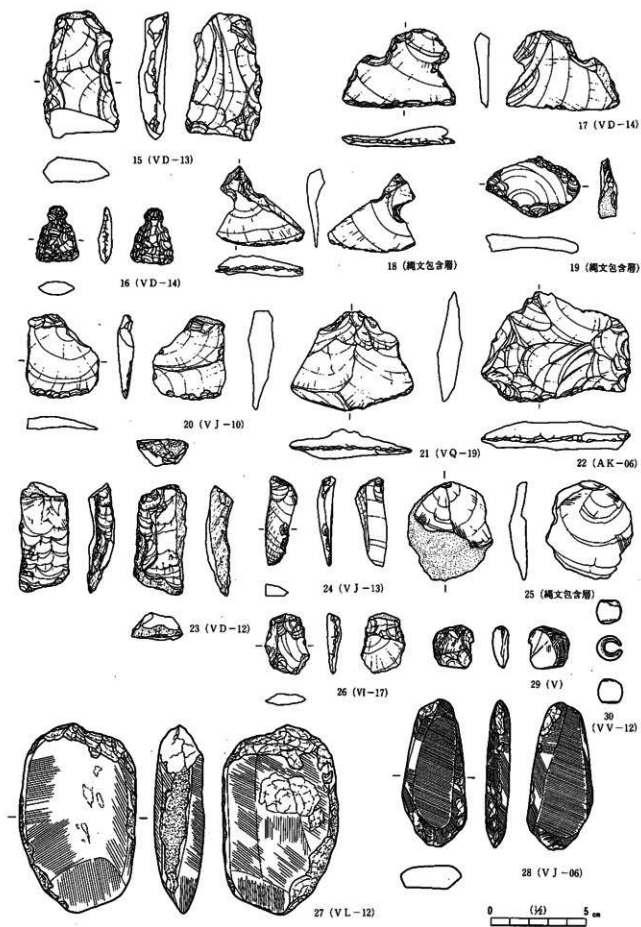
第55圖 遺構内出土石器 2



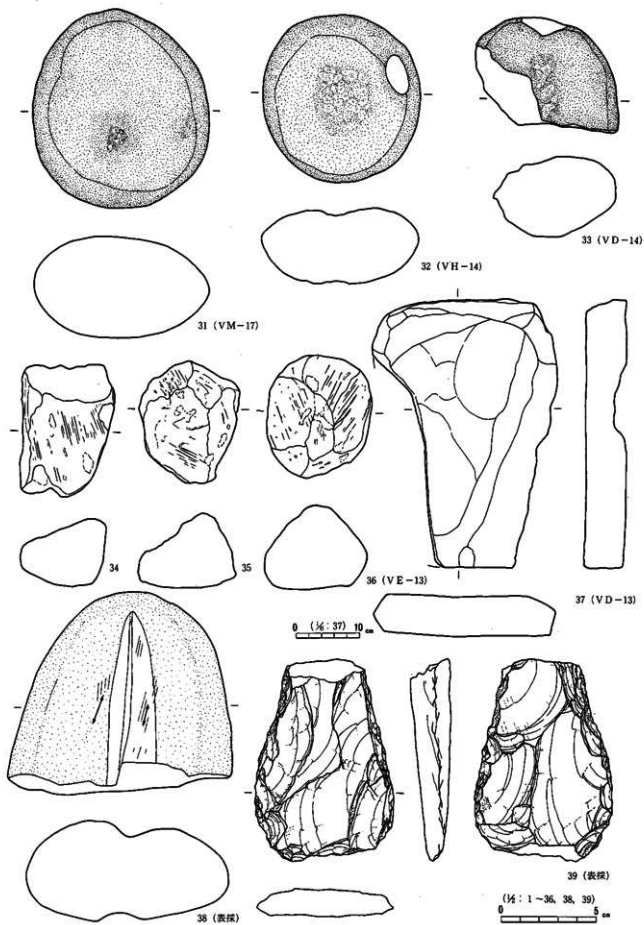
第56図 遺構内出土石器 3



第57圖 遺構外出土石器 1



第58圖 遺構外出土石器 2



第59図 遺構外出土石器 3

第2節 微高地の弥生時代・古墳時代前期(古墳祭祀域を除く)の遺構・遺物

1 調査の概要

本調査域からは埋没した微地形として広域な低地と微高地が2カ所で検出された。本節では⑥区南西微高地の弥生・古墳時代の遺構・遺物と、調査域中央部④・⑤・⑦・⑧・⑩区にまたがる中央微高地の弥生時代の遺構・遺物について扱う。

南西微高地は⑥区II-LからQグリッドの調査区内に岬状に突出する形状で確認された。約400mと小範囲ながらも弥生時代後期後半に帰属する竪穴状遺構1軒、土坑14基、土器集中1基と古墳時代前期の土坑が1基検出され、遺構内外から30箱余の土器が出土した。中央微高地は路線幅80mで東西約250mにわたって確認された微高地であるが、検出された主な遺構は古墳時代前期の祭祀跡や古代・中世の居住跡であり、弥生時代の遺構は微高地西側縁辺部の④区(II D22グリッド)から土器集中1基が検出されたのみである。ただしこの微高地からは古墳時代前期の遺構群の中から複数の弥生後期の土器片や少数ではあるが弥生中期の土器・石器、更には縄文時代晩期の土器片が出土している。約40mの低地を挟んで位置する両微高地は、出土遺物の時期、土器構成器種の上で共通点が多く、遺構こそ明確に検出されていないが、各時代・時期で同一の性格をもつ遺構群があったことが推測される。

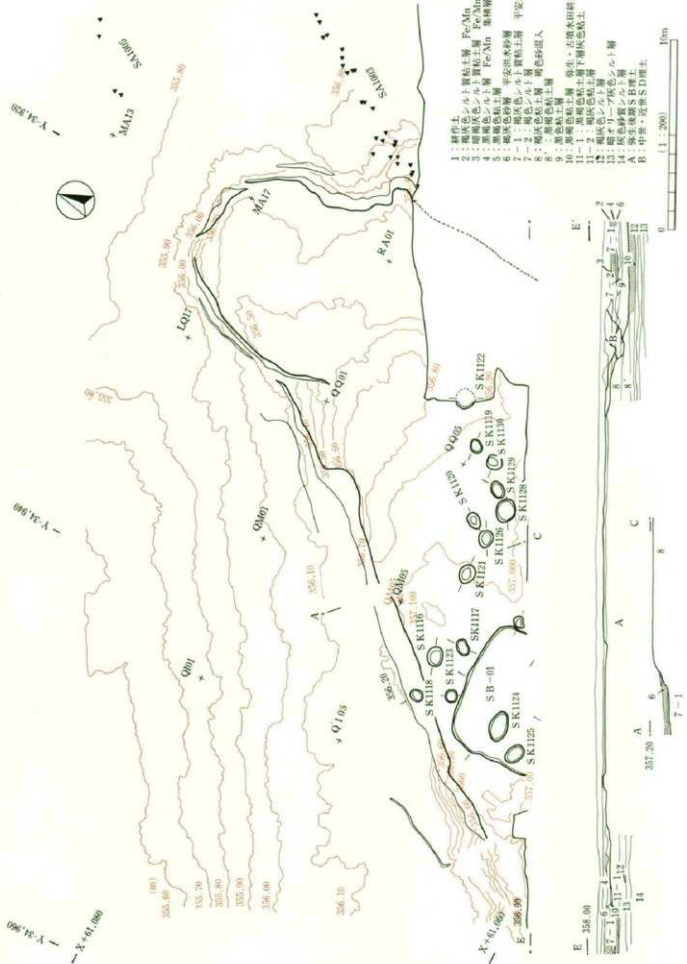
2 南西微高地の遺構(第60図、P L 4)

本微高地は⑥区周囲のトレンチ掘削の際に、南西城において多量の弥生土器が検出されたことにより確認された。微高地で検出された弥生後期の遺構面と隣接する低地における該期土層との比高差は約2mであった。遺構検出面は基本層序8層の褐色粘土層上面としたが、表土層と遺構埋土が近似した土質(砂質褐色粘土)であったため遺構平面プランが十分に確認できず、複数の弥生後期の土器破片が検出面より上に露出する状況で土坑、竪穴状遺構が確認された。したがって土坑の深さは少なくとも出土土器上面からあったものと認識し、土坑埋土上部が未検出であった土坑に関しては土器出土から底面までの計測値を深さとした。本微高地には出土遺物、遺構の重複状況から少なくとも3時期にわたる遺構が確認されたが、検出面は同一である。また遺構は検出されなかったが弥生中期前半から後半の土器が数片収集された。

(1) 弥生時代後期の遺構

S B 01 (第61・67・68図 P L 4)

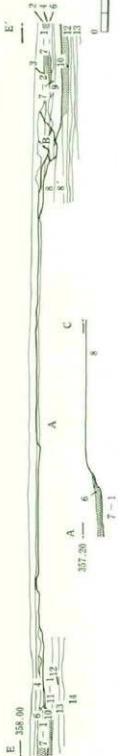
微高地南西隅に位置し、南側約1/3は調査区外のため全容は不明である。中央南寄りにはSK1124、SK1125と重複し、両土坑が本址床面を抜いている。形状・規模：東西に長軸をとる6.8×5.2mの隅丸長方形のプランをもつ中型の竪穴状遺構である。南西コーナーに歪みがあり複数の土器がまとまって出土していることからこの位置に土坑が重複していた可能性がある。埋土：15~20cm厚の自然堆積層である。褐色粘土に細粒砂が多量に含まれ、上層には後世の水田に伴う酸化鉄、マンガンの集積層が認められた。SK1124・1125と重複するが、両土坑の埋土が極めて近似した土質であったため、床面直上まで本址内埋土として掘り下げを行なった。床面：硬化した床が部分的に確認されたが、全体的に軟弱で貼り床は認められなかった。SK1124・1125の底面の掘り込みが床を壊して検出され、本址が土坑に先行する遺構であることが確認された。施設：炉、柱穴は検出されず、焼土、炭化物も出土していない。遺物の出土状況：床面から浮いた状況で多数の土器が出土し、大半の土器は検出面と同一レベルで確認された。壺、高杯、鉢が個体としてまとまっており、甕の破片が数点あったのみである。第66図No11の高杯は住居中央部に杯部が、住居南西SK



第60図 南西微高地弥生後期遺構全体・コンター・土層断面

- 1: 緑粘土
- 2: 暗褐色シルト質粘土層 Fe/Mn 集積層
- 3: 暗褐色シルト質粘土層 Fe/Mn 集積層
- 4: 暗褐色シルト層 Fe/Mn 集積層
- 5: 暗褐色粘土層 Fe/Mn 集積層
- 6: 暗褐色砂層 平沢洪水砂層
- 7: 暗褐色シルト層 質粘土層 平安木田耕土層
- 8: 暗褐色粘土層 暗色砂混入
- 9: 暗褐色粘土層
- 10: 暗褐色粘土層 弥生・古畑木田耕土層
- 11: 暗褐色粘土層 弥生・古畑木田耕土層
- 11-1: 暗褐色粘土層 弥生・古畑木田耕土層 下層 灰色粘土
- 12: 暗褐色粘土層
- 13: 暗褐色シルト層
- 14: 暗褐色シルト層
- A: 弥生後期 S B 埋土
- B: 弥生後期 S D 埋土

0 10m
1 : 200



1125上に脚部が出土して両者が接合したものである。この接合状況と2基の土坑が本址埋土と中層まで同一にしている状況から、本址構築時に伴う土器はなかつと判断される。また北西コーナー付近にまとまって出土した土器群は、遺構未検出であったが土坑遺物としてとらえられる。時期：出土土器が弥生後期を下るのがなかったことから、周辺にある土坑群よりも若干古い弥生時代後期後半に属する遺構とされる。

SK1124 (第61・66図)

微高地南西隅に位置し、SB01と重複している。形状・規模：1.5×0.95mの東西を長軸とする楕円形プランで、底面は平坦である。出土土器から底面までの深さは25cmとなる。埋土：褐色粘土に細粒砂が多量に含まれている土層で、SB01の埋土との判別はつかないが、底は黒褐色粘土となり砂粒を含まない土層である。遺物の出土状況：大形壺の底部が高杯杯部の上に重なり合う状況で出土し、西隅に壺頸部があった。壺底部の上から管玉2点、底部と頸部の中間北寄りに、ガラス小玉と歯(第48表・210図 P L79)が出土した。これらの土器は完形個体に復元されなかったが、土器棺である可能性が高い。歯は鑑定により12歳前後の女性である可能性が高いとされた(付章第3節)。遺物は全てSB01の床面より高いレベルからの出土であった。

SK1125 (第61・69図)

微高地南西隅に位置し、SB01と重複している。形状・規模：1.1×0.75mで南東-北西を長軸とする楕円形プランとなり、底面は平坦であった。出土土器から底面までの深さは15cmとなる。埋土：褐色粘土に細粒砂が多量に含まれている土層で、SB01の埋土との判別はつかないが、底は黒褐色粘土となり砂粒を含まない土層である。SK1124と同一の埋土である。遺物の出土状況：底南西寄りに広口壺が逆位のまま完形で出土しSB01の床面と同一レベル上から歯が数点出土した。歯は鑑定によりSK1124と同様に12歳前後の女性のものであった(付章第3節)。また条痕文土器の破片が1点出土したが本址構築時に混入したものと判断した。

SK1127 (第61・70図 P L5)

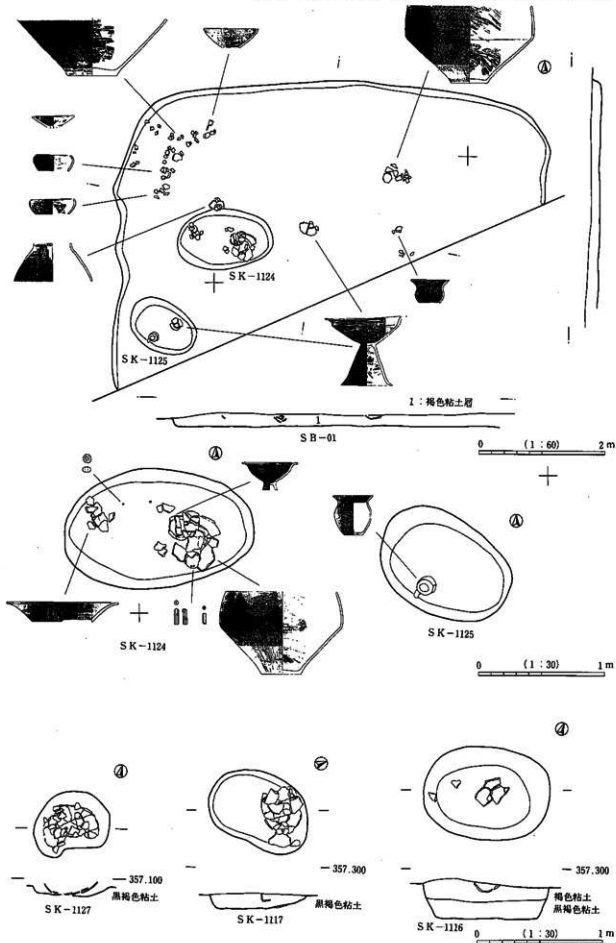
微高地中央部、SB01東側に隣接している。南側の一部が調査区外にかかり、全容は不明である。規模・形状：ほぼ東西方向に長軸をもつ60×45cmの不整形円形で、底面は摺鉢状となる。出土土器から底面までの深さは12cmである。埋土：細粒砂を少量含んだ黒褐色粘土の単一層。遺物の出土状況：大形甕が横たわり、壺の底部が上から潰れた状況で出土した。壺は胴部上半を欠いたまま用いられていた。甕内からの遺物出土はないが、これらを土器棺と判断した。

SK1117 (第61・67図 P L4)

SB01の北側に位置している。形状・規模：84×56cmの不整形楕円形状となり、底面は南に傾斜し傾斜面には土器胴部が貼りつく状況であった。最深度は12cmと浅い。埋土：残された埋土は細粒砂を多量に含んだ黒褐色粘土で、後世の耕作の影響が残る鉄、マンガンの集積も見られた。遺物の出土状況：検出面からSK1116と接合した甕の破片があるが、壺が1個体ほぼ完形で口縁部を東に向け北西寄りに横たわっていた。この壺は、底部を欠損するが2次整形による打ち欠きかどうかは不明であり、甕内からの出土遺物はなかつと、土器棺と判断した。

SK1118 (第61・67図 P L4)

微高地北西縁辺の低地寄りに位置する。形状・規模：100×73cmの楕円形であり、底面は平坦となる。検出面から30cm深さがある。埋土：2層に分層され、上層は自然堆積層で褐色粘土に細粒砂が多量に含まれている。下層は黒褐色粘土で砂粒が少量含まれる層であった。遺物の出土状況：土器は全て上層からの出土であった。大形である円筒形の甕はSK1117上層出土土器と接合した。本址構築時にしかかわる遺物は出土していない。



第61図 南西微高地整穴状遺構・土坑平面・断面 (SB01・SK1124・1125・1127・1117・1116)

SK1118 (第62・68図 PL4)

微高地北西縁辺の傾斜面に位置している。土坑約1/2は削られているが、土器の出土状況からは構築時も緩やかな傾斜面であった可能性がある。形状・規模：68×62cmで北東-南西に長軸をとる円に近い楕円形となるが、傾斜面であることから本来の長短軸は逆であったものと判断される。埋土：黒褐色粘土で砂粒が少量含まれる。遺物の出土状況：壺1個体が口縁部を南東方向に向け完形で横たわっていた。底部を欠損するが2次整形による打ち欠きかどうかは不明であり、壺内からの出土遺物はないが、土器棺と判断した。

SK1121 (第62・69図 PL5)

微高地中央部に位置する。形状・規模：長軸を東西にとる100×85cmの楕円形となり、深さ28cmで底面は平坦である。埋土：上層は自然堆積層で灰黄褐色粘土に細粒砂が多量に含まれている。下層は黒褐色粘土であった。上下層とも後世の耕作による鉄・マンガンの集積が見られた。最下層は黒色粘土で締まりが強い。遺物の出土状況：1、2層から複数の土器小破片が出土した。下層において壺の頸部及び胴部下半が、西側にまとまって出土していることからこれを土器棺と判断した。

SK1126 (第62・68図 PL5)

調査区南寄りに位置しSK1120と近接する。形状・規模：85×75cmの円形に近い楕円形であり、底面は摺鉢状の掘り込みで、土坑内出土の壺胴部の形状にあてはまり深さ20cmであった。埋土：黒褐色粘土で地山の暗褐色粘土に比べ砂粒分が少ない。遺物の出土状況：完存する壺が1個体口縁部を南西方向に向け横たわっていた。欠損部がなく、故意に打ちかかれた状況も見られなかった。また壺内から骨、歯などは出土していないが、土器棺と判断した。

SK1120 (第62・68図 PL5)

微高地中央部に位置しSK1126と近接する。形状・規模：90×65cmの北東-南西に長軸をとる楕円形となり、底面は摺鉢状で深さ25cmである。埋土：上層は自然堆積層で、灰黄褐色粘土に細粒砂が多量に混入している。下層は黒褐色粘土で砂粒を微量に含んでいる。明瞭に分層され上層は2次堆積である。遺物の出土状況：壺の胴部、高杯脚部の他複数の土器片が上層から出土した。高杯脚部内側に詰まっていた土が2層であったが、本址に直接かかわる遺物とするかは微妙である。

SK1128 (第62・70図 PL5)

微高地中央部に位置しSK1129と隣接する。形状・規模：117×98cmの北東-南西に長軸をとる楕円形となり、底は検出面から18cmの深さで平坦である。埋土：黒褐色粘土に細砂が少量混入しており土器片が多数含まれていた。遺物の出土状況：高杯、小形壺、台付壺が重なりあって中央部から北寄りに集中出土した。また高杯杯部1個体がやや離れた南西壁近くに単独であり、土器集中の下から底部を欠いた壺がほぼ完形で出土した。壺内からの遺物出土はないが土器棺とされ、そのほかの土器も大半が接合し略完形となることから、土坑内に同時に遺棄されたものと判断した。

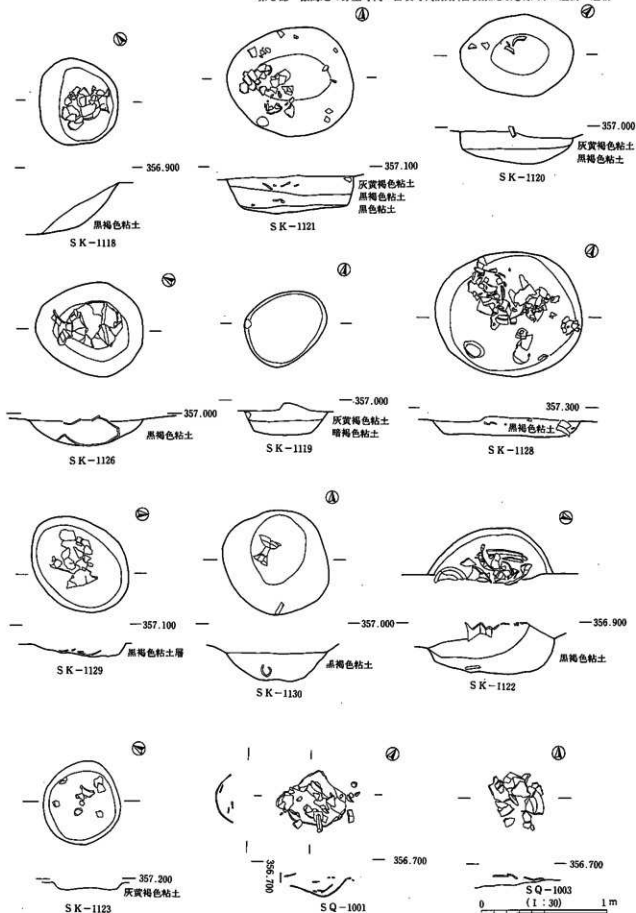
SK1129 (第62・68図 PL6)

微高地中央部に位置しSK1128、SK1130と隣接する。検出面が低かったため南西壁が曖昧となった。形状・規模：87×68cmの北東-南西に長軸をとる楕円形で、底面は平坦である。検出面からの深さは12cmと浅い。埋土・遺物の出土状況：黒褐色粘土層の中に、横向きに壺が内面を上にして出土した。壺は口縁部を北東方向に向け、底部を打ち欠いていた。胴部約1/2半面の壺であったため、上部がなく土器内からは何も出土しなかったが、土器棺と判断した。

SK1130 (第62・71図 PL6)

微高地中央部、SK1119とSK1129の中間に位置する。形状・規模：81×80cmの隅丸方形で、底面は摺鉢状になる。検出面から25cmの深さとなる。埋土：砂を少量含んだ黒褐色粘土である。土器棺を出土したほか

第2節 微高地の弥生時代・古墳時代前期(古墳築成域を除く)の遺構・遺物



第62図 微高地土坑・土器集中平面・断面

(SK1118・1121・1120・1126・1119・1128・1129・1130・1122・1123
SQ1001・1003)

の土坑に比べ粘性が強い。遺物の出土状況：埋土中には土器破片が含まれず、完形の高杯が横たわった状況で出土した。高杯周辺の土坑底面からは管玉2点、ガラス小玉14点(第210図)が出土し、南壁に砥石1点(第205図24)の出土をみた。この状況から高杯はかの遺物が遺棄された可能性がある。

SK1119 (第62・68図 PL5)

微高地中央部、SK1130とSK1122の中間に位置する。形状・規模：68×52cmの北東-南西に長軸をとる卵形となり、底面は平坦である。検出面から25cmの深さとなる。埋土：上層は自然堆積層となり、灰黄褐色粘土に凝灰岩礫を含んだ細粒砂が混入している。また上部には鉄・マンガンの集積も認められる。下層は暗褐色粘土で粘性が強い。遺物の出土状況：上層から甕の完形個体が逆位で出土したほか、小破片の土器片も全て上層からの出土であった。このため本址に直接伴う遺物はないと判断した。

SK1122 (第62・69図 PL5)

微高地中央部に位置しSK1119と隣接する。調査区周囲の法面掘削時に検出されたため約1/2が削られる。形状・規模：南北に長軸をとる楕円形状で102×80cmの規模があったと推定される。出土土器から底面までの深さは40cmであり、底面は平坦となる。埋土：混入する砂粒の違いから2層に分層された。上層は黒色粘土で粗い砂粒が混入し、下層は黒褐色粘土に細粒砂が少量混入していた。遺物の出土状況：底面に大形の壺が横向きにあり、壺上面の破損破片と混じり合って複数の土器片が出土した。本址に伴う土器は底面に貼り付いて出土した大形壺と南寄りであった高杯杯部であり、壺は底部を打ち欠いた土器棺であったと判断した。

SQ1003 (第62・71図)

微高地東寄りに単独で位置しているが、周辺からは多数の土器片が収集された。本址は約50cm四方の範囲に壺、高杯の土器片が集中して出土したものである。土器底面は基本層序8層であり、掘り込みは確認されなかった。出土状況は壺の内面、高杯杯部の内面が上を向いて検出され、この2個体に器種が限定されることから微高地上に分布する土坑群と同一の性格であった可能性が高い。

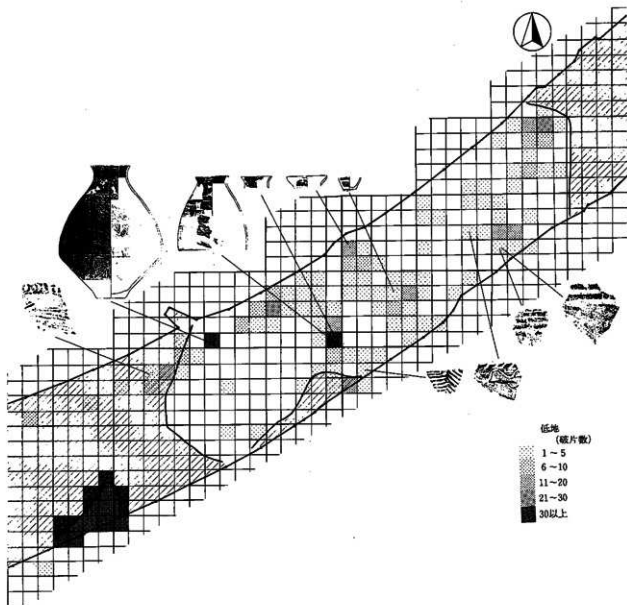
イ 古墳時代前期の遺構

SK1123 (第62・75図)

微高地縁辺のSB01北側に隣接しているが、遺構相互の重複関係はない。形状・規模：62×60cmの円形で底面は平坦となり、検出面からの深さは8cmと浅い。埋土：自然堆積層で、灰黄褐色粘土に細粒砂が多量に含まれている。遺物の出土状況：凝灰岩礫と混じって古墳前期後半の甕口縁部がまとまって出土した。本微高地では該期に帰属する遺構は本址のみであるが、中央微高地に検出された古墳前期の土坑群と関連する遺構である。

3 中央微高地の遺構

本微高地は、地表面下3.5mの縄文時代前期の集落跡に始まり、2.5～3mの間層を挟んで古墳時代前期、古代、中世の祭祀・居住跡が展開している。弥生時代の遺構は後期に帰属するSQ1001があるだけで、古墳時代前期の遺構面と同様の褐色シルト(⑤-1区6層)上で検出された。SQ1001以外当該期の遺構はなかったものの土器片の集中出土をみた地点がいくつかあった。これらは後世の遺構群によって本来の位置にないものであるが、器形復元が可能な土器もいくつかあり、壺、高杯など器種が比較的まとまっている。また小破片ではあるが縄文晩期、弥生中期の土器片が数点出土している(第65・72～74図)。



第63図 微高地周辺弥生土器出土分布図(1:200)

SQ1001(第62・71図 PL6)

微高地西側縁辺部に位置し、褐色粘土と平安砂層が混合した土層中から壺の約1/4が横向きに潰れた状態で出土した。掘り込みは確認されず、土器底面に窪んだ状況も見受けられなかった。壺内からの出土物はなかったが、底部まで赤彩された大形の壺であることから南西微高地上の土坑群から出土した土器と同様の土器棺と判断される。

4 小結

(1) 弥生時代後期の遺構群の性格について

南西微高地の調査範囲は岬状に突出した一部であり、微高地全体の規模や各時代の遺構状況については不明であるが、調査区外の南側りんご畑からは弥生後期後半の土器が多量に収集され、JR稻荷山駅周辺まで高まりが確認される。このことから南西微高地には広く弥生後期の集落域が展開していたことが想像

され本調査域は低地との境界線として1つの生活空間領域をもっていたものと考えられる。

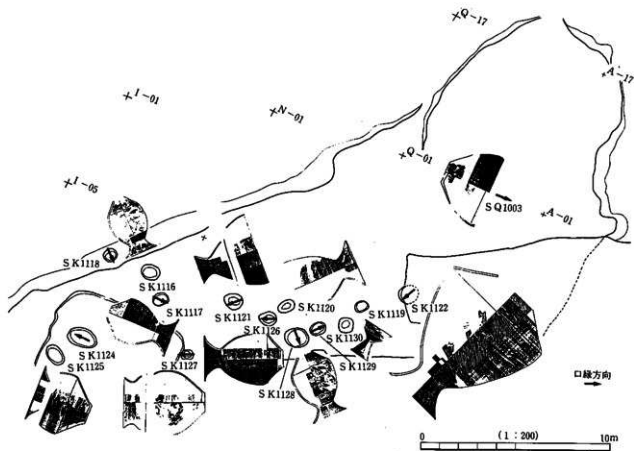
本調査域からは竪穴状遺構1基のほかは、長軸60～150cmのほぼ楕円形となる土坑群のみが遺構の重複をもたず検出された。これら土坑の状況を整理すると、埋土が検出面の土質と同一であること、内部から人骨・玉類の出土があったこと、土器棺とされる大形壺・甕が土坑内に横たわっていたこと、出土大形壺には底部を欠くものが多かったことなどが特長として上げられ、この土坑が土墳墓としての性格をもっていたことが分かる。従って本調査域の空間利用が墓域であったことを示している。

中央微高地からは土坑が検出されず当該期の様相は不明な点が多いが、出土土器片の器種では壺が圧倒的に多かったこと⑦調査区出土の壺が大形壺に復元され、SQ1001と同様に土器棺であった可能性が強いことなどから南西微高地と同様に墓域として使われていたものと考えらる。

ア 土坑の配列と被葬者について (第64図・第18表)

土墳墓のなかで土器棺を用いたものは9基あり、SQ1003・SQ1001を含めると11個体の土器が埋葬施設となる。この土器棺の口縁部の方向及び土坑遺物として供伴した土器、遺物は第18表の通りである。

SQ1003を含めた南西微高地土坑群の配列は、微高地北西部に空白帯をもって弧を描いた分布を示す。また横倒しで出土した土器棺の口縁部方向を整理すると一定してないことが分かるが、1つとして弧に分布する中心部を向くものがないことが指摘できる。個々の土坑は隣接するものの重複関係がないことから墓域構成に規則性、制約があったことが窺える。墓域の配列を制約させた空白帯は④・⑥区の低地で



第64図 南西微高地土坑内出土壺の方向

ありプラント・オパール分析からは水田として利用されていた可能性が高い。つまり本微高地の墓域は生産領域と居住域の境界に位置するものである。

土坑内の遺物では、土器棺だけの埋葬ではなく高杯が伴うものが7基ある。高杯の出土状況は全て、杯部が上向きで、SK1130では土器棺はなかったものの完形高杯と管玉、ガラス小玉が供伴している。このことは高杯が埋葬の容器として重要な役割を担っていたことを示唆するもので、SK1130のガラス小玉の出土位置が頭部だとすると高杯が頭部にかかわる容器とされる。

墓域は南西の調査区外にも展開していることが予想され、本調査域から検出された僅か14基の土坑から被葬者の性格を明確に限定することはできない。ただ2基の土坑から装飾品類が出土したことは、同一集団のなかに特殊な人物がいたことが推察され、SK1124出土の歯が12歳前後の女性という鑑定結果からその人物像が浮かび上がる。また土器棺の法量は最大でも器高80cm程度で(SK1122)、大半は40～60cmの壺であることから、被葬者の主体が幼児から子供であった可能性が強い。

弥生時代後期後半の善光寺平南部地域の墓は、主体部の回りに円形もしくは方形に溝を巡らせた円形周溝墓が単独あるいは群をなして検出されている。篠ノ井遺跡群では周溝墓群を形成し中央主体部のほかに周溝内からも土器棺と思われる埋葬主体部があるが、土坑、土器棺が群をなしている状況はない。また当該期の土器棺を調査した事例も自然堤防上の遺跡からいくつかの報告があるがすべて単独であり、本遺跡のように複数ある状況は見られない。本遺跡の墓制は、生産域と居住域の境界部に位置する空間利用として土器棺、土壌墓という制約が働いたものと考えらる。

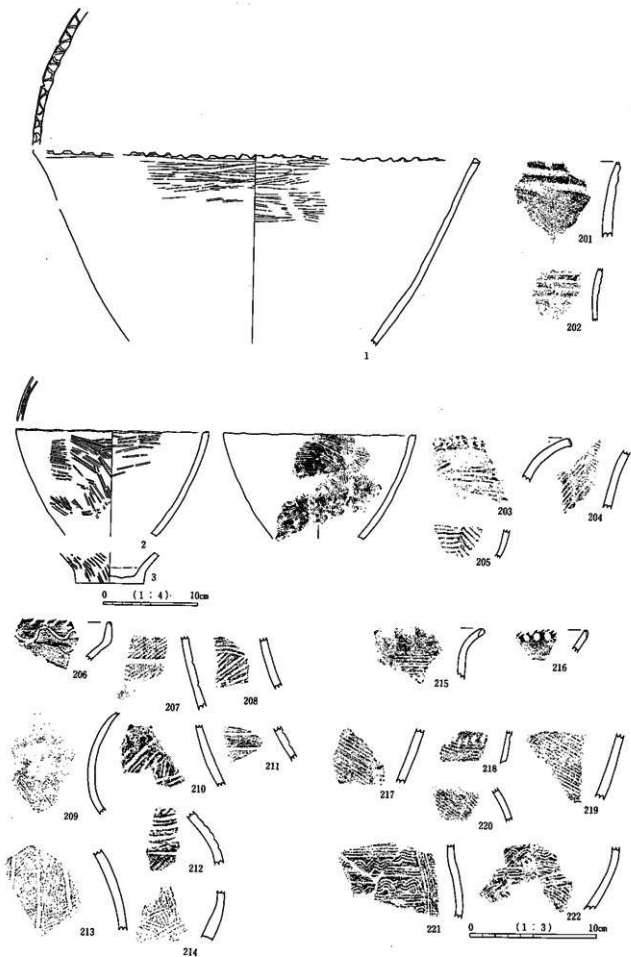
(2) 弥生時代後期以前の微高地の様相について (第63図)

中央微高地は、古墳時代以降の遺構密度が高いため収集された遺物から弥生時代後期以前の様相を推測する。⑦W14からは縄文晩期米式土器の鉢の口縁部2点、微高地縁辺からは条痕文系の甕の土器片が数点出土している。これらの土器群がこの微高地利用の初源とされるものである。

弥生中期後半の遺物としては栗林式土器の破片のほか、太形蛤刃石斧、石泡丁、横刃形石器、磨製石鏃が出土した。土器片の出土は多くなかったが多器種の石器群からは微高地東西に広がる同時期水田の集落として立地していたことが想像される。

第18表 土壌墓一覧

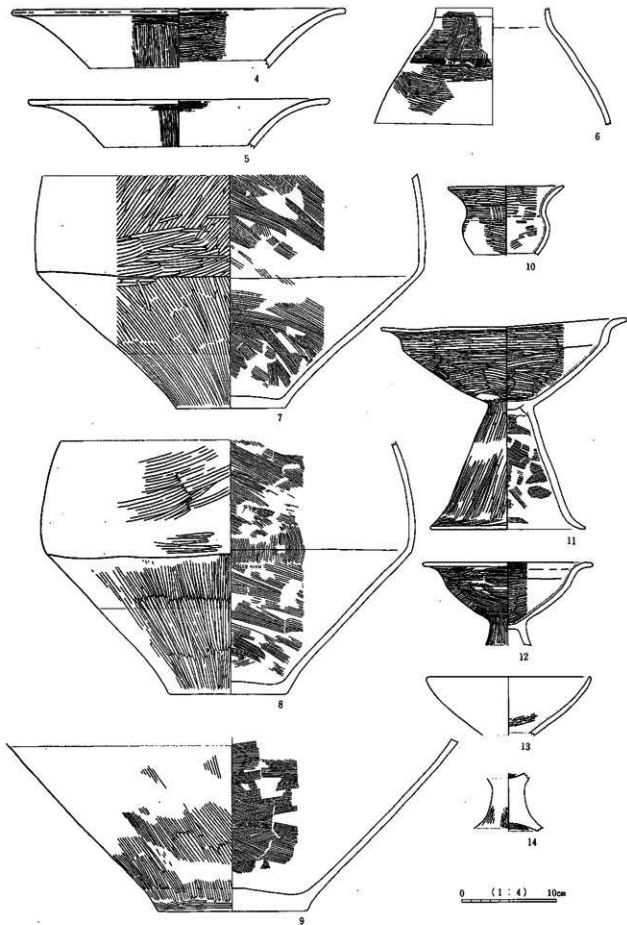
	土坑番号	土器棺	口縁部の方向	共存遺物及び出土状況
1	SK1124	壺	西	高杯…壺の底部付近杯部上向き ガラス小玉、管玉、歯
2	SK1125	—	—	広口壺、歯
3	SK1127	甕	西南西	壺
4	SK1117	壺	東	—
5	SK1116	—	—	—
6	SK1118	壺	南東	—
7	SK1121	壺	南西	高杯
8	SK1126	壺	西南西	—
9	SK1120	—	—	高杯
10	SK1128	壺	南東	高杯3…内1は壺の頸部脇上向き 鉢2…内1は壺の底部付近上向き 甕3
11	SK1129	壺	北東	—
12	SK1130	—	—	高杯…横位、管玉・ガラス小玉・磁石
13	SK1119	—	—	—
14	SK1122	壺	南南西	高杯…壺の頸部脇杯部上向き
15	SQ1003	壺	南東?	高杯…壺の肩部付近杯部上向き
16	SQ1001	壺	南西	鏢



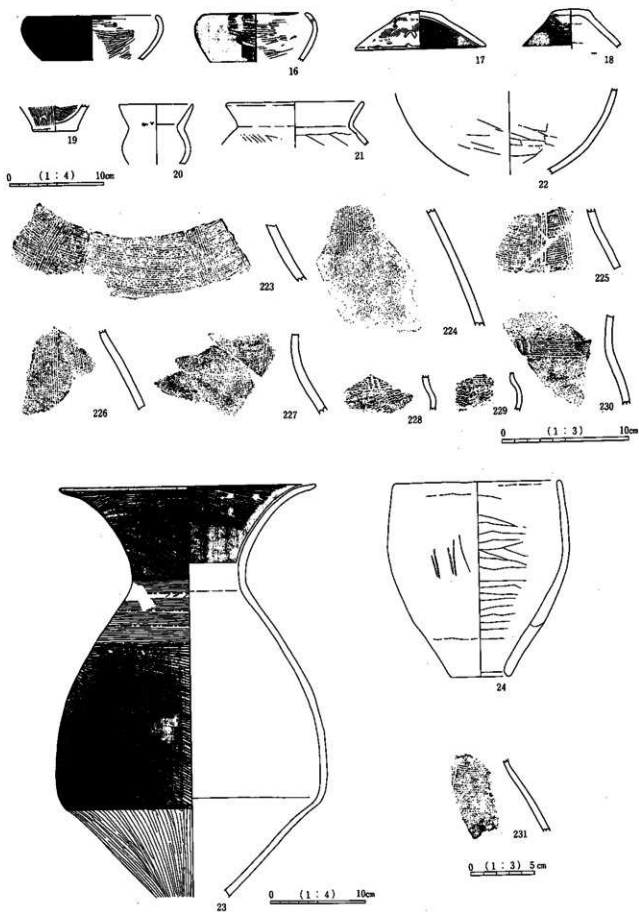
第65圖 東側低地出土繩文晩期・微高地出土弥生土器 1

SD4004・SA4002(1) SD1020(2・3) ②区(203-207) ④区(3・203-215)

⑥区(204-208・210-212・217-219~222) ⑤区(207-211・216-218) ⑦区(201-202-205) ③区(206)

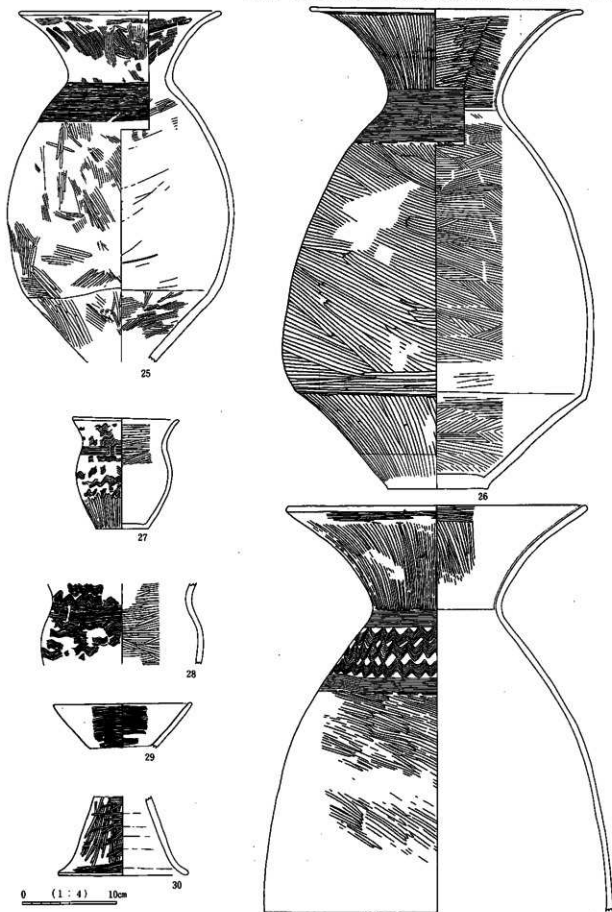


第66圖 微高地出土弥生土器 2
SB01(5·6·7·9~11·13·14) SK1124(4·8·12)



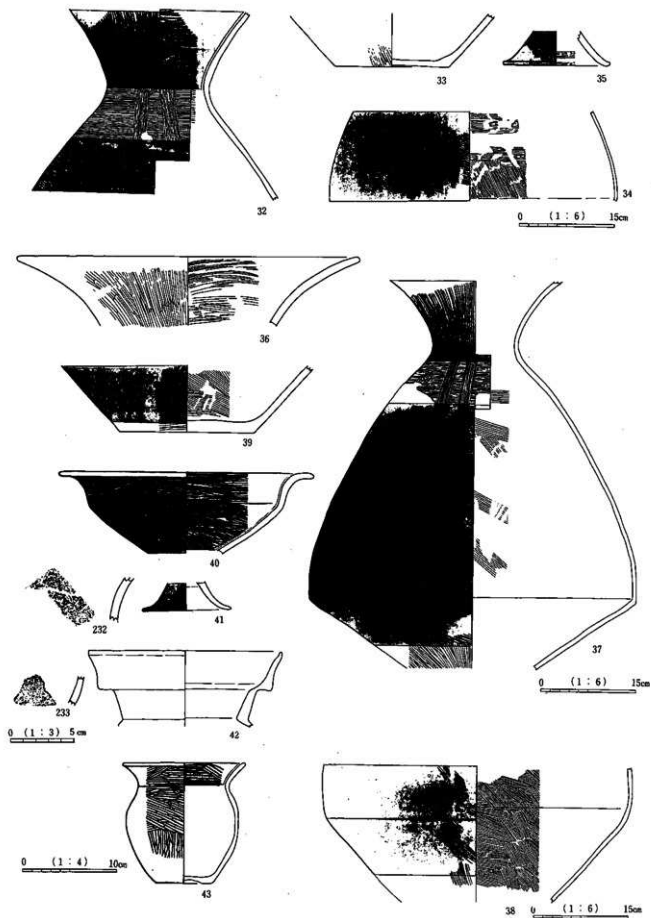
第67图 微高地出土弥生土器 3

SB01(15~22-223~230) SK1116-1117(24) SK1116(231) SK1117(23)

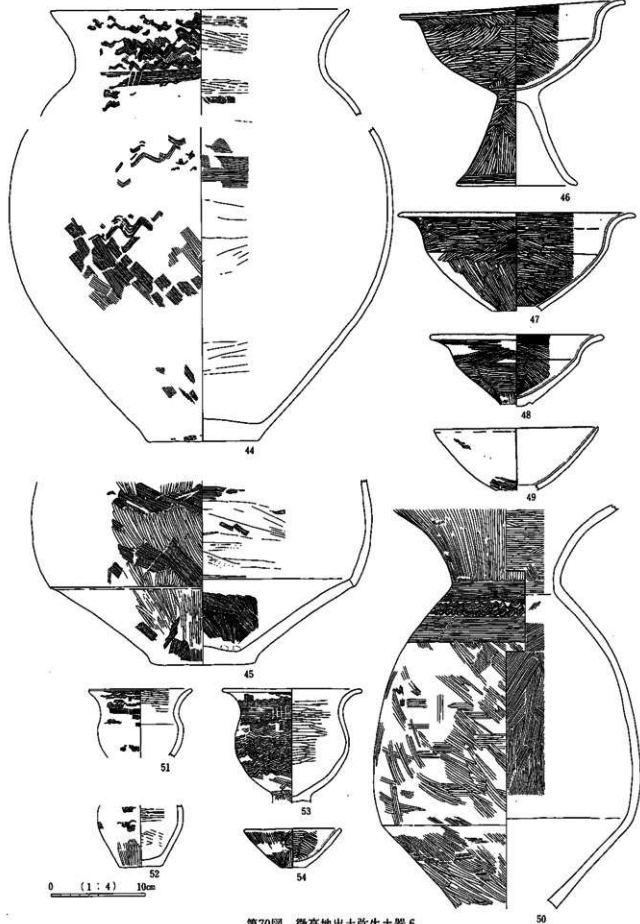


第68図 微高地出土弥生土器4

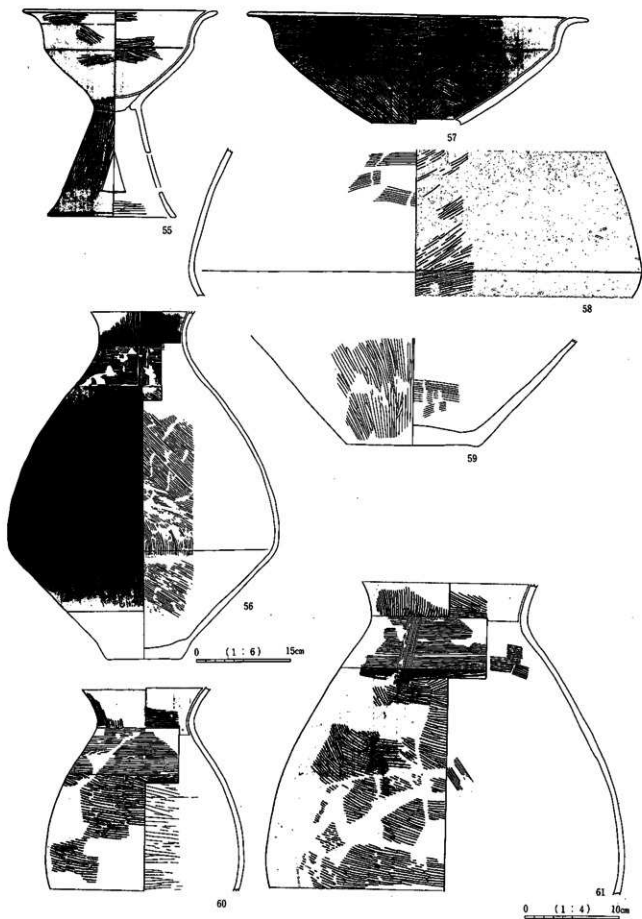
SK1118(25) SK1119(27) SK1120(28~30) SK1126(26) SK1129(31)



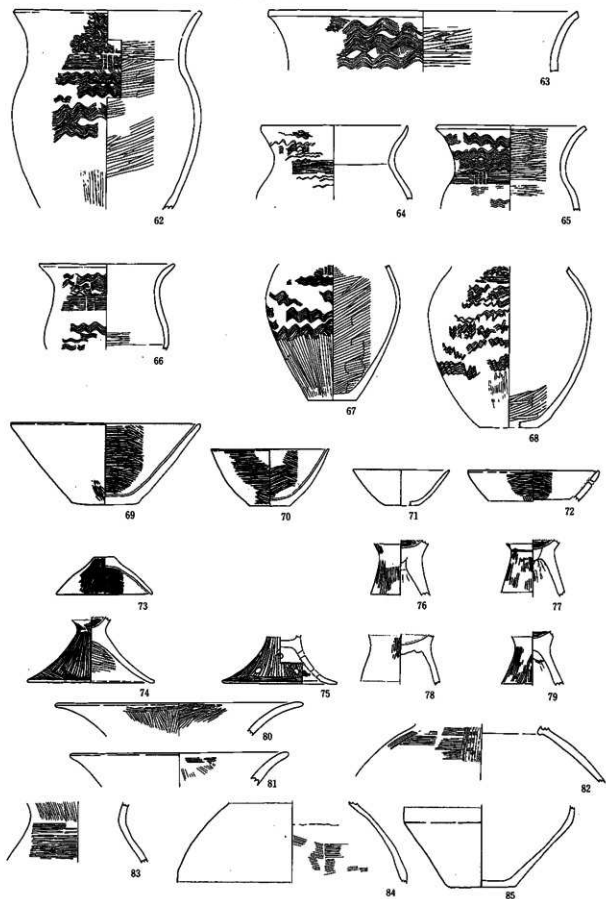
第69図 微高地出土弥生土器 5
 SK1121(32~35) SK1122(36~42·232·233) SK1125(43)



第70図 微高地出土弥生土器6
SK1127(44・45) SK1128(46~54)

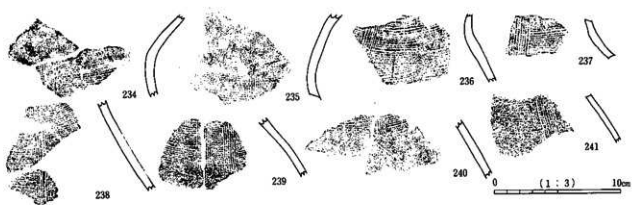
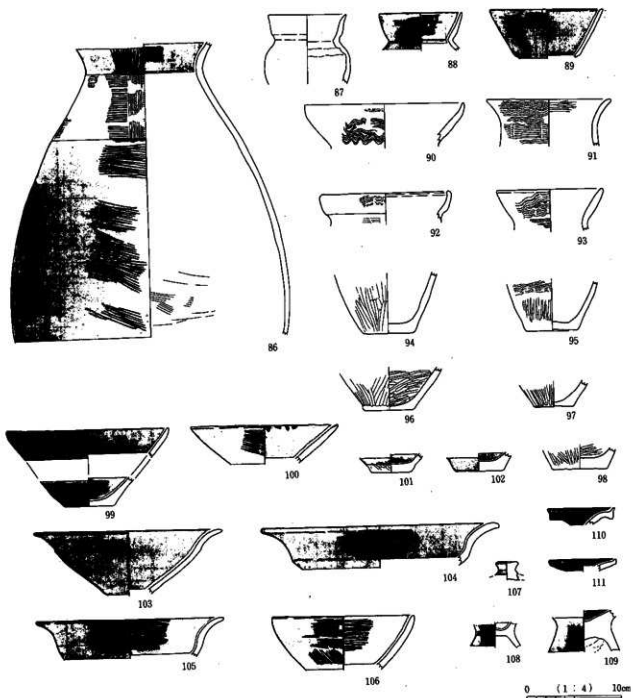


第71图 微高地出土弥生土器 7
 SK1130(55) SQ1001(56) SQ1003(57~59) ⑥区(60·61)



第72図 微高地出土弥生土器 8

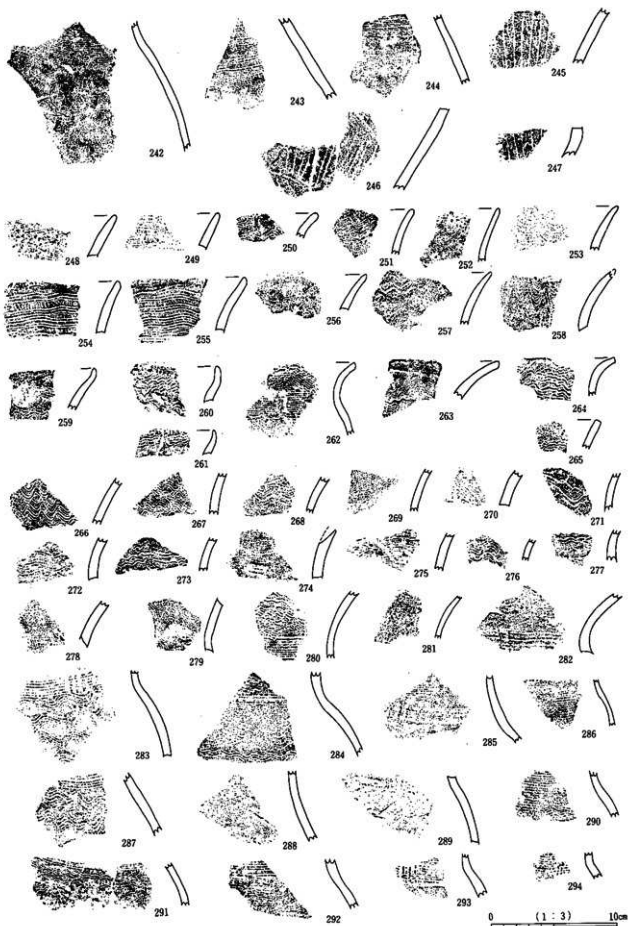
④区(62-63 67-79) ⑤区(82-83) ⑥区(64-65-67-79) ⑧区(80-81-84-85)



第73图 微高地出土弥生土器 9

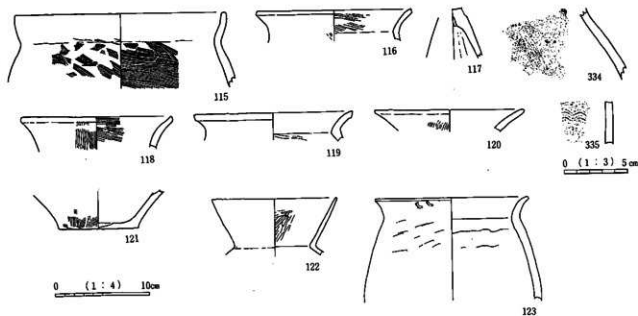
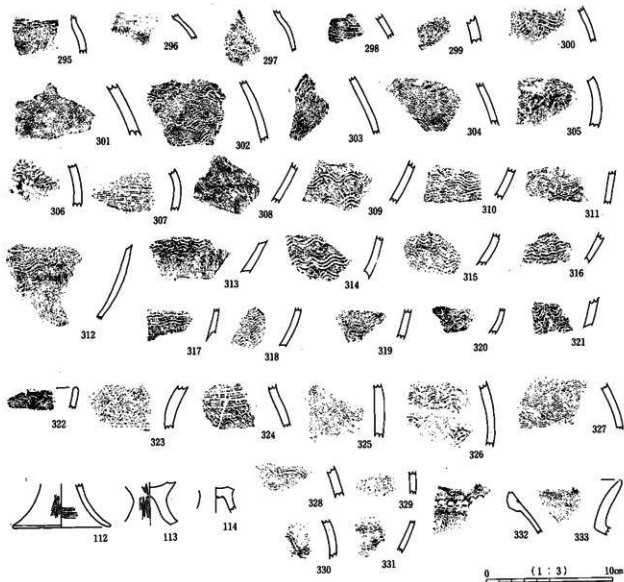
⑤区(90·93·96·97·99~102·105·106) ⑦区(86·89·91·92·108) ⑧(88·95·98·109)

⑩区(87·94·103·104·107)



第74图 微高地出土弥生土器10

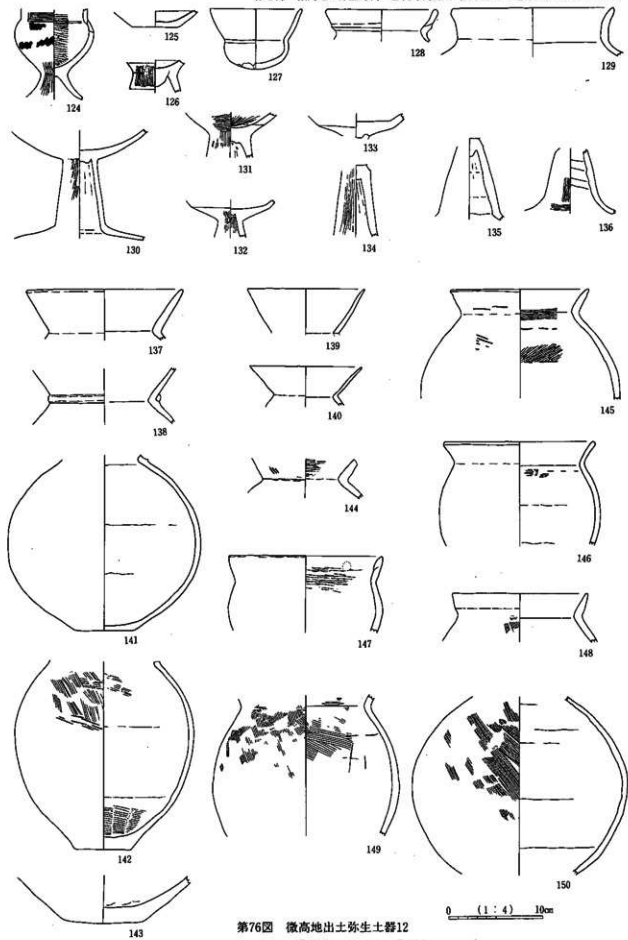
- ④区 (248·249·253·270·272·274·275·278·283·285·288·289·294) ⑥区 (245~247·263·286·291)
 ⑤区 (243·251·252·254·255·257·261·265~268·280~282·284·292·293) ⑦区 (242·259·279)
 ③区 (256·262) ⑩区 (244·250·258·260·264·269·271·273·276·277·287·290)



第75图 微高地出土弥生·古坟土器11

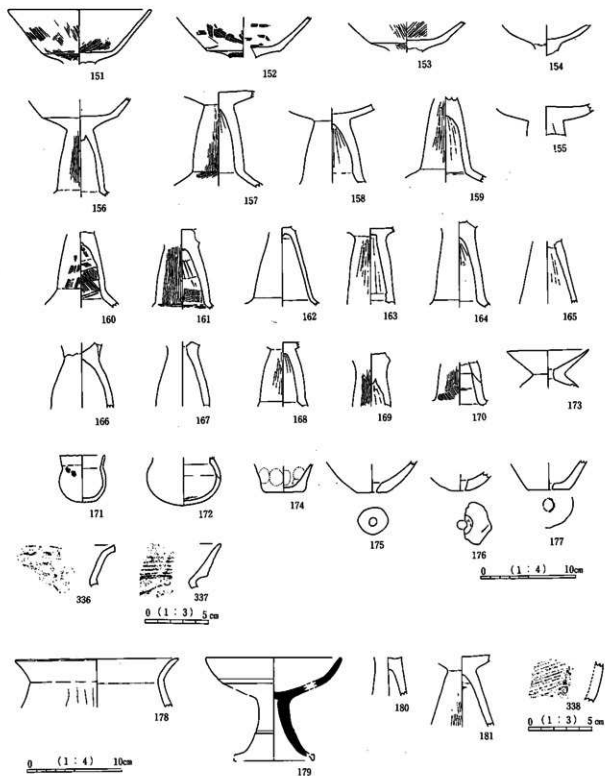
①区(112~117·322·334) ②区(118~121·335) ③区(3·203·315) ④区(207·211·216·218)
 ⑤区(204·208·210·212·217·219~222) ⑥区(201·202·205) ⑦区(206)

第2節 微高地の弥生時代・古墳時代前期（古墳祭祀域を除く）の遺構・遺物



第76図 微高地出土弥生土器12

④区(137~150) ⑥区(124~136)



第77図 微高地・平安水田層出土弥生・古墳土器13

④区(151~177・336・337) ①区(178-180) ③区(179-180) ②区(181)

第19表 弥生・古墳時代土器観察表1

色調 A…褐色～明褐色 B…橙褐色 C…灰褐色～灰色 D…暗褐色～黒褐色 E…茶褐色
 F…赤褐色 両者が見られるものはA Bなどと表示
 胎土 ㊸…石英・長石・チャート・茶色の小礫を多量に混入 在地の土器がもつ胎土
 ㊹…在地がもつ胎土を基本にしているが比較的精選されているもの
 ㊺…小礫がほとんど含まず精選された胎土をもつもの 輸入品と認識されるもの

○内は調査区

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存色	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
1	浅鉢	47.2			1/3	E	㊸	ナデ 口縁内側に角状工具による横 線	ナデ 擦痕	㊸ S D 4004 S A 4002
2	鉢	204			1/4	A	㊸	ハケ状工具2-3本による条痕 (斜位横位斜位) 口縁縁文 摩滅	同工具による条痕(横位) 摩滅	㊸ S D 1029 H18V
3	鉢		7.2		底部	A	㊸	ハケ状条痕 摩滅	条痕 摩滅	㊸ 2と同一個体 ㊸ S D 1020 H18V
4	壺	35.2			口縁部 1/4	BA	㊸	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	口縁部に黒線 ㊸ SK1124
5	壺	32.0			口縁部 1/4	BE	㊸	ミガキ→赤彩 摩滅	ミガキ→赤彩 摩滅	㊸ S B 01
6	壺				胴部 頸部	A	㊸	帯指線縁文→縦線文 →ミガキ→赤彩	摩滅	縁線の上から赤彩 ㊸ S B 01
7	壺		11.6		底部 胴部	E	㊸	ミガキ(斜位横位斜位) →赤彩	ハケ(底部)ナデツケ	㊸ S B 01
8	壺		12.8		胴部 底部3/4	A	㊸	ミガキ(横位斜位)→赤彩 →ナデ(底部)	ハケ	㊸ S B 01
9	壺		15.8		底部 2/3	E	㊸	ミガキ(横位横位斜位)→ 赤彩 ミガキ(底部)	ナデ→ハケ	内面底にへらの 条線 ㊸ S B 01
10	広口壺	12.4			1/3	E	㊸	雲状文→ミガキ(横位斜位) →ナデ(口縁端)→赤彩	ミガキ(横位斜位)→ 赤彩	縁線の下段赤彩 ㊸ S B 01
11	高杯	26.1	16.5	21.3	完存	A	㊸	ミガキ(斜位横位・杯部・腹中・唇 部・縁位・頸部)→ナデ(口縁端 縁部)→赤彩	ミガキ(斜位横位・杯部)→ 赤彩 ハケ(唇部)	㊸ S B 01
12	高杯	17.5			杯部	A	㊸	ミガキ(斜位横位)→ナデ (口縁端)→赤彩	ミガキ(斜位横位)→ ナデ(口縁端)→赤彩	㊸ S B 01
13	高杯	17.2			胴部	DE	㊸	ミガキ→ナデ(口縁端)→ 赤彩 摩滅	ミガキ→赤彩 摩滅	㊸ S B 01
14	高杯				複合部	E	㊸	ミガキ→赤彩	ミガキ(杯部)→赤彩 ミガキ (横位脚部)→赤彩	器形左右に歪 ㊸ S B 01
15	鉢	13.6			口縁部	A	㊸	ミガキ(横位横位)→ナデ (口縁端)→赤彩	ミガキ(横位横位)→ナデ (口縁端)一部分赤彩	㊸ S B 01
16	鉢	10.4			#	A	㊸	ミガキ(横位横位)→ナデ (口縁端)→赤彩	ミガキ(横位斜位)→ナデ (口縁端)一部分赤彩	口縁部円孔2 ㊸ S B 01
17	蓋	13.8		4.0	2/5	E	㊸	ハケ→ナデ(口縁端 口縁の縁り) →ナズリ(底)部分赤彩(口縁縁部 の他)	ミガキ(横位斜位) →赤彩	㊸ S B 01
18	蓋	4.0			1/2	E	㊸	ミガキ(横位斜位)→赤彩 (底部赤彩なし)	ナデ	㊸ S B 01
19	甕		4.9		底部	DE	㊸	ミガキ(横位) 底面ナデツケ による粘土塊状	ミガキ(斜位横位)	㊸ S B 01
20	小型 九底	7.8			1/3	A	㊸	ハケ(胴部)→ナデ 摩滅	ナデ	㊸ S B 01
21	甕	14.6			口縁部 2/3	A	㊸	棒状工具によるミガキか? ナデ	ケズリ→ナデ	内面輪状痕 ㊸ S B 01
22	壺				胴部下キ	CE	㊸	線状痕残存 摩滅	ハケ→ナデ	器形の歪 黒斑 ㊸ S B 01
23	壺	27.2			1/2	AE	㊸	帯指線縁文(口縁縁部)→ミガキ(横 位斜位・横位・斜位横位斜位・横位) →ナデ→赤彩	ミガキ(斜位)→ 赤彩 摩滅	SK11160 SK1117 胴部下部赤彩帯指 入加付の痕跡か ㊸ S K 1116 S K 1117
24	有孔鉢	17.7	6.0	20.4	2/3	A	㊸	へら線状痕 摩滅	へらナデ	黒斑一ヶ所 ㊸ S K 1116 S K 1117
25	壺	21.4		36.7	121号 完存	A	㊸	ハケ→横線文→ミガキ (口縁部)	ナデツケ→ハケ	黒斑二ヶ所 底面人 的の文様出か ㊸ S K 1118

第4章 各時代の遺構と遺物

弥生・古墳時代土器観察表 I

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
26	壺	28.9	10.6	50.5	完存	A	㊟	ミガキ(縦位・口縁部、肩位・腹位・胴部) 横線文(10本4段)→ナデ(胴部)→ナデ→赤彩	ハケ→ミガキ→ナデ→赤彩(口縁部)	頸部横線文上から下へ施文 ㊟SK1126
27	甕	11.2	55	11.9	〃	D	㊟	波状文→横線文(帯幅5本)→ミガキ(縦位)→ナデ	ナデツケ→ミガキ(横位)→ナデ	黒斑外周2ヶ所 内面1ヶ所 ㊟SK1119
28	甕				頸部1/5	E	㊟	波状文(胴部、口縁部)→横線文(頸部)	ミガキ(斜位横位)	㊟SK1120
29	鉢	14.6			1/6	E F	㊟	ミガキ(横位)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	㊟SK1120
30	高杯		13.6		脚部1/2	E A	㊟	ミガキ(縦位横位斜位)→ナデ→赤彩	摩滅	輪積痕 ㊟SK1120
31	壺	32.0			1/2	A	㊟	横線文(2段)→波状文(3段)→ミガキ→ナデ→赤彩	ミガキ 摩滅	㊟SK1129
32	壺				胴部	A	㊟	ミガキ(縦位・口縁部)横位・斜位→横線文(10本4段)→ナデ→横線文(10本4段)→ナデ→赤彩	ミガキ(斜位横位)→ナデツケ→赤彩	㊟SK1121
33	壺		11.6		底部	A	㊟	ミガキ? 摩滅	ミガキ 底部へらの条線残存	㊟SK1121
34	甕				胴部	B	㊟	ミガキ(斜位)→赤彩 摩滅	ハケ	黒斑1ヶ所 ㊟SK1121
35	高杯		11.3		脚部	A	㊟	ミガキ(縦位)→赤彩	ナデツケ→ハケ(横位)	㊟SK1121
36	壺	36.2			口縁部	A	㊟	ミガキ(縦位)→ナデ(口縁部)	ハケ→ナデ(口縁部)	口縁部黒斑1ヶ所 ㊟SK1121
37	壺				2/3	E	㊟	横線文(10本4段)→横線文(10本4段)→ミガキ(縦位・口縁部)横位・斜位→ナデ→赤彩	ハケ 摩滅	黒斑1ヶ所 口縁部、底面、人知の心臓部少 ㊟SK1122
38	壺				胴部	E	㊟	ハケ →ミガキ→赤彩 摩滅	ハケ(斜位)	黒斑1ヶ所 ㊟SK1122
39	壺		14.2		底部 2/5	A	㊟	ミガキ(縦位横位)→赤彩	ハケ	㊟SK1122
40	高杯	27.0			杯部 1/2	D E	㊟	ミガキ(斜位横位杯部)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(斜位横位杯部)→ナデ(口縁部)→赤彩	㊟SK1122
41	小型高杯	9.4			脚部 1/4	A B	㊟	ミガキ→赤彩	摩滅 一部に赤彩残存	㊟SK1122
42	二重口縁壺	10.4			口縁部 1/2	E	㊟	摩滅	摩滅	㊟SK1122
43	広口壺	13.0	5.9	12.6	完存	A	㊟	ミガキ(縦位斜位・口縁部、縦位横位・斜位、横位)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(斜位横位・口縁部)→ナデ(口縁部)→赤彩(口縁部)	黒斑2ヶ所 ㊟SK1125
44	甕	31.4			口縁部 胴部	A E	㊟	ハケ→波状文(10本4段)→横線文(3波止め)→ナデ(口縁部) 摩滅	ハケ(胴部・胴部)→ミガキ(口縁部)→ナデ(口縁部)→赤彩	黒斑 摩滅 ㊟SK1127
45	壺		11.0		底部 1/2	A	㊟	ハケ(斜位)→ミガキ(縦位)	ハケ(縦位斜位)→ハケ→ナデ(斜位)	黒斑1ヶ所 ㊟SK1127
46	高杯	23.9	12.8	19.4	完存	E	㊟	ミガキ(斜位横位縦位)→ナデ(口縁部、脚部)→赤彩	ミガキ(斜位横位)→ナデ(口縁部)→赤彩(杯部)	㊟SK1128
47	高杯	25.0			杯部 ほぼ完存	A	㊟	ミガキ(斜位横位杯部)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(斜位横位)→ナデ(口縁部)→赤彩	㊟SK1128
48	高杯	18.4			杯部 完存	A	㊟	ミガキ(斜位横位縦位)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(斜位横位杯部)→ナデ(口縁部)→赤彩	㊟SK1128
49	鉢	17.2			杯部	D E	㊟	ミガキ→赤彩 摩滅	ミガキ→赤彩 摩滅	㊟SK1128
50	壺				2/3	D E	㊟	ハケ→ミガキ(斜位横位縦位)→帯横文(波状文→横線文)	ハケ(斜位縦位)→ミガキ(縦位・口縁部)	口縁部底部人知の帯横線少 黒斑1ヶ所 ㊟SK1128
51	台付甕	10.8			胴部 3/4	A	㊟	波状文→横線文→ナデ(口縁部) 摩滅	ミガキ(横位) 摩滅	㊟SK1128
52	甕		4.6		胴部 1/3	E	㊟	波状文 下部 ミガキ(縦位)	ミガキ(斜位横位)	3次焼成をうけ摩滅 ㊟SK1128
53	台付甕	14.8			胴部 2/3	A	㊟	ハケ→ミガキ(縦位斜位)→波状文→横線文→ナデ(口縁部) 帯横文(7本)	ミガキ(横位)	内面接合部黒斑 ㊟SK1128

弥生・古墳時代土器観察表 1

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
54	鉢		2.6	4.1	2/3	A	⑩	ミガキ(横位横位)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(横位斜位)→ナデ(口縁部)→赤彩	黒斑2ヶ所 ⑤SK1128
55	高杯	20.6	13.6	21.4	完存	A E	⑩	ミガキ(横位横位・横位・横位・横位)→ナデ(口縁部・横位部)→赤彩	ミガキ(横位横位・横位・横位)→ナデ(口縁部・横位部)→赤彩(横位)	三角孔4つ ⑤SK1130
56	壺		11.6		口縁部欠損4/5	A	⑩	横位横位文(5単位)→流状文→丁字文→ミガキ(斜位)→赤彩	ハケ→ミガキ→赤彩	黒斑3ヶ所 ④SQ1001
57	高杯	36.2			杯部3/4	E	⑩	ミガキ(斜位横位杯部)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(横位横位・杯部)→ナデ(口縁部)→赤彩	⑥SQ1003
58	壺				胴部	E	⑩	ミガキ(斜位)→赤彩 摩滅	ハケ 摩滅	黒斑1ヶ所 ⑥SQ1003
59	壺		14.0		底部充弁	B	⑩	ミガキ(横位) 摩滅	ハケ 摩滅	黒斑2ヶ所 No.58と同一個体か ⑥SQ1003
60	壺				頸部 胴部	E	⑩	横位横位文→ミガキ(横位・横位・横位斜位・横位)→赤彩	ミガキ(横位・横位・横位斜位・横位)→赤彩(横位)	胴部黒斑 ⑥微高地
61	壺				胴部 胴部1/3	A	⑩	横位横位文→横位文→ミガキ(横位・横位・横位斜位・横位)→赤彩	胴部→ハケの条線を一部残しあとに摩滅 ミガキ(横位)→赤彩	胴部黒斑 ⑥微高地
62	壺	20.0			1/4	B D	⑩	ハケ→流状文→流状文→ミガキ(胴部下半)	ミガキ 摩滅	外面炭化物付着 口縁部平坦 ④H5 IV
63	壺	32.6			口縁部1/8	A E	⑩	ハケ→流状文(7本)→ナデ(口縁部面取り)	ハケ→ミガキ→ナデ	④H5 IV
64	壺	15.4			口縁部2/3	E	⑩	流状文→横位横位文→ナデ(口縁部)	摩滅	⑥AM17
65	壺	16.0			口縁部完存	D E	⑩	流状文(口縁部胴部)→横位文(横位)→ナデ(口縁部)	ミガキ(横位・口縁部)	口縁部平坦 黒斑2ヶ所 ⑥微高地
66	壺	14.4			1/5	E D	⑩	流状文→横位文(7~8本) 摩滅	ミガキ 摩滅	④HIV
67	壺		5.0		胴部完存	E	⑩	流状文→横位文→ミガキ	ミガキ(斜位)	黒斑2ヶ所 ⑥微高地
68	壺		6.4		1/5	D	⑩	流状文→横位文→ミガキ? 摩滅	ミガキ 摩滅	⑥AM17
69	鉢	20.0	7.0	8.7	1/2	A	⑩	ミガキ→ナデ(口縁部)→赤彩 摩滅	ミガキ(横位)→ナデ(口縁部)→赤彩 摩滅	黒斑1ヶ所 ⑥AM17
70	鉢	12.4	4.4	6.1	1/2	A	⑩	ミガキ(横位斜位)→ナデ(口縁部)→赤彩(底)	ミガキ(斜位)→ナデ(口縁部)→赤彩	⑥微高地
71	鉢	10.3	3.4		1/4	A	⑩	赤彩 摩滅	摩滅	底部黒斑 ⑥Q11
72	鉢	14.0			口縁部	E	⑩	ミガキ(横位横位)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(横位)→ナデ(口縁部)→赤彩	口縁部内孔あり2孔か ⑥微高地
73	壺	2.2	10.2	4.0	1/3	E	⑩	ミガキ(横位)→ナデ(口縁部)→赤彩	ミガキ(横位斜位)→ナデ(口縁部)→赤彩	⑥微高地
74	壺		13.5		1/2	E	⑩	ミガキ(横位斜位横位)→ナデ(底部)→赤彩	強いナデ(横位)→赤彩 上部ミガキ(斜位)→ナデ	⑥微高地
75	高杯		12.2		脚部2/3	C	⑩	ミガキ(横位横位)→ナデ(脚部)→赤彩	ハケ→ナデ(脚部)	内径上径5つ下径6つを要の割合あり 今の高杯心 ⑥微高地
76	高杯				脚部	A	⑩	ミガキ(横位)→赤彩 摩滅	ミガキ(横位・杯部)→赤彩 ハケ(脚部) 摩滅	⑥L8
77	高杯				脚部	E	⑩	ミガキ(横位)へう福乳線2本→赤彩 摩滅	ミガキ(横位・杯部)→赤彩 ハケ(脚部)→ナデ 絞り 摩滅	⑥微高地
78	高杯				脚部	E	⑩	赤彩 摩滅	赤彩(杯部) 摩滅	⑥R6
79	高杯				脚部	A	⑩	ミガキ(横位)→赤彩	ミガキ(横位・杯部)→赤彩→ナデ(脚部)→ハケ	⑥微高地
80	壺	26.0			口縁部1/8	A	⑩	ミガキ(横位横位)	ミガキ(斜位横位)	⑥SK2626
81	壺	23.0			口縁部1/5	A	⑩	ナデ(口縁部) 摩滅	ミガキ→ナデ 摩滅	⑥SD1016

弥生・古墳時代土器調査表 I

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
82	壺				胴部	A	⑤	帯縞横線文→縦線文 摩滅	ナデ(接痕状) 摩滅	⑤-1 S D1016
83	壺				胴部 1/5	A	⑤	帯縞横線文→ミガキ (縦位)	摩滅	⑤-2 S D1016
84	壺				胴部上 半1/6	C F	⑤	ミガキ(斜位)→赤彩 摩滅	ハケ(横位)→ナデ 摩滅	⑤ S D1016
85	壺	7.0			底部 完存	F	⑤	ハケ(縦位)→ミガキ→赤彩 ナデ(底面)	ハケ(斜位) 摩滅	⑤ S D1016
86	壺				胴部	A B	⑤	帯縞横線文→帯縞縦線文→ミ ガキ→赤彩	ミガキ→ハケ→ナデ 口 縁赤彩	⑦ S D1016
87	小型壺	8.2			1/4	F	⑤	不明	ナデ	2次焼成うけ表面 調整不明 ⑤ S K 2626
88	小型壺	8.8			口縁部 3/8	E C	⑤	ハケ(縦位)→ミガキ(縦位) →赤彩	ハケ(縦位)→ミガキ(縦位) →赤彩	⑤-1 遺構外
89	小型壺	11.8			口縁部 1/4	F	⑤	ミガキ(横位斜位)→ 赤彩	ミガキ(横位斜位)→ 赤彩	⑦-2 低地
90	甕	16.6			口縁部	F	⑤	波状文 摩滅	摩滅	⑤-1 S D2002
91	甕	13.0			口縁部 1/4	A	⑤	縞状文→波状文	ミガキ(横位) 摩滅	⑦ S D1016
92	甕	13.8			口縁部 1/12	D	⑤	波状文(口縁端部) 縞状 文(胴部)	ナデ	内湾口縁強いナデ 有留糸の影響か ⑦ S D1016
93	甕	11.0			口縁部 1/6	C	⑤	波状文(口縁部) 縞状 文(胴部)	摩滅	⑤-1 S D1016
94	甕	5.3			底部	D C	⑤	ミガキ(縦位)→ナデ (底面)	摩滅	⑤ S D1016
95	甕	5.4			底部	C	⑤	波状文→ミガキ(縦位)	摩滅	⑤ S Q 2002
96	甕	5.0			底部 完存	C	⑤	ミガキ(縦位)→ナデ (底面)	ミガキ(横位)	⑤-2 S D1016
97	甕	4.2			底部	A D	⑤	ミガキ(縦位)→ナデ (底面)	摩滅	⑤-1 S D2002
98	甕	5.6			底部1/4	C D	⑤	ミガキ(縦位)	ミガキ(横位)	⑤-1 S D1016
99	鉢	17.0	5.2		口縁部 1/16 底部完存	F	⑤	ミガキ(横位斜位)胴部下 →赤彩(底面も)口縁摩滅	ミガキ(斜位)	⑤-2 S D1016
100	高杯	15.6			口縁部 1/12	A	⑤	ミガキ(横位)→赤彩 摩滅	不整形刺突(口縁端部) 赤彩	遺構外
101	鉢	6.0			底部 完存	F C	⑤	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	⑤-2 S D2005
102	鉢	5.0			底部 3/4	D F	⑤	ミガキ→赤彩→ケズリ (底面)	ミガキ(縦位)→赤彩	⑤-2 S Q 2016
103	高杯	23.0			口縁部 1/6	E D	⑤	ミガキ一部→赤彩 摩滅	赤彩 摩滅	⑤ 西トレンチ
104	高杯	25.0			口縁部	F	⑤	ミガキ(横位)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	⑤ S D1016
105	高杯	19.6			口縁部 1/3	F	⑤	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	⑤-2 S D1016
106	高杯	15.0			口縁部	E B	⑤	ミガキ(横位上端縦位下 端)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩	⑤-1 検出面
107	甕				つまみ 部	F	⑤	赤彩 ミガキあるか 摩滅	摩滅	⑤ S D2001
108	高杯				接合部	E	⑤	ミガキ(縦位横位)→ 赤彩	ミガキ(杯部)→ナデ (脚部)	⑦ S D1016
109	高杯				接合部	B C	⑤	ミガキ(縦位)→赤彩	ミガキ(横位)→赤彩 指 ナデ(脚部)	⑤-1 遺構外

弥生・古墳時代土器調査表 1

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
110	小型器台	7.0			口縁部 1/8	F	④	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	⑤-1 検出面
111	小型器台	7.0			口縁部 1/4	B	⑤	ミガキ(横位)→赤彩	ミガキ?赤彩	⑤-1 Z
112	高杯		10.4		脚部 1/4	F	④	ミガキ(縦位) 摩滅	ミガキ(横位) 摩滅	①-1 15層
113	高杯				脚部	B	④	ハケ→ミガキ	ナデ	①-2 13層
114	高杯				脚部	AB	⑤	摩滅	摩滅	①-1 15層
115	甕	22.2			口縁部	D	④	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	外面炭化物付着 ①-2 13層
116	甕	16.4			口縁部	BA	④	ハケナデ 口縁端面取り	ハケ(口縁部)→ナデ	①-1 15層
117	高杯				脚部	A	④	摩滅	摩滅 紋り	①-1 11層
118	甕	16.0			口縁部	AD	④	ハケ(口縁端)→ナデ 面取り	ハケ	口縁端部先鋭状 ②-1 9層
119	甕	16.8			口縁部	A	④	ナデ 口縁端面取り	ナデ(口縁端) ハケ (脚部)	「く」の字 ②-1 10層(弥生-古期)
120	甕	14.4			口縁部	AF	④	ハケ→ナデ(口縁端)	ナデ	②-1 10層(弥生-古期)
121	甕		8.4		底部 1/4	D	④	ハケ(縦位) 摩滅	摩滅	②-1 10層
122	甕	13.2			口縁部 1/2	B	④	ミガキか? 摩滅	ミガキか? 摩滅	⑤SK1123
123	甕	16.2			脚部 ほぼ 完存	E	⑤	ナデ ヘラ状痕	ナデ	口縁端に2つへ ラの刺突痕、内面輪積痕 ⑤SK1123
124	台付甕				2/3	A	④	ミガキ→波状文→墨状文 摩滅	ミガキ	⑥SD17
125	鉢		5.0		底部	E	⑤	摩滅	赤彩 摩滅	⑥SD17
126	高杯				接合部	A	④	ミガキ(縦位)→赤彩 摩滅	赤彩(杯部) 摩滅	⑥SD17
127	小型丸底	9.8		6.3	ほぼ 完存	C	④	底部ケズリか? 摩滅	摩滅	黒斑1ヶ所 ⑥微高地
128	甕	11.7			口縁部 1/4	AE	④	摩滅	摩滅	5面縁の黒斑のナノ 新褐色に黄色 希散 ⑥微高地
129	甕	16.9			口縁部	A	④	摩滅	摩滅	表面鉄分付着 ⑥SD22
130	高杯				柱状部 完存	C	④	ミガキ 摩滅	摩滅	脚部底面黒斑 ⑥微高地
131	高杯				接合部	A	④	ミガキ(縦位・杯部、縦位・ 脚部)	ミガキ(伊位・杯部)再彫、接合部 上面に刺突痕	⑥微高地
132	高杯				接合部	A	④	ミガキ(縦位) 摩滅	紋り 摩滅	⑥L20 9層
133	高杯				接合部	C	④	摩滅	摩滅	脚部接合部で大須 ⑥微高地
134	高杯				脚部	A	④	摩滅	紋り	⑥微高地
135	高杯				脚柱状 部完存	C	④	摩滅	摩滅	部分的に輪積痕 ⑥微高地
136	高杯				脚部 ほぼ 完存	D	④	摩滅	摩滅	⑥微高地 内面輪積痕
137	甕	16.6			口縁部 完存	AE	④	ナデ	ナデ 摩滅	④HIV

弥生・古墳時代土器観察表 1

遺物No.	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
138	壺				口縁部	B	㊸	頸部貼付帯 摩滅	摩滅	④C 25IV
139	壺	12.5			口縁部	B	㊸	ミガキ? 摩滅	摩滅	口縁端部黒斑 ④S Q 02
140	壺	11.9			頸部	B	㊸	ミガキ? 摩滅	摩滅	④IV
141	壺	6.2		1/2		D	㊸	ミガキ 摩滅	ナデ? 摩滅	黒斑 内面輪積痕 ④HIV
142	壺	5.6		3/5		DB	㊸	ナデ→ハケ	ナデ→ハケ	スス付着 ④S Q 1002
143	壺	8.5			底部	E	㊸	摩滅	摩滅 底面器形の歪	外面黒斑 ④S Q 1002
144	壺				頸部	D	㊸	ミガキ? 摩滅	ミガキ(口縁部) 摩滅	④S Q 1002
145	甕	14.7			口縁部	AD	㊸	ハケ→ナデ(口縁端)	ミガキ(頸部)→ナデ(口縁端)	内外黒皮化スス付着 ④S Q 1002
146	甕	15.7		1/6		B	㊸	ナデ	ハケ	口縁部より胴部にか ④I IV けて黒斑
147	甕	16.2		1/8		D	㊸	摩滅	ミガキ 摩滅	④HIV
148	甕	14.4			口縁部	E	㊸	ハケ 摩滅	摩滅	④S Q 1002
149	甕				胴部	D	㊸	ハケ	ハケ ヘラの線状痕	スス付着 ④S Q 1002
150	甕			1/3		DA	㊸	ハケ	摩滅	内面輪積痕 ④HIV
151	高杯	14.5			杯部 外B 内D		㊸	ハケ→ミガキ→ナデ	ミガキ	黒斑 ④H 9 IV
152	高杯				杯部	C	㊸	ハケ ミガキ?	ハケ ミガキ?	輸入品か? ④S Q 1002
153	高杯				杯部 外C		㊸	ミガキ	ミガキ	接合部黒斑 ④H 13IV
154	高杯				杯部	B	㊸	摩滅	摩滅	④S Q 1002
155	高杯				接合部	B	㊸	摩滅	摩滅	④HIV
156	高杯			3/5		A	㊸	ミガキ(縦位) 摩滅	摩滅	④S Q 1002
157	高杯			3/5		A	㊸	ミガキ(縦位斜位)	絞り痕 摩滅	④S Q 1002
158	高杯			3/5		A	㊸	摩滅	絞り痕 摩滅	胴部の器厚が一定でない ④S Q 1002
159	高杯				脚部	B	㊸	ミガキ 摩滅	摩滅	④H 9 IV
160	高杯				脚部	DE	㊸	ハケ→ミガキ	ハケ	内面輪積痕 ④S Q 1002
161	高杯				脚部	DE	㊸	ハケ→ミガキ	ハケ	内面輪積痕 ④S Q 1002
162	高杯				脚部	B	㊸	ミガキ 摩滅	摩滅	④HIV
163	高杯				脚部	B	㊸	ミガキ 摩滅	摩滅	④I IV
164	高杯				脚部	A	㊸	ミガキか? 摩滅	絞り痕 摩滅	④S Q 1002
165	高杯				脚部	D	㊸	摩滅	摩滅	④H 5 IV

弥生・古墳時代土器調査表1

遺物No	器種	口径	底径	器高	残存度	色調	胎土	外 面	内 面	備考・出土遺構地点
166	高杯				脚部	E	㊸	摩滅	摩滅	④HIV
167	高杯				脚部	A D	㊸	摩滅	摩滅	④HIV
168	高杯				脚部	B	㊸	ミガキ 摩滅	摩滅	④HIV
169	高杯				脚部	E B	㊸	ミガキ(擬位)	ナテ 絞り	④S D 17
170	高杯				脚部	A	㊸	ハケ→ミガキ 摩滅	摩滅	内面輪積痕 ④S Q 1002
171	小型 丸底	4.6		4.9	ほぼ 完存	C A	㊸	ハケ 摩滅	摩滅	黒斑 ④H 10III
172	小型 丸底				1/4	C	㊸	摩滅	ナテツケ底面への 線状痕	内面輪積痕 ④HIV
173	器台	8.6			1/2	A	㊸	摩滅	摩滅	④S Q 1002
174	ミニチュア 土器		4.0		ほぼ 完存	D A	㊸	指頭圧痕 摩滅	指頭圧痕 摩滅	底面黒斑 ④HIV
175	有孔鉢		3.2		底部	E D	㊸	摩滅	摩滅	④HIV
176	有孔鉢		2.2		底部	B	㊸	摩滅	摩滅	④H 8 V
177	有孔鉢		3.8		底部	D E	㊸	摩滅	摩滅	④HIV
178	甕	17.2			口縁部	A	㊸	ナテ	ナテ	墓高地からの乱入土器 ⑤5層 (平安砂層)
179	須恵器 高杯	14.4			口縁部 1/10 脚部9/10	青灰色	㊸	回転ナテ 回転ヘラケズリ (脚部)	回転ナテ(杯部) 回転ヘラナ テ(脚部)	全体に自然焼成 ⑤6層 (平安砂層)
180	高杯				脚部	A	㊸	摩滅	摩滅	⑤6層 (平安砂層)
181	高杯				脚部	B	㊸	ヘラ状条線 摩滅 ミガキ (擬位)	摩滅	墓高地からの 乱入土器 ⑤7層 (平安砂層)

第3節 弥生・古墳時代の低地の遺構・遺物

1 概要

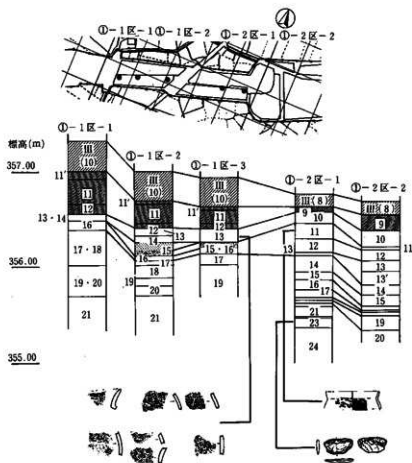
本調査域の低地は、中央微高地を挟んで山麓寄りの西側低地と千曲川自然堤防方向へ広く湿地帯を形成した東側低地とに区分される(第3章)。両者の低地は地形条件から土層及び堆積状況が異なるが、弥生時代に遡る水田層があることがプラント・オパール分析から確認され、弥生時代以降の土地利用は同一の変遷をたどっている。西側低地では水田層上の堆積層が薄く粘土質であったため、発掘調査技術の問題等から平面的な水田遺構として明瞭に検出されず、一部の遺構検出にとどまった。一方東側低地では水田層上部を覆っていた厚い泥炭層や泥炭質のシルト、部分的な砂層によって面的に水田遺構が検出された。本節では西側低地と東側低地に2区分して弥生時代、古墳時代の遺構・遺物について解説する。

2 西側低地の遺構(①・②・④・⑥・⑦区)

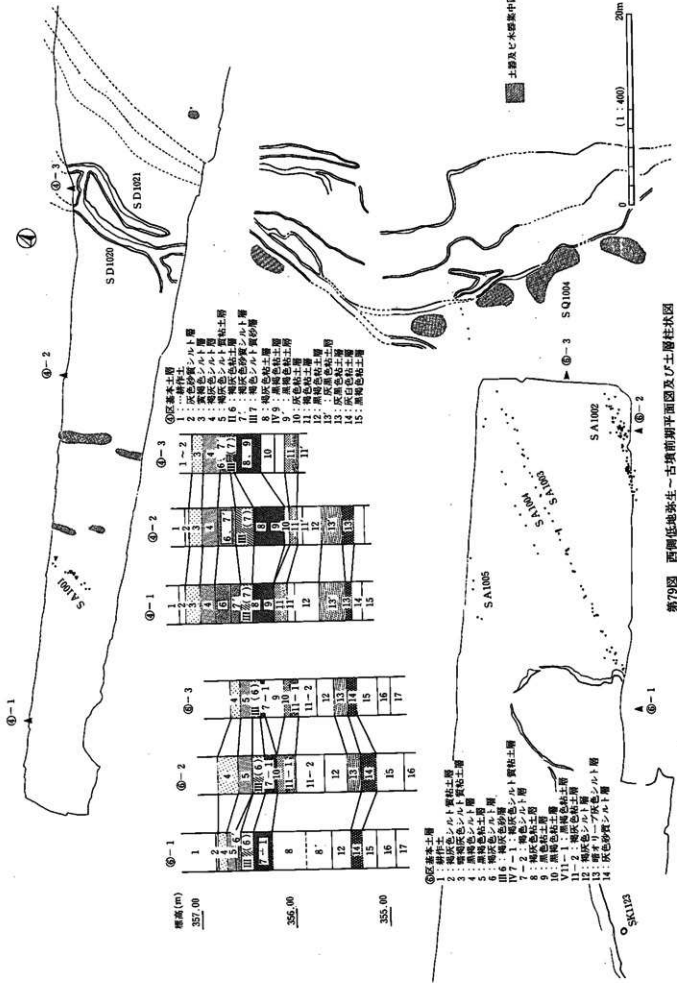
(1) 調査の概要(第75・79図)

本低地では山麓部寄りの各調査区において下層水田層(①-1区15・16層、①-2区13層、②-1区10層)上面で、水田遺構の平面検出を試みた。この平面調査によって弥生時代後期から古墳時代前期までの土器片を収集することができたが、水田被覆層が粘土層であったことなどにより畦畔状の高まりを確認することができなかった。出土土器は、①-1区13層内から第75図112・113、同区15層内からは114・116、②-1区10層上部からは118-121、①-2区11層内から115などが弥生後期から古墳前期に帰属するものが出土した。この調査区は西山山麓部に位置する鶴前遺跡の影響が考えられるが弥生中期の土器片が出土していないことから、①、②区の土地利用は弥生後期後半以降と見なされる。

この低地域での遺構は、中央微高地寄りで弥生時代の溝2条と古墳時代前期の杭1条が検出され、南西



第78図 西側低地土層柱状図及び層位出土遺物図



第79図 西側低地弥生・古墳前期平面図及び土層柱状図

微高地と中央微高地に挟まれた低地で古墳時代前期の杭列4条が検出された。これらの遺構は検出時点で既に上層の攪拌をうけており、杭列は杭先端部のみを残すものが大半であった。杭列には水田を区画する畦畔もしくは低地上に設けられた通路としての性格が考えられ、土盛りがあったことが想定されるが、検出面・断面からはこの構造を明確にすることができなかった。

ア 弥生時代

SD1020・1021 ④区IIH (第65・80図 PL6)

中央微高地西側の低地境に位置する。④区基本層序12層に約20cmの浅い窪みとして東西方向に約13mにわたって検出されたが、東側延長上に隣接する⑦区では不明瞭となり検出されていない。SD1020は幅1.2~1.6m、SD1021は幅1.2mで両者は北側で繋がり蛇行形状で東西に走行する。SD1020は両側で二又に枝わかれし、SD1021は窪みが不明瞭となる。埋土は泥炭質となり、炭化有機質を多量に混入する黒褐色~暗灰色の粘土層を主体とする。上部には上層である11層中の白色粘土が堆積していた。本址は微高地と低地境に形成された窪み状にできた自然の溝と判断した。溝内からは自然流木、木片が数点出土し下部から弥生中期の鉢(第65図2・3)が出土した。本址は弥生後期・古墳前期水田層に対応する土層下の遺構であることから弥生中期に帰属するとされるが本址に鉢が伴うかどうかは微妙である。

イ 古墳前期の遺構

SA1001 ④区IIG (第80・81図 PL6)

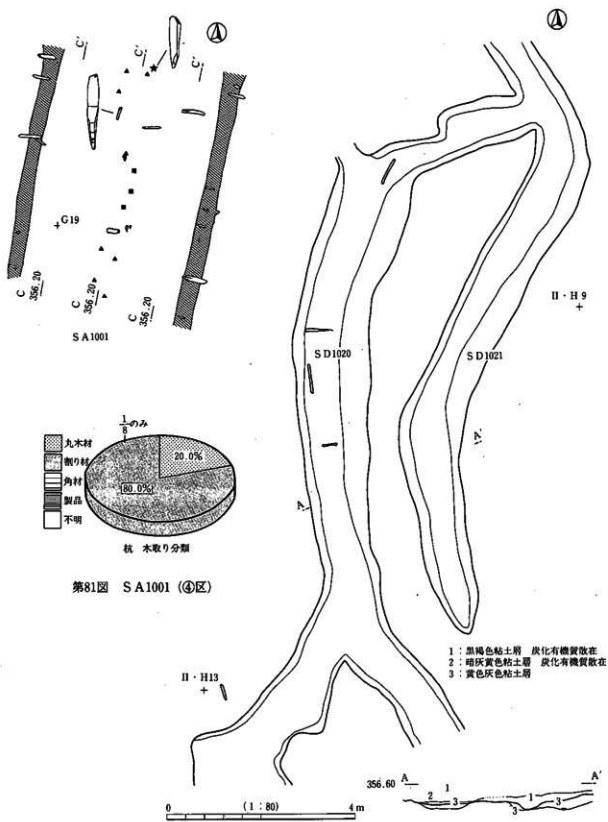
位置・検出土層：微高地から低地への移行部に位置する。④区基本層序11・12層中から検出された。規模・方向：N-20°-Eの北南の方向に、ややばらつきはあるものの2列平行して並ぶ杭が十数本確認された。杭列幅は40~55cmで、杭相互の間隔は1m前後で、長さは約6mであった。杭頭部は破損し先端のみ残存するものが大半であった。構造：杭の上面にあたる11層は弥生・古墳水田層で、本来は盛り土をした水田区画の畦畔とされ、杭はその補強に用いられたと見られる。杭用材は80%が1/8割り材で20%が丸木材であった。遺物出土状況：杭の間及び周辺から弥生後期壺の土器片と木片が数点出土した。本址とSD1020のほぼ中間に本址と方向を同じくする横木の集中箇所がある。この木材が集中した出土レベルが本址と同一であることからこの遺構も畦畔に関連する遺構の残骸である可能性がある。時期：出土遺物は弥生後期の土器片のみであったが、杭上面が古墳前期水田層に達していることから古墳前期とされる。

SA1002 ⑥区IIM (第82・83図 PL4・6)

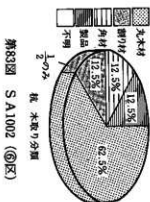
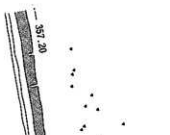
位置・検出土層：中央微高地と南西微高地に挟まれた低地、⑥区東南端に位置する。⑥区基本土層10・11-1層内から検出された。規模・構造・方向：杭の配列に規則性はないが、1m間隔内に数十本の杭が密に打ち込まれていた。杭幅は1.5~2mで、杭列間から横木材が集中的に検出された地点があった。横木は杭頭部から10~20cm下に水平に位置し、横木材がのる土層は灰色泥炭質シルトである。この土層は杭列間に溝状の窪みとして残る地点もあるが、法面の断面観察では10層上面に達していることから土盛りの土層であったと判断した。溝状の窪みは土圧による沈下の可能性がある。杭用材は丸木材が62.5%、割り材が12.5%、角材転用材が25%で、横木は全て雑木である。方向はN-45°-50°-Eとなり、北側のSA1003・1004と並列する。遺物出土状況：10層検出面から弥生後期・古墳前期の土器片があり、杭列内(11層)から弥生後期の土器片が多数出土した。時期：杭上面の土層、杭先端部の加工形状から中央微高地上から検出された祭祀遺構とほぼ同時期にあたる古墳時代前期とされるが、弥生後期から継続した杭列(畦畔)の可能性もある。

SA1003 ⑥・⑦区IIM~Q (第82図 PL4・6)

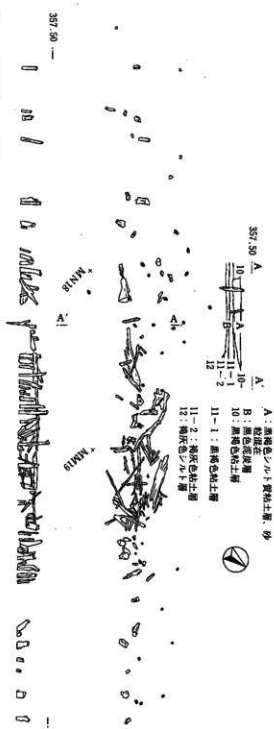
位置・検出土層：中央微高地と南西微高地に挟まれた低地に位置する。SA1002とは約9m、SA1004とは約3mの間隔を置いて両杭列の中間にある。中央微高地(⑦区)と南西微高地(⑥区)の縁辺からも



第80図 SA1001、SD1020・1021 平面・断面・立面



第83図 S A1002 (9)K



- 357.50 A
- A: 黒褐色シルト質粘土層・砂
 粘泥層
 B: 黒色泥炭層
 10: 黒褐色粘土層
 11-1: 黒褐色粘土層
 11-2: 黒灰色粘土層
 12: 黒灰色シルト層



第82図 S A1002・1003・1004 平面・断面・立面



- 10: 黒褐色粘土層
 粘泥・古墳水田跡土層
 11-1: 黒褐色粘土層
 下層
 11-2: 黒灰色粘土層
 12: 黒灰色シルト層



杭が検出され、杭列によって両微高地が結ばれた形となる。⑥区基本土層10層上から約80本の杭が検出され、一部の杭頭が9層下部にかかる。規模・構造・方向：杭は南西微高地縁辺から密に検出されたが、全体的には杭相互の位置に規則性はなく粗密であった。杭列幅は最大で3m、杭列の長さは44mに及んでいる。杭は大半が先端一部を残すものであったが、残存した杭は丸木材を主体とし、直径8cmの大形杭もあった。10層上面に起伏は確認されず土盛の有無は不明であるが、SA1002の状況から判断すると畦畔状の遺構であった可能性が高い。また並列するSA1004と検出状況が共通し、同一の杭列あるいは同時築造の可能性が高い。方向はN-45°-Eで傾斜面に平行する。遺物出土状況：杭列内からの出土遺物はない。時期：杭上面の土層、杭先端部の加工形状から中央微高地上から検出された祭祀遺構とほぼ同時期にあたる古墳時代前期とされる

SA1004 ⑥区IIM (第82図 PL4・6)

位置・検出土層：中央微高地と南西微高地に挟まれた低地、SA1003とSA1005の中間に位置する。⑥区基本土層10層上から10本の杭が検出された。規模・構造・方向：杭は7本、3本に別れそれぞれ1列となり約13mにわたっている。両者の杭列間隔は約80cmである。杭を覆った盛り土については10層が閉鎖されているため不明であるが、土盛りがあったと想定される。杭は全て先端部のみが残存で、劣化の著しいものであった。方向はN-45°-E。時期：遺物は杭取り上げ時に、10・11層内から弥生後期の土器片が出土しているが、本址とは直接伴なわない遺物と判断され、SA1003と同一の古墳時代前期となる。

SA1005 ⑥区IIM (第79図 PL4・6)

位置・検出土層：中央微高地と南西微高地に挟まれた低地、SA1004の7m北側に位置する。⑥区基本土層10層上から5本の杭が検出された。規模・構造・方向：数少ない杭であるので配置は曖昧な点が多いが、杭列幅約40cm、長さ約7mであった。杭は全て先端部のみが残存し、劣化の著しいものであった。方向はN-55°-E。時期：遺構にともなう遺物はないが、検出土層から古墳前期とされる。

3 東側低地の遺構 (⑨・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯区)

(1) 調査の概要

本低地域は、中央微高地東傾斜部 (⑨・⑫区) から平面調査域東端である聖川西側 (⑯区) が該当する。この低地域の調査は、道路幅60mで東西約500mに及ぶ範囲を9地区に分割し4カ年にまたがって行われた。各調査区からは弥生時代中期から古墳時代に至る水田及び水田関連遺構が検出され、普光寺平では初めて弥生・古墳時代の水田跡が確認された。

検出された遺構は各時期の重複、継続遺構を含め以下の通りであるが、溝の護岸遺構としての杭列は溝に含めた。また各水田層、遺構からは多数の土器、各種石器が出土している。

弥生中期以前	杭列1条
弥生時代中期	畦畔・杭列 5条、溝 1条、土器集中1箇所
弥生時代後期～古墳時代前期初頭	杭列畦畔 19条、盛土畦畔 55条、溝4条
古墳時代前期	杭列畦畔 (杭列を含む) 15条 溝5条
古墳時代前期後半～中期	溝2条

以下に時期ごとの遺構所見を各調査区別にまとめた。ただし複数の調査区にまたがり弥生後期～古墳前期まで継続する溝SD3004に関しては、項目を設けた。

(2) 弥生時代中期の遺構

ア 弥生時代中期の土層と遺構検出の概要

弥生中期水田層は、基本層序VI層とした下部にあたり、㊸-2・3区13層下部~14層、㊸・㊹区10層下部~11層、㊸区26層下部(26-2)、16区11b層下部~12層上部が該当する。本土層はシルト質粘土であり上層の弥生後期水田層へ漸移して粘土質となっている。両者の土層内には泥炭・炭化物粒子が多量に混入しているが、これらと細砂の含有量が中期水田層には多く、色調においては暗い褐色もしくは赤褐色となる。両者の土層の分層は微妙であり、土質の違いから該期水田面を面的に検出することはできなかった。なお弥生時代水田層については、次項の弥生時代後期でも扱う。

弥生中期の遺構のうち面調査で確認されたものは土器集中1箇所のみで、畦畔・杭列、溝は上層水田の重複遺構下部から検出された。弥生後期水田調査後に重機による平面検出を行ったが、遺物は収集されたものの、溝、杭列などは一切検出されなかった。このことから中期水田は継続的に耕作され、恒常的な水田区画にかかわる主要な畦畔・杭列が後期へ踏襲されたとみなした。各調査区の水田層と遺構から収集された遺物は破片資料であるが比較的まとまった出土となり、弥生中期後半に位置づけるものが主体を占める。

イ 弥生時代中期の遺構

SA3530 II ㊸-2区(第84・85・87・187・201図 PL8・28)

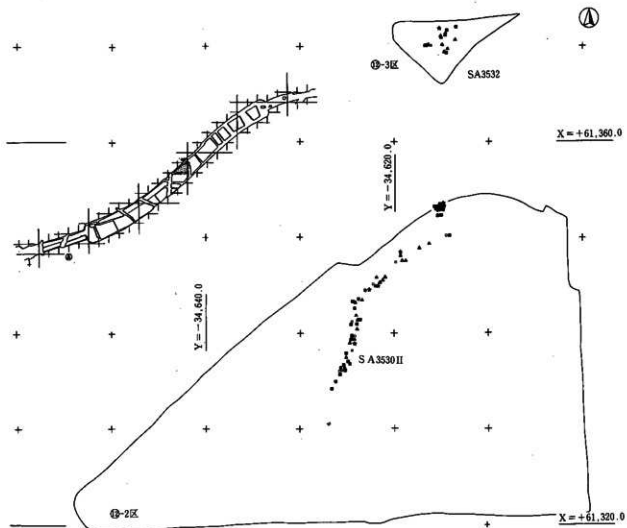
位置：中央微高地縁辺部で該期水田遺構の低地西端に位置する。㊸-2区では中央から北にかけて検出され、SA3530 Iと北側の一部が位置的に重複する。検出土層：弥生後期水田層(13層)に帰属する杭列SA3530 Iの杭取り上げの際に下部遺構として横木を伴う杭列が確認された。本調査区の中期水田層(14層)の層厚は最大で25cmと厚いものであるが、杭はこの14層上部から16層内において検出された。規模・構造・方向：2列の杭列が基本となり、2箇所で屈曲し約30mにわたって120数点の杭を検出した。杭間隔1.2m幅に粗密が認められ、杭列構造には横木材が主体となっている列と杭・横木が密になっている列、杭列だけの地点の3種類の違いがある。調査区中央部はN-0~20°Eの方向に蛇行しながら約13mにわたって検出され、横木材が主体となる部分と杭・横木が密に配列される地点がある。この杭列の北端部から方向をN-53°Eに変え再び約13mにわたって走行する。この地点は杭・横木が密となる配列と杭だけの配列とが併用されている。更にこの北東端部からはほぼ真北に方向を変え、杭だけの密集地点となる。横木材は大形材が多く長軸を杭列の走行方向と一致させている。土層断面からは本址への盛り土は明確にされなかったが、14層上部に位置する横木材を挟み込んで杭列が並ぶことから畦畔状の盛り土が想定される。杭の状況：杭は多数出土したが、劣化が著しく杭の両端部の残りは極めて悪い。用材は丸木材が54.5%、割り材が35.1%と丸木材の占める割合が高く、先端部の加工は短く鈍角に削りだしたものが目立った。樹種はクスノキ、カエデ属が多い。遺物出土状況：杭列内の横木と共に磨製石庖丁1点(第201図3)が出土した他、壺、甕の小破片が数点(第187図415~420)収集された。時期：検出土層と遺物から弥生中期後半とした。

SA3532 ㊸-3(第84・86図)

位置：中央微高地円辺部で低地西端に位置する。検出土層：14層上面から杭頭部が確認された。泥炭質の強い13層上面から下部にかけて上層水田に帰属する横木が多量に出土している。規模・構造：杭は南北約1.5m、東西約5mの範囲に14本が確認されたが、調査範囲が狭いため配列、方向等は不明である。上層から出土した横木とは位置を同じくしているが本址と直接かかわらない遺構と判断した。杭の状況：杭はSA3530 IIと同様に遺存状態が悪く先端加工の確認できたものは数点に留まる。用材は割り材が66.7%、丸木材が26.7%で割り材の占める割合が多いが、割り材の主体は不明品を除けば1/2割り材であった。遺物は同層内から弥生中期後半の土器片が数点出土したのみである。時期：土層から弥生中期後半とした。

SD4004 ㊸区VII J~VIII F(第65・187図 PL11)

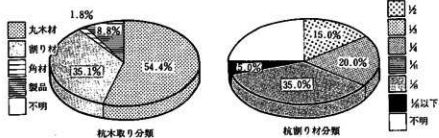
位置・検出土層：調査域東寄りの低地最深部に位置する。古墳時代前期のSA4002、弥生時代後期のSA4003・4004・4005と重複する。各時代の杭列検出及び杭取り上げ時に細砂を多量に混入した溝を検出した。



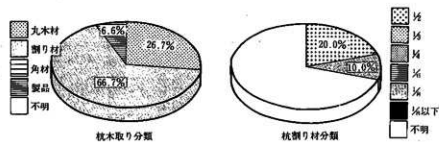
第84図 ⑬区 弥生中期の遺構

坑分類
 ● 丸木
 ● 割材
 ● 角材
 ● 転用
 ● 不明

0 (1:400) 10m

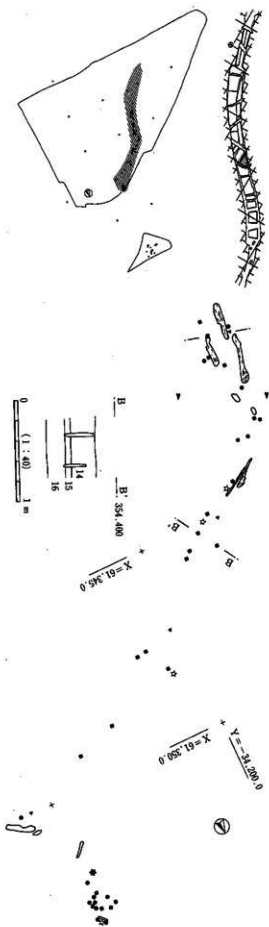
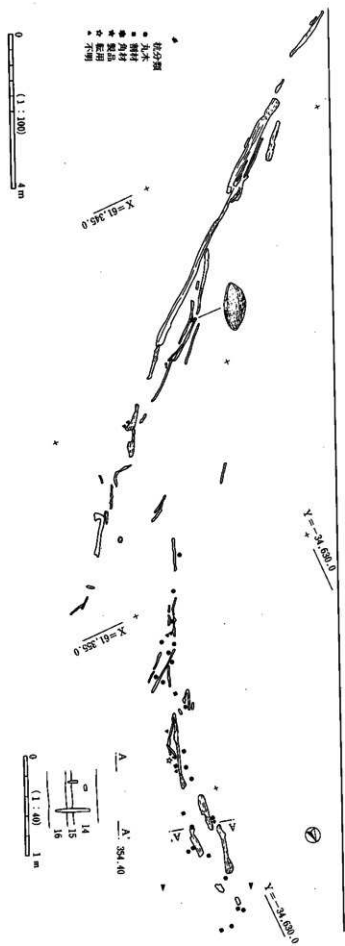


第85図 S A 3530 II (⑬区)



第86図 S A 3532 (⑬区)

第87図 SA3530 II 平面・断面 出土主要遺物分布図



本址周辺には26-2層上部に薄い砂層が堆積し、上層(26-1層)と区分され、本址は26-2層水田に対応することが確認された。埋土:2層に分層され、上層は弥生後期水田層である暗赤褐色から灰褐色粘土(26-1層)が堆積し、下層は細砂粒を多量に混入した灰色泥炭質粘土である。規模・形状:幅は1.5~2mとなり北西から南東に蛇行して走行する。深さは60cmで断面は逆台形になり底面は平坦である。遺物出土状況:埋土下層からは弥生中期の土器片(第187図2・413・414)、縄文晩期の鉢(第65図1)が出土した。この内縄文晩期の鉢は上層に重複するSA4003下部出土の土器片と接合した。埋土上部からは木製品を含む木材片が多数出土したがこれらは上層に重複する杭列に伴う材と判断され、本址に伴う木材は小破片である。時期:土層と出土遺物から弥生中期後半とした。なお本水田層は縄文晩期水田期からの弥生中期までの時期が与えられる。

SX4100 ⑩区ⅧB~G(第88・198・199図)

調査域東端の低地最深部に位置し、16区基本層序11b層である泥炭質灰色粘土層下部から弥生中期の土器片と木材片が散在して出土した。遺物出土範囲は標高352.7から352.5mの約20cm層厚内からで、土器は北東-南西方向に約15m、北西-南東方向に約5.5mの楕円状に散在し、木材片は直径約13mの範囲にまばらに出土した。本址南側には明瞭ではなかったものの幅0.5~1m、長さ12mの帯状の高まりが確認され、この高まりを境に北東側が遺物散布域となっている。出土土器は50点ほどで弥生中期前半の条痕文系土器2点(第198図535・536)の他は弥生中期後半の葉林式土器(第199図538~541など)であった。木材片に製品はなく丸木材を主体とした自然木であった。出土土器の器種は甕だけであるが接合するものがなく、木材にも製品がなかったことから底湿地の低い地形に遺物が流れ込んだ状況と判断した。

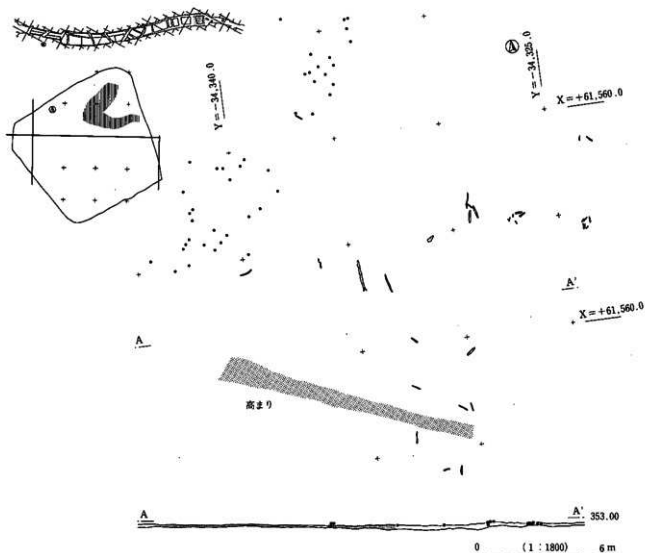
ウ 弥生中期から後期に継続する遺構

⑩区 (第102図PL8・25・29)

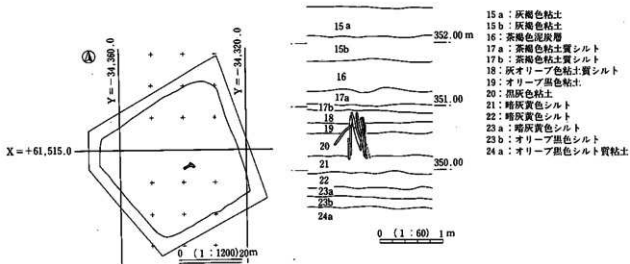
上記弥生中期の遺構の他に、弥生後期水田層と重複する畦畔としてSC3522・3523があり、SC3524の杭集巾箇所からは中期の土器片が集中出土した。SC3522・3523では畦畔断り割りによって畦畔下の弥生中期水田層内から横木材と土器片が多数出土し、後期畦畔が位置と方向を踏襲していることが確認された。中期から後期水田層は連続する土層として中期水田面の面的な所見が得られていないため、規模・構造について不明な点が多いが同調査区では弥生中期の段階から水田区画が付設されていることが判明した。これらの遺構の詳細については(3)弥生後期の遺構の項目で述べる。

エ 弥生中期以前の杭列 ⑩区(第89図)

16区中央部で下層堆積層確認のためトレンチ調査を行った際に水田最下層である12層下約2mの土層内(18~20層)から7本の杭がまとまって出土した。12層以下は粘土と泥炭が互層となる土層で、21層以下はシルト質粘土である。掘削面が深いことから面的調査ができず杭の性格等は不明であり、杭出土層からは土器などの遺物は収集されなかった。¹⁴C年代測定によると縄文時代後期の年代が与えられたが、本調査域出土の木製品数点を¹⁴C年代測定したところ遺構年代観とは調和しない結果が得られているため時期についても不明である。



第88図 S X 4100弥生中期出土土器分布図



第89図 ㊸区深掘り杭出土状況断面

(3) 弥生後期の遺構

ア 弥生時代後期の土層と遺構検出の概要

弥生後期水田層は泥炭質（炭化物粒子）混じりの灰色粘土層を基調としているが、色調の点で多少異なる調査区もある。水田層直上層は泥炭層もしくは泥炭質の粘土層が堆積する点で共通し、薄い砂層が泥炭層と互層となる地点もある。遺構検出にあたっては、灰色粘土層を覆った泥炭層を重機によって数センチ上まで除去し、手作業による精査を行った。杭列等が検出された地点は杭頭の出土をもって精査を行い、古墳面からの継続する溝は全て手作業で遺構検出を行った。発掘当初は泥炭層を含めた灰色粘土層中に数面の水田が存在することを予想していなかったため粘土層にある遺構検出に終始したが、調査が拡大するにつれ数面の水田層があることが判明した。この点において検出上の問題があった。

水田層の土質は各調査区で共通するものの直上層である泥炭層の堆積状況が微妙に異なり、地点によっては耕作土と認識される下部土層の乱れも確認されている。この調査面に対する各調査区での観念の違いと、上層水田及び弥生該期水田層調査の際の土圧による沈下、更には調査技術の未確立な点などにより全域で水田区画あるいは水田面を詳細に検出することができなかった。またいくつかの調査区で水田区画となる遺構が検出され、弥生後期（古墳時代前期初頭を含む）の水田という点では一致をみるものの、洪水等による要因で一時的に被覆された水田面の性格とは異なるものである。

水田区画については低湿地に立地することもあり条件によって杭列が複数検出され、これらには盛り土があったことが確認され、恒常的な畦畔として大区画を想定することが可能である。畦畔も数調査区で検出され該期の耕地区画の特徴を捕らえることができる。水田面については不明瞭な調査区が多く、砂層で覆われた地点の調査で凹凸を確認したに止まった。出土遺物では調査域を東西に走行する溝から多量の木製品が出土し農具のみならず武器、建築部材など多器種にわたっていた。

以下に弥生後期（古墳時代前期初頭を含む）の水田面及び遺構の所見を述べるが、各調査区での微妙な検出層の違いがあったことを踏まえ、調査区別に水田層と水田遺構を扱うこととする。水田層については基本層序である弥生時代VI層とした土層で弥生中期を含んでいる。なお本調査域を東西に走行する溝址SD3004に関しては調査区を一括して所見を述べる。

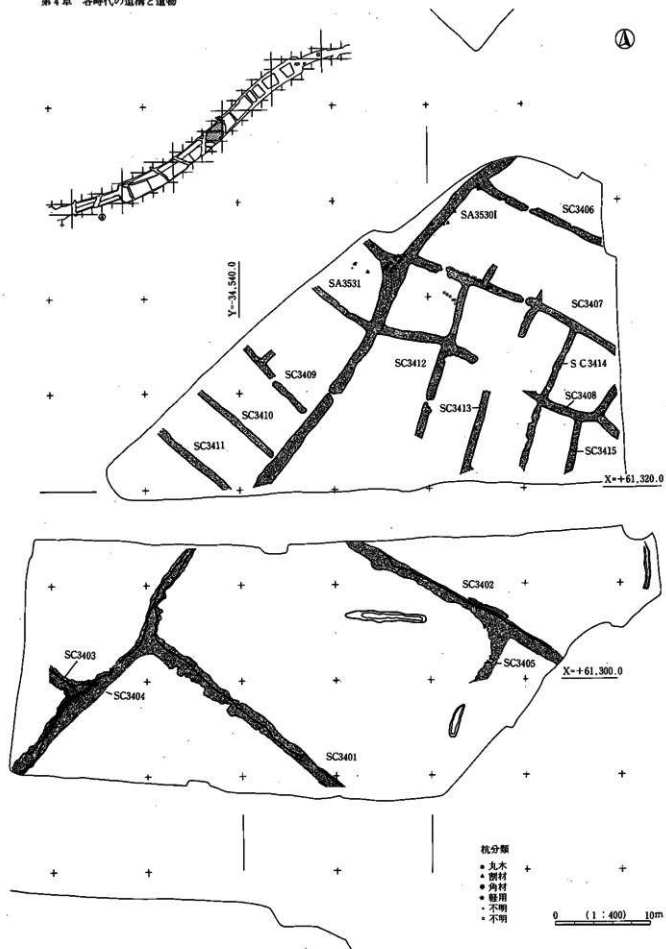
イ ㊤-1区 (第90・199図 PL7・8)

位置：中央微高地縁辺部で低地西端に位置する。微高地寄りの西が高く、東側地点と比高差は50cmに及ぶ。水田層：黒色化した炭化有機物を多量に混入する暗灰色粘土（10層）で、下部には細粒砂を部分的に含んでいる。直上層は堆積厚2～4cmの帯状に薄く堆積した乳白色の粘土（9層）で、下部に薄い泥炭層がある。9層直上は古墳水田層の下部にあたるが泥炭質の強い粘土である。

遺構検出状況：畦畔は黒色泥炭（7～2層）の精査時に暗灰色粘土（10層）が連続する高まりとして確認された。直上層である白色粘土は畦畔上部には堆積していない。この高まりは調査区南東部で不明瞭となるが5条の畦畔が検出された。また白色粘土が埋土となる溝状の窪みが3カ所で確認された。畦畔の規模・方向：畦畔の幅は検出時の削りによって一定していないが0.8～1.2mと幅広いものであった。畦畔上部と水田面の比高差はSC3401と北側水田面の20cmが最大となりほかは10cm以下と低いものであった。特に北西側は一段高い面となり比高差はほとんどない。方向はSC3401・3403がN-52°W、SC3402がN-60°W、SC3404がN-30-43°E、SC3405がN-29°Eである。水田地形は西北西から南南東へ傾斜している。遺物出土状況：10層から弥生後期の土器片（第199図551・555・559）が出土した。

ウ ㊤-2・3区 (第90・199・200図 PL7・8)

位置：中央微高地縁辺部で低地北西端に位置する。北西側が一段高い面となる。水田層：オリーブ黒色粘土（13層）と灰色シルト質粘土（14層）で、13層内には黒色化した炭化有機物が多量に混入する。13層



第90図 ㊸区弥生後期遺構全体図

下部及び14層上部には耕作土層特有の波状堆積が見られる。直上層は黒色泥炭(12層)であるが、13層上部には散在的に㊸-1区9層と同質の乳白色粘土がある。直下層は約5cmの厚みの砂(15層)である。

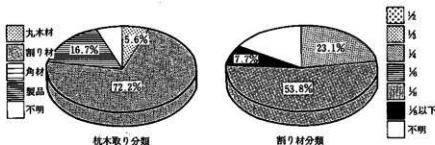
水田検出状況：水田面は黒色泥炭層(12層)をスライス状に除去していく過程で全面に凹凸が確認された。畦畔は杭・横木材が検出されたSA3530 Iのほか杭の抜き跡が列状に残されたSC3407など14条の高まりを確認した。小畦畔の検出はSA3530 IとSC3407の精査によって水田面からの数センチの高まりの連続を捉えたもので不明瞭となる箇所がある。水田面には白色粘土を埋土とする浅い円形の窪みか12カ所で確認され、杭列(SA3531)を伴った溝状の窪みを1カ所で検出した。畦畔の規模・方向：幅は60~80cmで、湾曲、蛇行形状で走行するものが多い。方向は西北西-東南東が6条、北北東から南南西が8条で畦畔の位置は北西から南東に傾斜する地形に直交もしくは平行する。遺物出土状況：SA3530 I南脇に㊸(第199図158)の破片が集中して出土したほか13層内から小破片(第199図548・558)が収集された。

SA3530 I ㊸-2区(第91・92・93・187・197図PL12)

位置：調査区北西側に位置し、複数の小畦畔と接する。検出土層：古墳水田層内の杭列であるSA3514の杭取り上げの際に下部

の遺構として確認された。

杭頭は13層上面ないし12層下部から、杭列に伴う横木は13層上部から検出された。規模・構造・方向：杭列はSC3407との交点に集中し、杭列幅約40cmで2列平行して約2

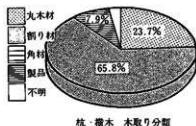


第92図 SA3530 I (㊸区)

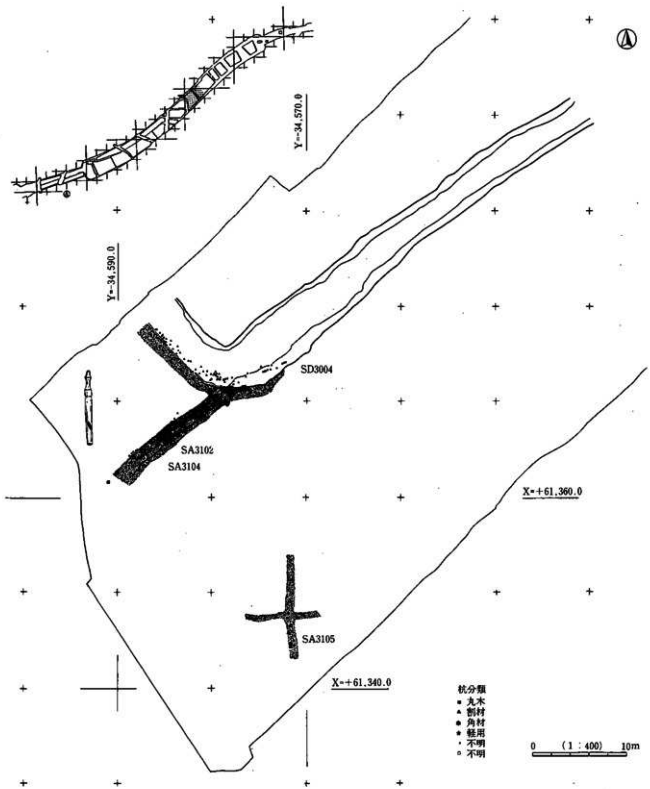
m走行する。この地点以外はまばらに検出され杭列の長さは約8mに及び、杭を伴わない横木のみをの地点を含めると約13m続く。杭列、横木周辺は数センチの高まりが確認され、N-34~46°Eの方向に湾曲形状で連続する畦畔となる。杭列の盛り土は明確でなかったものの高まりの幅の中に礫・横木があり、恒常的な大畦畔と認められる。また本址の南西延長上には㊸-1区SC3404があり、本調査面と㊸-1区調査面は同一面の可能性が高い。杭の状況：比較的細い用材で、割り材72.2%、転用材16.7%、丸木材5.6%となり、1/8割り材を主体とするものであった。先端部の加工は鈍角な割りだしとなるものが多い。樹種ではカエデ属、クヌギ節が目立っている。遺物出土状況：横木材付近から弥生後期の壺が出土したほか、小破片が少量収集された。

SA3532上層(木製品集中) ㊸-3区(第91図)

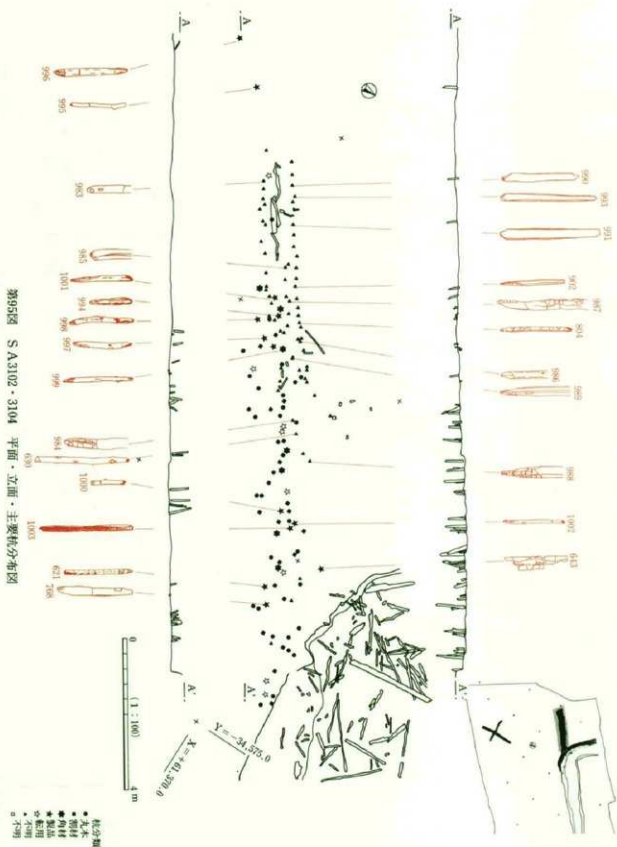
検出土層：上層の泥炭層下部から13層にかけて複数の横木が出土し、横木の下部(14層上部)から杭が14本検出された。規模・構造：SA3532は約1m幅で東西方向に3mにわたって検出されたが、本層出土の横木の長軸方向が東西、南北に乱れていることから、前項の所見で記した通り横木を伴った盛り土は想定されない。SA3532が該期まで機能が継続していたかどうかは微妙であるが、微高地と低地境界部の護岸施設の可能性がある。横木の集中箇所は溝あるいは低地溜りと考えられる。調査範囲が狭く不明な点が多い。遺物出土状況：横木の中に平鉢が1点のほか小形木製品が数点出土した。



第93図 SA3530 I (㊸区)



第94図 ③区弥生後期遺構全体図



エ ⑬・⑭区 (第94・100・195・198・199図PL 8・26・28・29)

位置：低地西側に位置するが、本調査区付近から水田層が50cm以上低くなる。水田層：泥炭と粘土の互層となる部分を含んだ灰褐色から暗褐色粘土（10層）と泥炭と粘土の不連続な互層を含んだ灰色シルト質粘土（11層）である。11層下部は砂質となる。直上層は⑭-1区9層と同質の白色粘土層であり、9層を挟んで泥炭層が薄く堆積している。

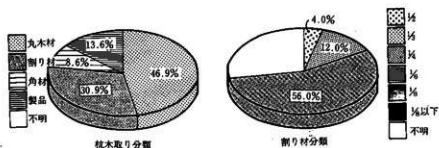
水田検出状況：水田面は9層白色粘土層面まで重機で下げ、平面精査を行った。⑬区では検出面から畦畔状の高まりは確認されず、10層上面から杭列2条が検出され、古墳水田層の遺構との重複から杭列2条と大溝1条が本水田面に帰属することが確認された。⑭区では重機によって10層上面から数センチ単位の深さでスライスし同層下面から杭列を伴った高まり（畦畔）を5条、泥炭層内に灰褐色粘土の連続する高まりを数条検出した。遺物出土状況：水田面直上から埴杵などいくつかの木製品・木材片が出土し、水田層内からは土器片が複数散在していた。10層下部から11層にかけては弥生中期前半から後半の土器片が見られ（第198図527～529・532・533・537）、10層中からは弥生中期後期から後期の土器片があった（第199図543・550・557・562）。

A 主要な遺構

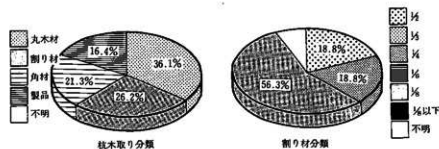
SA 3102・3104 ⑬区 (第95・96・97図PL12・22)

位置：調査区北西寄りに位置し、SD 3004 I の護岸杭列と接する。古墳前期 SD 3004 II 及び SD 3012 と位置的に重複する。検出土層：古墳水田層内の遺構である SA 3101 の杭取り上げの際に下部の遺構として確認されが、SD 3004 寄りの10層上面泥炭層内から検出された SA 3102 と北西側の10層中位から検出された SA 3104 があった。両者は一連の杭列であるが、杭列構築に前後関係があったものと判断される。規模・構造・方向：SA 3102 は SD 3004 I の流路屈曲コーナー部から南西方向 (N-53°E) に約10mにわたって検出された。杭列幅は1.2mで杭間は数十センチと杭が密に点在する。SA 3104 は SA 3102 が途切れた南西端から僅かに北側に位置をずらし同一方向へ約10mにわたって検出された。杭列幅は80cmで2列が整然と配列されている。また一部に横

木材があり、長軸を杭列方向と一致させている。両者の杭列脇からは10層の高まりが僅かに認められ、盛り土があったもの判断した。杭の状況：SA 3012 の杭は頭部を欠くものの遺存状態が良好で、大形であった。一方 SA 3014 は劣化の目立つものであった。SA 3012 の用材は丸木材36.1%、割り材26.1%、角材21.3%、転用材15.8%で角材・転用材の占める割合が高く、SA 3014 の用材は丸木材46.9%、割り材30.9%、転用材13.6%で丸木材が約半分を



第96図 SA 3104 (⑬区)

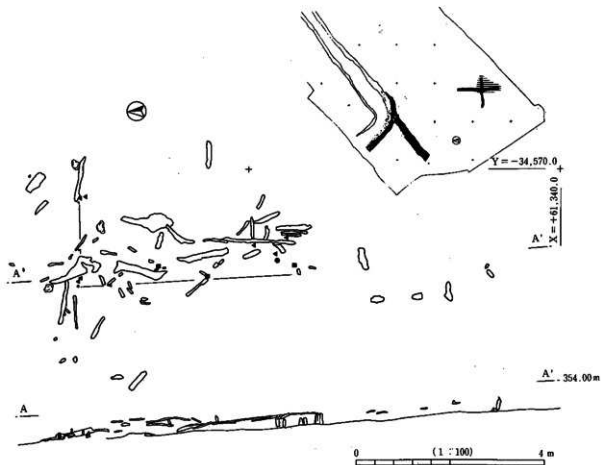


第97図 SA 3102 (⑬区)

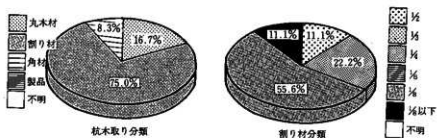
占める。両者の杭とも先端部に鋭角で細かな削りが残されていた。また樹種はモミ属、クヌギ節、コナラ節が大半であった。遺物出土状況：杭として用いられた中に垂木など建築部材が含まれていたほかは本址に直接係る土器は出土していない。時期：検出土層から弥生後期の杭列畦畔であるが、SA3012の大形杭は古墳前期初頭までの間に後続して補強構築されたものと判断した。

SA3105 ⑬区 (第98・99図PL12・14)

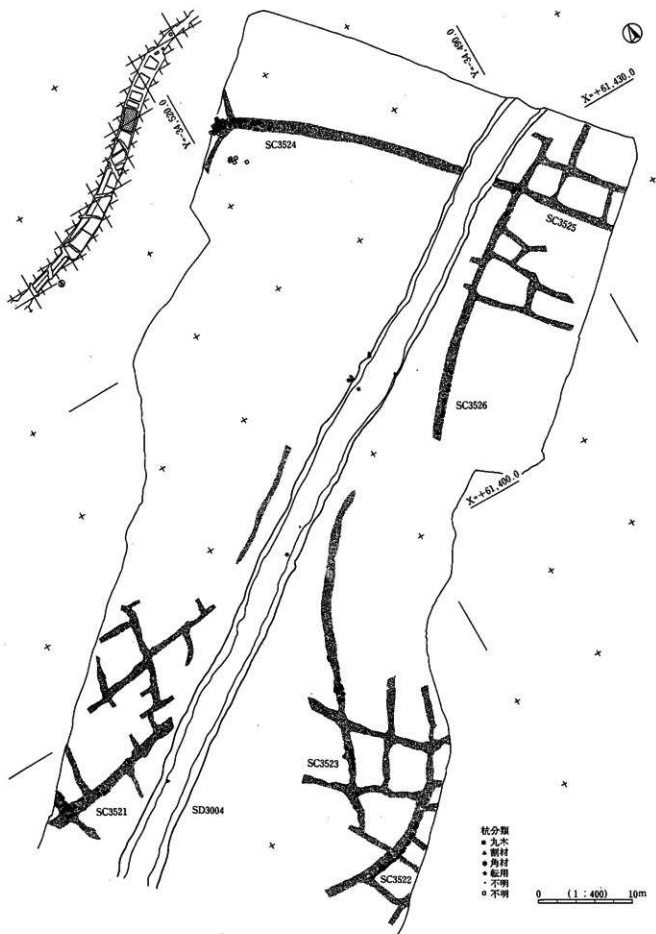
位置：調査区南東よりに位置する。検出土層：10層上部の泥炭質を多量に含んだ灰色粘土層から杭頭が確認され、ほぼ同一レベルから横木が出土した。杭は確認できたもので13本であったが、検出時に数本の杭を欠いている。規模・構造：杭列と横木は幅約1mの間隔におさまり、横木の長軸と杭列の方向が同一



第98図 SA3105平面・立面



第99図 SA3105 (⑬区)



第100図 ㊸区弥生後期遺構全体図

となることから盛り土があった畦畔とされ、横木は畦畔内の芯材として利用されたものであると認識した。杭列と横木の方向は東西南北に各1条となる。杭の状況：杭用材は割り材75%、丸木材16.7%、角材8%で、1/8割り材を主体とするものであった。時期：本址及び周辺同一土層からの遺物出土はないが、検出土層から弥生後期とした。

SC3521 ㊤区 (第101・103・187・188図PL14)

位置：調査区北西の㊤区寄りに位置する。周辺からは畦畔の高まりが不連続に確認されている。検出土層：灰色粘土(10層)と白色粘土(9層)の間層である泥炭質分の多い層から横木材が出土し、これらが10層上面にのることから泥炭層のみを除去精査して高まりを検出した。本址周辺は同調査区で検出された水田遺構面よりやや高い。規模・構造・方向：泥炭層のみを除去したため畦畔の形状としては歪んでいるが、幅0.8~1.5mの高まりとして東西方向(N-80°E)に20m、西端部で南北方向(N-4°W)畦畔が交差して6mにわたって検出された。盛り土は10~15cmで、畦畔交差部からは杭列が検出された。南北畦畔の杭列は杭列間80cm2列で横木材を挟みこむ形で約3m、東西畦畔はまばらな杭により1列で約8mにわたっていた。杭の状況：杭は25本出土し残りは比較的良好であった。用材は割り材が50%、丸木材が31.8%で、樹種はクヌギ節、コナラ節が大半を占めた。遺物出土状況：畦畔上から建築部材1点が出土したほか、畦畔掘り下げにより杭列を中心に下層から弥生中期土器片(第187図407、第188図428~431)が複数出土した。時期：検出土層から弥生後期後半とされる。畦畔盛り土下出土の中期土器片からは弥生中期後半に遡る畦畔を踏襲するものと判断した。

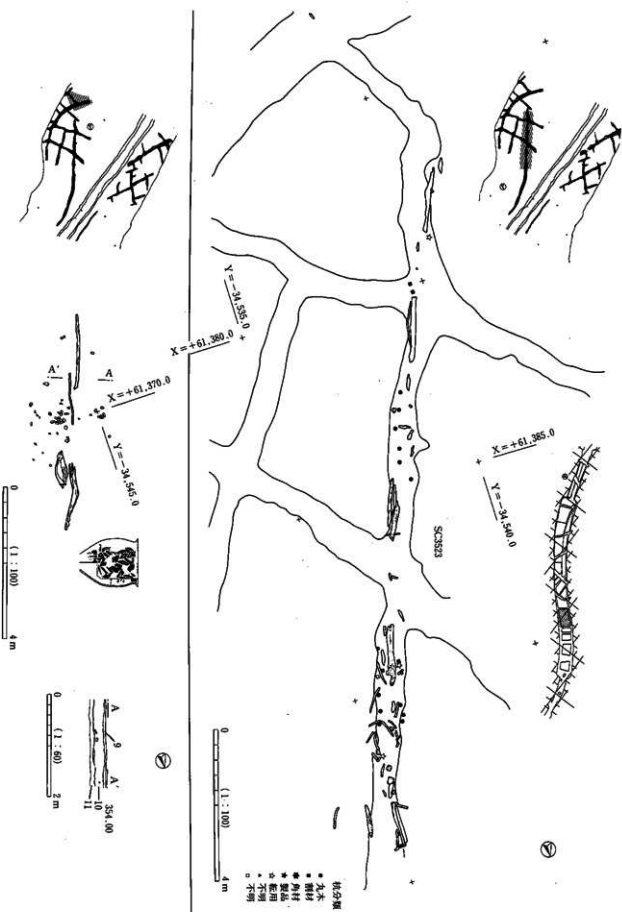
SC3522 ㊤区 (第101・104・187図PL14)

位置：調査区南西寄りに位置し、数条の畦畔が直交する。検出土層：10層上面の泥炭堆積層を水平精査し泥炭の途切れる灰色粘土の連続を畦畔とした。一部で灰色粘土上部に細長い横木材の状況があり、横木材の南側10層中位から杭列の検出をみた。規模・構造・方向：幅は0.8~1.5mであるが杭列地点は比較的幅広となり、水田面との比高差は最大で10cmある。北東から西に湾曲しながら約30mにわたり高まりが残り、湾曲部には横木材と1列の杭列が約10m確認された。杭列の杭間隔は40~50cmと規則的な配列であり約20本の杭が残されていた。横木材は長軸を畦畔の方向と一致させ10層粘土から上層泥炭層にかけて出土した。横木材を覆う盛り土があったことは確実で、横木の出土からは泥炭層内水田の畦畔の可能性がある。杭の状況：杭頭部は欠損し中位以下先端部までが残っていた。用材は75%が割り材25%が丸木材であり、割り材は全て1/8以下であった。樹種はクヌギ節が大半を占める。遺物出土状況：本址とSC3523の延長ライン交点の下部から多数の弥生中期土器片がまとまって出土した(第187図1)ほか、数点の土器片が畦畔下部から出土した。時期：検出土層から弥生後期とされる。

SC3523 ㊤区 (第102・105・187・189図PL13・14)

位置：調査区南西から中央部に位置し、3条の畦畔と交差する。検出土層：10層上面の泥炭堆積層を水平精査し泥炭の途切れる灰色粘土の連続を畦畔とした。杭列が検出された中央付近までは高まりとして識別されたがSD3004付近は、盛り土内からの芯材検出により畦畔とした。畦畔内の杭、横木材は低位から見つかり10層内から11層上面まで点在していた。規模・構造・方向：畦畔の幅は1m前後で水田面との比高差は10cm程になる箇所がある。南南西から北北東へ緩く湾曲しながら約36mに及んで検出された。杭は10層中から、横木材の多くは11層上部からの出土であり大形礫なども含まれ約25mにわたっていた。横木材の出土層位からは10層上部と11層上面の2時期の畦畔が重複していることが確認された。杭の状況：杭の所属する層位は個々に10層(弥生後期)と11層(弥生中期)に区分できなかつた。遺存状況は比較的良好で、用材は丸木材54.4%、割り材28.6%、となり1/2割り材の占める割合が多い。用材の傾向からは弥生中期の様相に近い。樹種はクヌギ節であった。遺物出土状況：芯材検出の際、11層上面の横木材とともに

第102図 S.C.3523 平面・断面・出土主要遺物分布図



石庖丁、磨り石などの石器や剥片と土製円盤、土器片が多数出土した。また調査区南西隅にあたる本址延長ラインの11層上面からは横木材の周辺に弥生中期の1個体分の変が破片で散在していた(第187図1)。畦畔内からの土器片出土も多く、

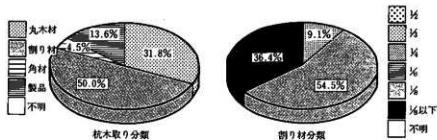
弥生中期後半から後期前半の壺・甕(第187図401・403・408・409・411・412)があり、弥生後期前半の壺破片(第189図5)はSD3004下層出土土器と接合した。時期:検出土層は弥生後期面であるが、下部出土の横木材および各種遺物は弥生中期後半に帰属するものであり、特殊遺物がいくつか含まれる。本址は弥生中期後半から踏襲された恒常的な水田区画とされる。SC3524 ㊤区(第106・107・187図PL13・14・29)

位置:調査区北東寄りに位置し、SD3004と接する。

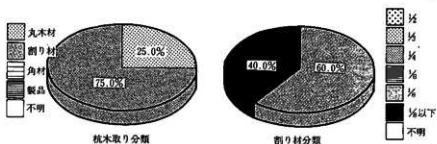
検出土層:10層上面の泥炭質粘土層中から泥炭層を除去して灰色粘土の連続する高まりを畦畔とした。畦畔北端には同一面から2列の杭列と横木材の集中区が検出された。規模・構造・方向:幅約1mで、北端に並列する杭列は幅も同一である。北西南東方向(N-44~46°E)に緩く湾曲して約26mにわたって走行する。北端杭列部で東西方向に枝別れた畦畔となる。同一層水田との比高差は5cm以下であった。杭の状況:杭は40ほど出土し、杭頭は欠損するものの先端部の残りは良好であった。用材は割り材と丸木材がそれぞれ44.4%となり転用材が11.1%で、樹種はクヌギ節とモミ属が多く見られた。遺物出土状況:本址に直接関係する遺物は杭転用材の製品と畦畔掘り下げにより北端杭列周辺から出土した弥生中期土器片数点(第187図402・404~406)がある。時期:検出土層から弥生後期後半とされる。ただし中期土器片が下層出土した北端杭列箇所は弥生中期後半に遡る畦畔を踏襲するものと判断した。

SC3525 ㊤区(第100図)

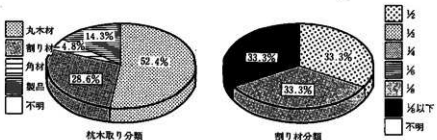
位置:調査区南東に位置し、SC3526と交差する。SD3004を挟んだ延長にはSC3524があり、古墳水田層の畦畔SC3505と重複する。検出土層:SC3526から連続する10層上部の泥炭層内の粘土質部分を畦畔としたが、堆積層は微妙で粘土と泥炭面の凹凸が著しく不明確な部分もある。規模・構造・方向:畦



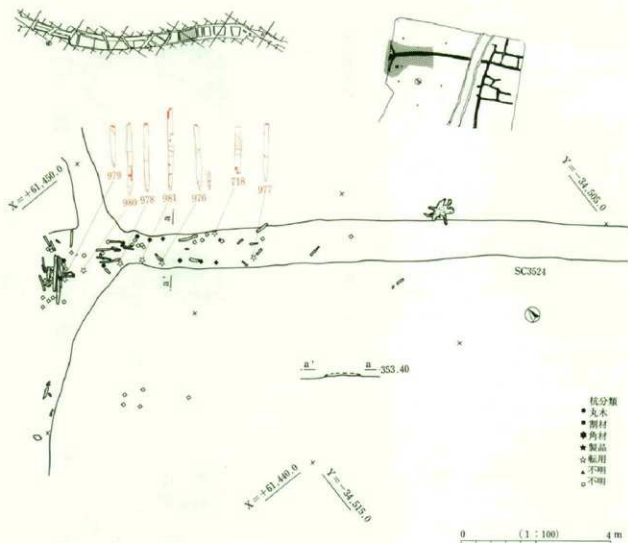
第103図 SC3521 ㊤区



第104図 SC3522 ㊤区

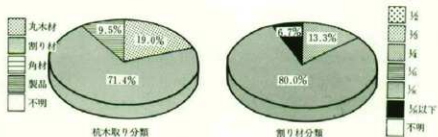


第105図 SC3523 ㊤区



第106図 SC3524 平面・断面 主要杭分布図

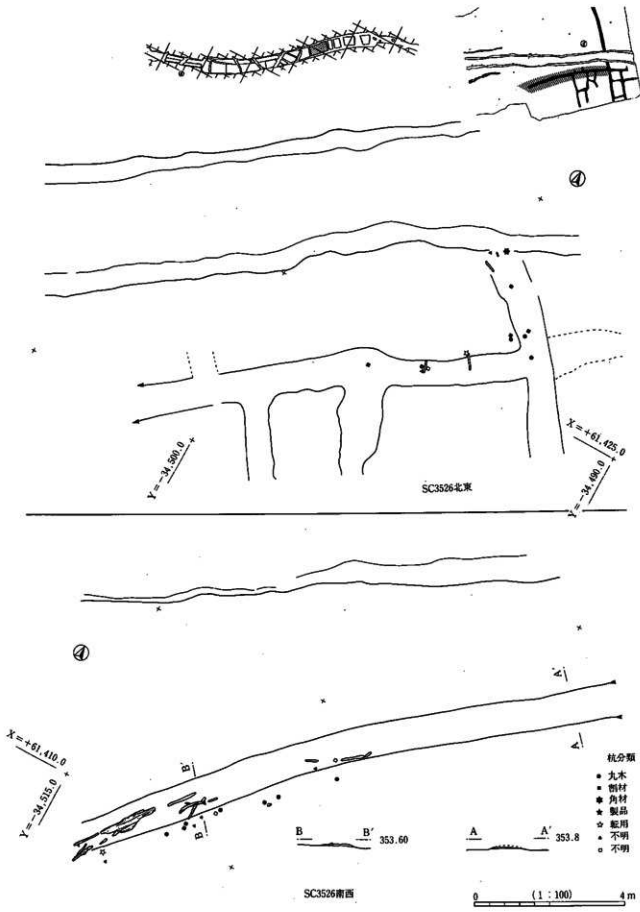
畔の幅は1m前後となり、SC3526の交点からSD3004Iの接点にかけて杭列が検出された。調査区南東端から約14mにわたってN-44°Eの方向に走行する。SD3004と関係する畦畔であるが、杭以外の状況は不明である。時期：検出土層から弥生後期とした。



第107図 SC3524 (③区)

SC3526 ④区 (第108・109図PL14)

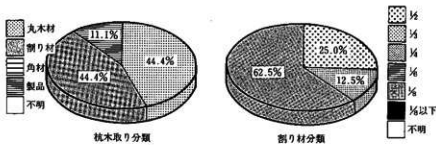
位置：調査区西寄りに位置し、SD3004の南側で同一方向に走行し、SC3525と交差する。検出土層：10層上面の泥炭堆積層を水平精査し泥炭の途切れる灰色粘土の連続を畦畔とした。本調査地点の検出レベルは低く10層中から杭・横木材が認められた。規模・構造・方向：畦畔の幅は約1mで、南西から北東へ



第108図 SC3526 平面・断面

緩やかに湾曲しながら約35mにわたって検出された。

北西側には横木材と杭材が約10m出土しているが、杭の配列が畦畔の南脇にずれて並ぶ状況であった。この地点での畦畔の高まりと杭列は一致しない。杭の状況：小形杭材が先端加工部を



第109図 SC3526 (㊸区)

残し出土した。用材は丸木材、割り材ともに44.4%を占め転用材が11.1%となる。1/2割り材の占める割合が比較的多く、杭材の傾向は弥生中期に近い状況となる。樹種はクヌギ節、モミ属であった。時期：検出土層から弥生後期であるが、杭列は本址を遡る時期に構築されたものである。

オ ㊸区-1・2 (第110・111・198・199図)

位置：低地中央部に位置し、本調査区から該期水田層上には厚い黒色泥炭層が堆積する。水田層：未分解有機質の泥炭が散在した灰色粘土層(17層)と17層に比べ泥炭の含有量が少量となる暗灰色粘土層(18層)が該当する。直上層は泥炭を主体とする層で暗灰色粘土が混在し、㊸-2区では下部に薄い砂層が堆積している。直下層は数センチの礫が少量混入する泥炭層(19層)である。

遺構検出状況：㊸-1区では泥炭層の厚い堆積が認められたもののSD3004北側では遺構が検出されず、溝南側脇で17層粘土の高まりと杭列が検出された。㊸-2区では古墳時代のSD3003調査時に泥炭層を重機によって除去し17層上面の砂混じりの泥炭を精査した。畦畔状の高まりは検出できなかったものの水田面の凹凸が明瞭に検出され、砂を埋土とする溝が2条検出された。水田区画は明確ではないが凹凸のない部分を畦畔と判断した。畦畔は北西-南東方向に7条北東-南西方向に8条認められた。遺物出土状況：SD3004周辺の砂質泥炭層内(16層下部)から弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土した(第198図150、第199図153・155・156・159・542・547)。

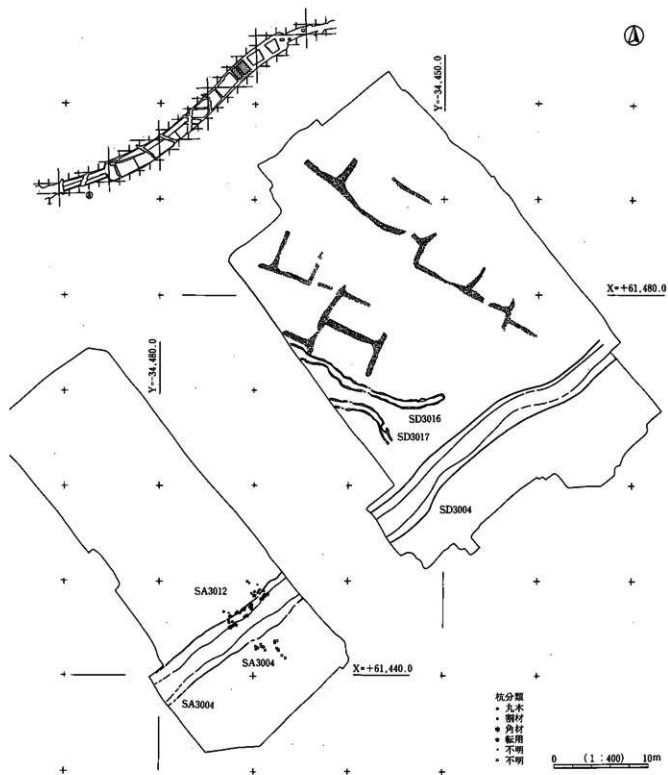
A 主要遺構

SA3004 ㊸-1区(第110・136図)

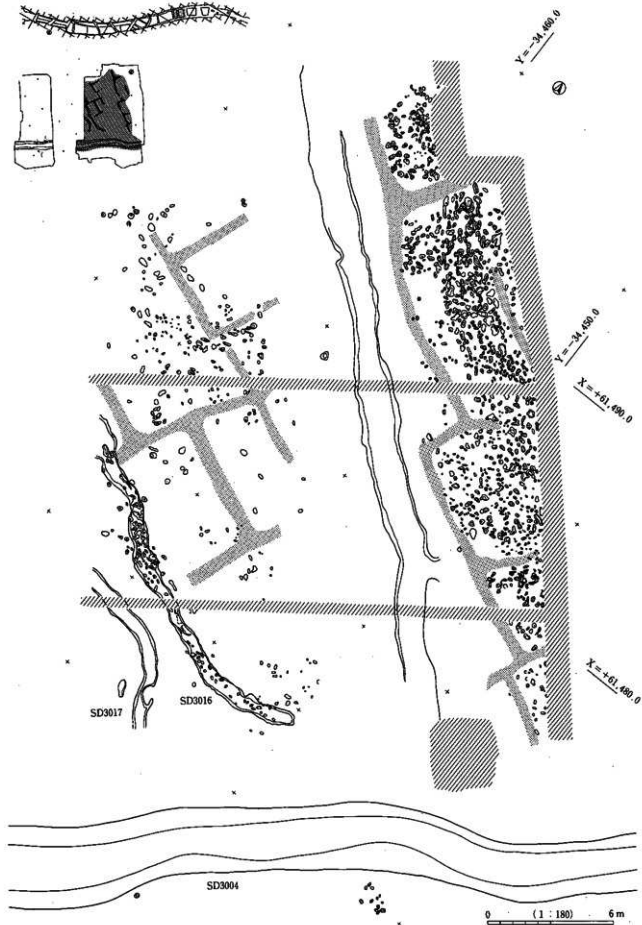
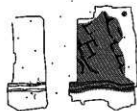
位置：調査区北西側に位置しSD3004に隣接する。検出土層：弥生時代後期から古墳時代まで継続するSD3004調査において溝の埋土となる16層を北西側に精査していたところ17層中の灰色粘土の高まりと杭列が確認された。杭頭部は17層上部からの検出である。規模・構造・方向：畦畔となる高まりは幅60cmで、溝と平行し北東-南西方向に約5m走行する。北東側は古墳時代の溝SD3003に寸断され南西側はトレンチ調査によって不明となるが、SD3004との接する付近で幅約40cm途切れ、水口となっている。この水口部南西側の畦畔内から畦畔と方向を一にする杭列が検出され、水口を1.5m隔てた北東側に畦畔と直交する方向の杭列が約2.5mにわたって検出された。畦畔と水田面の比高差は約30cmと高い。北西-南東方向に走行する杭列に盛り土は確認されなかったが、水口と杭の配列から畦畔状の遺構が想定される。時期：畦畔内及び周辺から遺物は収集されなかったが、SD3004最下層からの土層と対応することから弥生後期後半とした。

SD3016・3017 ㊸-2区(第112図)

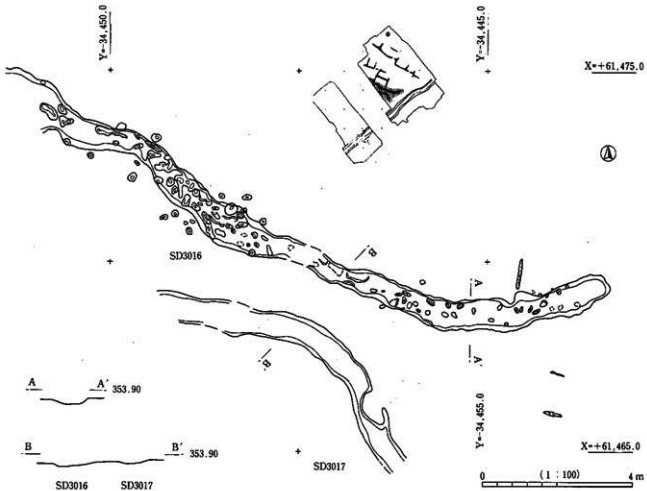
位置：調査区南西側に位置する。検出土層・埋土：17層上部に堆積した砂質泥炭層精査によって検出された。埋土は砂を主体とした泥炭であった。規模：幅は60~80cmで北西から南東に湾曲形状で走行する。深さは10~15cmと浅くSD3016は南側で立ち上がり、SD3017は先行トレンチ内で不明となる。SD3016



第110図 ①区弥生後期遺構全体図



第111図 ①-1区弥生畦畔・水田面全体図



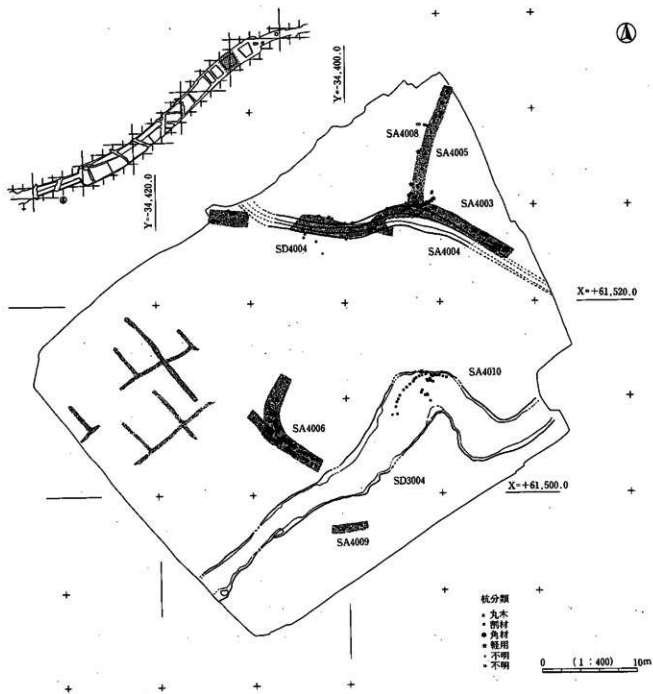
第112図 SD3016・3017 平面・断面

には砂の堆積が顕著で水田面同様凹凸が検出された。溝脇に凹凸が検出されていないこと、方向が区画と一致することから畦畔に隣接する遺構の可能性がある。時期：溝内から遺物は出土しなかったが、土層から弥生後期後半とした。

カ ㊸区 (第113・198・199図PL17・29)

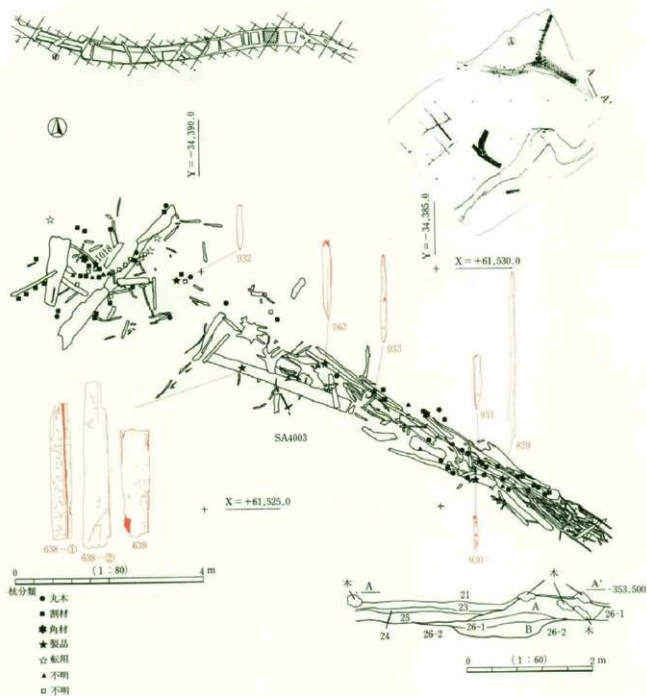
位置：低地東側に位置し、該期水田層上の泥炭層は本調査区中央が最大の厚みでもち、東側に向かって減少していく。水田層：未分解有機質の泥炭が散在した暗赤褐色から暗褐色粘土層 (26-1層) と同質の暗色となる粘土層 (26-2層) が該当する。26-1層と26-2層の間層には砂質泥炭層が薄く堆積する地点がある。直上層は泥炭層 (21-25層) で泥炭と礫混じりの砂層が互層となる地点がある。

水田検出状況：調査区北西側と南東側で検出状況が異なる。北西側は古墳水田層に帰属する遺構群の精査の際に下部から複数の杭列が検出された。これらの杭列は大規模なものであり盛り土のある恒常的な水田区画と認識される。この地点は水田面としては明確に捉えられたが古墳水田調査の影響で小さな高まりを検出することができなかった。南東側では重機によって泥炭層上部を除去し、平面精査を行ったとこ



第113図 ㊸区弥生後期遺構全体図

ろ数条の粘土の高まりが確認された。小畦畔は水田面から数センチの高まりとして一部コンタ図から補った部分があるが、北西-南東方向に6条、北東-南西方向に2条である。またこの地点には部分的に㊸-2区と同様の砂質泥炭層が堆積しており水田面上の凹凸も見られた。遺物出土状況：遺構に伴って複数の土器が出土している。水田層中からは北西側杭列群の周辺から26-1層にめりこむ状況で弥生後期の壺（第198・199図151・152）があったほか、数点の土器が収集されている。また古墳時代の杭列下部からも該期の土器片が多数出土した。



第114図 SA4003 平面・断面

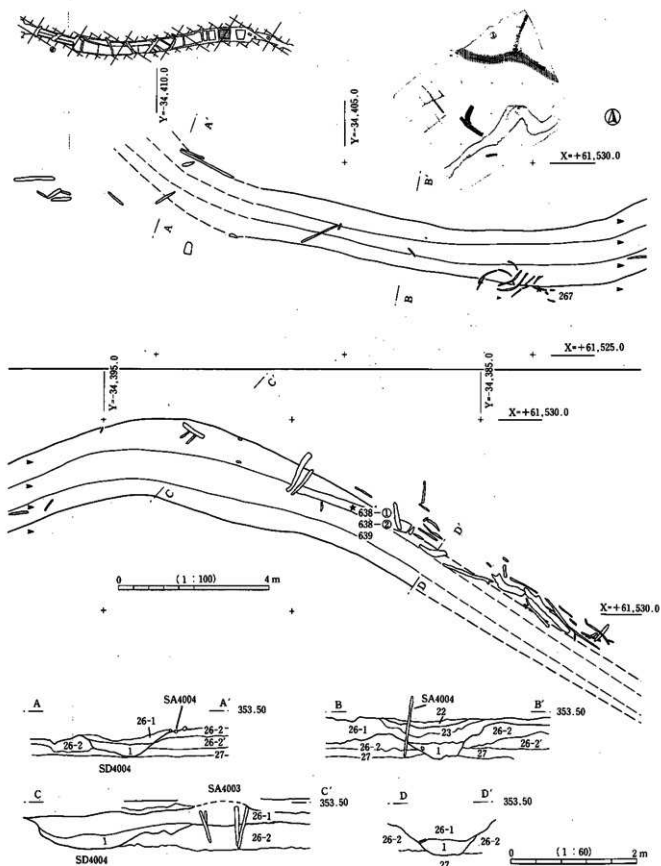
A 主要な遺構

SA4003 ㊤区 (第114・115・116・188図PL15・23)

位置：調査区北東寄りに位置し、SA4004、SA4005と接する。弥生中期の溝SD4004、古墳前期杭列SA4002と重複する。検出土層：泥炭質となる21層下部から25層までが本址に堆積せず、26-1層を基調とした灰色粘土に杭と横木が伴った高まりとして検出された。本址は26-1層段階で構築されているが、21~25層中の水田の畦畔として存続した可能性もある。規模・構造・方向：



第115図 SA4003 ㊤区

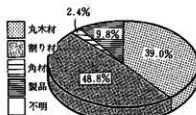


第116図 SA4003下部及びSD4004 平面・断面

幅1mで長さ約10mにわたってN-58°Eの方向に検出され、東壁法面にも横木が確認されていることから約20mの長さをもつ杭列畦畔となる。杭は横木材の間もしくは北東側にまばらに検出された。横木材は長い材を中心に重なる状況で密に出土し、長軸を杭列の走行方向と一致させている。横木が希薄となる部分には立木の根株が隣接して2箇所検出されたが泥炭層中から落ち込むことから本址に含めるかは微妙なところである。本址は大形材を中心に横木材を芯材とし杭によって補強、粘土で盛り土した畦畔とされる。26-1層上面との比高差は約40cmある。SA4002と接する地点で杭・横木が交錯し帰属遺構が不明な材がいくつかあったが、本址は横木材を主体とする畦畔であることから交点の杭材はSA4002に属するものと判断した。杭の状況：杭は頭部を欠くものの依存状態は良好であった。用材は割り材61.2%、丸木材30.6%で、割り材の占める割合が高く、樹種はクヌギ節とヤマグワが多い。遺物出土状況：本址の構造材である横木の中に大形板材があり、横木の間及び下部からは弥生中・後期の土器片数点が散在して出土した(第188図423~427)。時期：検出土層から弥生後期とした

SA4004 ⑬区(第117・118・188図)

位置：調査区北西側に位置し、SA4003と接し古墳時代前期のSA4001・4002と重複したため杭列の一部が不明となる。また下層である弥生中期のSD4004と位置的に重なる。検出土層：上層SA4001・4002の断面トレンチ調査で下層から本址が検出された。北西側の杭は頭部が26-1層上の泥炭層内で検出されたものもあるが大半は26-2層直上であり横木も同様である。本址北西側は比較的泥炭層が厚く堆積し、SA4002に向かって上層の泥炭と古墳水田層(19・20層)が混入しあった土質となる部分があり26-1層にまで及んでいる。このため本址上部は、古墳水田耕作によって閉鎖されたものと判断した。規模・構造・方向：本址は僅かな横木材と約40本の杭材からなるが、北側に一列の杭が1.5m前後の間隔で並ぶ以外は、列状の杭から南側2mの間に点在している。杭列幅は最大で2mであった。杭の状況：用材は割り材が48.4%、丸木材が39%で割り材の占める割合が高く、樹種はクヌギ節とコナラ節が主体を占める。遺物出土状況：下部から土器片が出土した(第188図432)が下層にはSD4004があり、本址に直接かかわる遺物はない。時期：検出土層から弥生後期とした。



第188図 SA4004 ⑬区

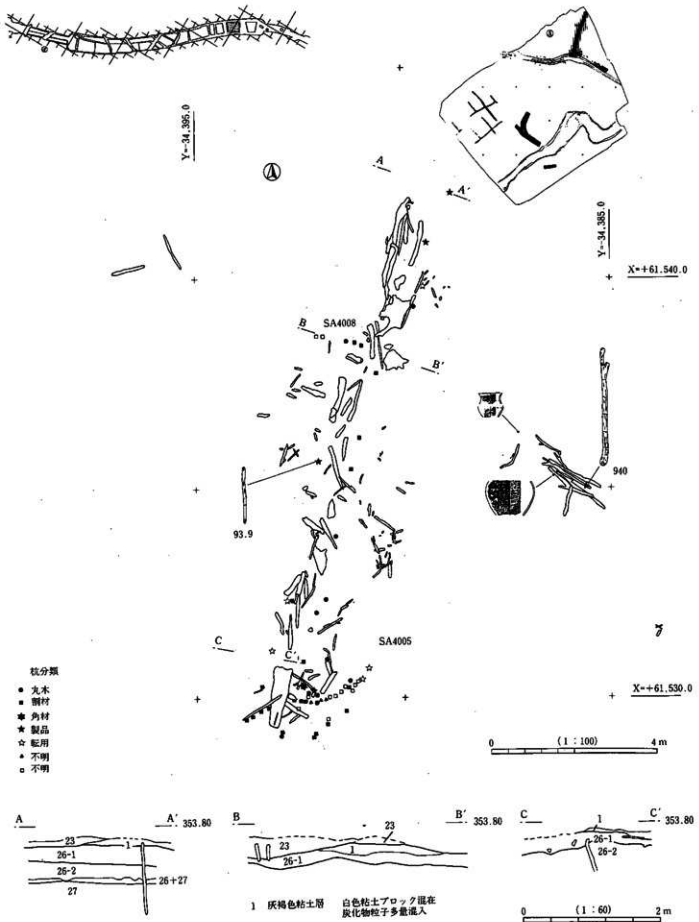
位置：調査区北端に位置し、SA4008と交差し、SA4003と接する。古墳前期の杭列SA4002と重複し本址の構造材が一部壊されている。検出土層：上層杭列SA4002の断面トレンチ調査によって下層の本址が確認された。本址横木材は重複する南側でSA4002下部に入り込んでいる状況がみられた。杭の状況：SA4008と交差するため杭材はまとめて分類した。割り材46.2%、丸木材38.5%、転用材15.4%であった。割り材の占める割合が高いが、本址では転用材が比較的多く用いられている。樹種はクヌギ節とコナラ節が主体を占め、同時期に畦畔が存在したSA4003・4004・4008と本址の4杭列は用材、樹種が共通している。時期：検出土層から弥生後期とした。

SA4005 ⑭区(第119・120図PL15)

位置：調査区北端に位置する。SA4005と交差し、古墳前期の杭列SA4002と重複する。検出土層：杭は26-1層上の泥炭層内に突出していたが、南東隅に集中する横木材は26-2層直上から検出された。規模・構造・方向：幅約80cmで、SA4005と交差する方向N-63°Eの畦畔とされる。水田区画としてはSA4005を中心にSA4003と平行する畦畔として1辺8mの方形水田が想定される。遺物出土状況：横木材の間から弥生後期後半から終末期の土器片(第197図130・131)が出土した。時期：検出土層から弥生後期と

SA4008 ⑮区(第119・120・197図)

位置：調査区北端に位置する。SA4005と交差し、古墳前期の杭列SA4002と重複する。検出土層：杭は26-1層上の泥炭層内に突出していたが、南東隅に集中する横木材は26-2層直上から検出された。規模・構造・方向：幅約80cmで、SA4005と交差する方向N-63°Eの畦畔とされる。水田区画としてはSA4005を中心にSA4003と平行する畦畔として1辺8mの方形水田が想定される。遺物出土状況：横木材の間から弥生後期後半から終末期の土器片(第197図130・131)が出土した。時期：検出土層から弥生後期と

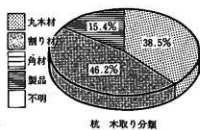


第119図 S A 4005・4008 平面・断面・出土主要遺物分布図

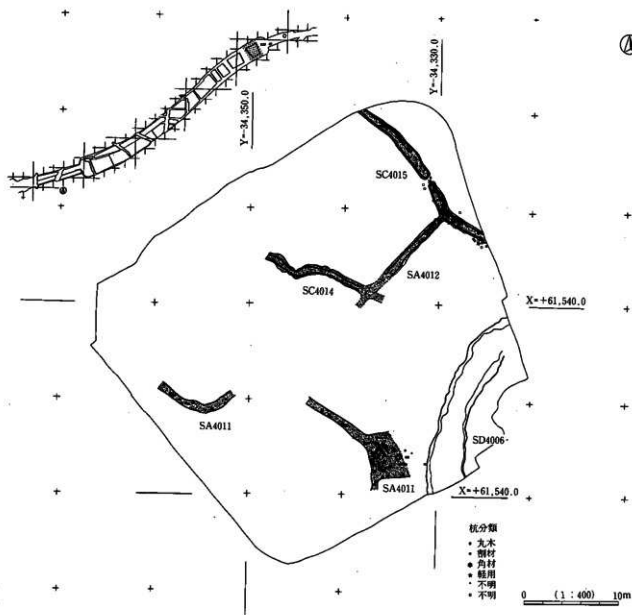
した

キ ㊤区 (第121図PL29)

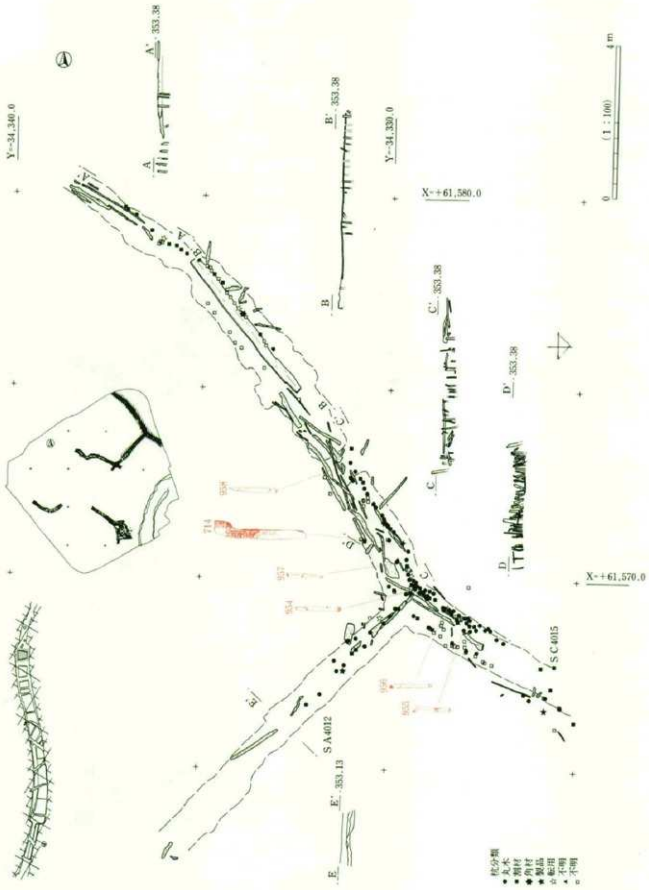
位置：調査域東端部に位置する。水田層：未分解有機質の泥炭を多量に混入した黒褐色シルト質粘土層 (10層) と泥炭質の土壌が上部から下部に漸移している灰色粘土層 (11層) が該当し、灰色粘土層は、11a層の粘土質と11b層の泥炭質粘土に分層される。直上層は泥炭質の灰色粘土層 (9C層) で㊤-1区9層と同質粘土が不連続に堆積する。地点によっては泥炭質粘土層内に固結した炭酸鉄が散在する。直下層は泥炭を



第120図 S A 4005・4008 (㊤区)



第121図 ㊤区弥生後期遺構全体図



第122図 S.C.4015, S.A.4012 平面・立面・断面・出土主要遺物分布図

含んだ褐灰色粘土質シルト層 (12層)、砂質の黒灰色粘土層 (13層) である。

水田検出状況：灰色粘土層 (9C層) 及び下部泥炭質粘土層の平面精査を行い、炭酸鉄を含んだ灰色粘土層の高まりを3条検出した。畦畔は杭材と横木材を芯材として用いた状況が明確にされた。遺物出土状況：9C層から11層中で、溝以外に遺物が集中した地点はなく弥生中期から古墳前期までの土器片が僅かに収集された (第199・200図154・157・564)。

A 主要な遺構

SC4015 (第122・123・124図PL16・18)

位置：調査区北東端部に位置し、SA4012と接する。検出土層：古墳水田層 (9b層) である明灰色粘土層下部の平面精査により灰白色粘土 (9C層) の連続する高まりが検出され、更に下部においても泥炭層 (10層) の薄くなる部分に灰色粘土 (11層) の高まりが検出された。規模・構造・方向：畦畔の幅は80~100cmで盛土内には幅60~80cmの緻密に打たれた杭が2列並び、大形板材が横木材として用いられていた。SA4012との接点で南西に屈曲する形状となるがほぼN-42°Wの方向へ約20mにわたって走行する。9C層で検出された畦畔はSA4012北西側で盛り土が途切れ水口となるが、11層内では同一箇所から横木材が多量に出土し、水口は検出され

てない。9C層畦畔と水田面の比高差は約25cm、11層では10cm程度となる。

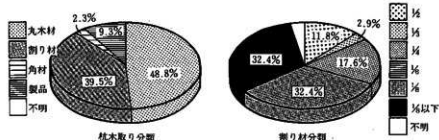
杭の状況：畦畔内からは100点以上の杭が出土し、遺存状況は極めて良好であった。

杭材は横木材の真下から出土するものが複数あり、杭材と横木材によって数回の構築が行われていたものと判断される。

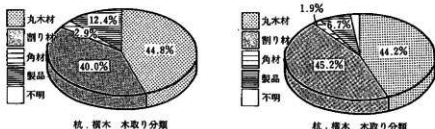
用材は丸木材が48.8%、割り材が39.5%、角材が23%で丸木材の占める割合が高く、先端加工は鈍角な削りだして弥生時代の特長を示している。

樹種はクヌギ節、コナラ節が大半を占める。遺物出土状況：横木材に建築材が含まれていたほかは土器等の遺物出土はない。

時期：検出土層は11層から9C層で、弥生後期から古墳時代前期前半とされ、本址の構築は弥生後期と

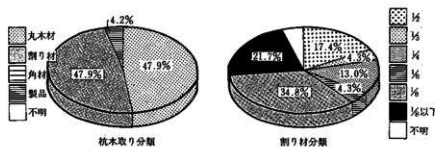


第123図 SC4015 (19区)



第124図 SC4015 (19区)

第126図 SA4012 (19区)



第125図 SA4012 (19区)

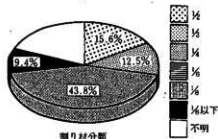
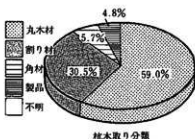
古墳前期前半の2時期がある。

S C 4014 (第121・187図PL16)

位置：調査区中央部に位置し、S A 4012と直交する方向に走行する。検出土層：泥炭層(10層)の水平精査により灰色粘土の高まりを検出した。規模・構造・方向：畦畔の幅は約80cmで、N-22°Wの湾曲する畦畔とN-35°Wの畦畔がつながり北西から南東方向へ約12mにわたって検出された。高まりは数センチであり、杭、横木材は検出されていない。遺物出土状況：畦畔下部から弥生中期後半の埴(第187図4)出土した。同地点12層中からは該期の土器片が複数出土しており下層遺構(S X 4100)の遺物とみなした。時期：検出土層から弥生後期とした。

S A 4011・A (第127・128・129図PL15・16・18・27)

位置：調査区南西側に位置する。検出土層：11層上部の泥炭層内から杭と横木材が数点確認された。規模・構造・方向：杭は幅約60cmの間に20本余りが点在し、N-55°Wの方向へ約5m、N-44°Eの方向へ約4m連続する。杭列の形状は

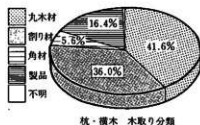


第128図 S A 4011 (A区)

L字状となり、本址の延長上にはS A 4012がある。杭と横木材を覆う盛土は確認されなかったが、畦畔の痕跡と見なした。杭の状況：遺存状況が悪く、先端部が残るものは少なかった。用材は丸木材が主体を占める。時期：検出土層から弥生後期とした。

S A 4011・B (第127・128・129・197図PL15・16・18・27)

位置：調査区南側に位置し、S D 4006と接する。杭の集中箇所として検出された。検出土層：明灰色粘土層下部(9b層)の平面精査の際に杭が数点検出され、更に下部泥炭層(10層)から灰色粘土(11層)上面にかけて80点余りの杭と横木材が出土した。11

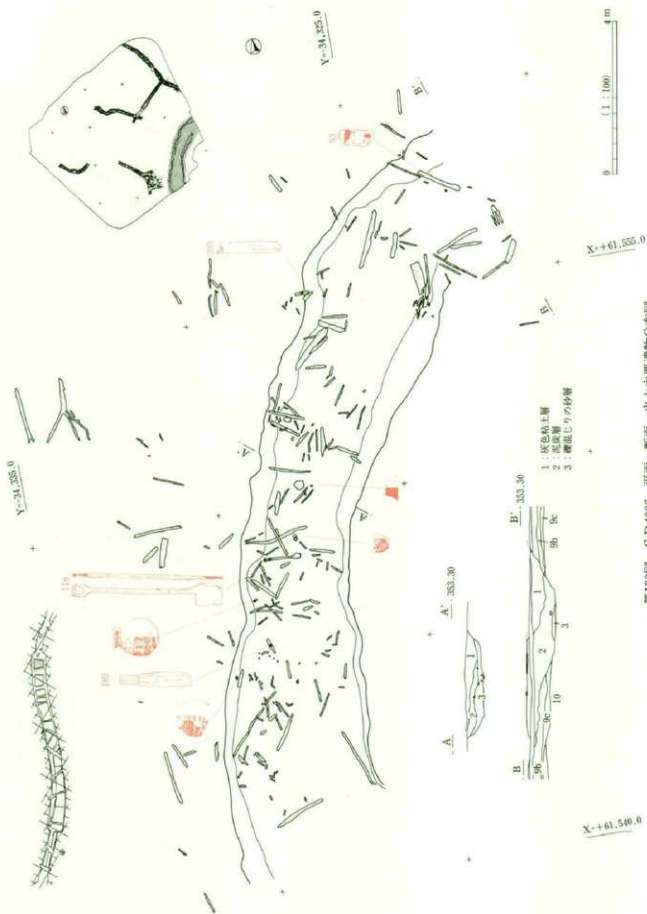


第129図 S A 4011 (B区)

層上部で検出された杭と横木材は北西方向に点在するが、杭集中地点の出土層位を特定することはできず、9b・9c・10・11層の検出となる。規模・構造・方向：11層上部出土杭は、約50cm幅に一部横木材を伴ってN-55°Wの方向約8mにおたり点在する。この杭列はS A 4011・Aと出土層位方向が一致することから一連の畦畔と見なされる。しかし杭集中地点ではこの杭列を特定することができない。杭集中地点はほぼ5m四方の範囲に夥しい杭があるが、11層杭列畦畔の補強あるいは水田区画の要所として9b層下部まで継続した杭列遺構となる。杭の状況：杭頭部を欠くものの比較的残りは良好である。用材は丸木材59%、割り材30.5%で、樹種はコナラ節、エノキ属が主体であった。遺物出土状況：杭材、横木材の中から横杆や部材等の木製品が多数出土した。また弥生後期から古墳前期前半の土器も複数収集された(第197図134・135・516・517)。時期：11層杭列とした杭列は弥生後期、杭集中地点はその出土の豊富さから大半は古墳前期となる可能性が高く、弥生後期からの継続する杭列畦畔とした。

S A 4012 (第122・125・126図PL15・16)

位置：調査区北東端部に位置し、S C 4014・4015と接する。検出土層：S C 4015との接点では9C層の高まりとして確認されたが、杭と横木材がなくなる南西側はS C 4014の検出面と同一の10層下部において灰



第130図 S D4006 平面・断面・出土主要遺物分布図

色粘土の僅かな高まりとして識別した。規模・構造・方向：畦畔の幅は80cmで、S C4015から南西(N-43°E)方向へ8mにわたって検出された。杭の状況：杭はS C4015寄りに数点出土し、S C4015の一連の構築材となるが、本址では点在している。用材は丸木材と割り材が47.9%と同じ割合となり、樹種はクヌギ節、ヤナギ属であった。時期：S C4015と同一の時期である弥生後期から古墳前期前半の畦畔とした。
S D4006 (第130・197図PL12・16・25・29)

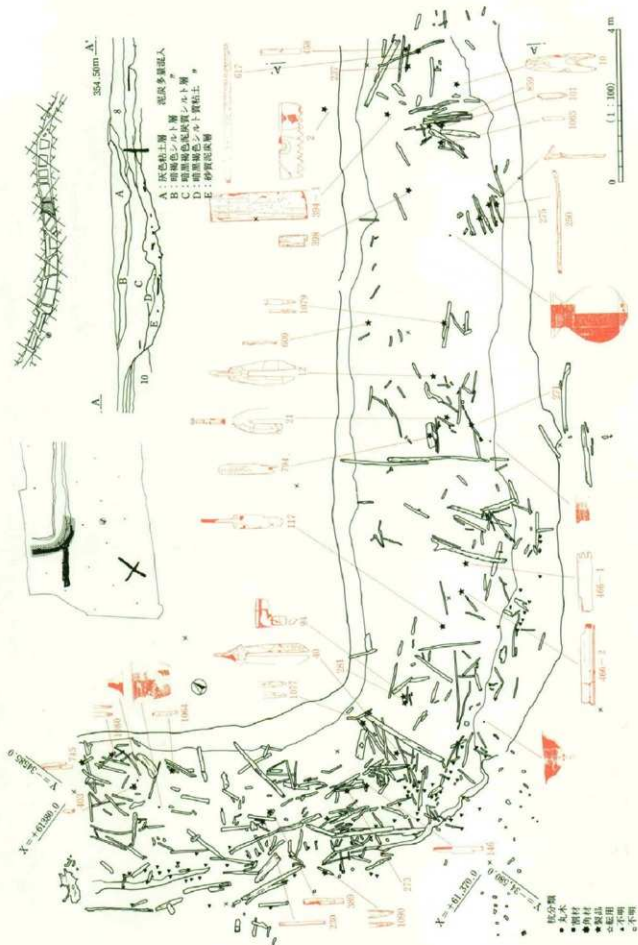
位置：調査区東端に位置する。検出土層：古墳水田層である明灰色粘土(9b層)中から幅約2mの溝が確認され、9c層下部から11層に属する幅3~4mの溝が確認された。本址は9b層と11層水田に属する溝が重複している。本址検出面は9c層上面である。埋土：3層に分層され、1層は基本層序9b層水田の溝であり、泥炭を多量に含んだ灰白色粘土層。2層は灰色粘土ブロックを多量に含んだ泥炭層、3層は礫混じりの砂層である。2層下部から3層にかけて多量の木製品が出土し、木製品は11層水田の時期が与えられる。規模・形状：9b層の溝は深さ40cm程で本址北西沿いに重複する。11層の溝も深さ40cmであるが底面が広い。遺物出土状況：埋土1層内から壺(125)が、2層以下から壺と甕(126~128)が出土し、下層からは農具を含んだ多量の木製品が散在していた。木製品を含めたは木材は流路に自然堆積した状況である。時期：出土土器は弥生後期後半から古墳時代前期前半であり、遺物からも本址所属水田の土層時期(11層から9b層内)と一致する。本址は弥生後期から古墳時代前期前半の溝とされる。

ク S D3004 I (S D3004) ⑬・⑭・⑯・⑰区(第131~136・138~140図P L 9・10・11・17・20・21・24・25・26・27・28・29)

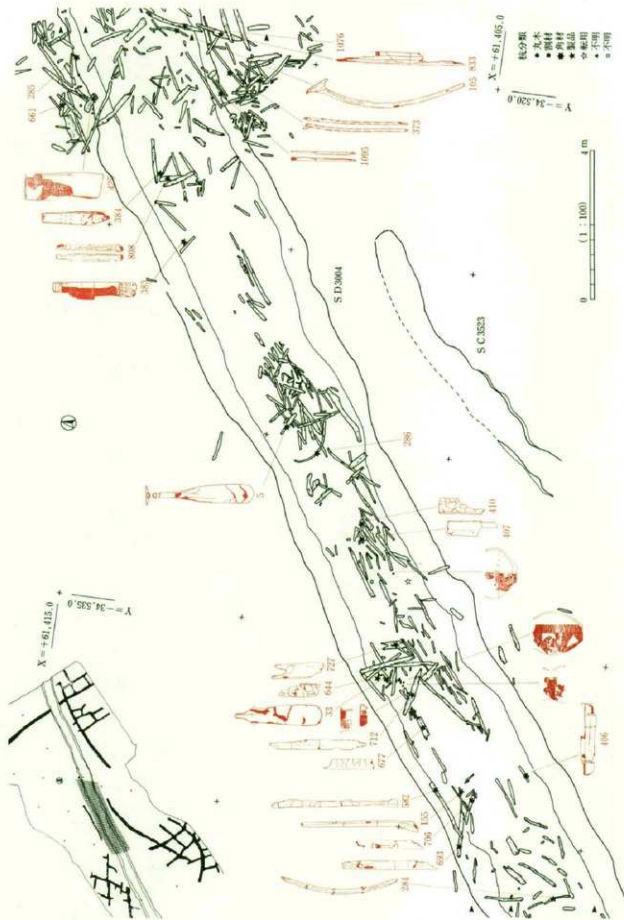
本址は東側低地を西から東へ約270mにわたって走行する溝状である。土層断面観察により3時代の溝がほぼ同位置に重複していることが確認され、出土遺物から弥生後期~古墳前期初頭、古墳前期前半から後半、古墳中期に属する。本址からは各時代の土器とともに農具・武具・祭祀具・構築材など多器種にわたる木製品が数千点出土した。溝幅4~6m、深さ0.7~1.2mの規模をもち⑱区と⑲区で大きく屈曲した形状となる。⑲区以東は不明であるが⑱区S D4006が規模と堆積土層の点で共通する。本址護岸には杭・横木材などの補強材を用いて土手が築かれ、溝内には杭によって堰を構築した状況が見られた。ただし重複によって下層と上層の構造材としての杭の帰属時期を特定することは難しく、弥生後期から古墳前期の継続的な遺構として把握されたのみである。また出土遺物についてもその帰属において弥生後期層が砂層堆積である箇所以外は微妙であるが、本址出土の木製品は古墳前期後半までの堆積層までしか出土していないので、弥生後期~古墳前期初頭、古墳前期前半から後半のいずれかに帰属する。本項では土層と弥生後期~古墳前期初頭について各調査区別に所見を述べる。

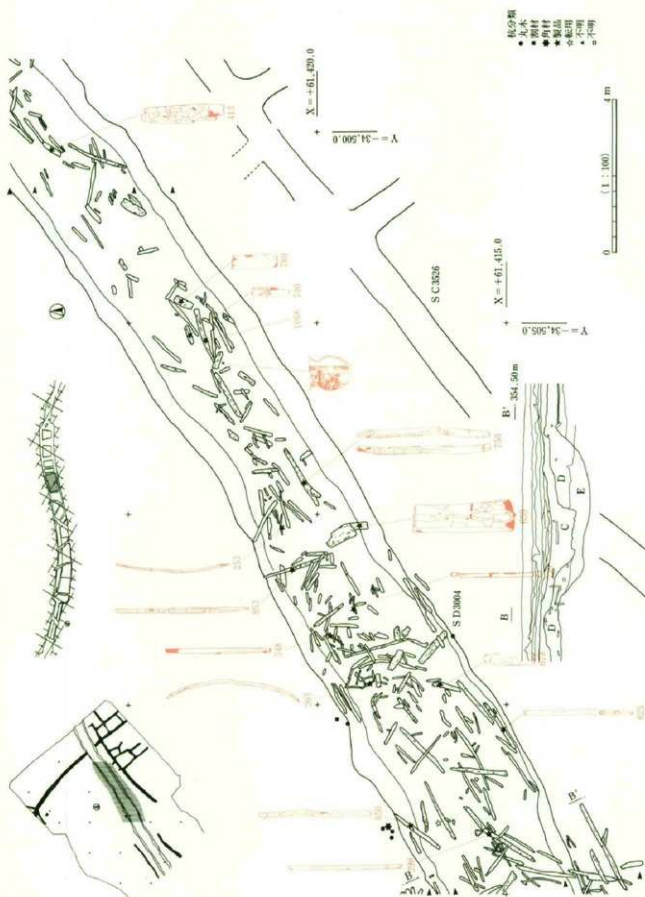
⑱区(第131・189図P L 9・25)

埋土：弥生後期の埋土は砂と泥炭の混合した土質(E層)とブロック状に混入する茶褐色粘土(D層)で、上層は暗茶褐色泥炭質シルト(C層)である。いずれの層にも白色粘土ブロックと砂が混入する。規模・形状・構造：調査区北西端から南東に約7m走行しほぼ90°北東へ屈曲する。幅は5~6mで弥生後期水田層(10層)からの深さは80cmである。断面は緩く湾曲した底面の広い形状であり、北西-南東から屈曲した攻撃面の壁は緩傾斜している。北西から北東へ屈曲するコーナー部を中心に南西岸からは80本余りの杭と大形横木材が検出され、これらによって護岸が構築されていた状況であった。杭が最も緻密に配されている地点は西側コーナー部であり、攻撃面となる南東岸は幅3mにわたって杭が希薄となっている。この地点が水田への主要配水(もしくは排水)施設となると考えられる。北東岸から杭の出土はない。遺物出土状況：最下層の砂質泥炭層から多量の木製品と大形土器片が出土した。木製品は板材、割り材などが北西-南東部から屈曲部に集中し、北東側では散在している状況が見られた。木製品の中には曲柄又鉞・一木鋤など農具のほか琴、盾、構築材などがある。この内40のナスピ形曲柄鉞は上層遺物の可能性がある。



第131図 S D 3004 I (3区) 平面・断面・出土主要遺物分布図





第134図 S D 3004 I (00X) 平面・断面・出土主要遺物分布図